

東大阪市

池島・福万寺遺跡 7

(池島Ⅱ期地区05-2調査区)

一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書

2008年12月

財団法人 大阪府文化財センター

東大阪市

池島・福万寺遺跡 7

(池島Ⅱ期地区05-2調査区)

一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書

財団法人 大阪府文化財センター

序 文

東を生駒山、西を上町台地、南を大和川で画された中河内は、かつては北流していた大和川水系の河川により形成された沖積平野と、生駒山西麓の扇状地を中心に発展してまいりました。当地は、列島でも早くから稲作が定着した地域の一つとして知られ、肥沃な平野や大和川水系の河川は、そこに暮らす人々の生活に恵みをもたらし、地域発展の礎となりました。その反面、地形的特性から長年水害に悩まされてきた地域でもあり、水害との戦いが続けられてきました。恩智川治水緑地は、こうした現代的課題である治水対策として、集中豪雨の際の増水分を貯留し、寝屋川水域の氾濫を未然に防ぐ目的で建設されました。

池島・福万寺遺跡は、恩智川治水緑地を含む広大な面積を持つ遺跡です。恩智川治水緑地の建設に伴う発掘調査は、大阪府教育委員会が試掘調査を開始して30年以上、調査が積み重ねられてきました。

当センターでは、これまで25年以上にわたって調査を継続し、福万寺Ⅰ期地区、池島Ⅰ期地区の調査を終了し、現在は福万寺Ⅱ期地区、池島Ⅱ期地区の調査を進めております。

発掘調査の結果、弥生時代の前期から後期に至る各時期の水田、古墳時代の集落、古代の条里地割にもとづいた水田区画など、土地利用の変遷や、現代までの農耕の歴史を示す遺跡であることが明らかになってきました。また、洪水による厚い堆積層や耕地の復旧の痕跡は、自然災害と人々の営みとの関わりを示すものでもあります。

今回の発掘調査においても、弥生時代から現代までの各時期の耕作地の変遷が明らかになりました。また、弥生時代前期の水田や溝を検出し、河内平野ではじめて水田稲作を行なった頃の実態に迫る成果を得ることができました。今後、継続される調査を通じて、成果を総合化し、地域の歴史をよりいっそう豊かにするとともに、その成果が広く活用されることを願います。

最後になりましたが、調査の過程でお世話になった地元の皆様をはじめ大阪府都市整備部、同部寝屋川水系改修工営所、同南部工区、大阪府教育委員会など関係諸機関、指導助言を賜った多くの方々に厚く御礼申し上げますとともに、今後とも当センターの調査事業に、より一層のご理解とご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成20年12月

財団法人 大阪府文化財センター
理事長 水野正好

例 言

- 1 本書は、大阪府東大阪市池島町7丁目地内に所在する池島・福万寺遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、大阪府寝屋川水系改修工営所から財団法人大阪府文化財センターが平成17年7月22日から平成19年9月28日の間委託を受け、平成17年8月19日から平成19年8月31日まで現地調査を行い、調査終了後は遺物整理作業に移行し、平成20年12月26日の本書の刊行をもって事業は完了した。

- 3 調査は以下の体制で実施した。

[平成17年度]

調査部長	赤木克視	中部調査事務所	所長	小野久隆
		池島支所	支所長	國乗和雄
調整課長	田中和弘	調査担当	調査係	係長 廣瀬雅信
				技師 内田真雄
				専門調査員 松野元宏

[平成18年度]

調査部長	赤木克視	中部調査事務所	所長	小野久隆
		池島支所	支所長	寺川史郎
調整課長	田中和弘	調査担当	調査第一係	係長 廣瀬雅信
				技師 内田真雄
				専門調査員 松野元宏

[平成19年度]

調査部長	赤木克視	中部調査事務所	所長	小野久隆
		池島支所	支所長	寺川史郎
調整課長	田中和弘	調査担当	調査第一係	係長 廣瀬雅信
				副主査 服部みどり
				技師 内田真雄
				専門調査員 松野元宏

[平成20年度]

調査部長	赤木克視			
調整課長	田中和弘	中部調査事務所	所長	寺川史郎
			調査係	技師 内田真雄

- 4 遺物写真撮影に関しては、中部調査事務所主査片山彰一が行い、木製品・自然木の樹種鑑定は中部調査事務所主査山口誠治が担当した。

- 5 調査の実施にあたっては、大阪府寝屋川水系改修工営所、大阪府教育委員会のご協力を受けた。

- 6 調査の実施にあたり、自然科学分析として放射性炭素年代測定を(株)パレオ・ラボへ、花粉・珪藻分析を(株)古環境研究所へ、大型植物遺体同定をパリノ・サーヴェイ(株)へ委託した。その報告は第6章に掲載した。また、総合地球環境学研究所(佐藤洋一郎教授)による第14層の自然科学分析の成果も第6章に掲載した。
- 7 調査および報告書作成に際し、佐藤洋一郎氏・田中克典氏・木村栄美氏(以上、総合地球環境学研究所)にご指導・ご協力を頂いた。記して感謝します。
- 8 本書の編集は、内田真雄がおこなった。
- 9 本書に関わる遺物・写真・スライド・実測図などは財団法人大阪府文化財センターにて保管している。

凡 例

- 1 本書の遺構実測図等における基準高は、東京湾平均海水面(T.P.)を基準として用いる。
- 2 遺構平面図は世界測地系(測地成果2000)である。
- 3 本書で用いた北は座標北を基準として、磁北は西に、真北は東に振る。
- 4 現地調査は、財団法人大阪府文化財センター『遺跡調査マニュアル【暫定版】』2003に準拠し行った。
- 5 土層断面の土色は、小山正志・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2005年版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修を用いて記入した。
- 6 遺構の番号は、遺構の種類に関わらず1から番号を付した。なお、整理段階などで新たにつけた番号は1001からの番号を付している。
- 7 池島I期地区と関連する遺構について、池島I期地区の遺構名称は『池島・福万寺遺跡3』に基づいて記述している。
- 8 遺構平面図については、全体平面図を1/500に統一し、各遺構の縮尺は適宜設定した。遺物実測については、土器・鉄製品・木製品が1/4、石製品を1/2と1/3とした。

目 次

序 文	
例 言	
凡 例	
目 次	
第1章 調査に至る経緯と調査方法	
第1節 調査の経緯と経過	1
第2節 調査方法	4
第2章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	6
第3節 既往の調査	9
第3章 調査の概要と基本層序	
第1節 調査の概要	11
第2節 調査地の層序	12
第4章 近・現代から古代の遺構と遺物	
第1節 近・現代から近世の遺構と遺物	21
第2節 中世の遺構と遺物	36
第3節 古代の遺構と遺物	48
第5章 古墳時代から縄文時代後期の遺構と遺物	
第1節 古墳時代の遺構と遺物	57
第2節 弥生時代後期の遺構と遺物	61
第3節 弥生時代中期の遺構と遺物	66
第4節 弥生時代中期前半から前期末の遺構と遺物	74
第5節 弥生時代前期から縄文時代晩期の遺構と遺物	80
第6節 縄文時代後期遺構面の調査	99
第6章 自然科学的分析	
第1節 分析の目的	100
第2節 放射性炭素年代測定	101
第3節 花粉分析	103
第4節 珪藻分析	108
第5節 大型植物遺体同定分析	111
第6節 第14層の分析(プラント・オパール分析・珪藻分析・種実同定分析)	116
第7章 総括	129

挿 図 目 次

図1	池島・福万寺遺跡の位置	1	図35	土器埋納土坑 出土遺物	50
図2	池島・福万寺遺跡の調査区配置	2	図36	古代・中世土坑 平面図・断面図(1)	51
図3	地区割り図・05-2調査区の地区割り	3	図37	古代・中世土坑 平面図・断面図(2)	52
図4	周辺の地形分類図	5	図38	古代・中世土坑 平面図・断面図(3)	53
図5	周辺の遺跡分布図	7	図39	第6層～第9層 出土遺物	56
図6	調査地東西断面図(X=-150,600ライン)	14・15	図40	第10面 平面図	57
図7	調査地南北断面図(Y=-34,400ライン)	16・17	図41	214溝 断面図	58
図8	井戸・1b土坑 位置図	21	図42	第10面ピット 平面図・断面図	59
図9	001井戸 平面図・断面図・見通し図	23	図43	第10層 出土遺物	60
図10	003井戸 平面図・断面図・見通し図	24	図44	第11面 平面図	61
図11	002井戸 平面図・断面図・見通し図	25	図45	第11面流路 断面図	63
図12	075井戸 断面図	25	図46	第11層 出土遺物	65
図13	第1面・第2面井戸・土坑 平面図・断面図(1)	26	図47	第12面 平面図	66
図14	第1面・第2面井戸・土坑 平面図・断面図(2)	27	図48	第12面畦畔 断面図	67
図15	第1b層・井戸 出土遺物	29	図49	289溝 断面図	69
図16	第2-1面 平面図	31	図50	380杭列・1001杭列 平面図	70
図17	第2-3・4面 平面図	32	図51	319杭列・322杭列 平面図・断面図	71
図18	第2面島畠 断面図	33	図52	第12層 出土遺物	72
図19	第2-5面 平面図	34	図53	319杭列・322杭列・1001杭列 出土杭	73
図20	第2層 出土遺物	35	図54	第13面 平面図	75
図21	第3-2面 平面図	37	図55	340微高地の溝 平面図・断面図	76
図22	第3-3面 平面図	38	図56	第13b面溝 平面図・断面図	77
図23	第3面島畠 断面図	39	図57	第13層 出土遺物	79
図24	第3層 出土遺物	40	図58	第14-2面 平面図	81
図25	第4面 平面図	41	図59	第14-2面水田域 平面図	82
図26	第4層 出土遺物	42	図60	397溝・398溝・399溝 断面図	83
図27	第5層下面 平面図	43	図61	390流路 断面図	85
図28	第5層下面 南側部分図	44	図62	第14-2面溝 断面図	87
図29	第5層下面ピット 平面図・断面図	45	図63	池島I期地区と調査地の 第14-2面遺構	89
図30	第5層下面土坑 平面図・断面図	46	図64	第14-2層 出土土器(1)	91
図31	162溝 断面図	47	図65	第14-2層 出土土器(2)	92
図32	第5層 出土遺物	47	図66	第14-2層 出土土器(3)	93
図33	第9面 平面図	49	図67	第14-2層 出土土器(4)	94
図34	土器埋納土坑 平面図・断面図	50	図68	第14-2層 出土土器(5)	95
			図69	第14-2層・第14-2b層 出土土器	96

図70	第14-2層 出土石器……………	97	図76	第14層 プラント・オパール 分析結果……………	121
図71	第15-2面 平面図……………	99	図77	第14-1層 主要珪藻ダイヤグラム…	122
図72	暦年較正結果……………	102	図78	第14層 種実ダイヤグラム……………	126
図73	花粉ダイヤグラム……………	105	図79	池島地区第11面・第12面 ……	130
図74	珪藻ダイヤグラム……………	109	図80	池島地区第13面・第14-2面……………	131
図75	第14層 分析試料採取地点……………	117			

表 目 次

表1	05-2調査区 土色一覧表……………	18	表9	遺物観察表(2)……………	136
表2	第12面検出杭列 樹種一覧表……………	72	表10	遺物観察表(3)……………	137
表3	第14-2面水田 面積一覧表……………	82	表11	遺物観察表(4)……………	138
表4	放射性炭素年代測定 および暦年較正の結果……………	102	表12	遺物観察表(5)……………	139
表5	大型植物遺体分析結果……………	112	表13	遺物観察表(6)……………	140
表6	プラント・オパール分析結果 ……	119	表14	遺物観察表(7)……………	141
表7	第14層 種実同定結果……………	125	表15	遺物観察表(8)……………	142
表8	遺物観察表(1)……………	135	表16	遺物観察表(9)……………	143
			表17	遺物観察表(10)……………	144

挿入写真目次

写真1	第1b層～第3-1層……………	12	写真18	中世・古代土坑 ……	55
写真2	第2-5b層～第10-1層……………	12	写真19	286畦畔(南から) ……	68
写真3	第10-1層～第12層 ……	19	写真20	297畦畔断面(北から) ……	68
写真4	第11b層～第14-2層 ……	19	写真21	289溝断面(西から) ……	69
写真5	第13b層～第15-2層 ……	20	写真22	380杭列付近(南西から) ……	70
写真6	001井戸 井戸瓦・桶側上部……………	23	写真23	285流路底面(南東から) ……	70
写真7	001井戸 桶側下部 ……	23	写真24	第13面畦畔検出状況(東から)……………	74
写真8	003井戸 井戸枠蓋の墨書 ……	24	写真25	第14-2面畦畔検出状況(西から) ……	80
写真9	075井戸 断面写真 ……	25	写真26	390流路断面(北東から) ……	84
写真10	第2-1面調査区北側(西から)……………	30	写真27	土層断面の噴砂……………	88
写真11	第2-1面調査区南側(南西から)……………	30	写真28	第14-2面検出の砂脈……………	88
写真12	130島畠(北東から) ……	36	写真29	花粉・孢子写真 ……	107
写真13	132島畠(南西から) ……	36	写真30	珪藻写真……………	110
写真14	145島畠(南から) ……	39	写真31	種実写真……………	115
写真15	154畦畔・141島畠(南西から) ……	42	写真32	プラント・オパール顕微鏡写真 ……	121
写真16	158土坑(西から) ……	44	写真33	第14層 珪藻写真……………	124
写真17	162溝断面 ……	44	写真34	第14層 種実写真……………	127

写真図版目次

扉写真 池島・福万寺遺跡全景(東上空から)

図版1 近世の遺構

1. 第2-3・4面 西半部全景(南西から)
2. 第2-5面 西半部全景(南西から)

図版2 中世の遺構1

1. 第3-2面 西半部全景(南西から)
2. 第3-2面 西半部北側(西から)

図版3 近世～中世の島島

1. 第2-5面 096島島・099島島(西から)
2. 096島島・099島島の断面(北西から)
3. 132島島の断面(北西から)

図版4 中世の遺構2

1. 第4面 西半部全景(南西から)
2. 第5層下面検出の耕作痕跡(東から)
3. 第5層下面検出 162溝(北から)

図版5 古代～弥生時代後期の遺構

1. 第9面 226土坑 土器出土状況(南東から)
2. 第10面 214溝(南東から)
3. 第11面 西半部全景 (南東から)

図版6 弥生時代中期の遺構1

1. 第12面 東側全景(南西から)
2. 第12面 東側全景(南東から)

図版7 弥生時代中期の遺構2

1. 第12面 西側全景(南西から)
2. 第12面 290畦畔と水田域(北西から)
3. 第12面 287畦畔と289溝(北西から)

図版8 弥生時代中期前葉の遺構1

1. 第13面 全景(南西から)
2. 第13面 340微高地の溝群(南から)

図版9 弥生時代中期前葉の遺構2

1. 第13b面検出の溝群(南から)
2. 第13b層390流路断面(南から)
3. 第13b層390流路 土器出土状況(南から)

図版10 弥生時代前期の遺構1

1. 第14-2面 水田・溝(北西から)
2. 第14-2面 水田・溝(南東から)

図版11 弥生時代前期の遺構2

1. 第14-2面 溝群(南西から)
2. 第14-2面 406溝(北東から)

図版12 縄文時代後期の遺構面

1. 第15-2面 西半部全景(南から)
2. 第15-2面 東半部全景(南から)

図版13 近世～近代の遺物

第1b層出土遺物・001井戸出土遺物

図版14 近世～中世の遺物

1. 第2層出土 陶磁器・瓦質土器・土製品
2. 第3層・第4層出土 陶磁器・瓦質土器
・土師器

図版15 中世～古代の遺物・金属器

1. 第5層・第6・7層出土 陶器・瓦質土器
・須恵器
2. 第2-1層・第4層・第8層・第9層出土
鉄製品・銅銭

図版16 古代～古墳時代の遺物

図版17 弥生時代の遺物1

図版18 弥生時代の遺物2

図版19 弥生時代の遺物3

図版20 弥生時代～縄文時代の遺物1

図版21 弥生時代～縄文時代の遺物2

図版22 弥生時代の石器

第1章 調査に至る経緯と調査方法

第1節 調査の経緯と経過

本調査は、大阪府都市整備部寝屋川水系改修工営所が進める一級河川恩智川治水緑地の建設に伴うものである。本事業の目的は、一級河川恩智川の排水機能の低下や、河内平野一帯の市街地化の進行に伴う保水能力の低下、および地盤沈下により引き起こされる豪雨時の河川水位の急激な上昇による水害対策の治水事業である。恩智川治水緑地は、増水時には河川の水を一時貯留して、下流河川の洪水調整を行い、平時には公園などの施設として使用できる多目的遊水地である。

恩智川が属する寝屋川水系は、寝屋川に合流する川を総称するもので、寝屋川、恩智川、第二寝屋川、平野川、今川などの河川が存在する。流域の大部分は河内平野の低湿地である。寝屋川流域は、1594年に「文禄堤」による淀川と寝屋川の分離、1704年に大和川付け替え工事が行われ大河川と切り離された。その後、大河川からの洪水は減少したものの、低平地における内水害を受けやすい地形環境にある。近代以降、恩智川流域の市街地化による保水能力の低下や、地盤沈下にともなう水害の増加が顕著になり、1972年の大東大水害を契機として、恩智川を含む寝屋川水系の治水計画の早期実現が望まれ

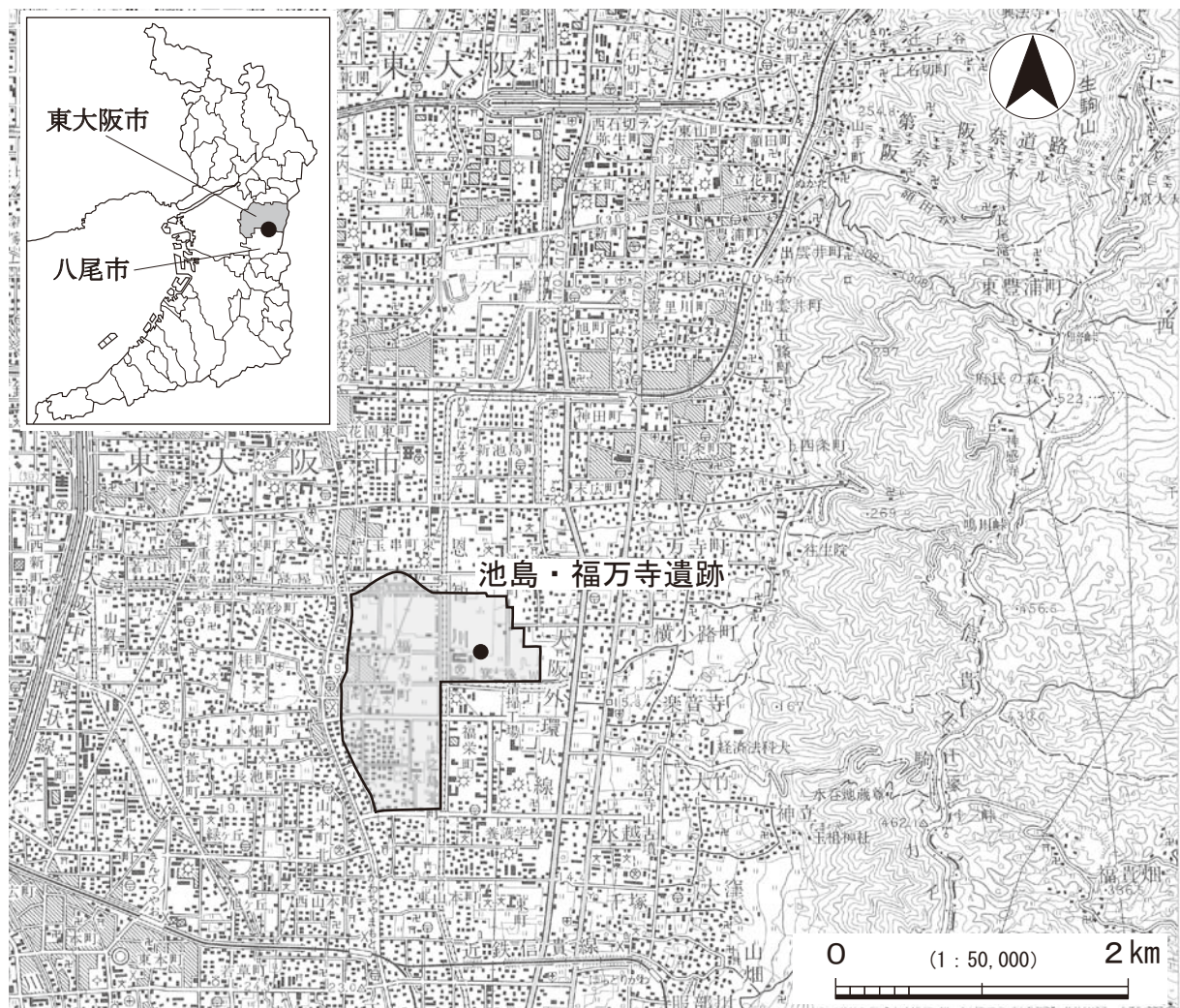


図1 池島・福万寺遺跡の位置 (●は今回の調査地) (国土地理院「大阪東南部」S=1/50,000平成7年7月1日発行に加筆)

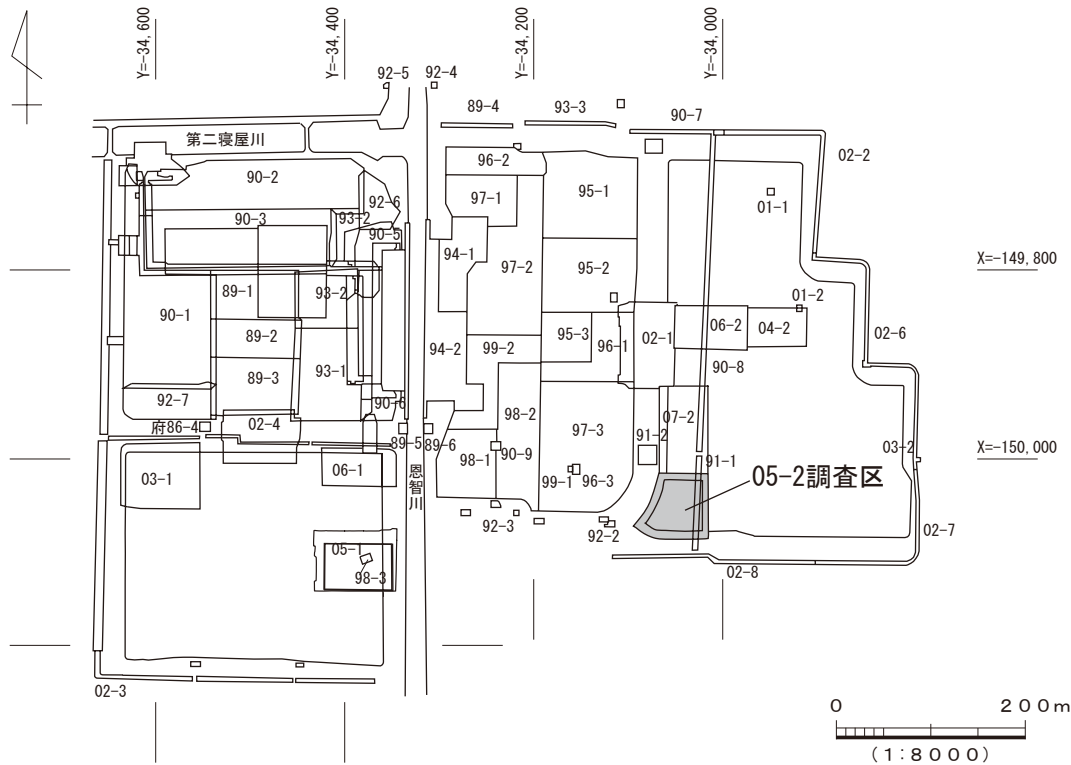


図2 池島・福万寺遺跡の調査区配置

ていた。大阪府では、1975年に水害対策としての「多目的遊水地」の建設を計画し、1978年に恩智川沿いの当地に「治水緑地」建設が決定された。全体計画では、八尾市福万寺町と東大阪市池島町にまたがる総面積40.2ha、計画貯水量165万 m^3 の規模を持ち、その内訳は、八尾市域の福万寺Ⅰ期地区(9.9ha)とⅡ期地区(8.3ha)および東大阪市域の池島Ⅰ期地区(9.2ha)とⅡ期地区(12.8ha)の4地区からなる。池床部を現地地表下4mのTP+0.9mまで掘削するとともに、付随する施設の建設も計画されている。なお、八尾市域の福万寺Ⅰ期地区は平成6(1994)年に完成し、東大阪市域の池島Ⅰ期地区は平成13(2001)年には概成した。

以下に治水緑地建設に伴う発掘調査のあゆみを略記する。

恩智川治水緑地建設に先立って、大阪府土木部都市河川課と大阪府教育委員会間で埋蔵文化財の取り扱いについての協議が行われ、1981年・1982年に福万寺Ⅰ期地区において大阪府教育委員会によって試掘調査が実施された。この結果を受けて関係機関による協議が行われ、1984年から大阪府教育委員会によって調査が実施された。その後、1989年に調査体制の検討が行われ、福万寺Ⅰ期地区、池島Ⅰ期地区については財団法人大阪文化財センター(現 財団法人大阪府文化財センター)が調査を担当することに決定された。先行する福万寺Ⅰ期地区の調査は1981年から1994年まで実施した。また、池島Ⅰ期地区の調査は、周辺整備を含めると1989年から2002年まで実施した。

福万寺Ⅱ期地区と池島Ⅱ期地区の調査開始にあたって、再度調査体制に関する協議が行われ、大阪府教育委員会の指導のもと、大阪府土木部(現都市整備部)寝屋川水系改修工営所と財団法人大阪府文化財センターとの間で委託契約を交わし調査が実施されている。発掘調査の報告書は、福万寺Ⅰ期地区、池島Ⅰ期地区では調査区ごとに調査終了後に概要報告を刊行し、後にそれらの調査成果をまとめて本報告を刊行していた。福万寺Ⅰ期地区の全ての調査区の成果をまとめた『池島・福万寺遺跡2』は2002年

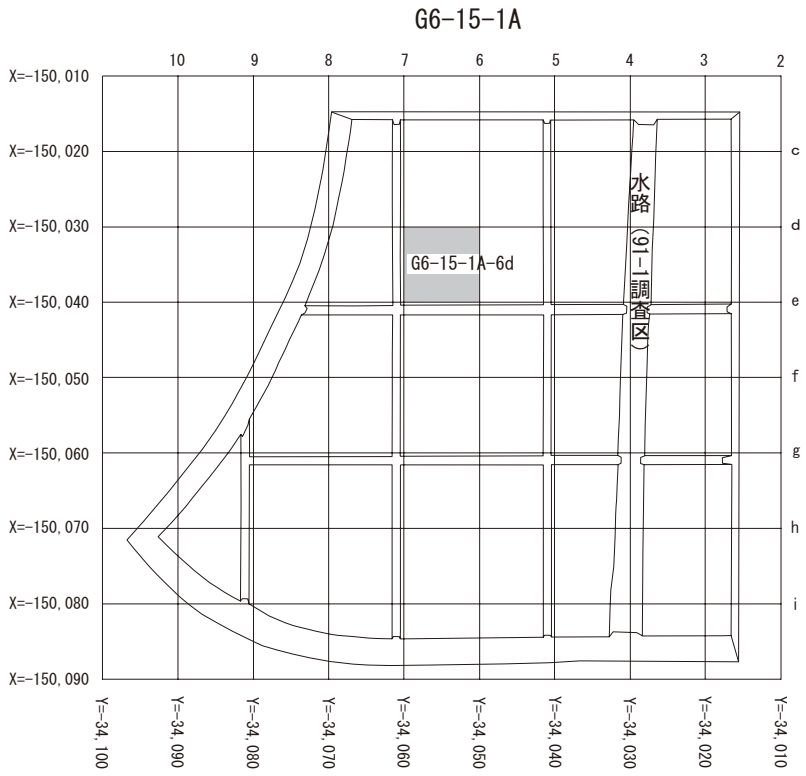
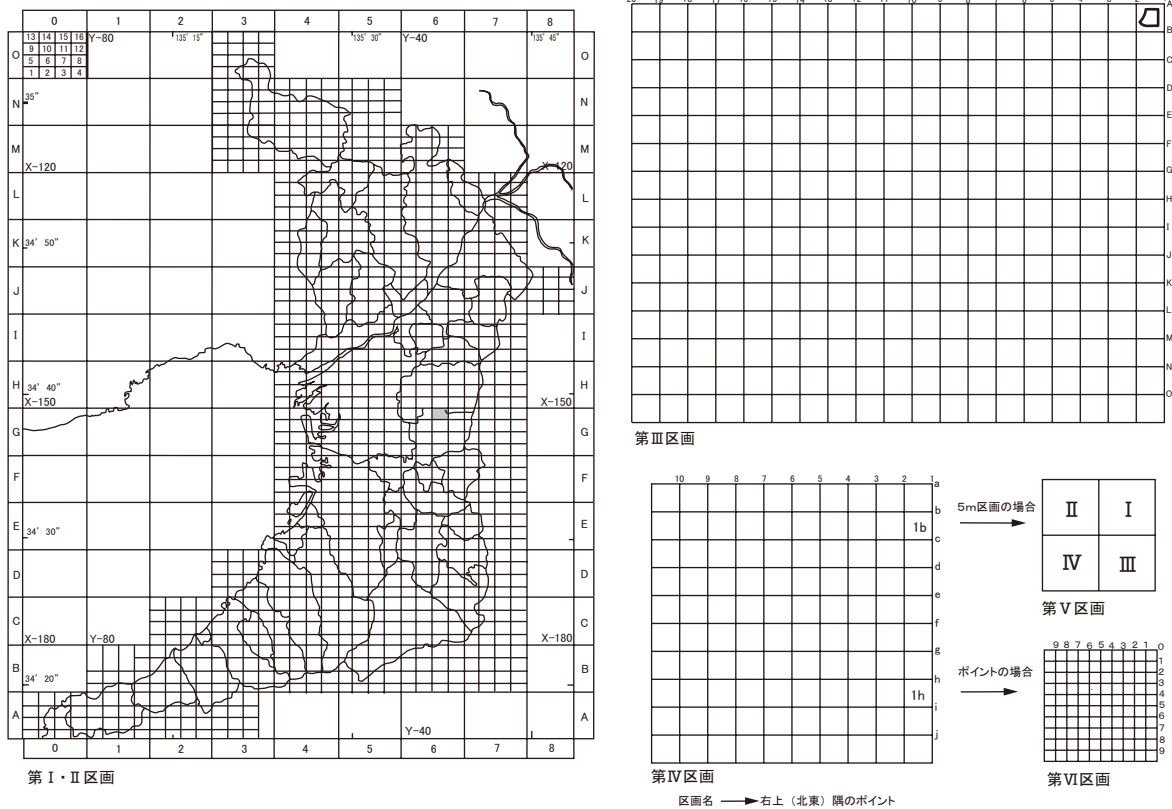


図3 地区割り図・05-2 調査区の地区割り

に刊行し、池島Ⅰ期地区の成果は『池島・福万寺遺跡3』として2007年に刊行した。なお、報告書『池島・福万寺遺跡1』は下水工事に伴う発掘調査の成果をまとめたもので2000年に刊行している。Ⅱ期地区の調査開始にあたって報告書の刊行についても協議が行われ、ひとつの事業契約ごとに報告書を作成する方式に変更された。

第2節 調査方法

今回の調査地は、東大阪市池島町7丁目地内に所在し、池島Ⅱ期工区の南西隅部に位置する。調査区の名称は「池島・福万寺遺跡Ⅱ05-2調査」であり、現地での調査は2005年8月19日から2007年8月31日までの期間で実施した。

発掘調査、整理作業については、財団法人大阪府文化財センターが作成した『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』2003に準拠して実施している。当センターでは、大阪府下を統一基準で区画する目的で、国土座標（世界測地系第Ⅵ系）を基準線にした第Ⅰ区～第Ⅵ区までの6段階の区画を設定し、さらにこれを細分して最小5m区画に細分している（図3）。本報告書では、検出遺構の説明にあたって、地区割りの標記にしたがって遺構位置を記述している。なお、本報告における北は、座標北を指し、標高は東京湾平均海水面（T.P.）を基準とする。

本調査区では、周辺調査区との関連や遺構面の残存状況により、重要と考えられる遺構面に関しては、航空写真測量を実施した。航空測量にあたっては、当センターの仕様にしたがって縮尺50分の1及び縮尺100分の1で図化している。航空写真測量を行った遺構面は、第2-1面、第3-2面、第4面、第5層下面、第10面、第11面、第12面、第13面、第14-2面である。池島Ⅰ期地区で行ってきた写真測量と整合させることを意図して実施したが、遺構面の遺存状況などによって調査区ごとに若干の時期的な齟齬があり、同一の遺構面の名称であっても、全ての調査区が同一面というわけではないので注意が必要である。航空写真測量で測量した遺構面以外は、縮尺100分の1の平板測量を基本とし、各遺構に応じて5分の1、10分の1、20分の1、50分の1で実測している。

調査にあたっては、国土座標にしたがって東西と南北に20m間隔で土層観察用トレンチを先行掘削し、地層の観察や断面図の作成などに用いた。遺構番号は、遺構の種類に関係なく検出した順番に001・002・003……と3桁の番号をつけている。後に、同一の遺構と認識していたものが、別の遺構として認識された場合や遺構の検討の結果、遺構番号を与えることが適当であると判断したものについては、1001・1002……と4桁の番号を付けている。

出土遺物の整理作業や、報告書作成に関わる作業は、調査中から基本整理作業として行っていたが、調査終了後2007年9月から2008年3月までは池島支所で、2008年4月から同年9月までは中部調査事務所でも本格的な整理作業を実施した。出土遺物は洗浄、注記、復元の後、遺物台帳に登録し、必要なものは実測図の作成、写真撮影を行ない本報告書に掲載した。収納は掲載遺物・未掲載遺物に分別し実測図、調査写真などは各々に台帳を作成し収納している。

本報告書掲載の遺構図はすべてデジタルトレースによって作成したものである。また、空中写真撮影によって撮影した遺構全体図に関しては、図化解析機によって数値図化（DXF形式）されているため、IllustratorCS2上で簡単な加工のみを行った。なお、遺物実測図については、従来どおり手作業によるトレースを行った。報告書全体の編集は従来どおり、アナログ形式で編集しデジタルデータで作成した図版については、印刷段階での十分な打ち合わせによって他の部分と齟齬のないようにした。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

池島・福万寺遺跡は、河内平野の東南部に位置する。遺跡の範囲は、生駒山西麓に広がる扇状地の末端部から、旧大和川水系の玉串川に挟まれた後背湿地にあたる。遺跡の中央には南北に恩智川が縦貫しており、恩智川を境に東を池島地区、西を福万寺地区としている。遺跡の東は扇状地末端の微高地、西は大和川の支流玉串川の自然堤防が南北に発達する。遺跡の西側を北流する玉串川は大和川の支流であるが、近世には天井川化が進み、恩智川は後背湿地の最低部を流れる排水河川としての性格を強める。生駒山西麓には扇状地を形成した河川が西流するが、池島・福万寺遺跡に関する河川としては、遺跡の北の長門川、南の箕後川がある。

河内平野の古環境復原の研究は、梶山彦太郎・市川実により、河内湾、河内潟、河内湖への変遷が明らかにされ（梶山・市原1986）、それ以来いくつかの研究が発表されている。また、発掘調査データをもとにした地層や古環境復原についての研究成果が公開された。

最終氷期の河内平野は山地に囲まれ、丘陵、台地の間を大和川や淀川が流れ、生駒山西麓には「深野沼」と呼ばれる湿原が広がっていた。縄文海進の時期は、梶山・市川の「河内湾Ⅰの時代」（約7000～6000年前）にあたり、当遺跡でも海成層がみられ、海成層下底近くにアカホヤ火山灰の堆積が確認されている。縄文時代晩期初頭頃には、海水準が低下し、河内潟は淡水化し、河内湖へ変遷する。陸域では流路の下刻が起り、湖岸線も後退して当遺跡付近は低湿地へと変貌する。

当遺跡の西方を北流する玉串川については、流路の変遷と地形発達について議論が行われている。服部昌之は、玉串川は9世紀以降に流路を確立したとする見解を発表し（服部1978）、高橋学は福万寺Ⅰ期

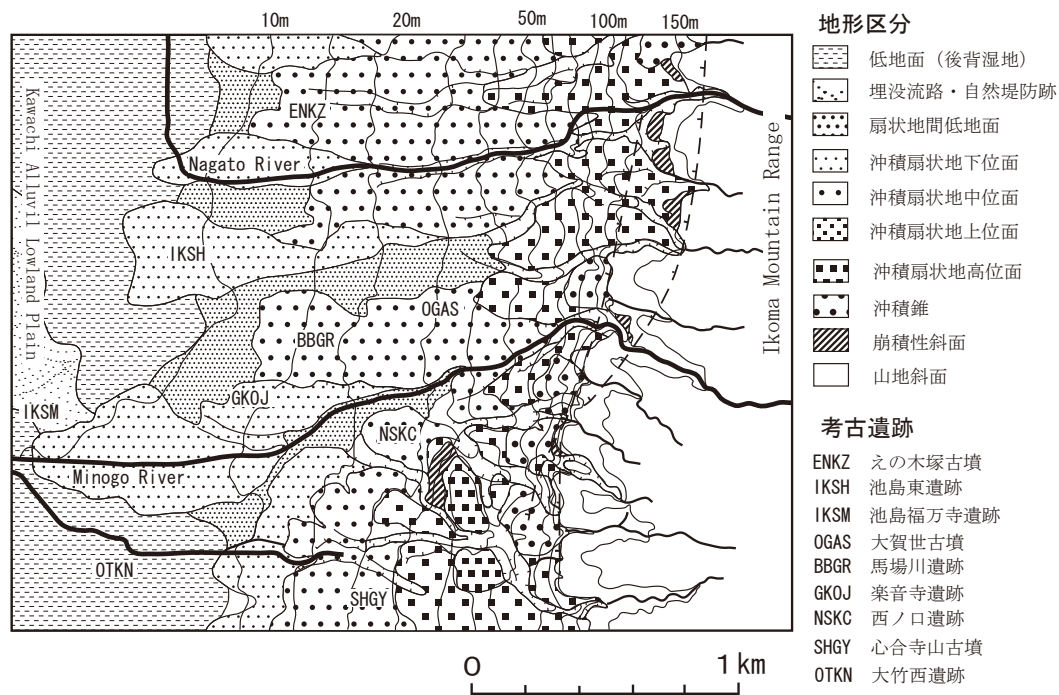


図4 周辺の地形分類図（松田 2001 より）

地区の調査に関して、弥生時代までは生駒山地から流下した河川の影響が強く、玉串川は中世以前にはなかったか、きわめて小規模であった可能性を指摘した(高橋 1995)。これに対して阪田育功は大和川水系の河道変遷の過程を追及し、古墳時代中期から後期には付け替え以前の玉串川の流路が形成されていた可能性を指摘した(阪田 1997)。また、松田順一郎は現在の玉串川西側のボーリングデータを検討し、弥生時代に堆積した沖積頂部陸成層下部と考えられる層準に厚さ 2～3 m の砂礫層がしばしば挟まれることに注目し、現在の玉串川近辺に大和川の分流が北流していた可能性を指摘する(松田 1998)。

当遺跡中央を流れる恩智川については、周囲の条里遺構の坪境線の方角などから、10世紀前半から12世紀後半頃のいずれかの時期に人工的に設定された排水河川(井上2002)であったと考えられている。

当遺跡周辺の地形をめぐっては、高橋学が河内平野全域の地形分類の中では、三角州 I a 帯、すなわち弥生時代中期までに河川の搬出した土砂によって陸化した場所に分類できるとした(高橋1991)。また、河角龍典は生駒山扇状地の発達史的地形分類図の作成をとおしてより細密に分析し、当遺跡が生駒山地からの堆積物の供給と、大和川水系の氾濫に大きな影響を受けている扇状地と低地の境界に位置するとした(河角1999)。遺跡の形成に重要な役割を担った池島・福万寺遺跡周辺における流路変遷については、松田順一郎(松田1994・2002)、高橋学(高橋1995)、井上智博(井上2002・2005)による研究がある。

第2節 歴史的環境

当地域で最も古い人類の活動痕跡は、旧石器時代にさかのぼり、生駒山西麓の神並遺跡、正興寺山遺跡、標高100m前後の山畑遺跡で後期旧石器時代のナイフ形石器が採取されている。

縄文時代の遺跡は、生駒山西麓の扇状地上、沖積低地に展開しており、東大阪市域、八尾市域では、日下遺跡、神並遺跡、鬼虎川遺跡、水走遺跡、鬼塚遺跡、馬場川遺跡、恩智遺跡が集落遺跡として知られている。縄文時代早期では、神並遺跡から神宮寺式期の集石土坑や焼土坑が検出され、早期土偶も出土していることから、集落の存在が考えられる。縄文時代前期・中期は、鬼虎川遺跡において当該期の土器、動物遺体、木の実類が出土している。また、恩智遺跡からも北白川下層 II c 式の土器が出土している。縄文時代後期では日下遺跡や縄手遺跡があり、日下遺跡は宮滝式期の竪穴住居が検出されている。また、縄手遺跡は北白川上層式 I 期に属する 2 基の住居跡が発掘された後期前葉の集落遺跡である。縄文時代晩期では、日下遺跡、馬場川遺跡、鬼塚遺跡、恩智遺跡などの遺跡がある。日下遺跡では、滋賀里 III a、III b 式期の環状列墓、セタシジミを主体とする貝塚が検出されている。馬場川遺跡は滋賀里 III a 式期に竪穴住居、埋甕などが営まれ、土偶を多量に保有する点でも特殊である。恩智遺跡は前期から晩期までの土器が出土しているが、縄文晩期の拠点的な集落であったと考えられている。鬼塚遺跡では、滋賀里 IV 式後半期の土器に初圧痕が認められ、稲作の存在が示唆されている。この他に、水走遺跡ではセタシジミの貝塚が検出された。河内平野では長原式期の遺跡がより低地に進出することが知られているが、生駒山西麓では、鬼塚遺跡、縄手遺跡、鬼虎川(水走)遺跡、植附遺跡などの諸遺跡がある。

弥生時代前期の水田遺構は、池島・福万寺遺跡のほか、志紀遺跡、若江北遺跡、山賀遺跡において前期中葉以降の水田が検出されている。また、集落では大竹西遺跡、水越遺跡が知られている。弥生時代中期後半から後期にかけては、生駒山西麓の扇状地に山畑遺跡、岩滝山遺跡、花岡山遺跡などの高地性集落が出現するとともに、比較的小規模の集落が多く認められるようになる。大竹西遺跡からは集落遺跡としては珍しく、鉄剣が出土している。

古墳時代は、当遺跡の池島 I 地区から、庄内・布留式土器を多く含む古墳時代前期の遺構を検出し、

福万寺 I 期地区からは中期～後期にかけての集落跡を検出した。当遺跡周辺では、庄内式期から布留式前半期に、沖積平野の集落遺跡が飛躍的に発達し、他地域に先駆けて庄内形甕を使用している。中でも長瀬川右岸の東郷遺跡、成法寺遺跡、小阪合遺跡、矢作遺跡、中田遺跡、東弓削遺跡は「中田遺跡群」として把握される大規模集落であり（山田1994、市村2006）、加美遺跡、久宝寺遺跡とともに卓越した存在である。古墳時代集落は長原・加美・亀井・久宝寺に代表されるが、これらは自然堤防、微高地に展開している。古墳は生駒山の西麓の丘陵部に営まれ、前期古墳では向山古墳、中期には西の山古墳、花岡山古墳、中谷山古墳、心合寺山古墳が築造される。このほかに、前期から中期にかけて楽音寺・大竹

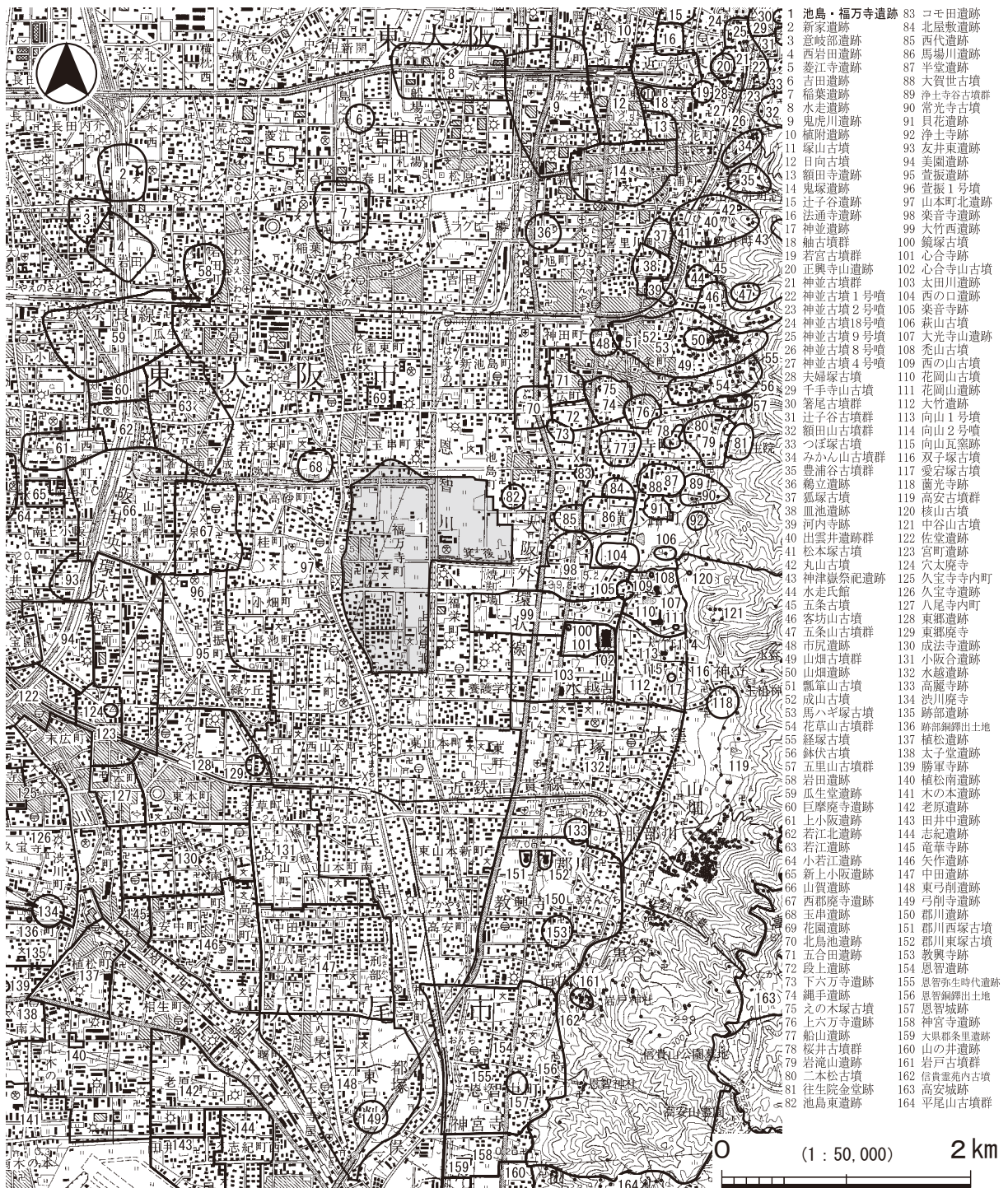


図5 周辺の遺跡分布図

古墳群が形成される。また、萱振古墳に代表されるように平野部にも古墳が営まれる。後期古墳では、横穴式石室導入期の古墳と目される郡川東塚古墳、郡川西塚古墳が築造され、生駒山西麓一帯には横穴式石室を主体部とする群集墳が形成される。東大阪市域では浄土寺谷古墳群、花草山古墳群、山畑古墳群、五条山古墳群、五里山古墳群、六万寺古墳群、桜井古墳群、出雲井古墳群、客坊山古墳群、豊浦谷古墳群、みかん山古墳群、神並古墳群、墓尾山古墳群があり、これらは相互に近接し群集墳群を構成する。八尾市域では高安古墳群、柏原市域には平尾山古墳群の群集墳群が所在する。

古代には、生駒山西麓に南北に連なるように古代寺院が建立され、当遺跡周辺では生駒山西麓に北から河内寺跡、心合寺跡、高麗寺跡、教興寺跡が、平野部には西郡廃寺が造営される。また八尾市と奈良県とをまたぐ範囲には古代山城として有名な高安城跡がある。

池島・福万寺遺跡の位置する河内郡は、六町方格の条里型地割と条名・坪名が良好に遺存する。当地の条里研究については、『大阪府全志』で池島条里一帯の条里図を掲載した井上正雄（大正11年）の研究を嚆矢とし、その後、山本博（1942）、天坊幸彦（1947）、足利健亮（1965）により、河内郡の条里プランの復原が進められた。1970年代以降は発掘調査の成果を活用し、条里型地割の施工時期についての研究や条里施工の意義に関する研究が進められた。荻田は池島条里の試掘調査の成果を踏まえ、池島条里についてまとめた（荻田1977）。その後、池島・福万寺遺跡での広範囲におよぶ発掘調査の結果、福万寺Ⅰ期地区において、現行条里地割とは異なる方角地割の存在が明らかになる。江浦洋は畦畔、溝、土器埋納遺構・置石・銅鈴の分析から、7世紀代と平安時代中期に開発の画期があり、前者は律令国家が主導した開発、後者は摂関家による荘園開発に伴うものである可能性を示した（江浦1992）。この見解は秋山2000、井上2002、廣瀬2007にも踏襲されている。近年、市村慎太郎は池島・福万寺遺の7世紀代の土器埋納遺構の存在と、長原遺跡、志紀遺跡や中田遺跡など河内の遺跡調査成果から、条里施工時期を引き上げる見方を示している（市村2007）。

平安時代には、当遺跡一帯は荘園「玉櫛荘」の範囲に含まれる。玉櫛荘の成立時期については、10世紀後半とみられている。玉櫛荘は当初摂関家の所領であったが、保延三年（1137）年宇治平等院の建立の際、平等院に寄進され、以後室町時代にかけて平等院領となっている。摂関家所領時代の玉櫛荘については、藤原実資の『小右記』長和四年（1015）四月五日条に「玉串主人追散辛島庄馬之日記」とみえ、道長が辛島牧司であった源訪に玉櫛庄司を兼ねさせ、双方の四至境を定めさせるよう実資に提案している。玉櫛荘は平等院荘園の中でも基幹荘園と位置づけられていたようであり、「中外抄」や「続古事談」には、頼通が諸庄からの米を検分したところ「河内国の玉櫛御庄の米」が第一であったという。中世においても玉櫛荘は重要な荘園であったと考えられ、鎌倉時代の殿下渡領を記した『摂籙渡庄目録』（九条家文書）に平等院十八カ庄の一つ「玉櫛庄」がみえ、年貢七五〇石で平等院領のうち最大規模の荘園であった。中世の文書史料からは、庄民と地頭の相論、玉櫛庄人に対する訴訟などの記録が残る。永徳三年（1383）十二月二十五日、摂政二条良基の申請により、將軍足利義満は玉櫛庄を相国寺に寄進し（『後鑑』同日条）、「大乘院寺社雑事記」文明七年（1475）十月二十四日条には「河内国玉クシ庄室町殿御領」とあり、幕府御料所にもなったことが知られる。一方、当時も「平等院領河内国玉櫛庄内寺用供米」はなお存在していた（応仁二年十二月十九日「後花園上皇院宣」案文消息類）。古代から中世の河内国の荘園については、諸資料にあげられているものを数えると百余におよぶ。その内わけは、皇室領、摂関家領、岩清水八幡宮領、興福寺領、その他の寺領、諸寮司領であり、時代により領主が変遷するとともに、各所領が散在していた。玉櫛荘の周辺では、藤原実資領「辛島牧」、醍醐寺領河内五箇荘の「郡荘」「渋川荘」「若江荘」などが知られている。

玉櫛庄について、考古資料からその内容を知るものとしては、池島・福万寺遺跡の南東約2kmに位置する向山瓦窯跡がある。ここからは平等院における初期の河内系瓦と同範の資料が確認されており、当地域と平等院が荘園「玉櫛庄」によって密接に関係することが考古資料からも裏付けられている。また、池島I期地区では、楠葉型瓦器碗の埋納遺構が確認されているが、楠葉型瓦器碗の分布は撰関家の荘園との関係で流通していたことが想定されており、玉櫛庄との関係も注目される。

鎌倉時代にはこの地域一帯は開発領主水走氏の勢力下にあったと考えられている。この時代の遺構では、水走遺跡から12世紀から13世紀の土坑、13世紀から15世紀の集落が検出されている。

室町時代には、河内守護の畠山氏が若江城を拠点にこの地域を支配する。当遺跡の北西約2kmに位置する若江遺跡では15世紀前半の溝や井戸、土坑が確認されており、若江城にかかわる遺構と考えられている。若江城はその後16世紀に三好氏の居城となり、城郭の整備が行われたものと推定されている。

江戸時代「池之島村」は幕府領、「福万寺村」は狭山藩北条氏領となる。天保四年（1833）刊の大蔵永常『綿圃要務』には、河内の湿田では土を掻き揚げた高いところに綿を、低いところに水を溜めて稲を栽培する半田、または掻揚田と呼ばれる形態の耕作地があったことを示す記述があり、島畠が顕著に認められる河内の様子を記した文献といえる。

近世・近代の史料としては、絵図・地引図が現存している。享保十九年（1734）『福萬寺村惣絵図』、明治十二年（1879）『堺県河内国第二大区四小区河内郡福万寺村地租改正地引絵図』、『堺県河内国第二大区四小区河内郡上之島村地引図』、明治十三年（1880）『堺県河内国第二大区四小区河内郡市場村地引図』の地引図には、宅地、墓地、畦、畠、水路などが表示され、土地利用の実際を理解するうえで有効である。

第3節 既往の調査

池島・福万寺遺跡を含む東大阪市南部から八尾市北部にかけては、条里地割が良好に残存する地域であり、歴史地理学の調査研究によって河内国条里を復元するうえで重要な地域として知られていた。当遺跡の発掘調査は、1972年に府立池島高校敷地内の調査を嚆矢とする。その後、1970年代後半に水道管埋設工事などに伴う調査が実施された。財団法人東大阪市遺跡保護調査会によって行われたこれらの調査によって、池島遺跡は条里遺構の下層にも、古墳時代、さらには弥生時代に遡る遺構があることが判明した。1980年に当遺跡内に治水緑地の建設計画が策定され、大阪府教育委員会と土木部の協議の結果、まず、条里遺構の埋没深度と下層の遺構の有無、およびその状況を把握するための試掘調査を実施する運びとなった。1981年試掘調査に関する覚書が締結され、同年12月に大阪府教育委員会により八尾市福万寺町で試掘調査が着手された。試掘調査では重層的な遺構の重なりが確認され、その成果にもとづき1982年から外堤部・越流堤・排水門・導水路などの施設部の本調査が大阪府教育委員会の直営で実施された。1989年度からは、大阪府教育委員会にかわって(財)大阪文化財センターが池島・福万寺遺跡の発掘調査を実施しているが、その後の調査で、縄文時代の遺物が出土し、池島地区の試掘ではより広い範囲で遺構の存在と、遺物の出土が認められ、遺跡の範囲も大きく広がることが知られるようになる。本調査区の範囲内では、1991年に池島I期地区の建設に伴い敷設された暫定水路の発掘調査（91-1調査）が行われている。中世の遺構面までが調査され、島畠、水田、足跡などが確認されている。

これまでの調査によって、弥生時代以降の耕作地の遺構のほか、福万寺地区では古墳時代中期～後期の集落が発見され、池島地区では弥生時代前期の水田、古墳時代前期の集落が発見され、集落の変遷、土地利用の変遷が明らかにされてきた。現在、池島・福万寺遺跡は低湿地遺跡の代表的な遺跡として、弥生時代から近世ま

での河内平野の歴史、農耕の歴史を復元する上で重要な遺跡であり、弥生時代前期の水田遺構、古墳時代の集落、古代の条里地割の施工や、古代・中近世の耕作地の具体相を解明する成果が得られている。また、2006年には縄文時代晩期から弥生時代前期の土壌墓、木棺墓、居住域などの遺構が検出された（04-2調査区）。今後、調査が進展することにより、縄文時代晩期の様相や弥生時代の集落についても新たな知見が得られるものと期待される。

参考文献

- 秋山浩三・朝田公年編 2000『池島・福万寺遺跡1』 大阪府文化財調査研究センター
- 足利健亮 1965「第5節条里と小字地名」『枚岡市史』第3巻別編 枚岡市史編纂委員会
- 市村慎太郎 2007「中河内における条里遺構の最近の調査」『条里制・古代都市研究』第22号 条里制・古代都市研究会
- 井上正雄 1921『大阪府全志』巻之四 清文堂出版株式会社
- 井上智博 1995「八尾市福万寺地区における現景観の形成過程－池島・福万寺遺跡（福万寺I期地区）の調査から－」『大阪文化財研究』第9号 大阪府文化財調査研究センター
- 井上智博 2005「池島・福万寺遺跡周辺の流路変遷に関する展望－堆積物のX線回折試験・化学分析結果をふまえた再検討－」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要30』 大阪府文化財センター
- 江浦 洋 1992「条里型水田面をめぐる諸問題」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要VII』大阪文化財センター
- 荻田昭次ほか 1973『池島町の条里遺構－調査概報－』 東大阪市遺跡保護調査会
- 大野 薫 1997「生駒山西麓の縄文集落」『河内古文化研究論集』 柏原市古文化研究会
- 梶山彦太郎・市原実 1986『大阪平野のおいたち』 青木書店
- 河角龍典 1999「池島・福万寺遺跡および周辺地域の地形」『調査研究報告』第2集（財）大阪府文化財調査研究センター
- 河角龍典 2000「沖積層に記録される歴史時代の洪水跡と人間活動－大阪府河内平野池島・福万寺遺跡の事例－」『歴史地理学』42巻1号歴史地理学会
- 河角龍典 2002「池島・福万寺遺跡および周辺の地形」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXVI』 大阪府文化財センター
- 阪田育功 1997「河内平野低地部における河川流路の変遷」『河内古文化研究論集』 柏原市古文化研究会
- 高橋 学 1991「河内平野の地形環境分析I－河内平野の環境復原に関する基礎的考察－」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』 大阪文化財センター
- 高橋 学 1991「河内平野の地形環境分析II」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要II』 大阪文化財センター
- 高橋 学 1992「河内平野の地形環境分析III」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要VII』 大阪文化財センター
- 天坊幸彦 1947『上代浪華の歴史地理的研究』 大八州出版
- 中村幸代 1998「河内系軒瓦からみた平等院の様相」『橘史学』第13号 京都橘女子大学歴史文化学会
- 服部昌之 1978「大阪平野低地古代景観の基礎的研究」『歴史地域研究と都市研究』
- 別所秀高 1999「微細形態の試行－その方法と考古遺跡への応用例－」『光陰矢如』 荻田昭次先生古稀記念論集刊行会
- 松田順一郎 1994「池島遺跡第11次発掘調査報告」『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告1992年度』 東大阪市文化財協会
- 松田順一郎 2002「堆積物・土壌からみた遺跡のなりたち－東大阪市楽音寺、池島遺跡の事例－」『大阪府埋蔵文化財研究会（第45回）資料』 大阪府文化財センター
- 森本 徹・廣瀬時習・島崎久恵・市村慎太郎 2007「摂河泉地域における古墳時代集落の基礎研究」『調査研究報告』第5集 大阪府文化財センター
- 山田隆一 1994「古墳時代初頭前後の中河内地域」『弥生文化博物館研究報告』第3集 大阪府立弥生文化博物館
- 山本 博 1942「河内国中河内郡に於ける條里遺制の新例について」『考古学雑誌』第32巻第6号 日本考古学会

第3章 調査の概要と基本層序

第1節 調査の概要

本調査区は、池島Ⅱ期工区の南西端部に位置している。調査着手時、現地には治水緑地内の工事に伴う代替道路や用水路があり、調査の開始にあたっては、これら構造物を撤去する必要があった。調査は堤防上の道路の供用を待って、道路や水路などの撤去工を2005年12月から実施した。撤去工の内容は、アスファルトやコンクリート砕石の除去、盛土の除去、街灯やガードレールの撤去、水路部の鋼矢板、コンクリート床の除去などであり、2005年12月から2006年1月末まで実施した。

人力掘削は2006年1月から行き、まずは近世面の把握のためのトレンチ調査を行った。このトレンチ調査では現代の道路設置に伴う掘削によって、近代面が削平を受けていることが明らかになった。この成果を受けて、近世末から近代面の平面調査は行わず、断面記録を作成した後、近代耕作土（第1層）および近世の洪水堆積土（第1b層）の機械掘削に移行することとし、機械掘削は2006年2月3日から2月24日まで行った。

近世遺構面の本格的な調査は2006年3月2日から行き、以後5月まで近世面の調査を行った。第1回の空中写真測量は3月24日に実施している。なお、空中写真測量は第2-1面、第3-2面、第4面、第5層下面、第10面、第11面、第12面、第13面、第14-2面で実施している。

調査期間中、2006年5月15日、16日に池島中学（2年生）の体験学習に供し、中世末から近世初頭（第2-5b面）の人や牛の足跡や、耕作痕跡の掘削を実施した。6月から9月には中世の各遺構面を調査した。この間、8月26日には大阪府立弥生文化博物館主催の発掘体験を実施している。これには一般募集した小・中学生と保護者が参加し、土層断面の観察や記録作成の体験を行った。古代および古墳時代の遺構面の調査は、2006年10月から11月まで行き、10月14日には八尾市中心合寺山古墳学習館との共催で体験発掘を実施し、10月19日には和光高校の研修旅行を受け入れた。

2006年12月からは弥生時代の各面の調査を実施した。12月に弥生時代後期遺構面の調査を行い、2007年2月には弥生時代中期遺構面の調査、3月には中期初頭の遺構面の調査を行った。そして、2007年4月から弥生時代前期の遺構面の調査に入り、水田・溝群などの遺構を検出した。これらの成果を受け、5月18日に弥生時代前期の遺構面を対象として現地公開を実施した。現地公開の前後には、北山本小学校（6年生）や池島小学校（6年生）の児童の見学会を実施しており、現地公開を含めこの期間に約240人が調査地を訪れた。弥生時代前期遺構面の調査終了後、7月には縄文時代後期の遺構面の調査を行い、同月に人力掘削を終了した。

本調査では、自然科学的分析用に各段階で土壌や木材、種子のサンプル採取を実施している。このうち、古代面の土壌や遺構内埋土、弥生時代遺構面の土壌や溝埋土について、花粉分析・大型植物遺体同定分析・珪藻分析を、弥生時代の杭列について、放射性炭素年代測定（AMS）を実施した。この他に、総合地球環境学研究所（佐藤洋一郎教授）の研究プロジェクトの一環として、当調査区の弥生時代前期の水田とその周辺地を対象に各種分析が行われ、本報告でもその成果の一部を掲載した。

現地調査は2007年8月をもって終了した。出土した遺物はコンテナ35箱である。調査終了後、遺物整理作業、報告書作成作業を行い、2008年12月本書の刊行をもってすべてを終了した。

第2節 調査地の層序（図6・図7、表1）

池島・福万寺遺跡では、これまでの調査によって、基本層序が確立されており、調査にあたっては、この基本層序との対応関係を検討しながら各層の観察、記述を行った。土層を認識するにあたっての観察視点や判断基準についてはこれまでの池島・福万寺遺跡の例に倣っており、詳細については福万寺Ⅰ期地区（井上編2002）、池島Ⅰ期地区（廣瀬編2007）の各報告書を参照されたい。遺構埋土の観察と解釈に際しては、趙（1995・2003）を参考にした。

本調査では、現地表下4.5mまで調査を行い、大きく22層に分けて各遺構面を調査した。以下、各層の特徴を記述する。

第1層 粗粒砂～中粒砂（灰色10Y5/1）を主体とする粘土・砂質礫層である。下部の第1b層を母材とする作土層と自然堆積層（第1b層）からなる。当調査区では現代の道路敷設に伴い旧耕土が掘削されたことによって、部分的に確認したに過ぎないが、2層～3層に細分することができる。

第1b層 極粗粒砂～中粒砂（灰白色10YR8/1）を主体とする砂質礫層である。調査区の全域に分布しており、江浦洋は福万寺地区の調査において、第1b層を1802年（享和二年）の洪水によって堆積した氾濫堆積物とする見解を示す（江浦1992）。

第2層 中粒砂～極粗粒砂を多く含む礫・粘土質砂の作土層と、洪水堆積物の砂質礫層である。第2層は池島Ⅰ期地区では調査区によって把握される土壌化層の枚数が異なるが、概ね5層に細分している。それぞれの調査区の第2層の対応関係については、洪水砂の分布が一様ではなく、島島の拡張や水田面の部分的な更新が多かったと考えられるために、広範囲にわたって同一時期の遺構面を捉えるのが困難である。さらに、本調査区の位置する二十二坪は、西側の二十七坪や北側の二十一坪（池島Ⅰ期地区）に比べ、地形的に高い場所であるため、洪水堆積物の分布が顕著ではない。以下、第2層の各層について詳述する。本報告書における第2層の細別については、あくまでも本調査における層序番号を示すものである。

第2-1層 鉄分の沈着が顕著な、わずかに礫質粘土砂（オリーブ灰色2.5GY5/1）の作土層である。島島部分では、自然堆積層の第2-1b層が島島の芯に確認できる。

第2-2層 中粒砂～シルトを主体とするシルト質砂（灰色N6/0）の作土層である。鉄分・マンガンの沈着が顕著で、第2-1面段階の耕作により大部分が攪拌されている。第2-1b層に覆われた箇所、部分的に遺構面が残存する。



写真1 第1b層～第3-1層



写真2 第2-5b層～第10-1層

第2-3・4層 中粒砂～細粒砂を主体とするシルト質砂（青灰色10BG5/1）の作土層である。本調査では、第2-3層・第2-4層を全面にわたって分層することができなかつたため、島島の肩部で確認できる島島の拡張段階について、明確に所属層を示すことはできない。同様に、島島部の自然堆積層も第2-3・4b層とする。

第2-5層 中粒砂を主体とする礫質シルト（オリーブ灰色2.5GY5/1）の作土層である。第2-5b層を母材としており、水田部分ではシルト粒を多く含んでいる。

第2-5b層 調査区の全域に分布するシルト質礫の自然堆積層である。なお、第3層段階で島島が形成されている箇所や、第2-5面段階で水田域であったところについては、攪拌によってプライマリーな第2-5b層が残存していない箇所もある。第2-5b層は、上部はラミナを有する砂礫層であり、最下部は植物遺体を含むシルト質砂である。

第3層 極細粒砂を主体とするシルト質砂の作土層と、シルト・砂質礫の洪水堆積層からなる。池島I期地区の調査では、各調査区によって若干の相違はあるものの、概ね3面の遺構面が調査されている。調査区によってはさらに細分されるが、いずれの遺構面も土壌化は弱く、短い周期で遺構面が更新されたものと考えられている。本調査区においても、3面分の遺構面を確認したが、水田部分は攪拌されていたため、全面的に調査したのは第3-1面、第3-2面の2面である。

第3-1層 砂質シルト（暗オリーブ灰色5G4/1）の作土層。上面に第2-5b段階にプリントされた人の足跡、起耕具痕跡、偶蹄目の足跡を検出した。第2-5面段階で島島であった箇所では、極細粒砂～シルトを埋土とする東西方向の耕作痕跡が認められる。池島I期地区における第3-1層である。

第3-2層 シルト質砂（暗青灰色10BG4/1）の作土層である。第3-1層に比べ粒径の粗い砂を含み、色調も全体的に暗い傾向がある。シルト質の土塊などを含む耕作土である。第3-1層に比べて淘汰は悪く、耕作土としての期間も長かつたものと考えられる。第3-2層の上面で遺構検出を行ったが、97-3調査区における3-2-1面と同一面と考えられる。

第3-3層 シルト質砂（暗緑灰色10G4/1）の作土層である。第3-2面の島島の下において、確認できたが、第3-2面段階で水田であった部分は攪拌されており分層はできなかった。

第4層 砂礫を多く含む礫・シルト土質砂（暗緑灰色10G4/1・緑灰色10G6/1）の作土層で、第3層とは明瞭に区別できる。第3-2層段階の耕作によって攪拌を受けてはいるものの全体的に残りは良い。第4層から第8層はシルト質を基質とした粘土・礫質土の耕作土で、層間に氾濫堆積物などが入らないため層相が類似する。また、土壌化層が連続しており、層境が明瞭に認められるわけではない。第4面とした遺構検出面は、第4層の上部を任意検出面としたものである。

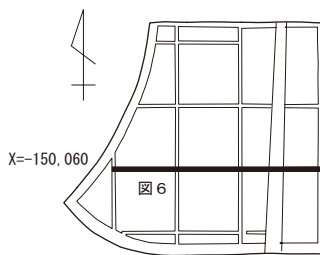
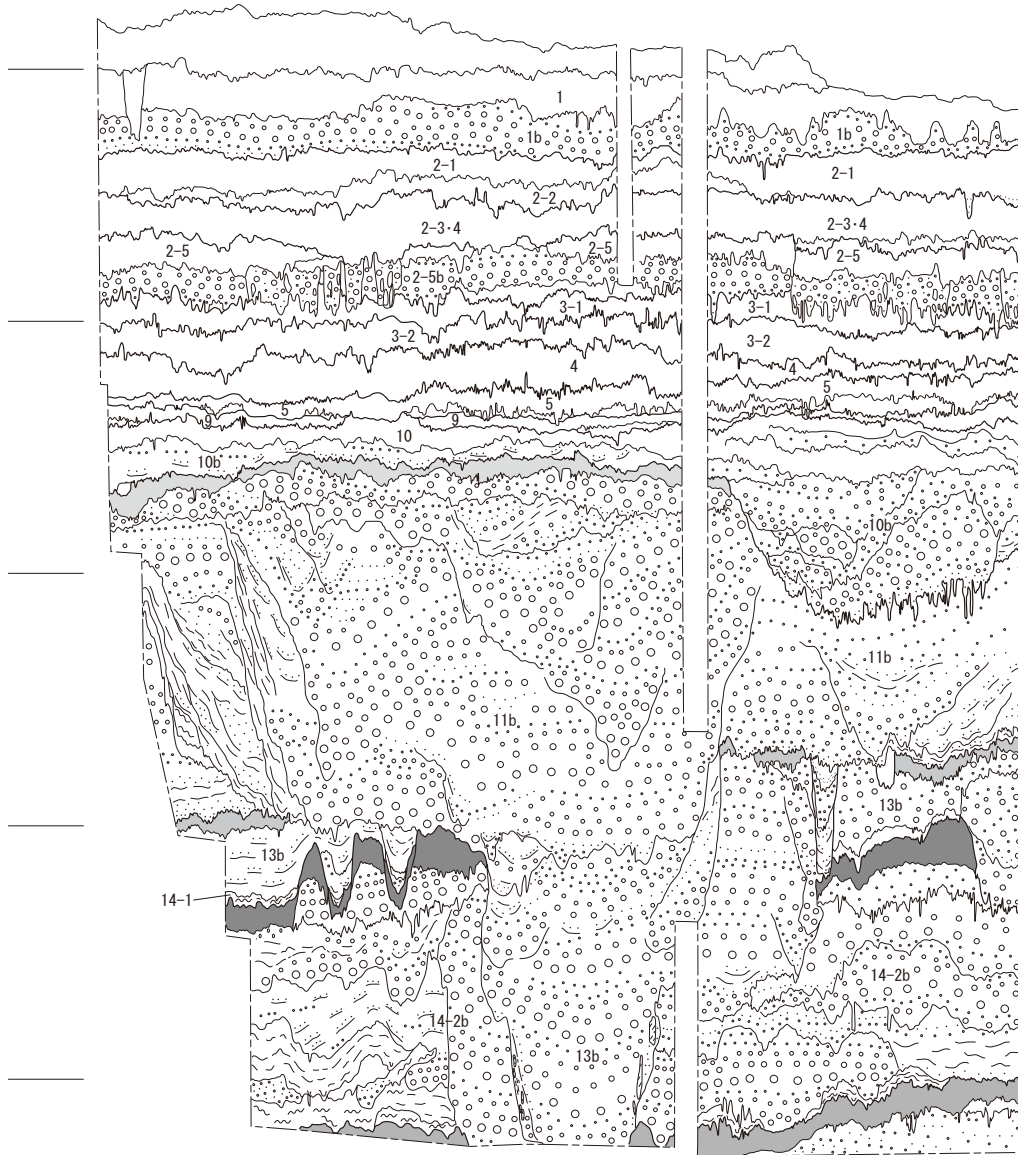
第5層 極粗粒砂～細粒砂を含む礫質シルト（暗青灰色10BG4/1・暗緑灰色5GY3/1）である。第4層に比べ砂礫を多く含み、第4層以下の層の中では認識しやすい。酸化カルシウム粒を多く含む。第5層上面は、第4面の耕作によって顕著な遺構は検出していないが、第5層下面で遺構の検出を行っている。

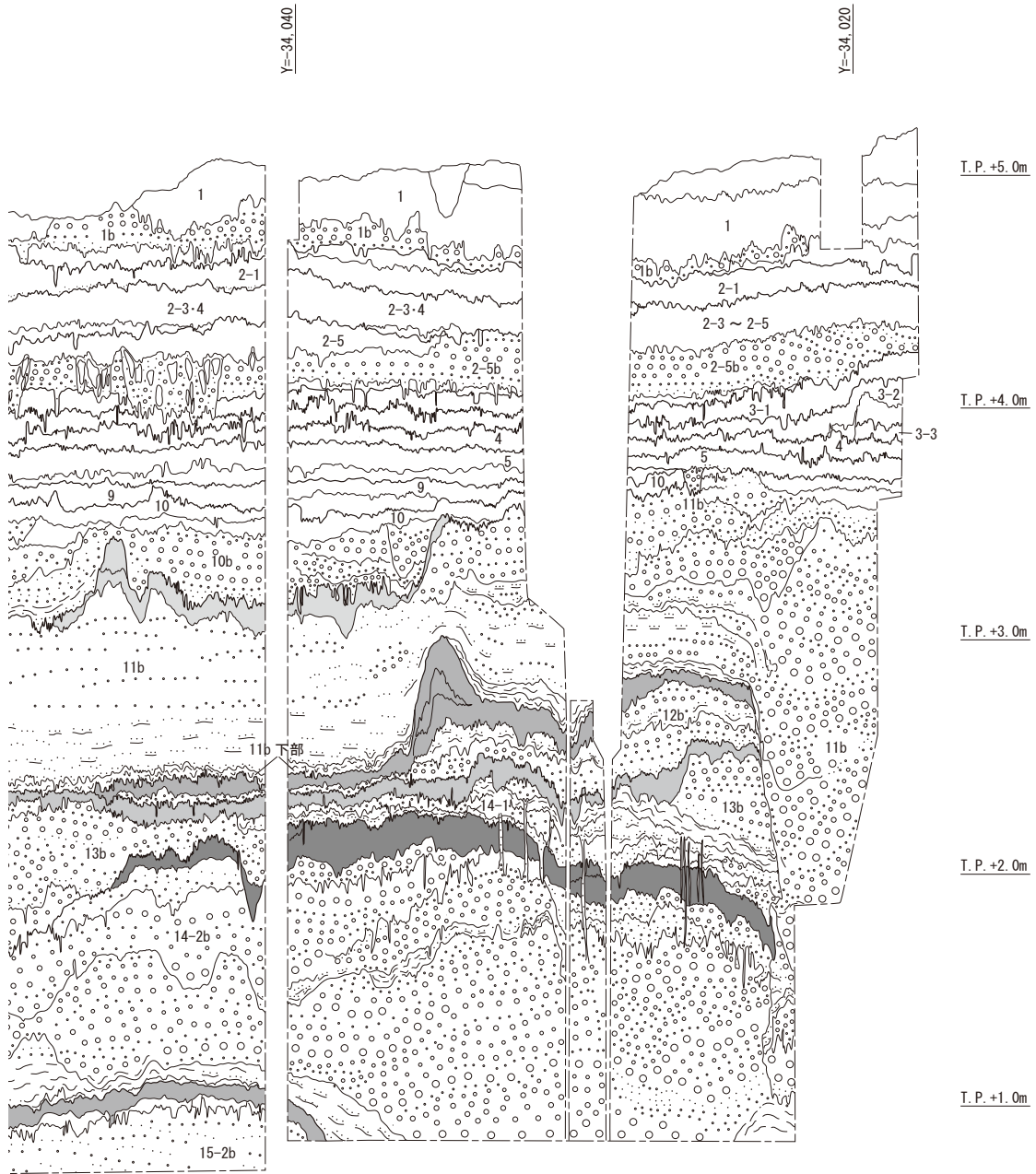
第6層・第7層については、当調査区では分層することが困難である。第5層の下にも、第8層、第9層にいたるまでに、シルト質砂の間層が部分的に確認できる箇所も存在するが、池島I期地区の第6層、第7層との具体的な対応関係は不明である。

第8層 砂質シルト（緑灰色10G5/1）の作土層である。これまでの調査成果から、第8層は古代の作土層と考えられる。また、第8層では、地震による変形作用が指摘されてきたが、当調査区においても南西部で土層断面に現れた変形構造を観察することができる。当調査区では、第8層の分布が部分的であ

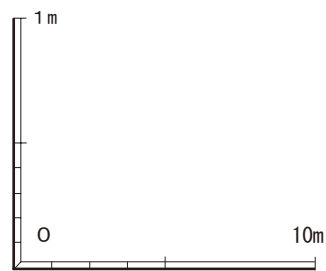
Y=34.080

Y=34.060





- | | | | |
|---|------|---|--------|
|  | 第11層 |  | 第14-2層 |
|  | 第12層 |  | 第15-2層 |
|  | 第13層 | | |

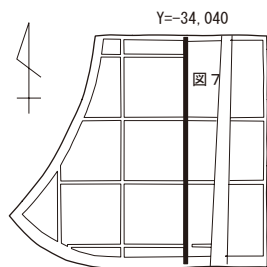
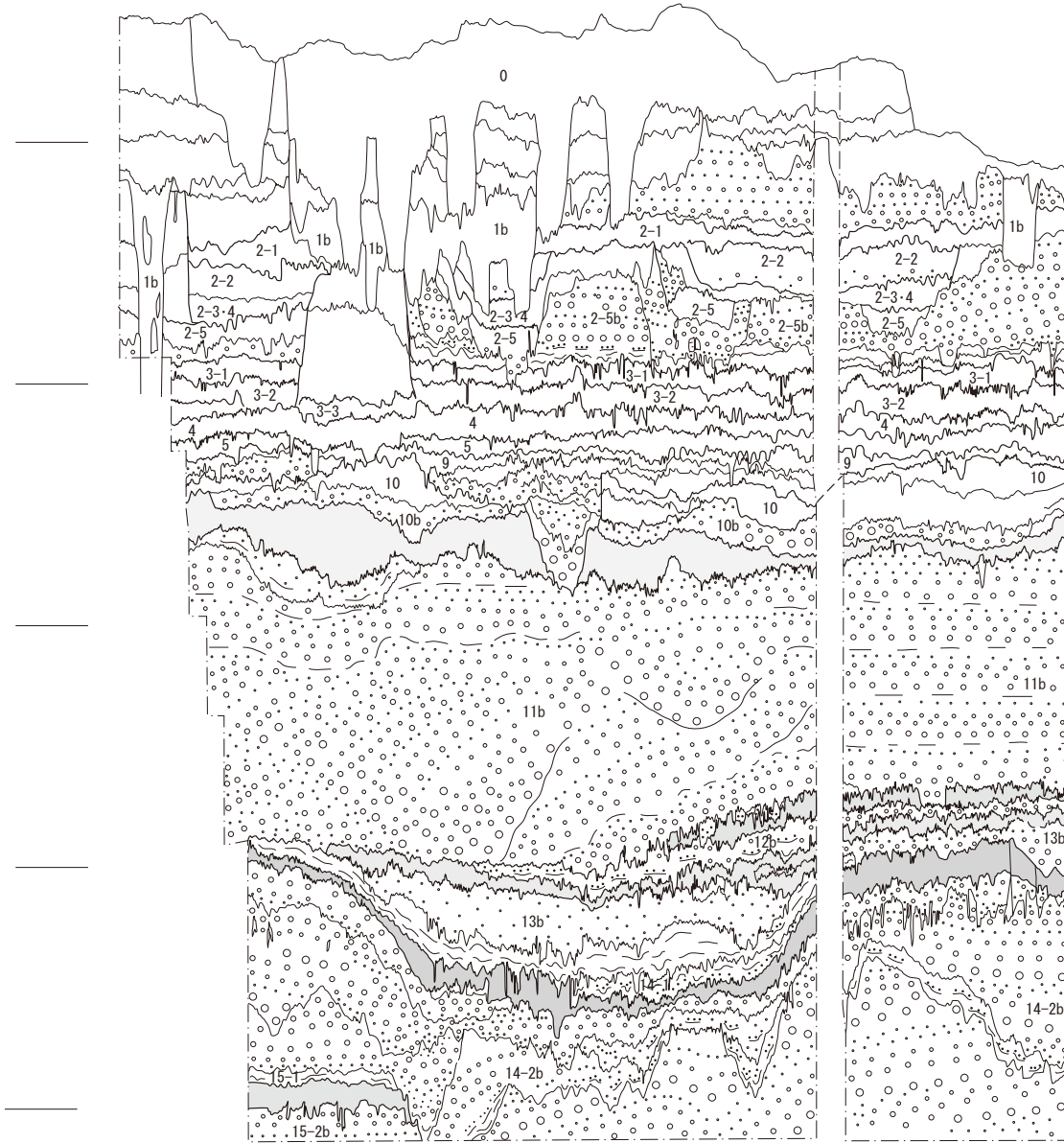


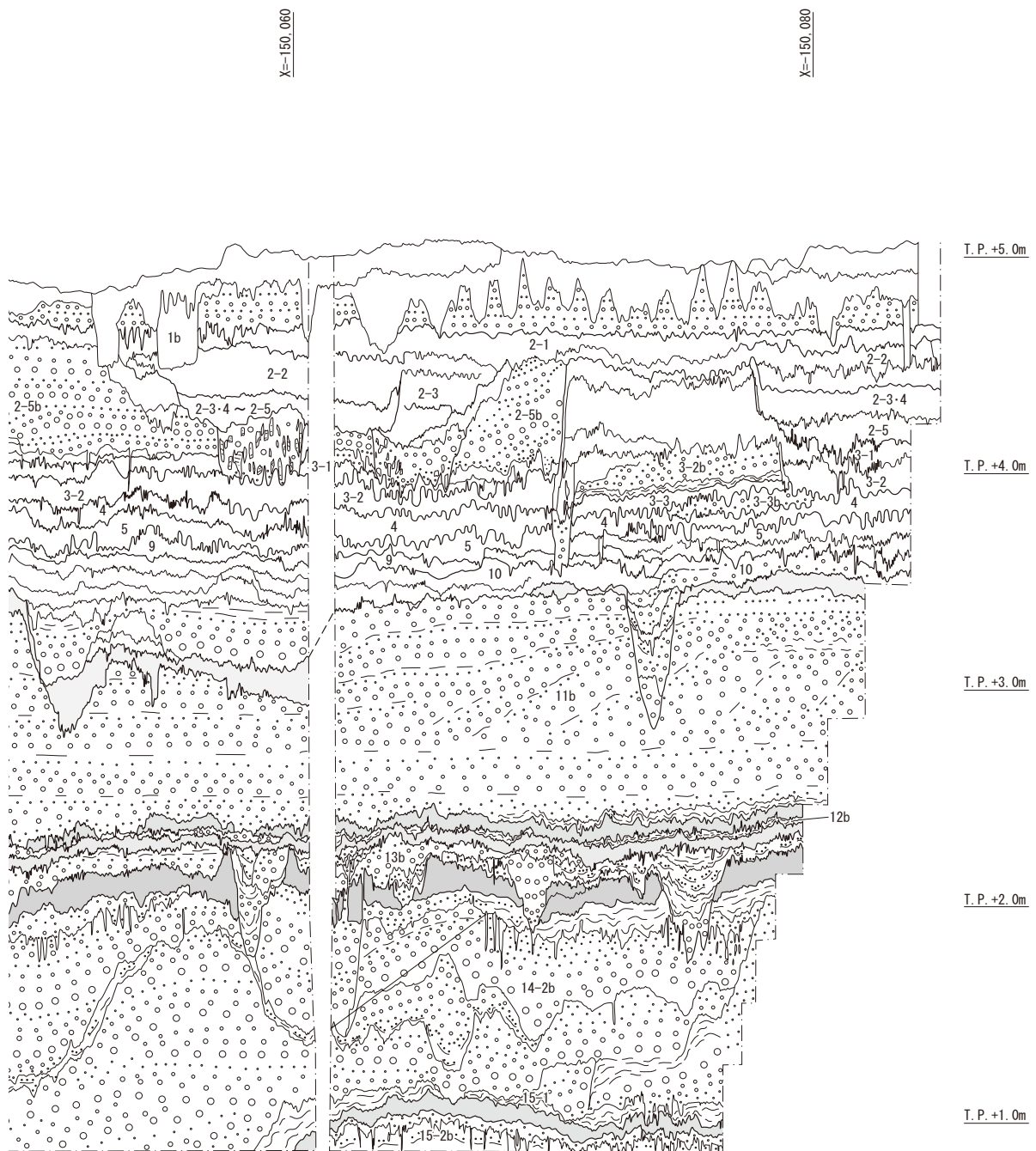
(縦1:30・横1:250)

図6 調査地東西断面図 (X = -150, 600 ライン)

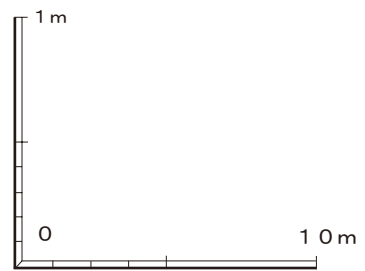
X=-150,020

X=-150,040





- | | | | |
|---|------|---|--------|
|  | 第11層 |  | 第14-2層 |
|  | 第12層 |  | 第15-2層 |
|  | 第13層 | | |



(縦1:30・横1:250)

図7 調査地南北断面図 (Y = -34,400 ライン)

調査地基本層序	池島層序	岩相	特徴	層厚(cm)	検出遺構(太線は検出遺構面)	主な出土遺物	時期
0		オリープ灰(2.5GY5/1)粘土・砂質礫 粗砂～中粒砂	盛土	25<			現代
0			作土	20			現代
1	1	灰色(10Y5/1)粘土砂質礫 粗粒砂～中粒砂多く含む	作土	10	↑井戸・島島 ↓土坑		近世～近代
1b	1b	灰白色(10YR8/1)砂質礫 極粗砂～中粒砂多く含む・灰色(5/0)砂質礫 中粒砂～シルト多く含む	水成	10<	←足跡 ↓土坑	染付、土人形	近世
2-1	2-1	オリープ灰(2.5GY5/1)わずかに礫質粘土砂・灰色(N6/0)礫質粘土砂	作土	10	↑島島・井戸・畦畔 ↓耕作痕跡	肥前染付、銅銭	
2-1b	2-1b	灰色(N6/0)シルト・砂質礫	水成	<15			
2-2	2-2	灰色(N6/0)シルト質砂 オリープ灰(5GY5/1)シルト質砂	作土	10	↑井戸	瓦質土器、陶磁器	
2-3・4	2-3	青灰色(10BG5/1)シルト質砂・青灰(10BG5/1)シルト質砂	作土	15	↑畦畔・島島・井戸・土坑	土師器・瓦器・陶磁器	
2-3・4b	2-4	青灰(10BG5/1)シルト質砂・オリープ灰(5GY5/1)シルト質砂	水成	—			
2-5	2-5	オリープ灰(2.5GY5/1)礫質シルト	作土	～10	↑島島 ↓溝・耕作痕跡・土坑	土師器・瓦質土器・陶磁器・瓦	
2-5b	2-5b	淡黄色(2.5Y8/3)シルト質礫・浅黄橙(2.5Y8/3)シルト質礫	水成	<25	←足跡		
3-1	3-1	暗オリープ灰色(5GY4/1)砂質シルト・暗青灰(10BG4/1)5PB)砂質シルト	作土	10	↑鋤溝	土師器・瓦質土器・陶磁器	
3-2	3-2	暗青灰色(10BG4/1)シルト質砂 極粗粒砂含む・暗緑灰(10G4/1)シルト質砂	作土	15	↑畦畔・島島 ↓溝・土坑	土師器・瓦質土器・陶磁器	
3-2b	3-2b	暗オリープ灰(5GY4/1)シルト・砂質礫	水成	0～20	↓足跡	土師器	中世
3-3	3-3	暗緑灰(10G4/1)シルト質砂	作土	0～10	↑水田畦畔・島島	土師器	
3-3b	3-3b	灰(10Y4/1)砂質礫	水成	0～15			
4	4	暗緑灰(10G4/1)礫・シルト質砂	作土	15	↑水田畦畔・島島	土師器・瓦器・陶器	
5	5	暗緑灰(5G3/1)礫質シルト 極粗粒砂～細粒砂	作土	10	↑水田畦畔 ↓耕作痕跡 溝・土坑	土師器・瓦 瓦	
6・7	6 7	灰色(7.5Y4/1)シルト質砂	作土	<10		瓦器	
8	8	緑灰色(10G5/1)砂質シルト 地震による変形構造あり	作土	<10	↑地震による変形 ↓土器埋納土坑	土師器	
9	9	灰色(10Y4/1)砂質泥・暗緑灰(7.5GY4/1)砂質泥	作土	<10	↑土坑・ピット	土師器	古墳
10-1	10-1	暗緑灰(5G4/1)シルト質砂・暗青灰(10BG4/1)シルト質砂	作土	10	↑水田畦畔・溝	須恵器・土師器	
10-1b	10-1b	オリープ灰(2.5GY5/1)シルト質砂	水成	5～30	←足跡	土師器	
10-2	10-2	緑灰色(10G5/1)礫質砂	土壌化	0～10			
10-2b	10-2b	緑灰色(5G5/1)シルト質砂	水成	0～40			
11	11	暗緑灰(N3/0)シルト質砂・黒(N2/0)シルト質砂	土壌化	5～10	↑流路・盛土・溝 ↓溝	弥生土器(IV・V)	弥生後期
11b	11-b	暗青灰(5BG4/1)シルト質砂	水成	60<	↓足跡		弥生中期
12	12-2	暗青灰(5B4/1)泥質砂～シルト質砂層	作土	<12	↑水田畦畔・溝・杭列 ←溝 ↓溝・土坑	弥生土器(VI)	
12b	12-2b	灰(10Y5/1)シルト・砂質礫	水成	～150	←足跡		
13	13	暗青灰(5PB4/1)泥砂質・暗オリープ灰(5GY3/1)シルト質砂	作土	<10	↑水田畦畔・溝 ↓溝	弥生土器(I・II)・石器	弥生前期
13b	13b	暗緑灰(5G4/1)わずかに礫質粘土質砂・暗青灰(10BG4/1)礫・シルト質砂	水成	<35	←地震痕跡		
14-1	14-1	黒(7.5Y2/1)砂質泥	土壌化	5	↑流路	弥生土器(I)・石器	
14-1b	14-1b	灰黄色(2.5Y6/2)砂質泥・緑灰色(10G5/1)砂質泥	水成	3			弥生後期
14-2	14-2	暗青色(5PB3/1)粘土・砂質礫 極粗砂多く含む	作土	15～20	↑水田畦畔・溝・流路	弥生土器(I)・縄文土器(長原式)	
14-2b	14-2b	暗青灰色(5PB4/1)シルト・砂質礫・青灰色(5PB5/1)シルト・砂質礫	水成	90～	↓足跡	縄文土器(長原式)	縄文晩期
15-1	15-1	暗青灰(5B4/1)砂質シルト	水成	5			縄文後期
15-2	15-2	黒色(N2/0)シルト質砂	土壌化	10	↑流路		
15-2b	15-2b	緑灰色(5G5/1)シルト質砂	水成	?			

↑ 上面検出遺構 ← 地層内検出遺構 ↓ 下面検出遺構

太線は遺構検出面

表 1 05 - 2 調査区 土色一覧表

るのに加え、地震による変形のため、平面的な遺構面の検出は困難であった。

第9層 細粒砂からシルトを主体とする砂質泥層（灰色10Y4/1）。当調査区では、相対的に標高の低い北西部や北部に分布することを確認したが、南側では確認できなかった。

第4層から第9層までの各層については、層厚が薄いものや、確認できない層が存在する。池島I期地区に比べて、第10層上面のレベルが0.15mほど高いことから、古墳時代から中世にかけて洪水堆積物の供給が少なく、安定して耕作されていたことがわかる。

第10層 古墳時代の土壌化層と自然堆積層である。調査区の東側と北西部は第10層の上面が後世の耕作によって攪拌されている。一方、調査区の北側と中央部では土壌化層が2枚確認できたため、第10-1層と第10-2層に分層した。

第10-1層 シルト質砂（暗緑灰色5G4/1）の土壌化層である。上面の耕作の影響を受けている。

第10-1b層 シルト質砂の自然堆積層である。

第10-2層 礫質砂層（緑灰色10G5/1）である。土壌化が弱く、池島I期地区の第10-2層とは対応しない可能性が高い。

第10-2b層 極粗粒砂～粗粒砂を主体とするシルト質砂層の洪水堆積物と、第11層の流路内に堆積した粘土・砂質礫の流路内埋土からなる。

第11層 弥生時代後期の土壌化層と下部の自然堆積層である。池島I期地区では、第11-1層と第11-2層に細分されており、第11-2層を「第1黒色粘土層」と呼称する。当調査区では、部分的に土壌化層が2枚に分かれるものの、確定できなかった。本調査区の第11層はシルト質砂（暗緑灰色N3/0）である。池島層序の第11-2層に対比されると考えられる。

第11b層 シルト質砂（暗青灰色5BG4/1）。弥生時代中期後半から後期にかけての洪水堆積層である。池島I期地区では上層、中層、下層に分けられ、下層と中層の間に停止面が存在し、遺構や立木などが検出されている。井上智博はこの停止面が福万寺地区の第12面と対応する可能性について指摘している（井上2007a）。当調査区における第11b層の堆積状況は、第12面を覆う細粒砂を主体とするシルト質砂の下層と、遺構面と下層を刻みながら粗粒砂から細礫を堆積させた流路内堆積物、および、流路の周囲に堆積する粗粒砂を主体とするシルト質礫の中層、中粒砂を主体とした砂質礫の上層に分けることができる。当調査区では、氾濫堆積物の停止面は明瞭ではないが、下層と中層・上層では層中の礫の比率が異なるため、池島I期地区と同様に停止面が存在する。

第12層 弥生時代中期の土壌化層と下部の自然堆積層である。第12層は、水田域では層厚0.15mのシル



写真3 第10-1層～第12層

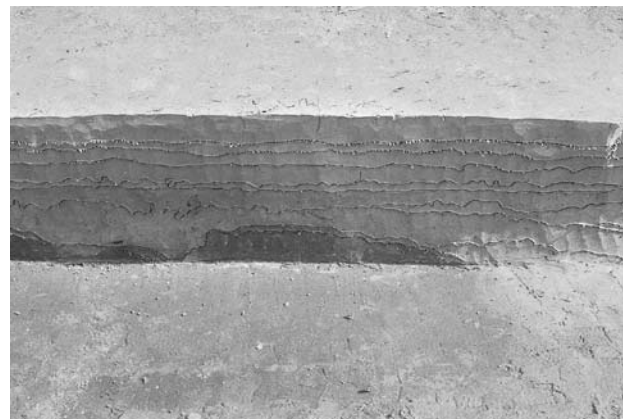


写真4 第11b層～第14-2層

ト粒を多く含んだ泥質砂の作土層（暗青灰 5B4/1）であり、非水田域では、粗粒砂～中粒砂を主体とするシルト質砂層である。

第12b層 第13層を覆う自然堆積層で、灰色（10Y5/1）の中粒砂を主体とするシルト・砂質礫の氾濫堆積層である。調査区の東端、西端では厚く堆積し、第12面の微高地を形成する。調査区の中央部では、第13層との間に自然堆積物を挟在せずに、第12層と第13層が接する状態であるため、第12面段階の耕作によって攪拌され、第13層との分層が困難であった。

第13層 弥生時代前期から弥生時代中期前半に比定される。水田域では細粒砂を主体とする泥砂質（暗青灰色5PB4/1）、非水田域では、シルト質砂（暗オリーブ灰色5GY3/1）の土壤化層である。

第13b層 わずかに礫質粘土質砂（暗緑灰色5G4/1）の氾濫堆積層と、極粗粒砂～粗粒砂を主体とする粘土質礫層（暗青灰色10BG4/1）の流路堆積物からなる。

第14層は、2枚の土壤化層と、洪水堆積層で構成される。

第14-1層 弥生時代前期に比定される、極細粒砂からシルトを主体とする砂質泥層（黒色7.5Y2/1）である。上部が土壤化していることから、一時的に砂の供給がおさまりに、安定した状態にあったと考えられる。本調査区では、第14-1層は、標高1.9m以下の部分に顕著に認められ、層厚は0.05m～0.1mほどである。それ以外の場所、第14-2面段階で微高地となっているところでは、第14-2面の直上に薄いシルト質の層が認められ、これが、第14-1層相当の堆積物と考えられる。

第14-2層 細礫を含む中粒砂～細粒砂を主体とする粘土・砂質礫（暗青色5PB3/1）である。土壤化が顕著で他の層に比べて濃い暗色系の土層である。また、第14-2層は水田検出部と微高地上など、場所によって層相が異なっている。すなわち、水田部では、厚さ0.1mほどのよく攪拌された層として認識できるが、微高地上では厚さ0.15m～0.2mの上部と、厚さ0.1m程の下部に分けることができる。上部は攪拌や、植物の根などによる生物擾乱を受けているため、より濃い色調を呈している。下部はそれに比べ色調が薄く、砂の粒径もまとまりを持ったものとなっている。また、生痕が顕著であり、自然堆積層のb層に近い様相を示す。

第14-2b層 氾濫堆積物によって構成されたシルト・砂質礫層（暗青灰色5PB4/1・青灰色5PB5/1）である。層厚は1.2mを測り、大きく3層に分けられる。下層は植物遺体を多く含むシルト質礫層。中層はシルト・砂質礫層で、細砂の薄層を挟在させる層理面が部分的に確認できる。上層は砂質礫層で、上方に向かって細粒化する。

第15層は第15-1層と第15-2層および第15-2b層に分けられる。



写真5 第13b層～第15-2層

第15-1層 シルト質砂（暗青灰色5B4/1）の水成層である。層厚は0.1mで第15-2層の上に全面的に確認できる。土壤化が弱く色調も薄い。

第15-2層 粗粒砂～細粒砂のシルト質砂層（黒色N2/0）である。層厚は0.15m、いわゆる「第5黒色泥土層」と呼ばれる層で、池島I期地区の第15面はこの第15-2層上面である。

第15-2b層 掘削限界のTP+0.9m以下にあるため、詳細は不明である。中粒砂から細粒砂を主体とするシルト質砂層（緑灰色5G5/1）である。

第4章 近・現代から古代の遺構と遺物

第1節 近・現代から近世の遺構と遺物

本調査区では、現代耕作土（第1層）と、その下層の洪水堆積土（第1b層）をトレンチ調査による確認を経て、機械掘削により除去し、第2-1層以下を人力掘削として調査を実施した。

本調査地の条里地割の坪表示は、河内国河内郡二条（字「河」）二十二坪である。調査区の範囲は、二十二坪内に位置し坪境は含まない。

（1）第1面・第1b面（図8）

第1面は現代耕作土である。調査区の全域にわたって攪乱されており、平面的な調査は実施せず断面記録の作成を行うにとどめた。従来この面に伴う遺構として、島畠、畦畔、井戸が報告されている。本調査区においても、001井戸、003井戸、036井戸は第1面段階で機能していたと考えてよい。また、これらの井戸がY=-34,060ラインに位置することから、この位置に南北畦畔や溝などの区画施設が想定できる。このほか、東西方向の条里畦畔がX=-150,040ライン付近で確認できた。

第1b面として把握した遺構は、機械掘削で第1b層をある程度除去した段階で検出した遺構である。また、第2-1面で検出した遺構のうち、遺構埋土から第1b面に帰属することが確実であると判断した遺構も含める。耕作痕跡、土坑、井戸を検出した。

耕作痕跡は、南西部から中央部にかけて多く認められた。基本的に東西の地割方向にしたがって、鋤溝や鋤跡が認められる。土坑は、池島・福万寺遺跡で「1b土坑」と呼ばれているもので、災害復旧を目的として掘られたと推定されている（江浦1991）。本調査区の「1b土坑」は、第2-1面の島畠付近に多く認められる。土坑の規模は長さ6m以上、幅約0.5m、深さ約0.15mの細長いものと、長さ10m以上、幅1.3m~1.5m、深さ0.15m程度の幅広のものがある。また、調査区北側の第2-1面の島畠部分では、幅1.0m、深さ1.0m以上の土坑が掘られている。これらの土坑は、切り合い関係を持つものもある。井戸は、調査開始直後に土層観察用のトレンチで検出したもの、機械掘削時に検出したもの、第2-1面検出時に確認したもの、第2-3・4面検出時に確認できたものがある。井戸の種類としては、井戸枠を持つもの（003井戸）、桶側のみなもの（002井戸）、竹籠の井戸側（075井戸）がある。また、構造物は検出されなかったものの、土坑内から井戸瓦が出土した036土坑や039土坑、066土坑、088土坑は、井戸を廃棄す

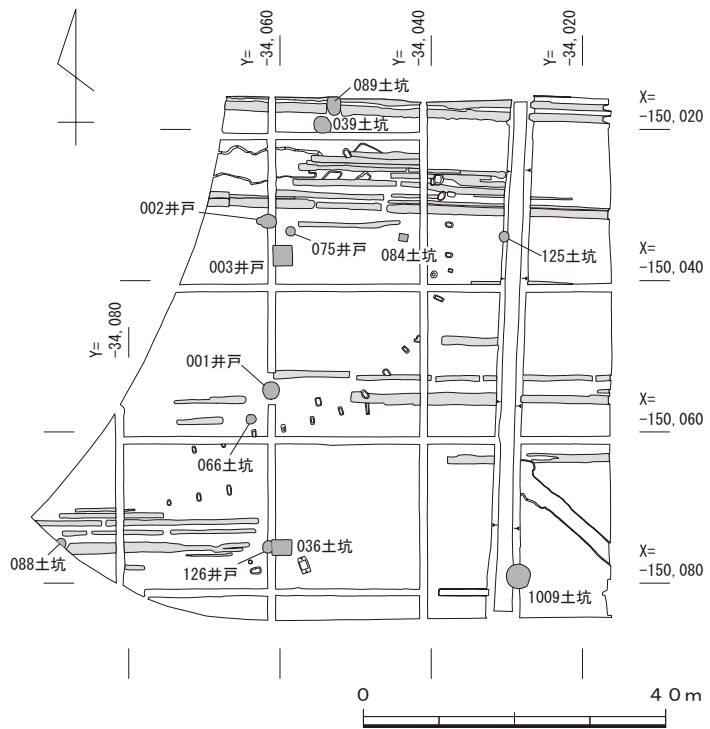


図8 井戸・1b土坑 位置図

る際に、構造材が抜き取られたものと考えてよい。他に、土坑が垂直に掘られ湧水層にまで達している084土坑、086土坑、089土坑も、井戸である蓋然性が高い。

001井戸 (図9・写真6・7) は、6fに位置する井戸である。調査開始直後、土層観察用トレンチの掘削時に検出した井戸である。掘形は東西・南北辺が約2.4mの隅丸方形の平面形をもつ。井戸の構造は、上部に井戸瓦を用いる。三段分が残存し、一段あたり8枚使用している。井戸瓦の下に径75cm、高さ98cmの桶を用いた桶側が1段あり、その下に上部径148cm、胴部径160cm、高さ196cmの桶が置かれている。井戸の最下部には、径0.58m、高さ0.45mの桶を用いて水溜としている。最下部の水溜は第14-2b層の砂層に達している。下段の桶は大型であり、タガのあり方から大桶を逆さにして井戸桶に用いていると思われる。このような桶を用いた例は池島・福万寺遺跡では初出である。下段の桶には蓋(カガミ)があり、蓋板は竹釘で結束し、上部の桶側に接続する部分をくりぬいている。桶胴部の上部には一辺約10cmの角材二本が桶を切り込んで差し込まれ、この角材と蓋板との隙間を埋めるためか、板材がそれぞれに挟み込まれている。桶には竹製のタガが回され、桶の側面にはタガと桶のズレを防ぐための釘穴が数個確認できる。001井戸はこのように大型の桶を用いているが、構造的には下段の桶が井戸枠の代用として用いられたことが想定できるため、亀井分類のB1類(亀井2002)の井戸として捉えることができる。上段の桶側の外面には墨書が認められるが、うち1枚は文字が途中で途切れており、もとは2枚にわたって書かれたことがわかる。桶を再利用したものか。

003井戸 (図10・写真8) は、6dに位置する井戸である。埋め戻しの際の「息抜き」に塩化ビニールパイプが差し込まれ、コンクリート片が井戸枠の最上部にある。コンクリート製の井筒が用いられていたと想定され、最近まで使用されていた井戸であることがわかる。なお、井戸内からは井戸瓦も出土しており、かつては井戸瓦が用いられていたと考えられる。003井戸の構造は、一辺2.6mの掘形をもち、井筒の下に高さ約90cmの桶側を二段に組み、その下に丸太を井桁状に8段分組んで井戸枠としている。最下部には、高さ約45cmの桶を置いて水溜としている。最下部の桶内の埋土は帯水状態にあったことを示している。003井戸の構造は、池島周辺でよく見られる井戸枠をもったもので、亀井分類のB1である。井桁状に組んだ井戸枠の上面は、板材を組み合わせてカガミとしており、板材は竹釘によって結束している。蓋の外面に、墨で瓢箪、五芒星、木葉、小槌などを描いているが、これらは隣の板にまたがって書かれたものもあることから、蓋を置いた後に書いたものである。井戸の最下部は、第14-2面段階の流路(390流路)の洪水堆積物である第13b層の砂礫層である。

002井戸 (図11) は、6d・7dに位置する第2-1面検出の井戸である。001井戸と同じく、土層観察用のトレンチの掘削時に検出した井戸である。南北2.0m、東西3.0mの楕円形の掘形を持ち、径65cm、高さ95cmの桶を2段に重ねて桶側とする構造で、最下部は砂礫層の第11b層まで達している。井戸瓦は出土していない。

075井戸 (図12・写真9) は、6dに位置する第2-2面検出時に確認した第2-1層下面の井戸である。002井戸、003井戸と近接している。径1.4mの円形の掘形を持ち、井戸側には高さ約220cmの長い筒状の竹編み籠を用いる。井戸の底は第13b層の砂礫層に達する深さまで掘削している。

039土坑 (図13) は、6bに位置する。径2.2m、深さ約1.3mの井戸である。第2-1面の島島の南肩部に位置する。埋土中から瓦片、板が出土しており、埋め戻された井戸であると考えられる。

089土坑 (図13) は、調査区の南端6bにあり、039土坑と近接する。径約2.1mの掘形を確認した。埋土はシルトブロックを含むシルト・砂質礫である。南接する07-2調査区で桶側を検出し、井戸であるこ

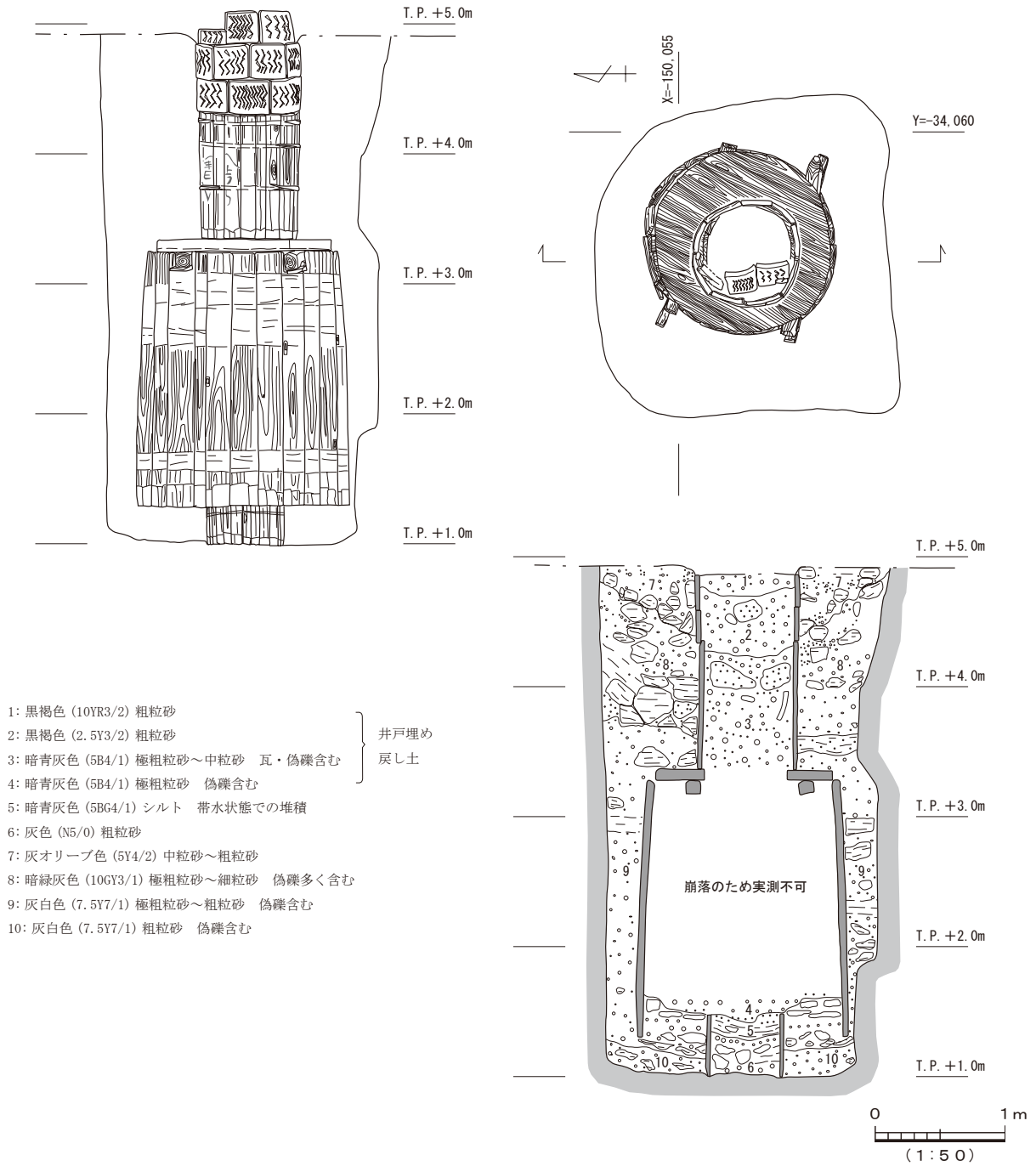


図9 001井戸 平面図・断面図・見通し図



写真6 001井戸 井戸瓦・桶側上部



写真7 001井戸 桶側下部

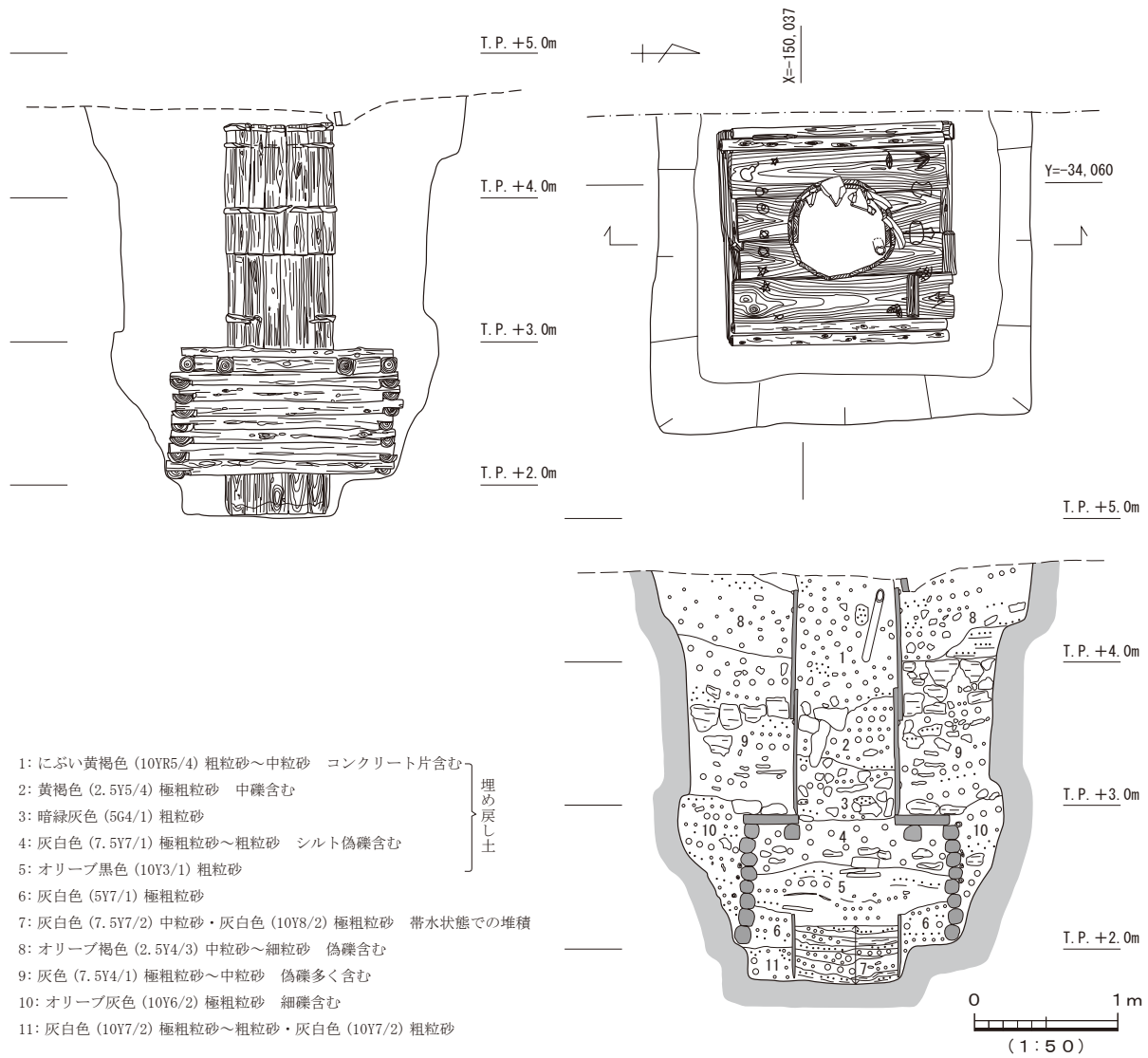


図10 003井戸 平面図・断面図・見通し図



1

写真8 003井戸 井戸枠蓋の墨書

- 1: 井戸枠蓋
- 2: 五芒星の墨描き
- 3: 葉の墨描き



2



3

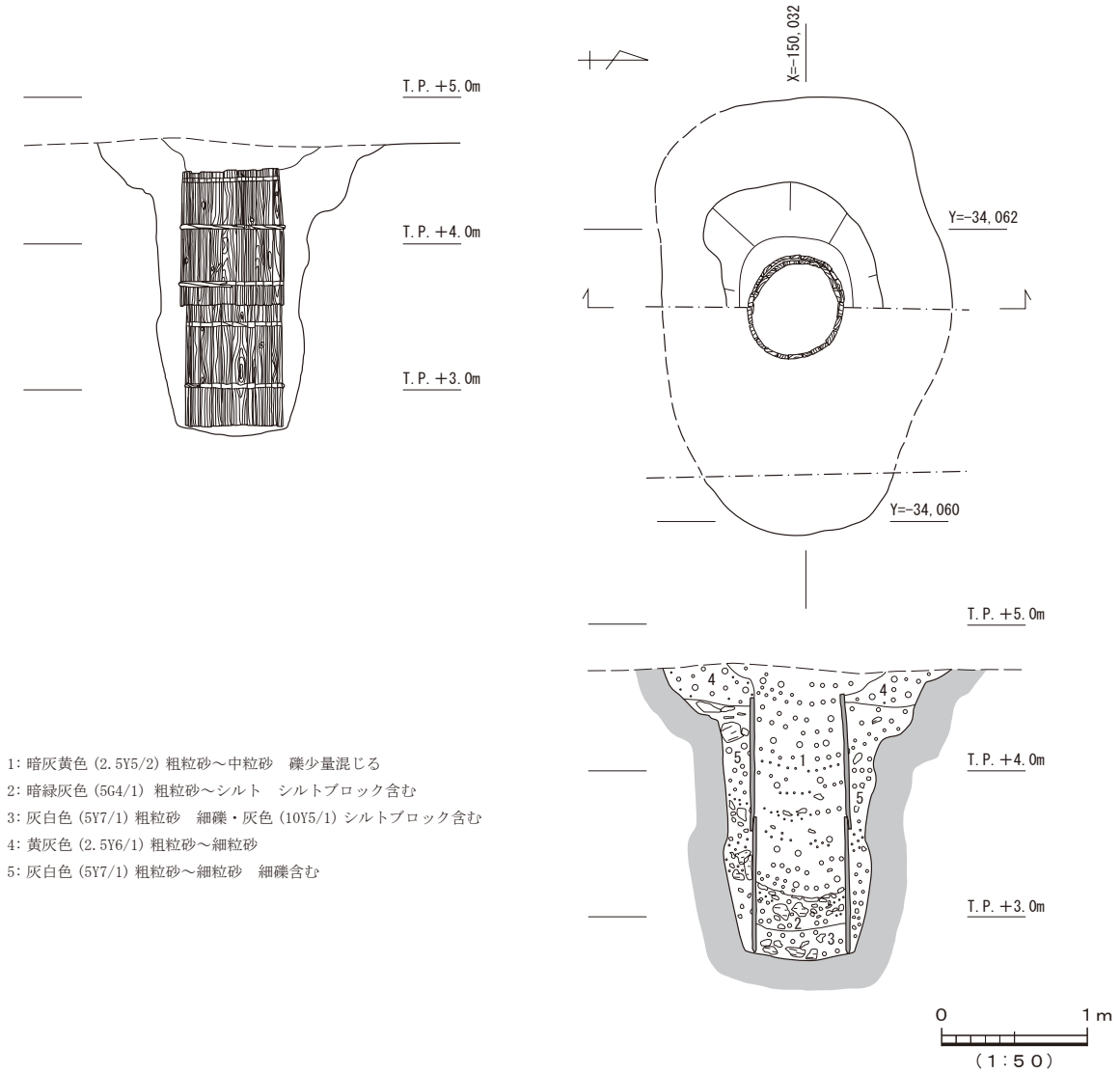


図11 002井戸 平面図・断面図・見通し図

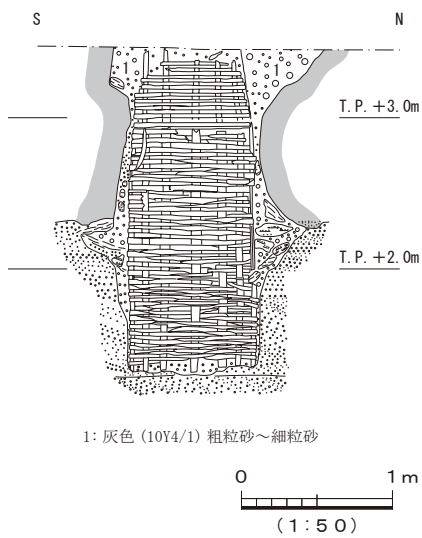


図12 075井戸 断面図

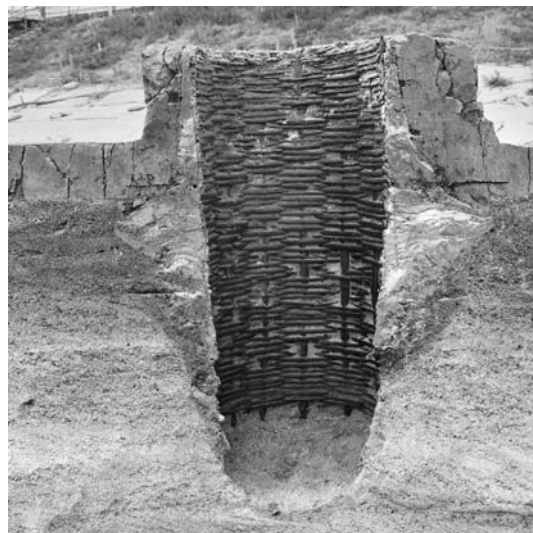
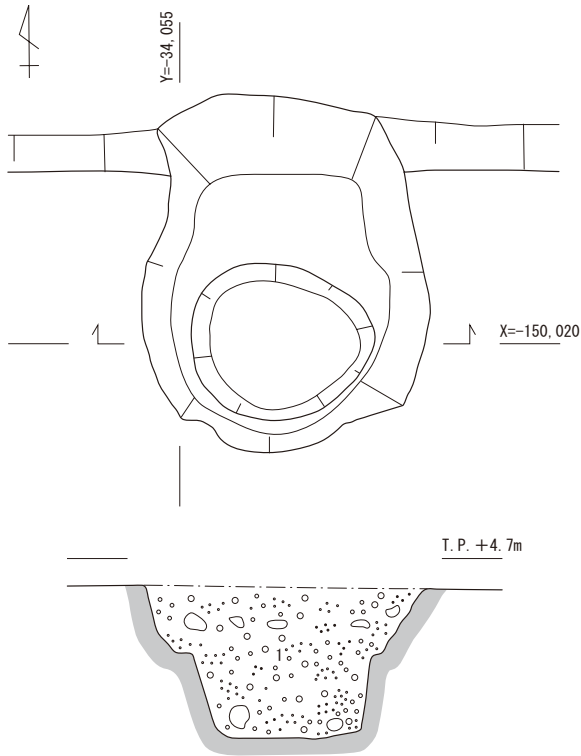


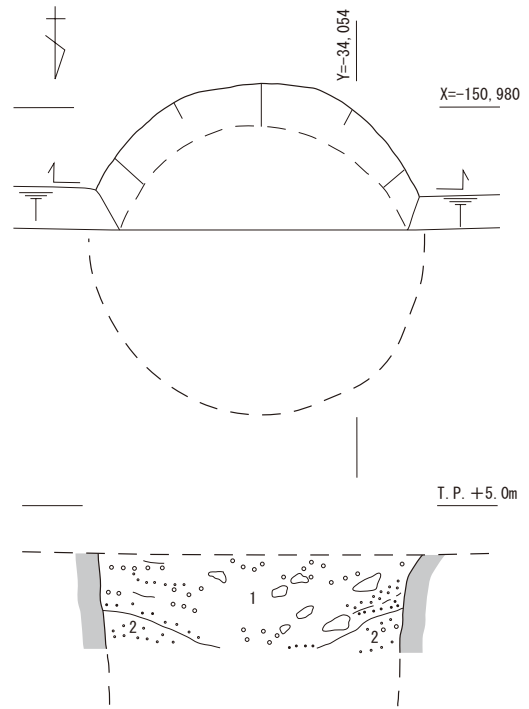
写真9 075井戸 断面写真

039 土坑



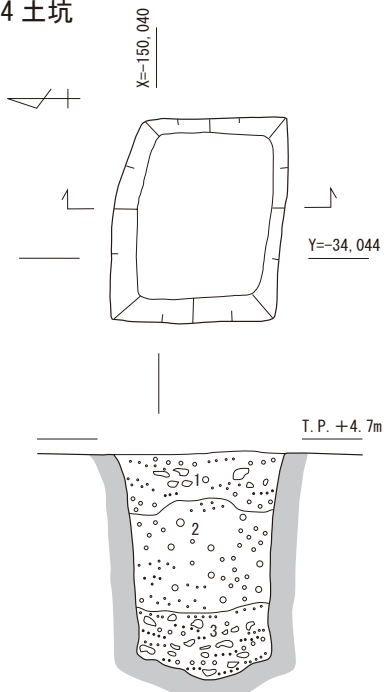
1: 暗緑灰色 (10GY4/1) 粗粒砂～中粒砂 シルトブロック含む

089 土坑



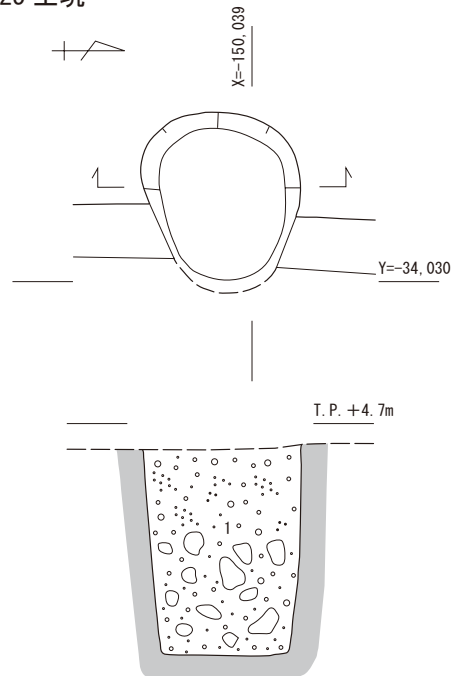
1: 緑灰色 (10G5/1) 中粒砂～細粒砂 シルト質のブロック含む
2: 暗緑灰色 (10GY4/1) 中粒砂～シルト 細礫含む

084 土坑



1: 灰色 (7.5Y5/1) 中粒砂～細粒砂 偽礫含む
2: 暗緑灰色 (5G4/1) 中粒砂～シルト
3: 灰色 (5Y5/1) 極細粒砂 偽礫含む

125 土坑



1: 暗緑灰色 (5G4/1) 中粒砂～シルト質 シルトブロック含む



図 13 第 1 面・第 2 面井戸・土坑 平面図・断面図 (1)

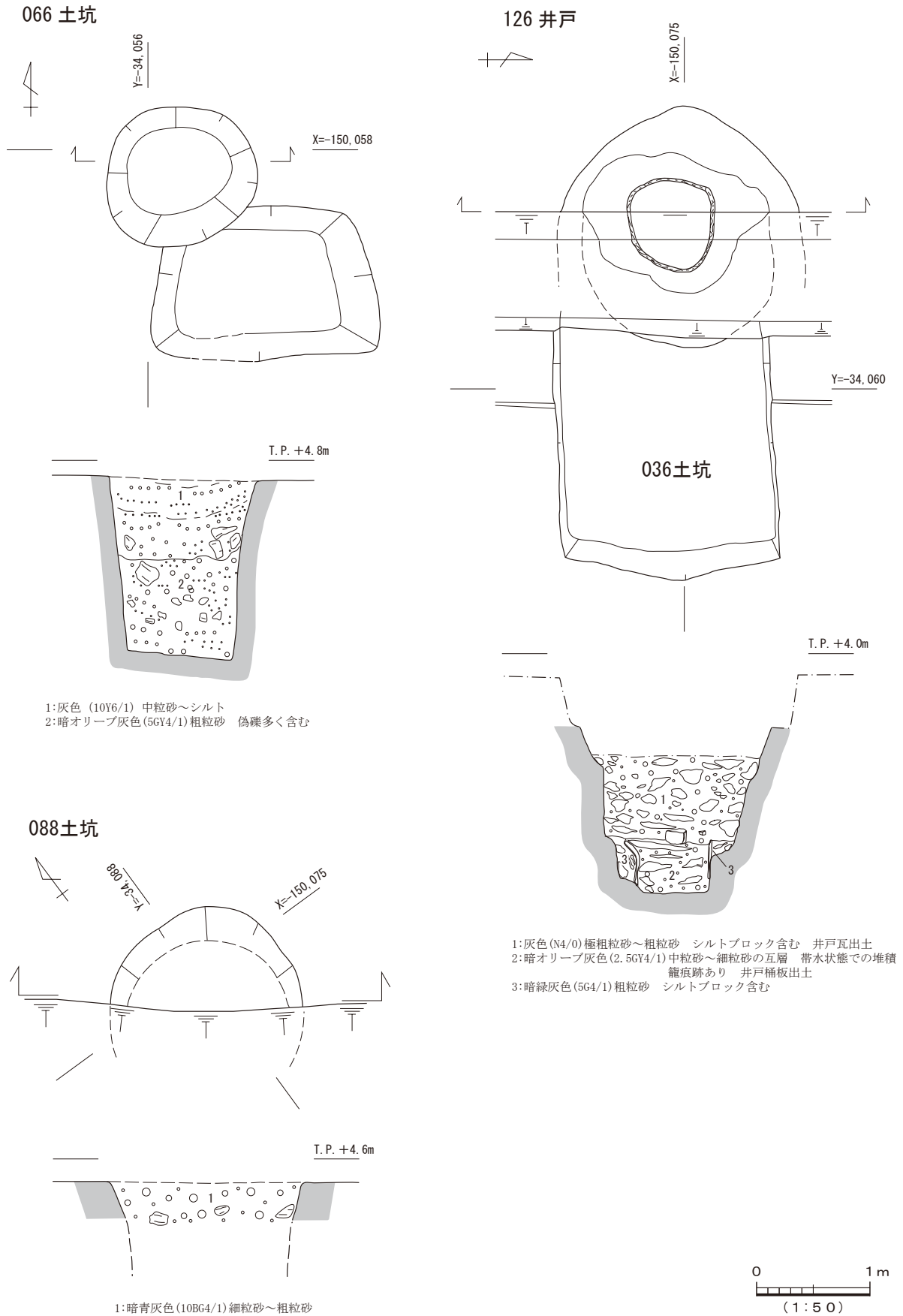


図14 第1面・第2面井戸・土坑 平面図・断面図(2)

とが確定した。

084土坑 (図13) は、5dに位置する南北1.1m、東西1.4m、深さ約1.5mの長方形土坑である。壁面は垂直に掘削されており、底面は第11b層に達する。埋土はシルトブロックを含むシルト・砂質礫で、埋土内から遺物は出土していない。西側に002井戸、003井戸、075井戸が位置することから、条里畦畔に沿って設けられた井戸であると考えられる。

125土坑 (図13) は、4dに位置する径約1.0m、深さ約1.4mの規模を持つ円形土坑である。現代水路によって、東側が攪乱されている。埋土はシルトブロックを多く含むシルト・砂質礫である。底面は第11b層に達する。

066土坑 (図14) は、7fに位置する、径約1.3m、検出面から底面までの深さ約1.6mの土坑である。第2-1面調査時に検出した。埋土はシルトブロックを多く含む砂質礫である。最下部から井戸瓦が出土したことから、井戸である可能性が高い。第2-3・4面の093島畠東端に位置することから、掘削時期は第2-3・4面にさかのぼると見てよい。

126井戸 (図14) は、7hに位置する第1b面検出の井戸で、東側を036土坑に切られている。径約2.1mの円形掘形をもち、検出面からの深さは約2.8m、井戸底面は第13b層に達する。井戸底面から0.3m上で箆を用いた井戸桶の痕跡を検出したほか、井戸底の砂層に刺さった状態で、幅7cm、高さ42cmの板が出土した。井戸の埋土内からは井戸瓦、鍬先などが出土した。

036土坑 (図14) は、6hに位置する第1b面検出の土坑である。南北1.96m、東西2.20m以上、深さ約2.2m。西接する126井戸を切っている。土坑内埋土は極粗粒砂～粗粒砂であり、偽礫を多く含む。土坑内から井戸瓦、木片が出土しており、井戸であったことがわかる。

088土坑 (図14) は、調査区の南西端部9hに位置する径約1.7mの土坑である。埋土はシルトブロックを含むシルト・砂質礫である。堤防法面のため完掘していないが、井戸である可能性が高い。

1009土坑は、3hに位置する円形土坑である。現代水路に隣接し、壁面には重機による掘削の痕跡が残ることから、現代水路に伴う攪乱と認識していたが、第13面調査時に径1.3mの円形土坑の輪郭が現れ、井戸跡であることがわかった。底面は第13b層にまで達する。

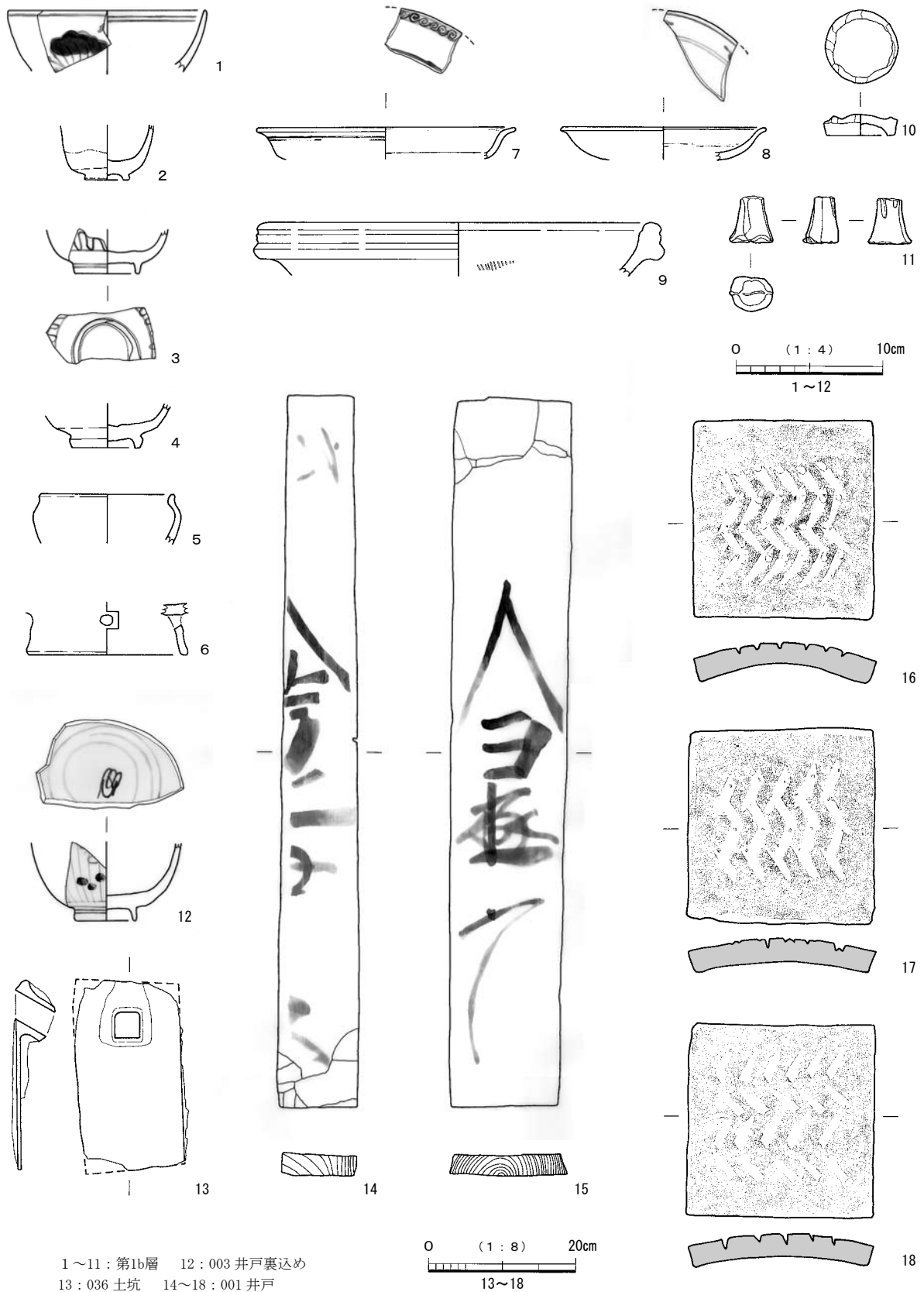
本調査区の井戸の分布を見ると、南北の土層観察用トレンチ (Y=-34, 060) 付近で計6基の井戸を検出している。坪境から約50mの距離にあり、第4面から第3面段階では南北畦畔も検出している。このことから、第2層の各遺構面でも坪内を区画する畦畔などが存在していたと見てよい。なお、002井戸、003井戸、075井戸、084土坑、125土坑は東西に並んでいるが、ここでは第2-2面で東西方向の畦畔が確認されている。

池島・福万寺遺跡で確認される近世から近・現代面検出の井戸については、掘削開始時期が中世にさかのぼるものはなく、第2面段階以降に掘削されたようである。また、改修して使用されているものもあるが、今回の調査においても001井戸や066土坑は第2-3・4面で検出した島畠の肩部にあたり、075井戸、084土坑、125土坑は第2-1面の畦畔に規定されていることがわかる。

井戸の掘削の契機については、これまでの調査では大和川の付け替えや島畠の形成を契機とすることが指摘されてきたが、今回の調査ではそれを裏付けるような状況は見出せない。近世の水田や畠に設けられた野井戸の掘削の契機について考察した鐘方正樹は、灌漑用水源の確保を重視する『農業全書』などの農書の影響や農業技術の普及が井戸掘削の契機になったことを指摘 (鐘方2002) したが、当地域ではこれに加え、大和川の付け替えによる用水不足といった複合的な要因があったものとする。

(2) 第1層・第1b層出土遺物 (図15)

第1層と第1b層から出土した遺物には、陶磁器(1~9)、転用円盤(10)、土人形(11)、土師器・瓦などがある。転用円盤(10)は中・近世の遺跡からの出土例が知られているが、用途不明の文物で



1~11: 第1b層 12: 003 井戸裏込め
13: 036 土坑 14~18: 001 井戸

図15 第1b層・井戸 出土遺物

ある。土師器・瓦器・陶器の底部あるいは体部片を打ち欠いて円形に加工したもので、土師器・瓦器を利用したものには研磨痕が残る。土人形(11)は、沓と裾・帯の表現がある。(12)は003井戸掘形埋土から出土した陶器の茶碗、(13)は鋏先、(14・15)は井戸桶部材である。(14)は「人□□□」。他に上端に墨痕が確認できる。(15)は「人ヨ極□」。「人」(山)と以下の文字は屋号を示す文字であろう。(14)は二枚にわたって書かれていたもので、再利用した桶側であることがわかる。(16～18)は井戸瓦である。凸面(井戸の外側)にクサビ状の形状をした凹凸がつけられている。凹凸には、三種類の原体あることが確認できた。

(3) 第2-1面(図16)

調査区のほぼ全域で認められる第1b層の氾濫堆積物を除去した面である。遺構面の標高は、水田部分でT.P. 4.55m～T.P. 4.70m。第2-1面は、当遺跡全体では比較的残存状態が良好な遺構面である。しかしながら、本調査区は、治水緑地の中でも標高が高い南端部に位置するため、第1b層の層厚が薄く、近代以降の耕作の影響を少なからず受け、南側では島畠の上部が削平されていた。また、中央部付近では島畠の上面に現代の攪乱が認められた。第2-1面で検出した遺構は、水田畦畔、島畠、井戸などがある。082島畠は第2-5b層を芯としており、第2-5面から継続して島畠として利用されたものであるが、第2-1面段階で大きく拡張された島畠である。島畠はその痕跡によって範囲を確認した。071島畠は第2-1b層を芯にして造成されたものである。第2-1b層の分布範囲および下面の第2-2面が良好に遺存する範囲から、島畠の範囲を確定した。072島はX=-150,024ライン以南から077畦畔までの間で、073島畠と072島間の水田域に比べて、0.1m高く、077畦畔以南と比べても0.1m程高い。畠上面では、東西方向の溝状の耕作痕を検出している。

井戸・土坑については(1)に詳述したが、第2-1面で検出したものとしては、075井戸・084土坑・006土坑がある。075井戸以外は井戸側などの構造材が撤去されていた。

(4) 第2-2面

第2-1層・第2-1b層を除去して検出した遺構面である。上層の第2-1面段階で耕作による攪拌を受けており、第2-2面として平面的に検出できたのは、第2-1b層の堆積した部分にとどまる。具体的には第2-1面の082島畠・071島畠の下や070島畠の拡張部である。071島畠直下では、第2-1b層の下面において、幅が0.3mの東西方向に走る畝溝を検出した。また、082島畠拡張部の第2-1b層直下では足跡を検出した。第2-1層は全般的に極細砂～シルトのブロックを多く含む礫質粘土砂、第2-2層は細砂を主体とするシルト質砂であり、両者は層相から明瞭に区別することができる。



写真10 第2-1面調査区北側(西から)



写真11 第2-1面調査区南側(南西から)

(5) 第2-3・4面 (図17)

第2-2層を除去して検出した。池島I期地区では、第2-3面と第2-4面の2面分が調査されているが、本調査区では、2面分の遺構面は検出していない。また097島島の南側、095島島の縁辺部に一部洪水砂が残存しており、これが第2-3b層か第2-4b層に帰属すると考えられるが、いずれであるのか判断はできなかった。本報告では第2-3・4面として記述する。

第2-3・4面では、第3面段階からつづく島島や、第2-5b層を芯とする島島を確認した。この段階では、第2-2面段階に比べて、島島が顕著に認められる。また、後述する第2-5面と第2-3・4面とを比較すると、島島や水田の変動がわかる。具体的には、前段階までは別の島島であった**094島島・095島島**は、第2-3・4面段階では連続する島島になっている。この島島はY=-34,060のトレンチを境に鍵形に屈曲している。トレンチの掘削によって畦畔や溝など具体的な遺構は確認していないが、井

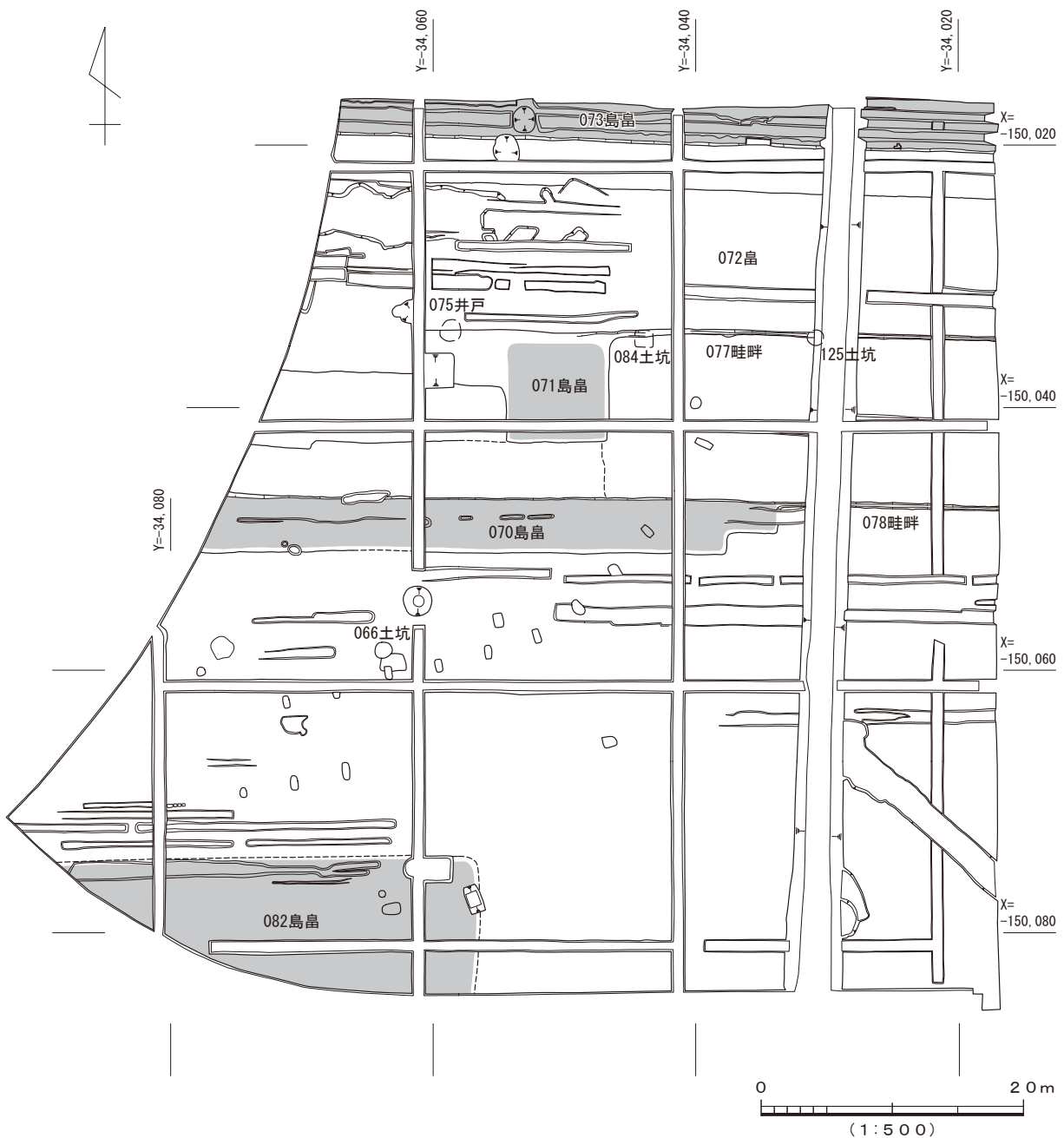


図16 第2-1面 平面図

戸の分布や島島の形状からトレンチ部分に南北方向の地割りが存在していた可能性が高い。なお、この位置は坪境から約55m西にあり、坪内を東西に二分する距離にあたる。また、093島島は第2-3・4面段階で東側に拡張されている。

(6) 第2-5面 (図19)

094島島・095島島の北側と096島島の南側において、第2-5面を面的に調査した。これは、第2-5面の残存する場所が限られていたことと、断面観察によって第2-5b層を芯とする099島島が東西に伸びていることが判明したためである (図18)。それ以外の箇所については、第2-5面は島島の肩部に残存するのみで、水田部については分層が不可能であった。第2-5面における水田・島島は下層の第2-5b面にトレースされていると考えられ、第2-5面および第2-5b面の平面図を編集調整したものを図19として提示する。

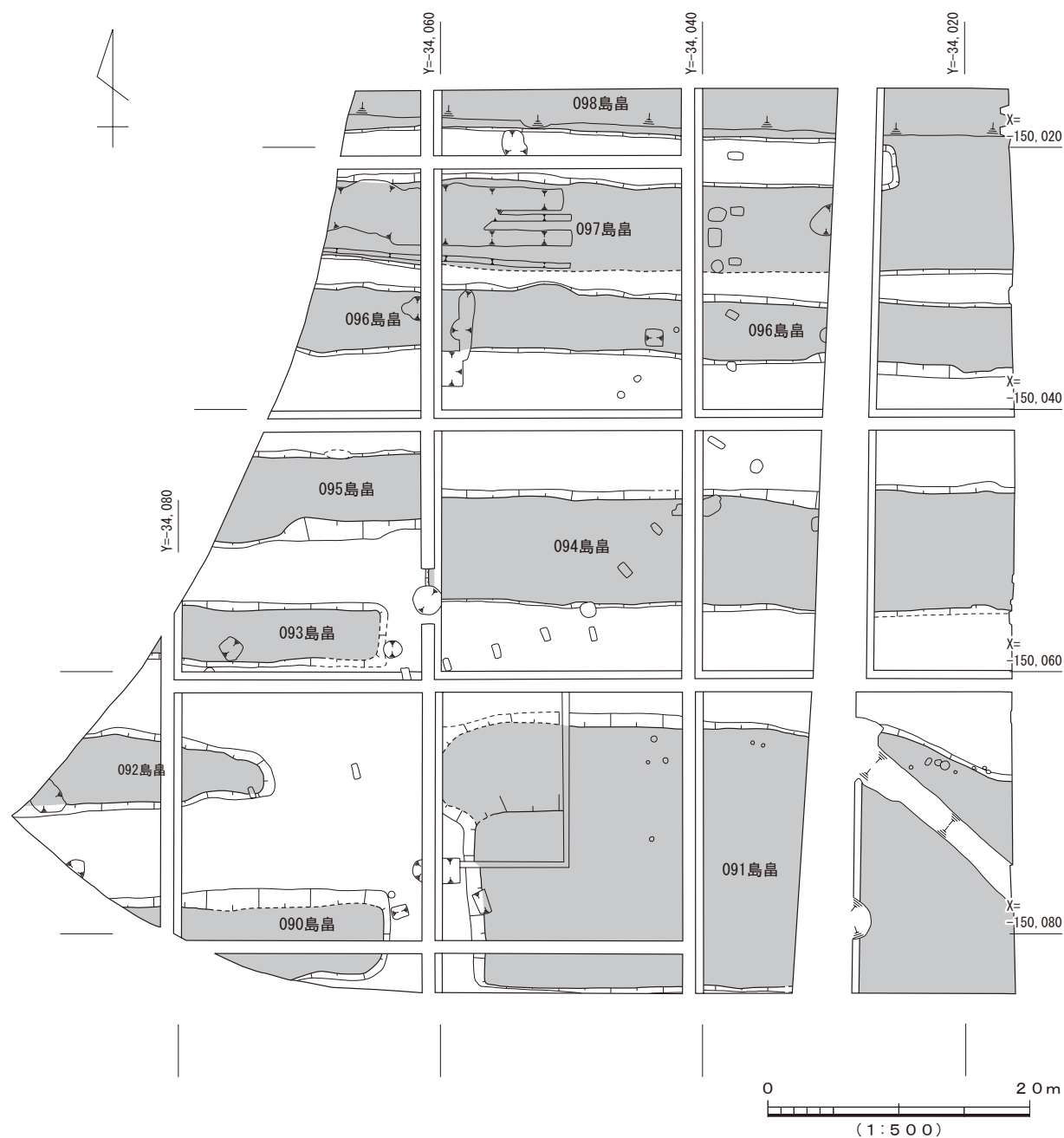


図17 第2-3・4面 平面図

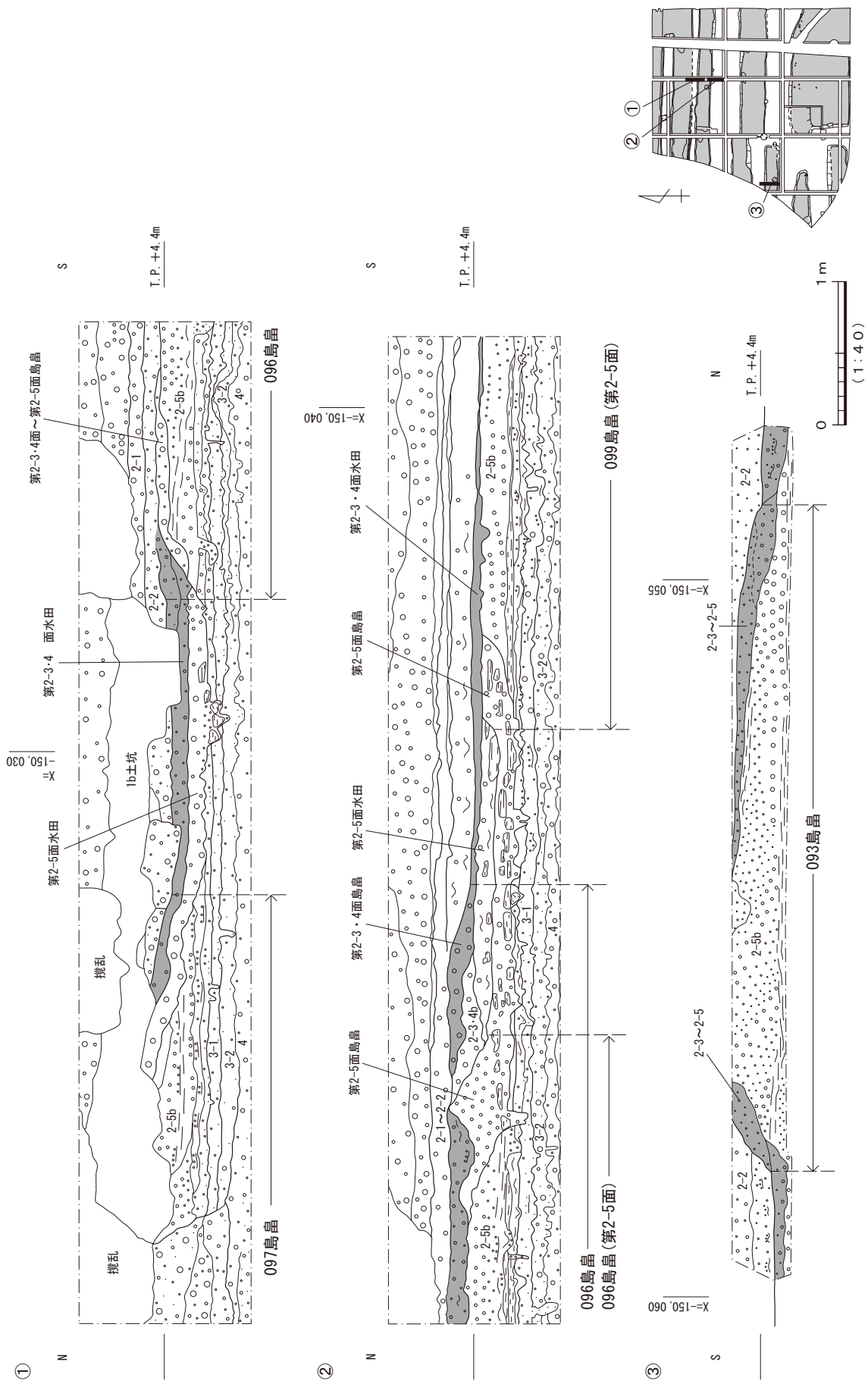


图 18 第2面島晶 断面図

第2-5面段階では、島島の範囲、面積が水田域に比べて大きく、島島の中に幅の狭い水田が存在していたものと考えられる。島島の芯となった砂の供給源は、第2-5b層の堆積を契機に形成された島島の分布状況と第2-5b層中の砂粒の大きさから、調査区南西部が考えられる。

(7) 第2-5b面

調査区の全面で確認できるラミナが顕著な粗砂礫層である。遺構としては、先述の第2-5面の耕作痕、水田・島島の築造に伴うと考えられる土坑などである。水田部はシルト質の偽礫を含んだ耕作土が第2-5b層中に深く入っている。また、土坑は不定形で、第3層まで及んでいるものもある。埋土には第3層系のシルト質砂を含むことが確認できる。埋土の状況から掘削直後に埋められたものと考えられ、耕作地造成にかかわる遺構と考えられる。

第2-5b下面では、人の足跡、牛馬などの偶蹄目の足跡、鋤や鍬による耕作痕が多数確認できた。こ

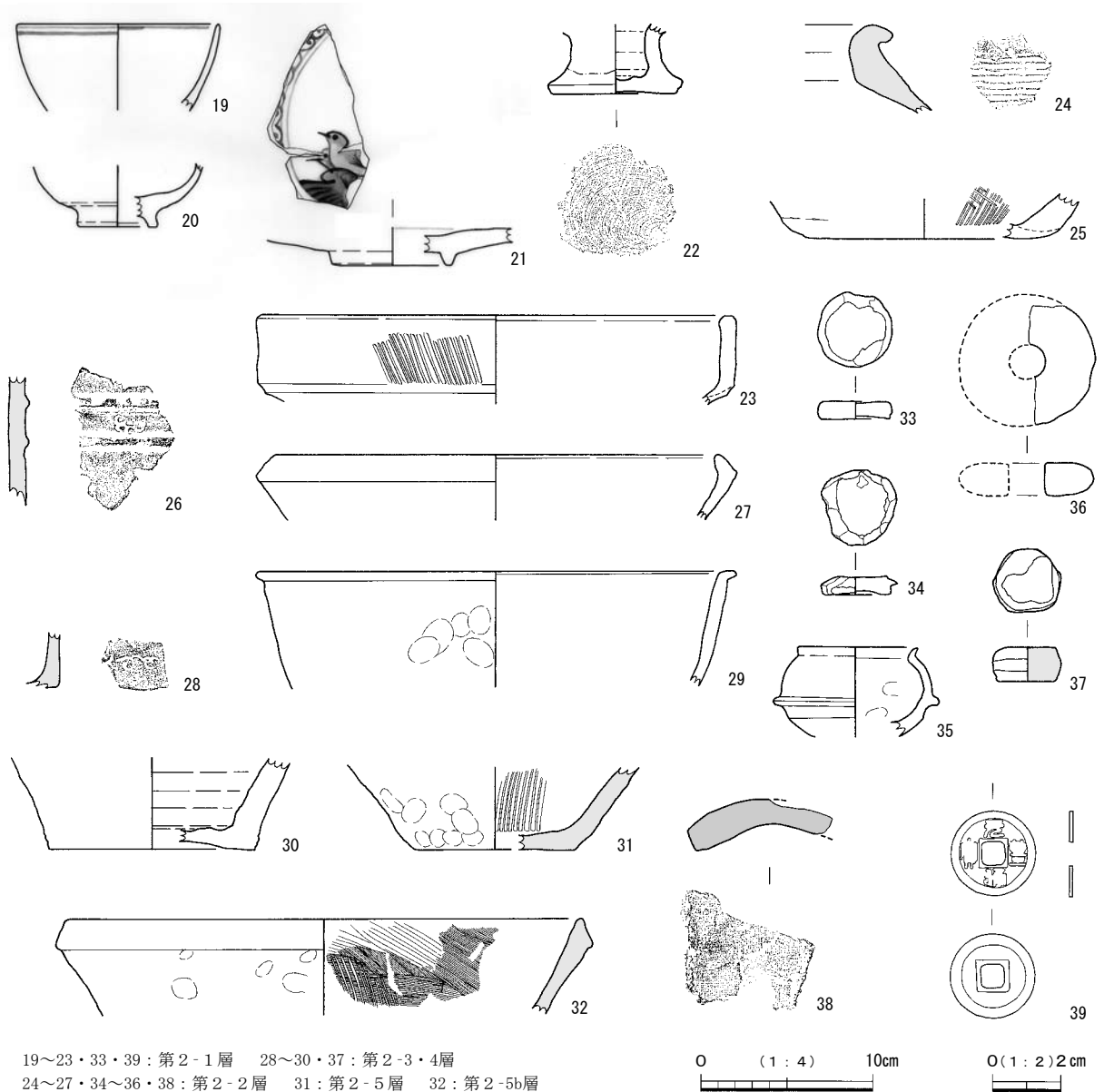


図 19 第2-5面 平面図

これらの埋土はシルト・砂質礫を主体とする氾濫堆積物であり、荷重により変形したラミナが第3-1層に入り込んでいることから第2-5b層中の踏み込みであることがわかる。これらは、水田や島島の縁辺部で確認でき、足跡や鋤の方向も不定方向であることから、第2-5b層が堆積する途中、細粒砂から中粒砂を主体とする下部の層が形成された段階でつけられたと考えられる。また、094島島直下では、幅0.1m、深さ0.05mほどの溝状の遺構が、心々間距離1.35mで東西に伸びており、轍の痕跡と判断できる。

(8) 第2層出土遺物 (図20)

第2層からは陶磁器、瓦質土器、土師器、転用円盤、紡錘車、須恵器、瓦、銅銭が出土した。(19・21)は、肥前系の染付。(20)は唐津の椀である。(22)は仏花瓶の底部。(23)は瓦質の焙烙。(24)は瓦質の甕。(26・28)は奈良火鉢の体部片で、花文印・草文印が確認できる。(33・34・37)は転用円盤。(37)は瓦質土器の転用である。(35)はミニチュアの羽釜である。(36)は陶製の紡錘車である。(38)は丸瓦片。(39)は北宋銭『元豊通宝』(篆書体)、初鑄は1078年である。



19~23・33・39：第2-1層 28~30・37：第2-3・4層
 24~27・34~36・38：第2-2層 31：第2-5層 32：第2-5b層

図20 第2層出土遺物

第2節 中世の遺構と遺物

(1) 第3面の調査

第3層の各遺構面は、中世後半の室町時代に比定される。池島Ⅰ期地区では、第3層として捉えられる層の中で概ね3面分の遺構面を調査しているが、当調査区ではシルトから極細粒砂を基質とする淘汰の良い第3-1層と、シルトから細粒砂を基質とし、シルト粒が卓越する淘汰の悪い第3-2層の2層に分層し、それぞれの上面で遺構検出を行った。なお、第3-2面の島畠の下では、第3-3層を確認している。特に132島畠下は、洪水堆積層の第3-2b層で覆われており、第3-3面が良好に残存する。池島Ⅰ期地区との層序対応関係を整理すると、第3-1面、第3-2面は、97-3調査区の第3-1面・第3-2-1面に対応している。97-3調査区の第3-3層は、130島畠、131島畠、132島畠の下に確認できるのみで、他の水田域では、層相や遺構面のレベルから当調査区の第3-2層の下位に対応すると考えられる。

池島Ⅰ期の成果からは、第3面の各遺構面は土壌化が進んでおらず、遺構面の更新が比較的早いペースで進んでいたと考えられている(廣瀬2007)。当調査区においては、第3-1層は土壌化が進んでおらず、第3-1面の耕作期間は短かったものと想定できる。なお、島畠部分を除き、第3-2層以下は古代面まで土壌化層が連続しており、調査区の全面に及ぶような自然堆積層は確認できないことから、本調査区では古代から中世まで比較的安定して耕作が行われたものと推定される。

(2) 第3-1面

第2-5b層下部の植物遺体を含む中粒砂を主体とするシルト質砂層を除去して検出した遺構面である。第3-1面の標高は、水田部でT.P. 4.05m~T.P. 4.15mである。第3-1層は土壌化の弱い細砂を主体とする砂質シルトの作土層で、調査区の全域に分布している。第2-5b層によって覆われているために、残存状況は概ね良好である。第3-1面では、第3-2面段階で形成された島畠と畝状の凹凸を検出した。畝状の凹凸は本来、調査区の全域に分布していたものと考えられるが、第2-5面段階の耕作による攪拌を受け、第2-5面段階で島畠であった部分にのみ良好に残存していた。畝の幅は0.7m~1.2m、畝間は0.1m~0.3mで、全て東西方向である。第3-1面では畦畔を検出していないことや、第3-1層の攪拌が弱く、シルトや細粒砂のブロックもラミナ構造を持つものが多いことから、この遺構面で長期間耕作が行われていたかどうか懐疑的である。第3-1層中からは少量の遺物が出土しているが、いずれも15世紀代のものである。



写真12 130島畠(北東から)



写真13 132島畠(南西から)

(3) 第3-2面 (図21)

第3-1層を除去して検出した遺構面である。第3-2面の標高は、水田部でT.P. 3.95m~T.P. 4.05mであり、検出遺構には水田畦畔、島島がある。遺構面の遺存状況は概ね良好であるが、132島島の南側は上層の第2-5b層と第3-1層の層厚が薄いため、第2-5面段階の耕作により攪拌され、第2-5b層の砂質礫を含む、礫・シルト質砂の作土となっている。また、調査区の東側は全般的に第3-1層の層厚が薄く、上層からの攪拌のため畦畔は明瞭に検出できなかった。

第3-2面は、検出した畦畔・島島から東西方向の地割りであることがわかる。東西方向の畦畔間隔は、北側の133畦畔から136畦畔までは10m~10.5m間隔であるが、136畦畔と137畦畔の間は3.5m、137畦畔と138畦畔の間は5m、138畦畔と139畦畔は6.5m、139畦畔と140畦畔間は11mである。Y=-34,600付近では南北方向の1006畦畔を検出した。この1006畦畔は、調査区の北側の134畦畔以北は不明

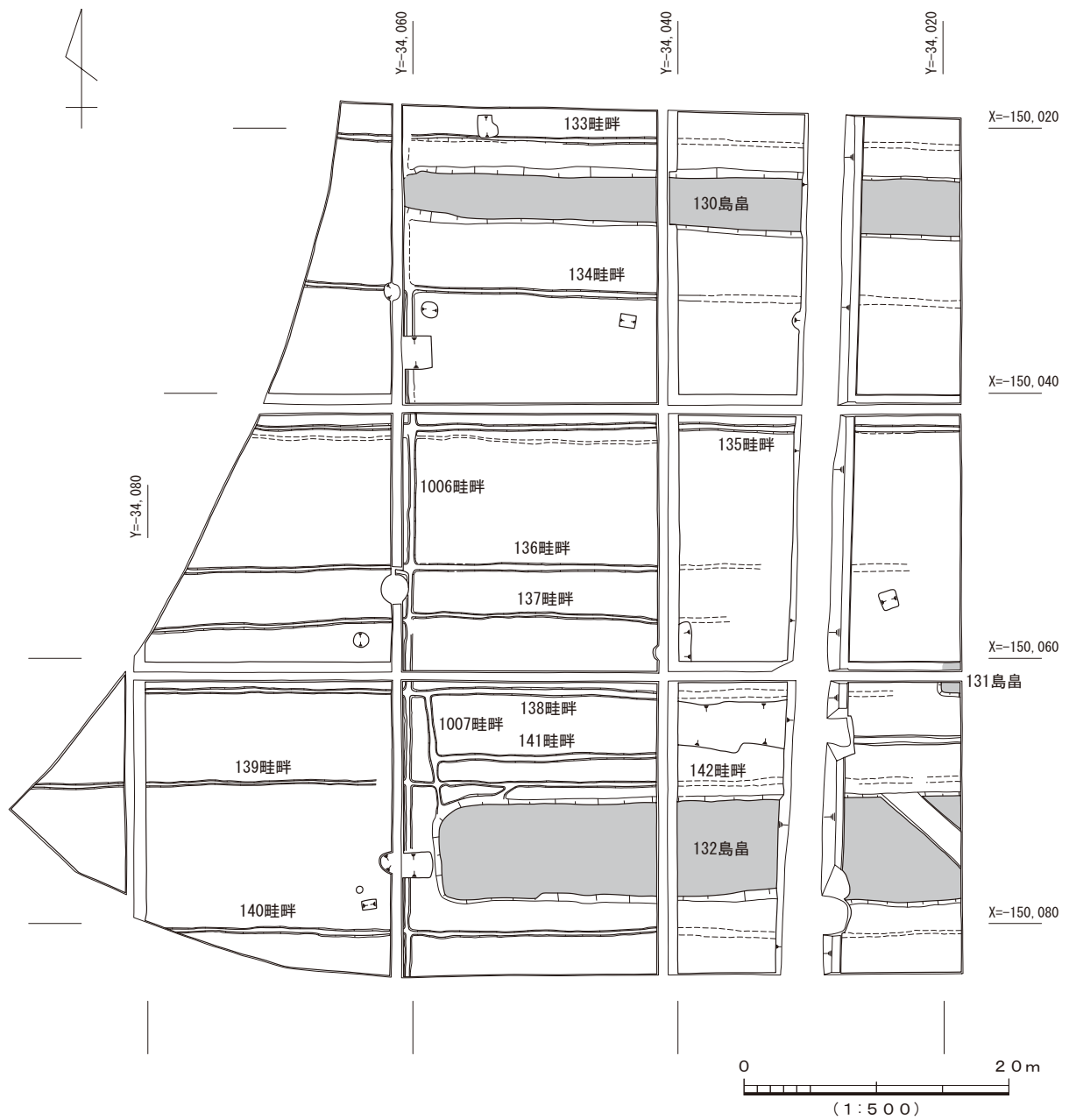


図21 第3-2面 平面図

瞭になっている。また、132島島の北側は畦畔間隔が狭く、東西方向の142畦畔・141畦畔と南北方向の1007畦畔によって区画されている。

130島島は、調査区の北側に位置しており、南北幅4.0m～4.9m、東西42.5m以上の東西方向の島島である。東端はY=-340,600ライン付近の南北畦畔に接するところであり、西は調査区外にのびている。第3-3面を覆う第3-2b層の上に、シルト質の偽礫を含む土で盛り土して構築している。第3-2面段階での水田面と島島上面との比高は0.4m～0.5mである。

131島島は、南北幅2.5m、東西1.7m以上の島島である。第3-1面段階では水田部との比高は0.15mほどであり、第3-2面段階では水田面との比高は北側が0.25m以上、南側が0.3mである。第3-2b層段階の洪水堆積物を島島の芯として構築したと考えられるが、プライマリーな状態の洪水砂は認められず、粘土・砂質礫の盛土によって構築されている。周辺に堆積した洪水砂を集めて作られた島島と判断できる。なお、島島内に第3-3層が確認できるが、残りが良くないことから、131島島の形成段階で第3-3面も攪拌されたことがわかる。

132島島は、調査区南側に位置する、南北幅7.5m～8.5m、東西39.5m以上の島島である。島島の西端は1006畦畔から約2m東側に位置しており、東は調査区外につづいている。第2面段階で検出した091島島はこの132島島を拡張したものである。島島の拡張は主に北側に向かって行なわれ、南側は第2-5面段階とほぼ同じ位置にある。調査区における第3-2層中の砂礫の多寡をみると、南東側が砂礫を多く含み、北西側はより粒径の小さい砂を含むことがわかる。島島内の堆積土の状況から見ても、132島島内ではラミナが確認できる状況であり、洪水砂の供給源に近いものと想定できる。

(4) 第3-2b面

第3-3面を覆う自然堆積層で、砂礫を主体とする洪水堆積層である。132島島、130島島下の一部のみ確認できる。この第3-2b面検出遺構としては、132島島の北側の143溝がある。143溝は、幅0.7m～1.2m、深さ0.35mで、溝の底は第10b層に達し、溝内の埋土は第10層から第4層を母材とする偽

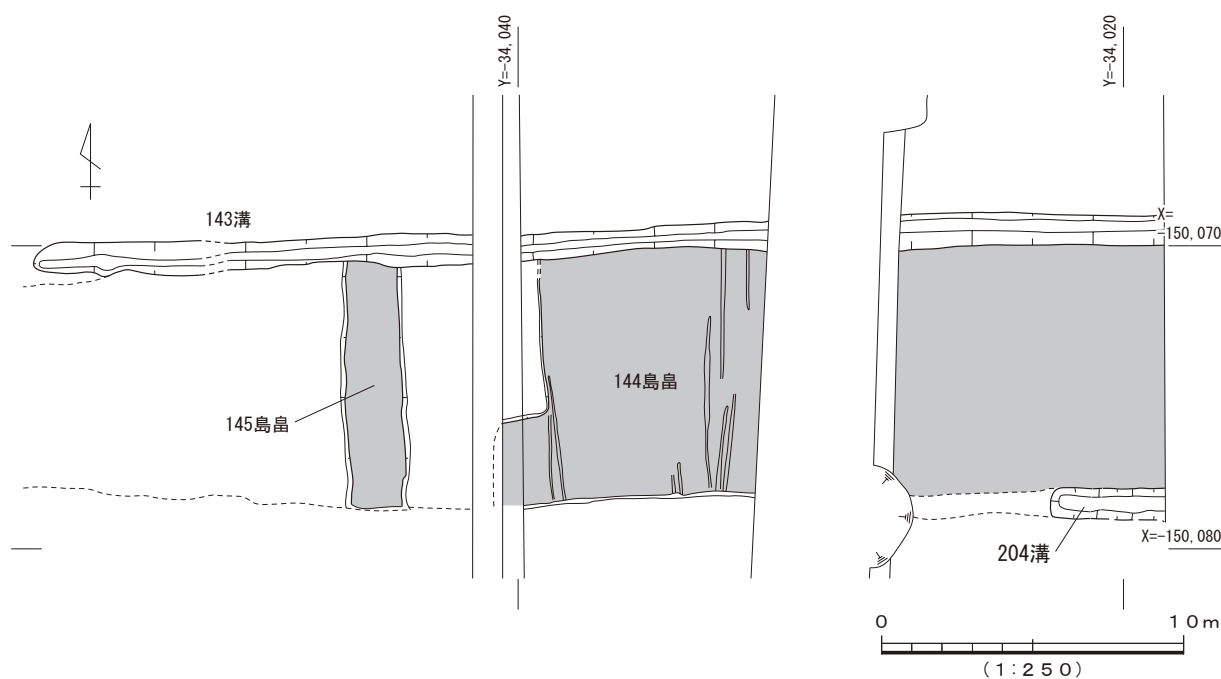


図 22 第3-3面 平面図

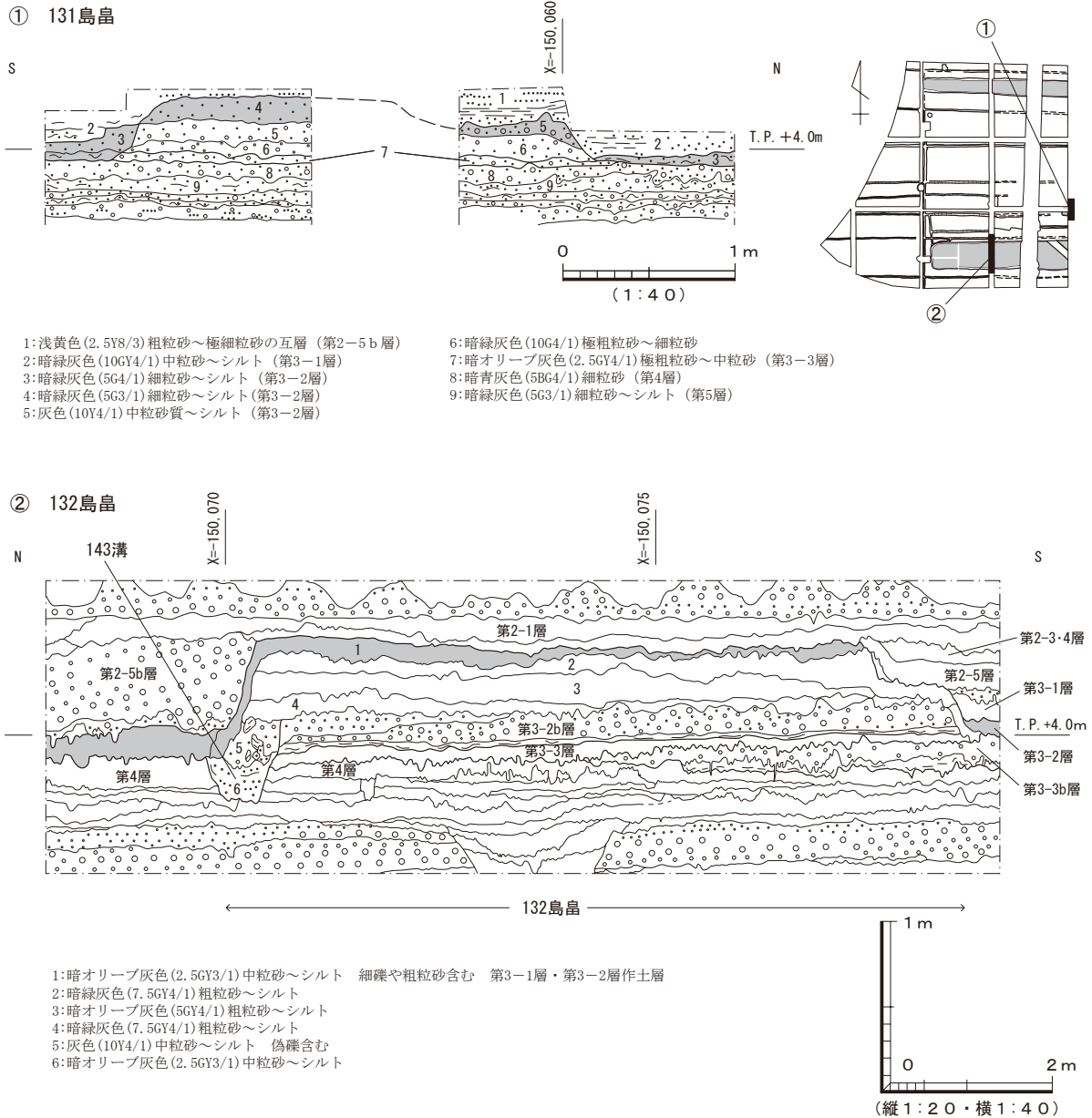


図23 第3面島島 断面図

礫や、シルト・砂質礫の第3-2b層を含んでいる。143溝は132島島の西端部付近までは輪郭が明瞭であるが、それより西にはつづいていない。132島島の南側でも、143溝と対になるように132島島の南側に204溝を検出している。204溝は、幅1.0m、深さ0.2mほどの浅い土坑である。第3-3面調査時には明瞭な遺構として認識していたものではないが、埋土はシルト質砂の第3-2b層であり、第3-2b面の遺構と判断できる。調査区の東端から4mのところでは輪郭があいまいになり、それより西側では溝として



写真14 145島島 (南から)

は確認できていない。なお、132島島と水田の境部分には踏み込みが顕著に認められる。143溝や204溝は、132島島の構築と関連するものであると考えられる。

(5) 第3-3面 (図22)

本調査区では、第3-2面で検出した島島の下にのみ第3-3面が残存していた。なお、池島I期地区や副越流堤部の調査地では、調査区のほぼ全面で第3-3面を調査している。本調査区で第3-3面が残存しない理由としては、下層の第4面のレベルが他の坪に比べ約0.1m以上高いために、洪水堆積物が厚く堆積しなかったこと。それにより、第3-2面の耕作時に第3-2b層とともに第3-3層が攪拌されたものと解釈できる。第3-3面検出の遺構としては、132島島下に位置する144島島、145島島がある。

144島島は、第3-3b層を芯とする島島であり、水田との比高は0.04mほどである。平面形は南側が西に張り出した鍵形になっている。島島は東側の調査区外に続いている。

145島島は、東西幅が2.0m~2.2mの南北方向の島島であり、水田との比高は0.04mである。第3-3b層の洪水砂を畦畔に寄せてつくられた島島であり、下層の第5面で154畦畔を検出している。144島島・145島島は、上面の132島島の範囲外では痕跡が検出できないが、南北の範囲は第4面の155畦畔、156畦畔の間に収まると考えるのが妥当である。

(6) 第3層の遺物 (図24)

第3層出土の遺物には、陶器、瓦質土器、瓦器、土師器、青磁、土製品がある。細片が多く図化できたものは少ない。第3-1層からは、瓦質土器の播鉢(40)、瓦質土器の浅鉢(41)がある。第3-2層・第3-2b層からは東播系の鉢(42)、土師質羽釜(43)、青磁碗(45)、土師器皿(46~49)、瓦器碗(44)が出土した。青磁碗は底部から体部までの資料で、外底は露胎である。龍泉窯製。土師器皿は、15世紀後半の資料を含む。第3-2b層から出土した天目碗(50)は、黒釉と褐釉で施釉され、口縁部がわずかに外反する。土師質羽釜(43)は河内F型で14世紀後半と考えられる。第3-3層からは、土師器皿(51)が出土した。

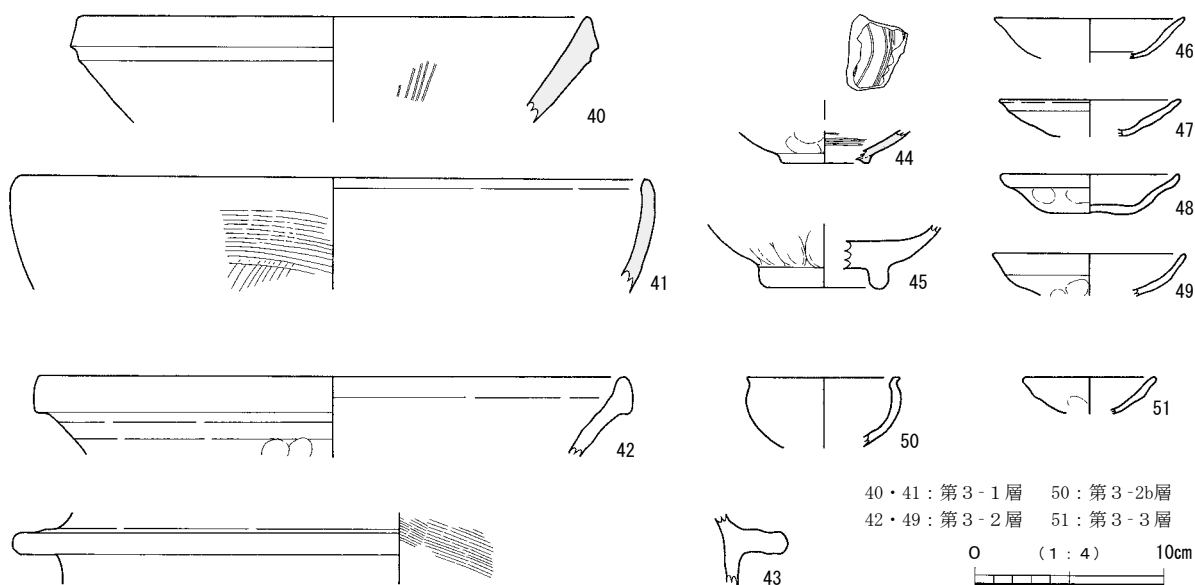


図24 第3層 出土遺物

(7) 第4面 (図25)

砂礫を比較的多く含む礫・シルト質砂層の第4層上面を遺構面とした。遺構面の標高は、T.P. 3.90m～T.P. 3.95mである。第3-2層以下は土壤化層が連続しているため、第4層の上面は第3-3面段階、あるいは第3-2面段階の耕作によって、攪拌されているものと考えられる。ただし、第4層自体はシルト・砂質礫を主とする第3層系の耕作土に比べ、砂礫を多く含むことから、明瞭に区別することができる。検出遺構としては、畦畔痕跡のほか、第3-3面段階の132島畠下で、154畦畔や141島畠を検出している。

池島I期地区では、当遺構面において畠作の痕跡を示す畝間溝が検出されている例もあるが、本調査区では第3-3b層にあたる氾濫堆積物の供給が少なく、条里畦畔はその痕跡を検出できたものの遺存状態は悪かった。畦畔は、第3-2面段階とほぼ同じ位置にある。この他に、第3-3面の島畠の下か

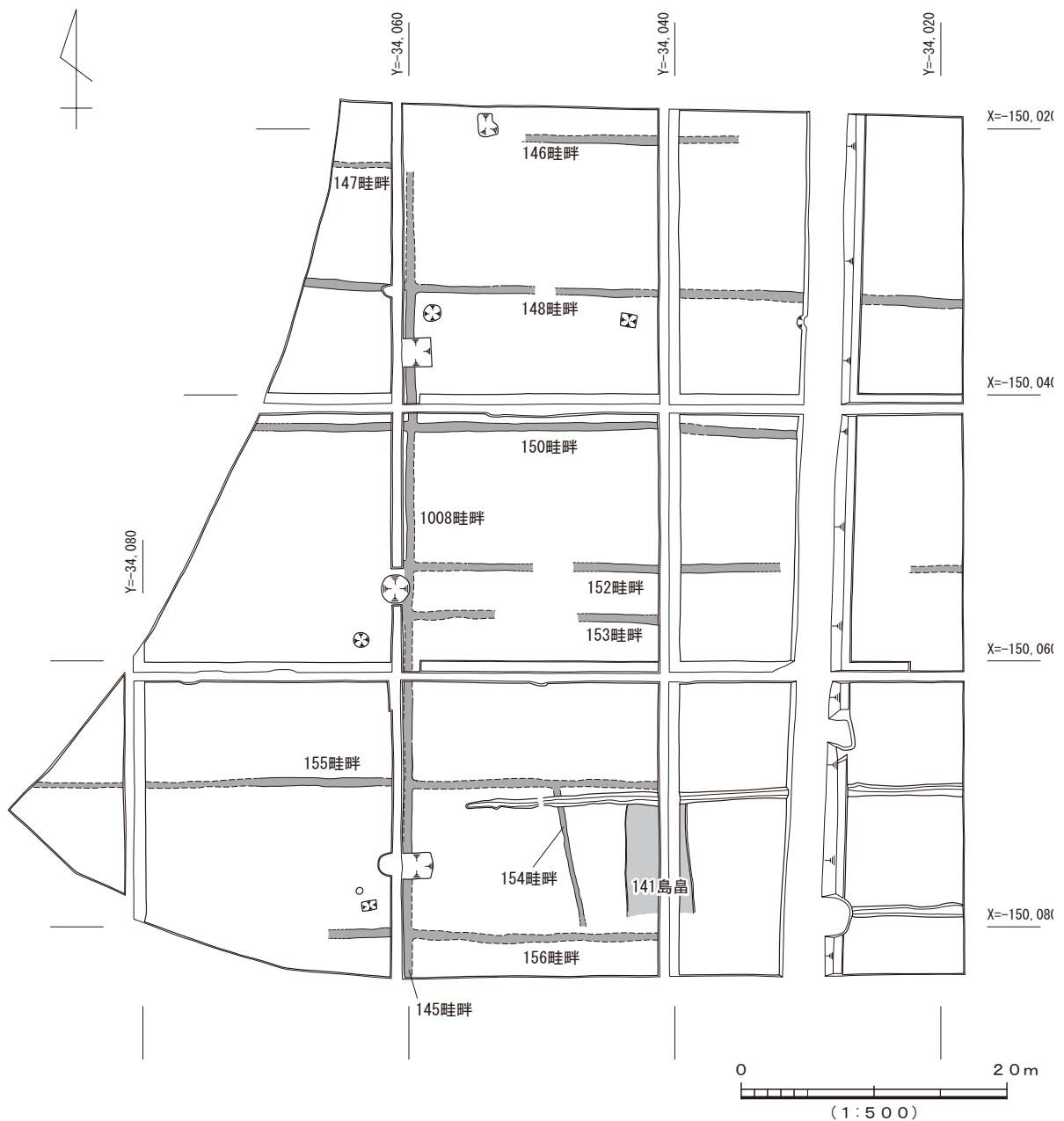


図25 第4面 平面図



写真15 154畦畔・141島畠（南西から）

ら、南北方向の154畦畔、141島畠を検出した。
141島畠は、東西幅4.7m～5.2m、南北は155畦畔と156畦畔間に収まる範囲であると想定できる。水田面からの比高は0.1mである。畝などの耕作に伴う痕跡は認められなかったが、島畠の西端には足跡が残る。
154畦畔は、第3-3面の145島畠の下に位置する。北側が西に寄った南北方向の畦畔である。

(8) 第4層の出土遺物(図26)

第4層からは、土師器、瓦器、瓦質土器、青磁、黒色土器、鉄製品が出土した。土師器はへそ皿を含む14世紀代から15世紀代の資料。(60)は黒色土器の椀。内外面ともに黒色化したB類である。(61)は、口縁部を内側に折り曲げた瓦質の羽釜である。(62)は足釜の脚部と釜体部の接続部の破片である。(63)は見込み部に格子状の線刻を施した陶器の卸目皿。(64)は龍泉窯青磁の椀で14世紀末から15世紀前半の資料。鉄製品(65・66)は鋤・鍬先の風呂部の破片である。出土資料からは14世紀から15世紀の資料が多いようであるが、10世紀代の黒色土器や11世紀代の瓦器椀もみえることから、下層の資料が混入していることがわかる。

(9) 第5面・第5層下面検出遺構(図27)

第5面は、第4層を除去して検出した遺構面である。第4層から第5層は土壤化層が連続していることから、遺構面の残存状況は良くない。第5層の上面で遺構検出を行ったが、顕著な遺構は検出できなかった。第5層は礫質シルトで層厚0.15mほどであるが、この第5層の下面で遺構検出を行った結果、耕作痕跡と見られる東西方向や南北方向のスキ溝のほか、方形土坑や長方形土坑、調査区を南北に貫く

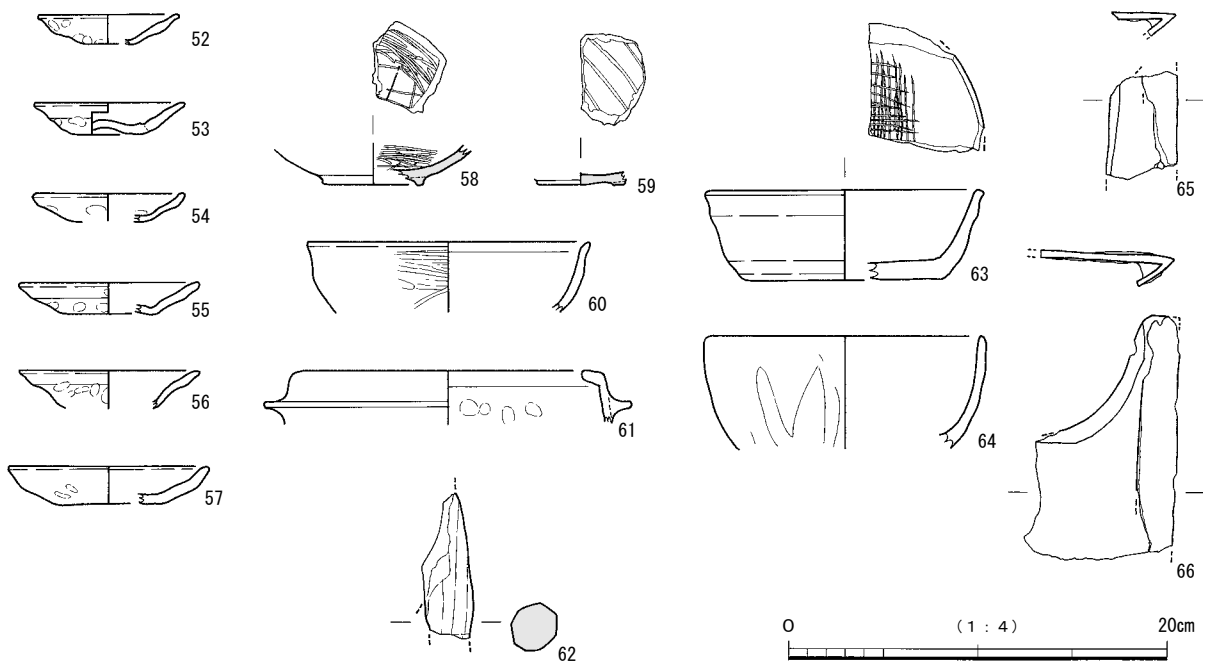


図26 第4層 出土遺物

溝を検出した。

スキ溝はおおむね幅0.1m～0.2m、検出面からの深さ0.03mほどで、東西、南北方向にはしる。調査区全体では、東西方向のスキ溝が優位である。スキ溝からは、瓦器・土師器・須恵器などの遺物が出土している。

161土坑は6gで検出した方形土坑である。東西1.6m、南北1.7m、深さ0.6mである。埋土は粗粒砂や砂礫を基質とし、シルトブロックを多く含む。掘削後短期間で埋め戻された状況が復元できる。埋土中から瓦器の破片が出土している。

158土坑は、4hで検出した。東西2m南北2mの範囲に、平面V字形の土坑が掘られている。土坑の深さはおおむね0.1mであるが、南西部は一部深く掘られている。埋土は粗粒砂や砂礫を主体とし、シルトブロックを多く含んでいることから、人為的に埋め戻されたことがわかる。土坑の壁面には鋤で掘削し

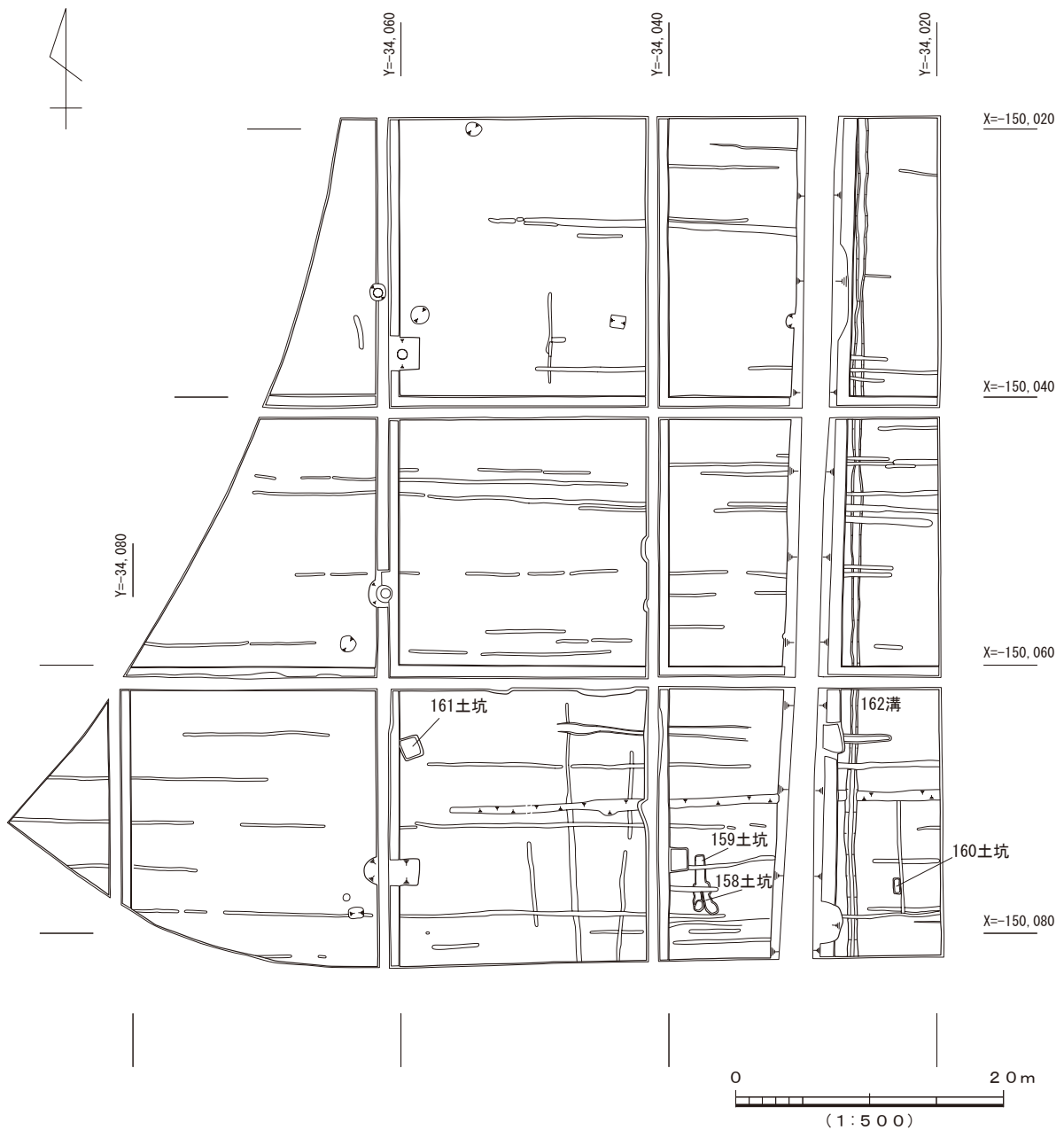


図27 第5層下面 平面図

た痕跡が明瞭に残る。なお、北側には158土坑に切られる159土坑が接している。159土坑は、南北1.5m 東西0.8m、深さ0.15mで、埋土は158土坑とほぼ同じである。158土坑・159土坑ともに遺物は出土していない。

160土坑は3hで検出した長方形土坑である。各辺とも正方位に近い。東西0.5m、南北1.15m、検出面からの深さ0.1mである。埋土は粗粒砂からシルトを主体とし、偽礫を多く含む。遺物は出土していない。

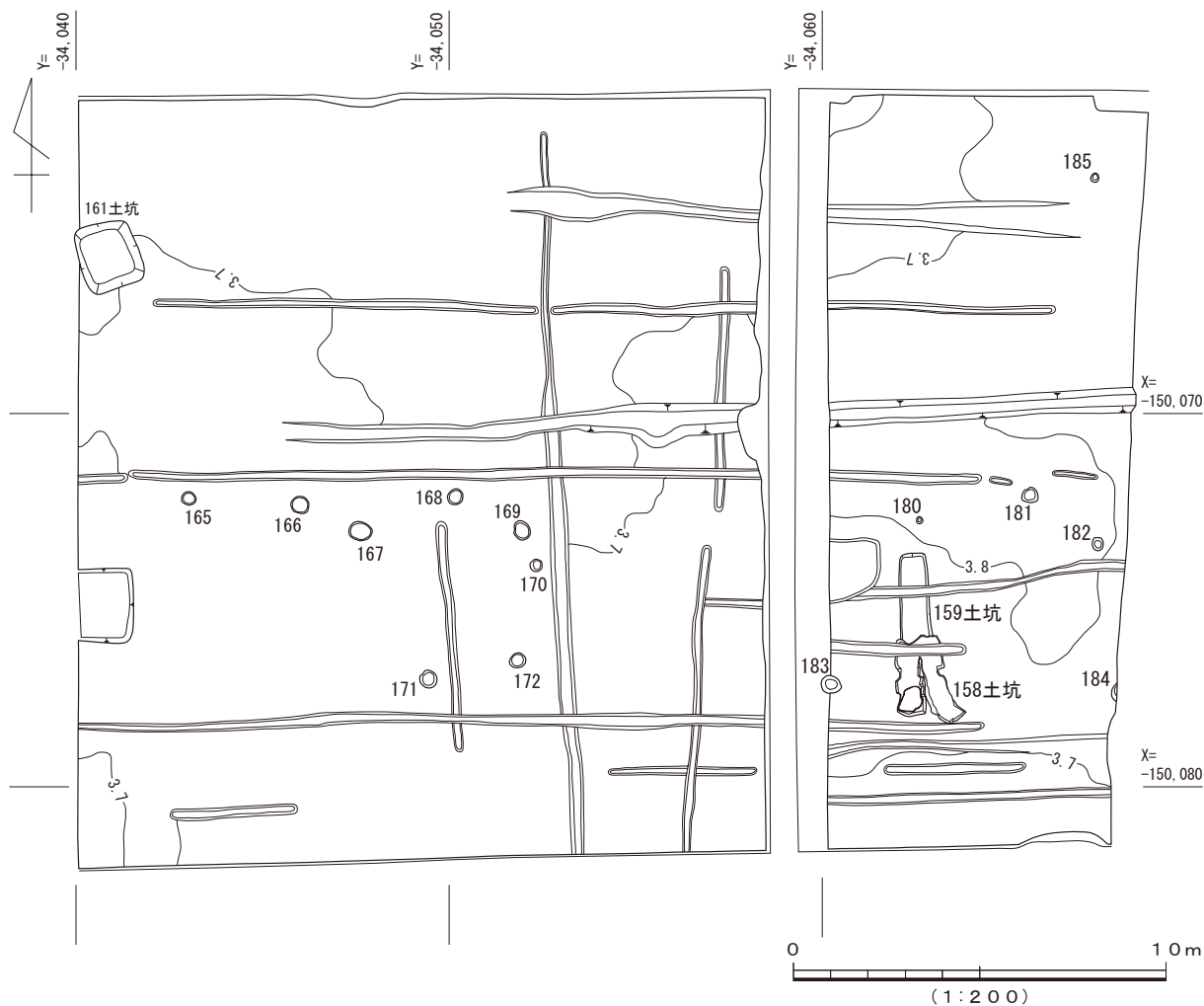


図 28 第5層下面 南側部分図



写真 16 158 土坑 (西から)



写真 17 162 溝断面

158土坑・159土坑・160土坑については、遺構内埋土に砂礫を多く含み、一辺20cmの大型の偽礫が多いという特徴がある。これらの土坑では、埋土の主体となる細礫～極粗粒砂が土坑の掘削深度内に存在しないことから、埋土の砂礫は氾濫堆積物である可能性が高い。この土坑内埋土と類似するものとしては、162溝内堆積土をあげることができる。遺物が出土していないので確実ではないが、158・159・160土坑については、埋土から第6面・第5面に帰属する可能性が高いと考えている。なお、今回の調査では第5層下面検出の土坑としておさえられた土坑は4基にとどまるが、検出時の見落としなどによって第8面や第9面検出の土坑中にも、中世段階で掘削された土坑が存在する可能性がある。

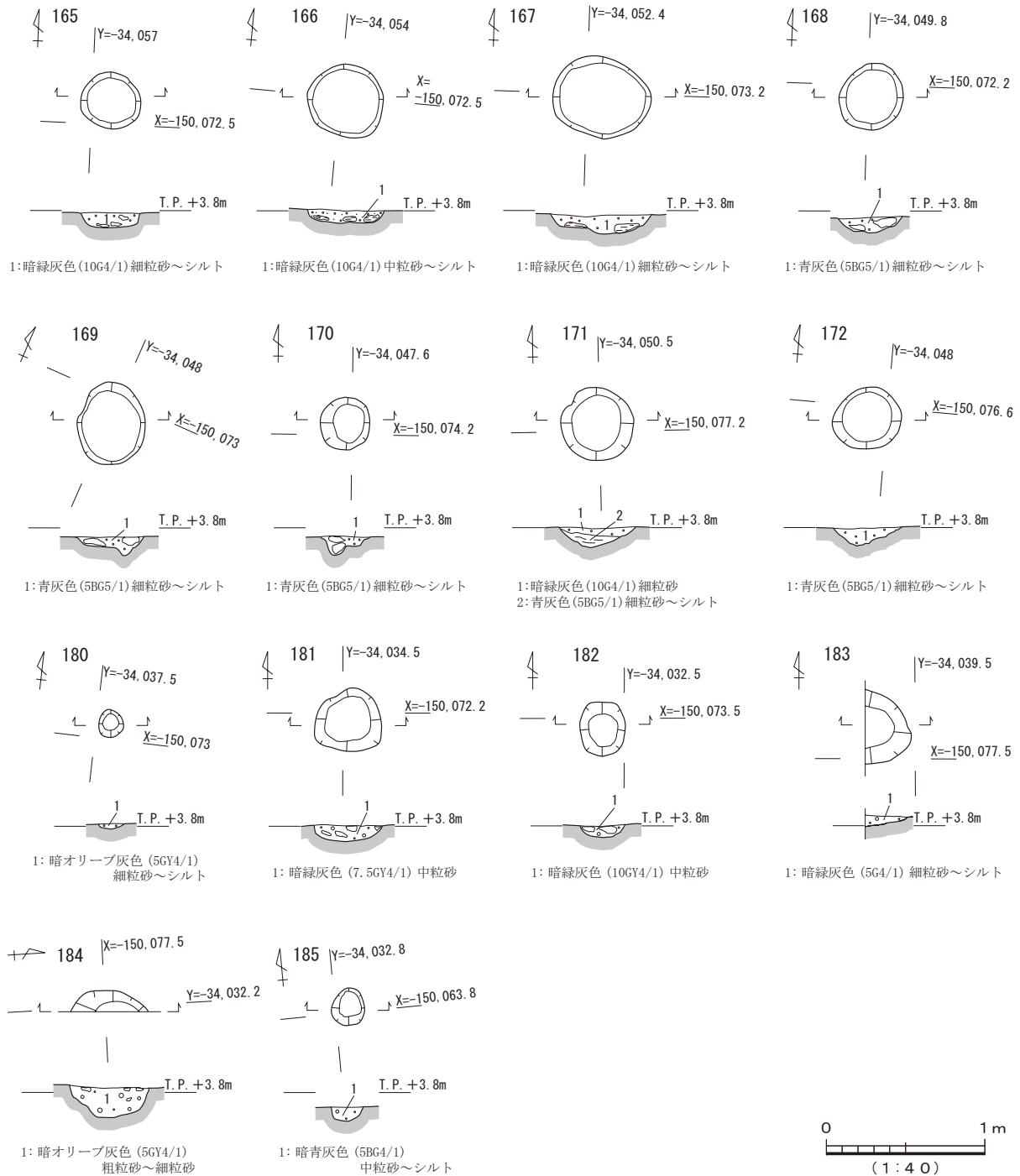
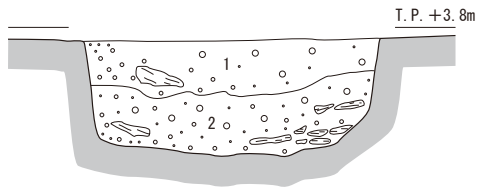
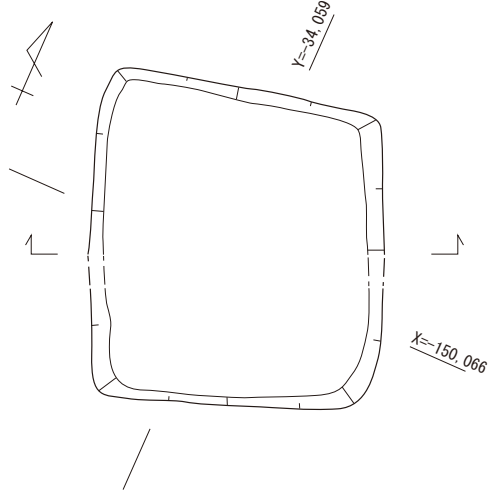


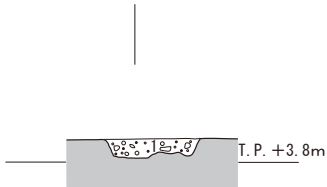
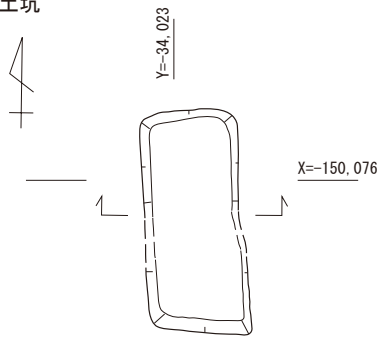
図29 第5層下面ピット 平面図・断面図

161土坑

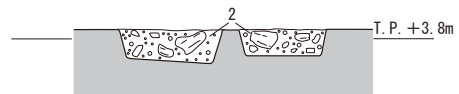
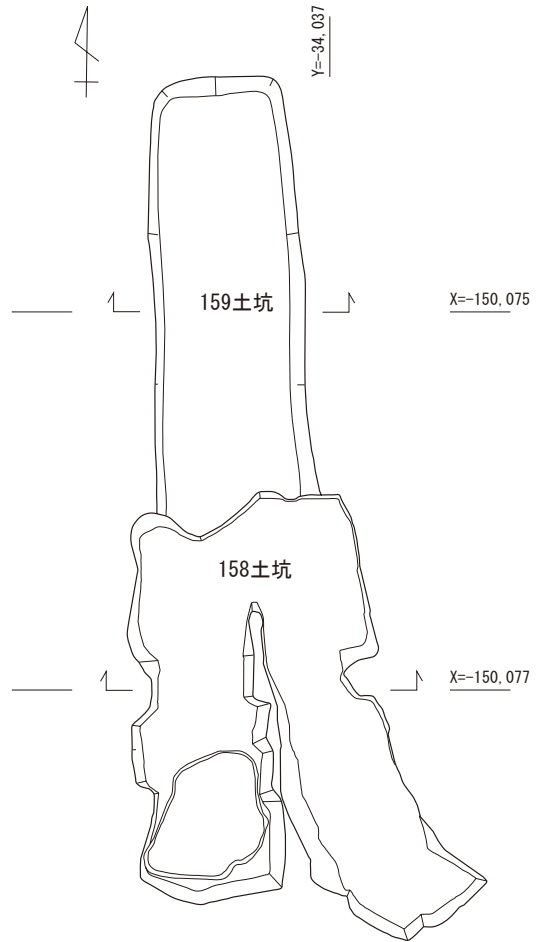


- 1: 緑灰色 (5G5/1) 細粒砂〜シルト 極粗粒砂多く含む
- 2: 暗緑灰色 (5B4/1) 細粒砂〜シルト 偽礫多く含む

160土坑



- 1: 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) 中粒砂〜細粒砂 極粗粒砂多く含む 偽礫多く含む



- 1: 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) 中粒砂 極粗粒砂多く含む 一辺5〜10cmほどの偽礫含む
- 2: 灰オリーブ色 (5Y6/2) 中粒砂〜細粒砂 極粗粒砂多く含む シルトブロック含む

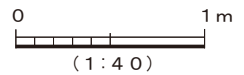


図 30 第 5 層下面土坑 平面図・断面図

ピット群 5h・6hでピットが集中する状況を確認した。円形、楕円形の平面形で深さは0.1m～0.2mと浅い。埋土にシルトブロックを含むものが多いが、171ピットは底部付近の埋土に細粒砂からシルト質が堆積し、ラミナが認められる。いずれのピットからも時期を判断できる遺物は出土しておらず、ピットの用途・性格も不明である。

162溝は、調査区の東に位置しており、幅0.5m～1.0m、検出面からの深さ0.08m～0.15mの南北溝である。遺構埋土は、粗粒砂～砂礫層を主体としており、一部、細粒砂の層も確認できる。溝内埋土から土師質の羽釜や、瓦器碗が出土している。これらの出土品は、13世紀中頃の年代を示しており、出土遺物の示す年代から第7面に帰属する遺構と判断できる。162溝は調査地を南北に縦断しており、二十二坪の中でも主要な区画溝であったと考えられる。中世前半の土地利用を知る上で重要な遺構と考えられる。

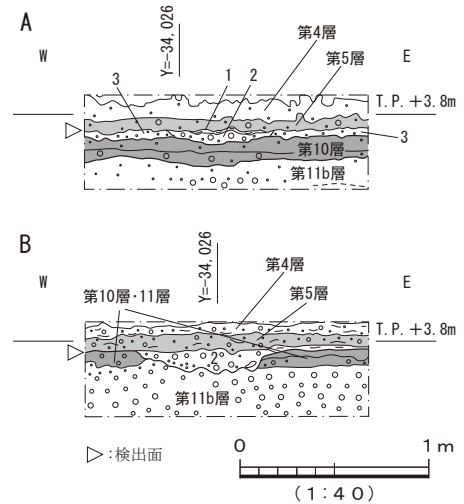


図31 162溝 断面図

(10) 第5層出土遺物 (図32)

第5層からは、瓦器、陶器、瓦質土器、土師器、瓦、須恵器などが出土した。瓦器碗(67)は、見込みに一定方向の暗文が施され、(68)は斜格子とそれに交わる直線により、網目状の暗文を施す。(69)は瓦質火鉢の口縁部片である。(70)は黄瀬戸の碗である。(71)は巴文軒丸瓦。(72)は162溝から出土した土師質の羽釜である。体部が丸く、鏝の先端部を丸くおさめた河内A型式(森島1990)と考えられ、13世紀中葉とみられる。(73)は土師器の杯。(74)は須恵器の杯身で、TK209型式。(75)はTK217型式のものである。これらは第10層以下の層からの混入品と考えられる。これまでに第5層は14世紀代の年代が与えられてきたが、当調査区では多くの混入品が認められる。第5層下面検出時に第10層のシルト質砂を検出したところもあり、本調査区の第5層は長い時間幅を持った作土層であることをうかがわせる。

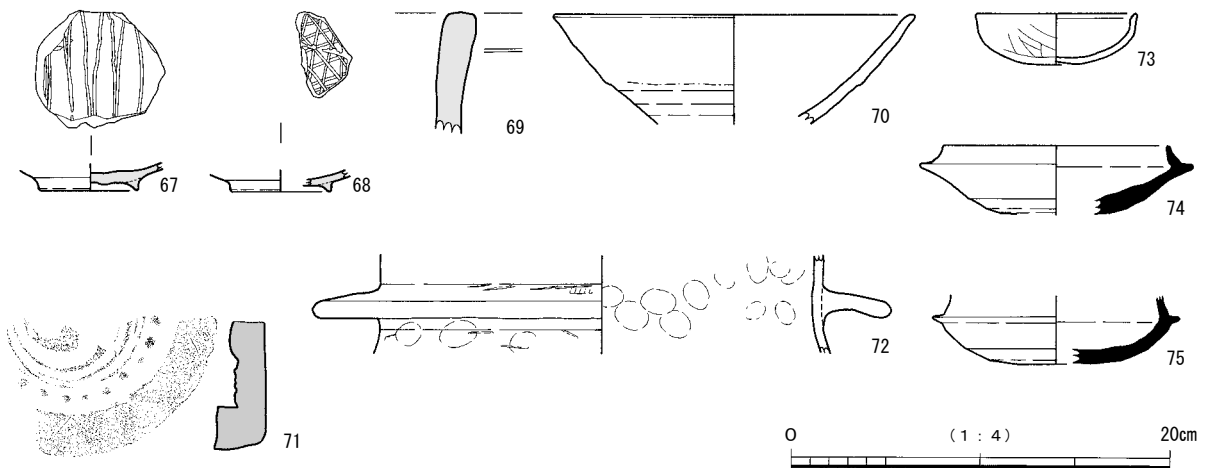


図32 第5層 出土遺物

第3節 古代の遺構と遺物

池島 I 期地区の成果から、古代に相当する層は、第 8 層、第 9 層であると考えられている。しかしながら、本調査区においては、調査区の全域にわたって第 11b 層が厚く堆積しており、第 5 層を除去した段階で、第 10 層や第 10b 層、第 11 層が露出する箇所も認められた。特に第 8 層が残存していた範囲は、調査区の南西と北東の一部に限られており、第 8 面においては全面的な遺構検出は行っていない。ここでは、第 9 面検出の土坑、埋納された土器から古代の遺構と推定できる土坑の他に、検出時の見落としにより第 10 面で検出した方形土坑も含め記述する。

(1) 第 8 面

本調査区においては、池島・福万寺遺跡の標準層序の第 6 層から第 10 層までは、氾濫堆積物の供給量が少なく、上層からの攪拌、地震による変形によって正確に分層した上で各遺構面を検出することができなかった。また、調査区の東側では第 11b 層の高まりに向かって地層が収斂していることを確認している。

池島 I 期地区の調査では、第 7 層下部から第 9 層にかけて、地震による変形構造が顕著に認められることが指摘されている（廣瀬 2007）。本調査区においても、断面の観察で第 8 層が確認できた調査区の西南部は、暗緑灰色の第 8 層と青灰色の第 9 層が火炎状に上層の第 5 層まで巻き上げられ、変形していることを確認した。この西南部付近で第 8 面の平面的な検出を試みたが、層厚が薄いことや、地震による変形のために遺構面として検出することは困難で、確実に第 8 面に帰属する遺構も確認できなかった。

(2) 第 9 面 (図 33)

第 8 面と同様に調査区全域にわたって第 9 層が残存する状況にはなかった。これまでの調査において、第 9 層は灰色の砂質シルトを主体としており、土壌化した部分を第 9 層、ラミナが観察される層を第 9b 層としているが、今回の調査では明瞭に土壌化した層や自然堆積層は確認できなかった。

第 9 面からは土坑を検出したが、第 9 層自体の把握が十分ではないために、遺構の帰属面を確実におさえられたわけではない。中世段階の遺構も含まれるものと理解したい。第 9 面に帰属すると考えられる遺構は、墨書土器が出土した 226 土坑と、8 世紀代の土器埋納遺構である 239 土坑をあげることができる。この他に、調査区の南端、Y=-34,050 付近の側溝からも 8 世紀代の土器が出土している。土器の 3 分の 2 以上が残存しており、土器埋納土坑に伴うものである蓋然性が高い。壁面や法面の精査を行なったが、遺構を検出することはできなかった。

226 土坑 (図 34) は、4d で検出した東西 1.7m、南北 1.5m の方形土坑である。検出面からの深さは 0.8m であり、土坑北東隅の底部から土器が正位置で出土した。土坑の壁面はほぼ垂直であり、底面はおおむね平坦である。壁面近くでは掘削時の崩落土が堆積しており、土器は土坑の北東側の壁面近くに、底面の形状にしたがって、やや斜めに置かれていた。土坑の埋土は、10cm～20cm 大のシルトブロック、同大の細粒砂のブロックを多く含んでおり、おおむね 3 層に分層できるが、土坑の埋め戻しは短期間で行われたものと考えられる。土坑内埋土は第 10b 層のシルト質砂を主体としている。土壌の洗い出しをおこなったが、植物の種子などは検出できなかった。

239 土坑 (図 34) は、調査区の北西部 7e に位置する長辺 1.5m、短辺 0.7m の隅丸長方形の土坑である。検出面からの深さは 0.45m である。長軸方向が正方位から約 45 度西へ振っており、今回の調査で検出

した方形土坑が方位を揃えているのと対称的である。土坑の底面には凹凸があり、土器は土坑の中央部に、正位置に置かれた状態で出土した。土坑内は、第10b層由来のシルトブロックや、極細粒砂のブロック、礫質砂などで充填されている。他の土坑と同様に、埋め戻しは短期間で行われたと想定できる。

本調査区では古代の遺構面の残存状況が悪く、最古条里面の状況を明らかにできなかったが、図33に示したように多くの土坑を検出した。所属時期が明らかになったものは少ないが、古代遺構面に所属するものも存在すると考えられる。今後周辺調査区の成果とあわせて検討することが必要である。

(3) 遺構出土の遺物 (図35)

(76) は226土坑出土の椀。椀A類である。口縁はやや内彎し、口縁端部は丸くおさめる。外面の体部下半から底部にかけては指頭圧痕が残る。内面はナデ、外面は口縁部付近までナデ調整を施しており、

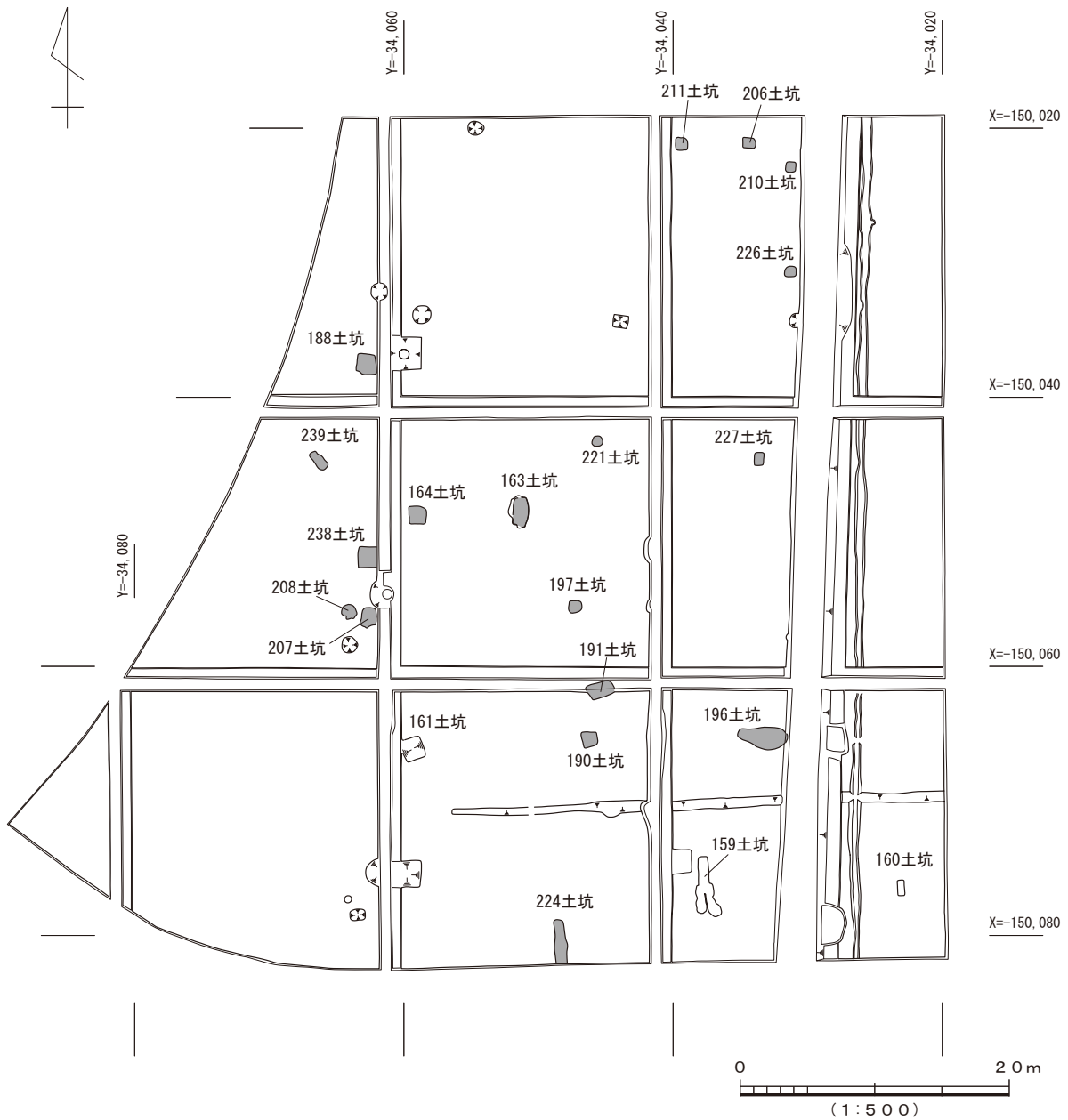


図33 第9面 平面図

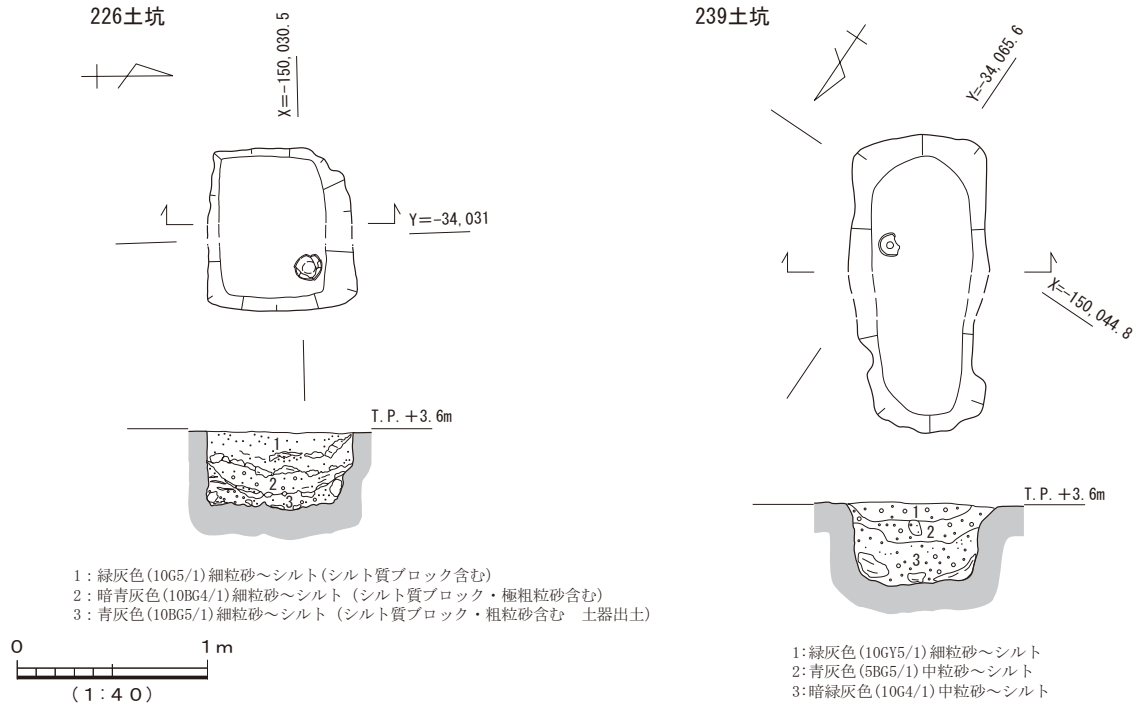


図34 土器埋納土坑 平面図・断面図

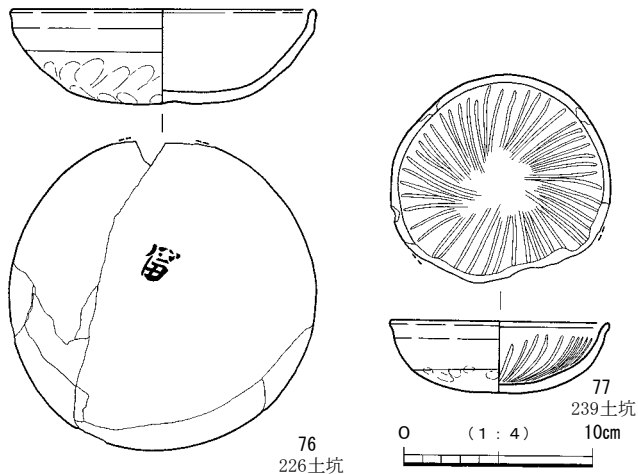


図35 土器埋納土坑 出土遺物

(4) 古代・中世の土坑について

本調査区では、第6層、第7層、第8層の層厚が薄いこともあり、第5層下面の検出の後、第9面、第10面で遺構検出を行っている。この中で、第9面や第10面で検出した土坑には、遺物が出土せず、遺構内の埋土からも帰属する遺構面の判断が難しいものが多い。土坑は、主に第9面、第10面の調査時に検出したものであるが、遺構検出時の見落としもあり、土坑の年代を決定するのは困難な状況である。このため、土器が出土して土坑の年代が推定できる161土坑・226土坑・202土坑・239土坑や、土坑の埋土の状態から中世の遺構面に帰属する可能性が高い159土坑・160土坑の他は、帰属面を確定することは困難である。ここでは、これらの土坑について第6面～第9面に帰属するという認識のもと記述を進めることにする。

211土坑は、4cに位置する。一辺0.85m、深さ0.35mの方形土坑である。各辺はほぼ正方位に合っている。土坑内埋土は、中粒砂から細粒砂を主体とし、偽礫を若干含む。

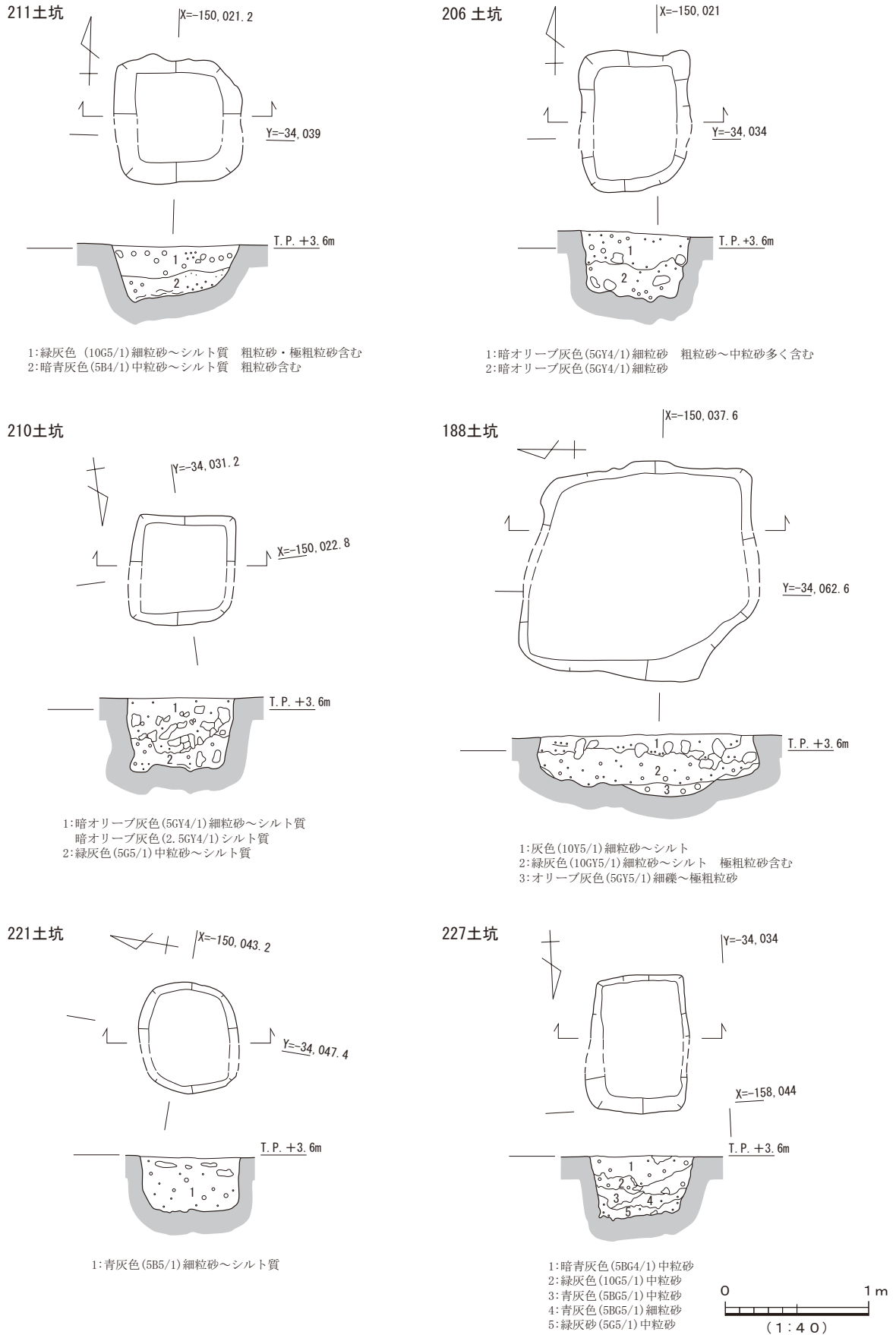
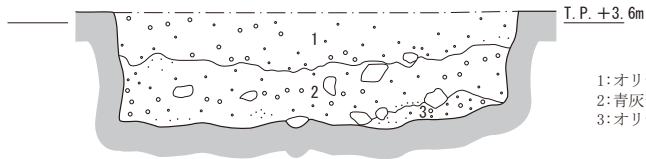
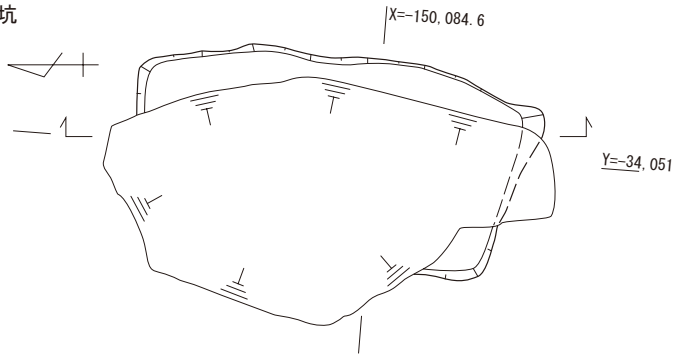


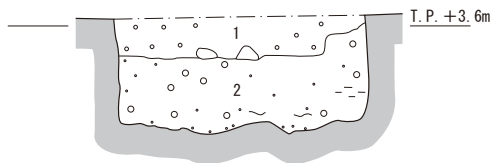
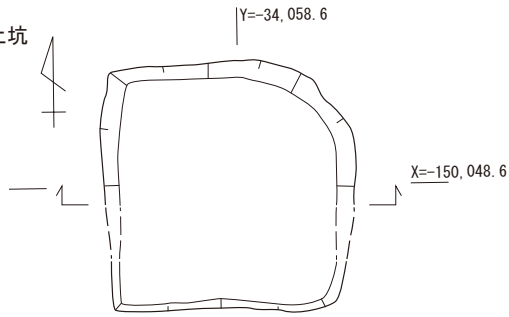
図36 古代・中世土坑 平面図・断面図 (1)

163土坑



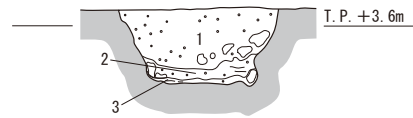
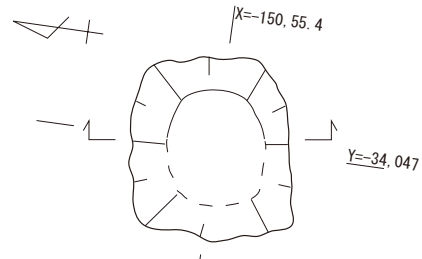
- 1: オリーブ灰色 (5GY5/1) 細粒砂～シルト質 極粗粒砂含む
- 2: 青灰色 (5BG5/1) 細粒砂～シルト質 粗粒砂含む
- 3: オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 細粒砂

164土坑



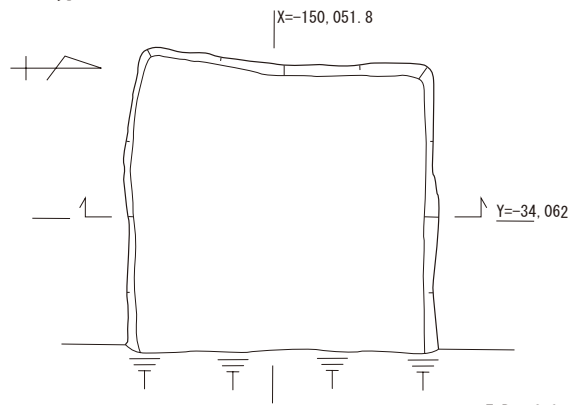
- 1: 暗緑灰色 (7.5GY4/1) 細粒砂～シルト質 シルトブロック・極粗粒砂含む
- 2: 灰色 (N5/0) 粗粒砂～シルト質 炭化物含む

197土坑



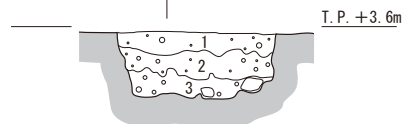
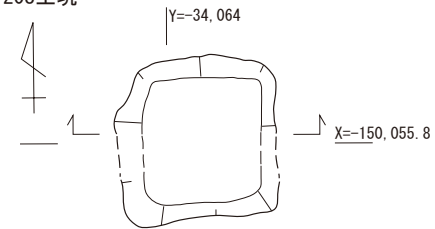
- 1: 暗緑色 (7.5GY4/1) 細粒砂
- 2: 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 極細粒砂
- 3: 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) シルト 礫含む

238土坑



- 1: 暗青灰色 (5BG4/1) 中粒砂～シルト シルトブロック含む

208土坑



- 1: 暗緑灰色 (10GY4/1) 細粒砂～シルト質
- 2: 暗緑灰色 (5G4/1) 細粒砂～シルト質
- 3: 青灰色 (5B5/1) 細粒砂～シルト質 シルトブロック含む



図 37 古代・中世 平面図・断面図 (2)

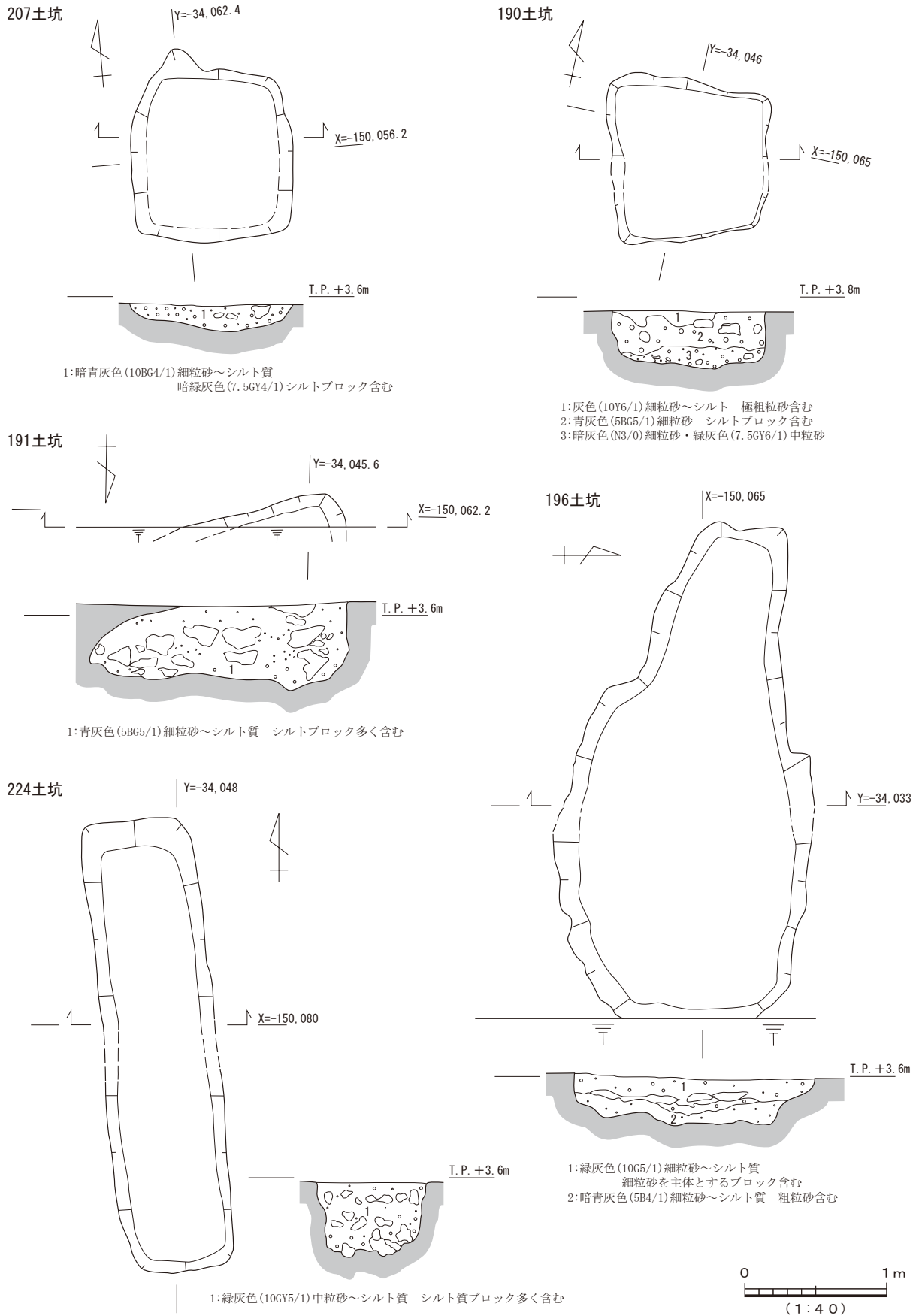


図38 古代・中世土坑 平面図・断面図(3)

206土坑は、4cに位置する。東西1.0m、南北0.75m、深さ0.45mの長方形土坑である。各辺は正方位である。土坑内埋土は粗粒砂から細粒砂を主体とし、第10b層に由来するシルトの偽礫を含む。

210土坑は、一辺0.75m、深さ0.55mの方形土坑である。各辺は、正方位からやや東に振っている。土坑内埋土は中粒砂～シルトの土に、一辺0.1mほどの偽礫を多く含む。

188土坑は、7dに位置する。東西1.5m、南北1.6m、検出面からの深さ0.4mの土坑である。各辺は正方位である。土坑埋土は、極粗砂を主体とする砂質土に径0.1mほどの偽礫を含んだもので、人為的に埋められていることがわかる。

221土坑は、南北0.7m、東西0.75m、深さ0.4mの隅丸方形の土坑である。土坑内埋土は細粒砂からシルトで、偽礫を含んでいる。

227土坑は、南北1.9m、東西1.4mの長方形土坑である。検出面からの深さは0.85mである。各辺は正方位である。埋土は粗粒砂～中粒砂の砂質土を主体として、偽礫を多く含んでおり、人為的に短期間で埋め戻された状況が復元できる。

163土坑は、土坑の掘削中に湧水により土坑壁面が崩落したため、正確な形状は不明であるが、南北1.1m、東西1.95mの長方形である。方位を合わせて掘削したものと考えられる。検出面からの深さは0.6m、土坑壁面はほぼ垂直である。土坑埋土は、細粒砂を主体とする砂質土であり、シルトの偽礫を多く含んでいる。

164土坑は、南北、東西とも長さ1.3mの方形の土坑である。土坑の各辺はほぼ東西南北に沿っている。土坑の深さは検出面から約0.6m、土坑の壁面はほとんど垂直であり、底面は比較的平坦である。土坑埋土は粗粒砂～細粒砂の砂質土を主体とし、シルトの偽礫を含む。

197土坑は、南北0.8m、東西1.0mの隅丸方形の土坑であり、検出面からの深さは0.4mを測る。埋土上部は細粒砂を主体とする偽礫を含む土であり、他の土坑と同じであるが、壁面は垂直ではなく、底面に細砂からシルトの薄層が堆積する点が他の土坑と異なる。

238土坑は、南北1.6m、東西長は東側が断面観察のトレンチと重なるため不明であるが、東西長は1.5m以上である。第10b面で確認したため、検出面からの深さは0.2mほどであるが、本来は0.3mほどあったものと考えられる。各辺は正方位を向いている。底面はほぼ平坦である。土坑内埋土は中粒砂～シルトで、第10b層を母材としたものである。

208土坑は、8fに位置する。一辺0.8m、深さ0.35mの方形土坑である。各辺は正方位に合っている。土坑内埋土は細粒砂からシルトを主体とし、偽礫を含んでいる。

207土坑は、7fに位置する。一辺1.1m、深さ0.2mの方形土坑である。土坑内埋土は細粒砂からシルトを主体とし、0.1mほどのシルトの偽礫を含む。深さが浅く、皿状の土坑である。

191土坑は、断面観察用の東西トレンチによって、全形は捉えられなかったが、土坑の南西隅部を検出した。土坑の深さは検出面から約0.5mである。土坑の埋土にはシルトブロックが多く認められる。

190土坑は、南北1.15m、東西1.1mの方形土坑である。各辺は正方位から若干西北に振っている。土坑の深さは検出面から約0.4mであり、土坑壁面は垂直に近い角度で掘られている。土坑埋土は細粒砂を主体とし、シルトブロックを多く含む。

196土坑は、南北0.7m～1.7m、東西3.4mの長方形であり、土坑の深さは検出面から0.3mほどである。底面の形状も凹凸が多く認められる。土坑埋土は砂質土を主体とする。形状が他の土坑とは異なることから、別の遺構面にとまなう可能性も考えてよい。

224土坑は、5hに位置する。南北3.2m、東西0.85m、深さ0.5mの長方形土坑である。土坑埋土は第10b層由来の中粒砂からシルトの土であり、径0.1mほどの偽礫を多く含む。

以上、詳細に記述したが、ここで土坑についてまとめてみたい。これらの土坑の特色としては、①平面形が正方形や長方形で、垂直に掘削する。②埋土にブロックを多く含み、短期間で埋め戻された状況が想定できる。③各辺を正方位に合わせている土坑が多い。ことがあげられよう。土坑の時期については、遺構面の把握が困難であり、出土遺物や遺構内埋土からも確実な情報がないため明らかではないが、池島I期地区では、第6面で同様の方形土坑が多く検出されている。

土坑の性格は明らかではないが、中世の土坑については、池島I期地区においても、二十八坪や二十九坪、二十一坪、二十二坪の坪境に土坑が集中する傾向がある。今回検出した土坑については、坪境から離れていることから、これまでの傾向とは異なるものの、東西方向、南北方向ともに規則的な配置をうかがわせる配置であり、坪内の区画にあわせて土坑が掘削された状況が復元できる。

古代の土坑の場合、土器を埋納するものの中に、墨書土器や線刻を施したのを見受けられ、銅鈴や銅銭の埋納と同様に地鎮祭祀に伴う遺構遺物であるとする見方がされており、その契機に土地開発を想定する意見がある（江浦1992）。本調査では8世紀代の土器を納めた土坑と、「冨」と墨書した9世紀の土器が出土した土器埋納土坑がある。前者は、第一段階の開発の時期に該当する遺構であり、いわゆる方格地割の施工段階のものと考えられるが、本調査区では地割を復元する成果は得られていない。なお、「冨」は仏教的な語句である可能性が指摘されており、土器埋納の思想的な背景を考える資料となろう。

古代から中世の方形土坑については、作土の採取土坑と考える見方（松田1996）、土取りを伴った祭祀遺構とする見解がある。本調査で検出した方形土坑のうち土器を埋納しないものについて、土坑の底

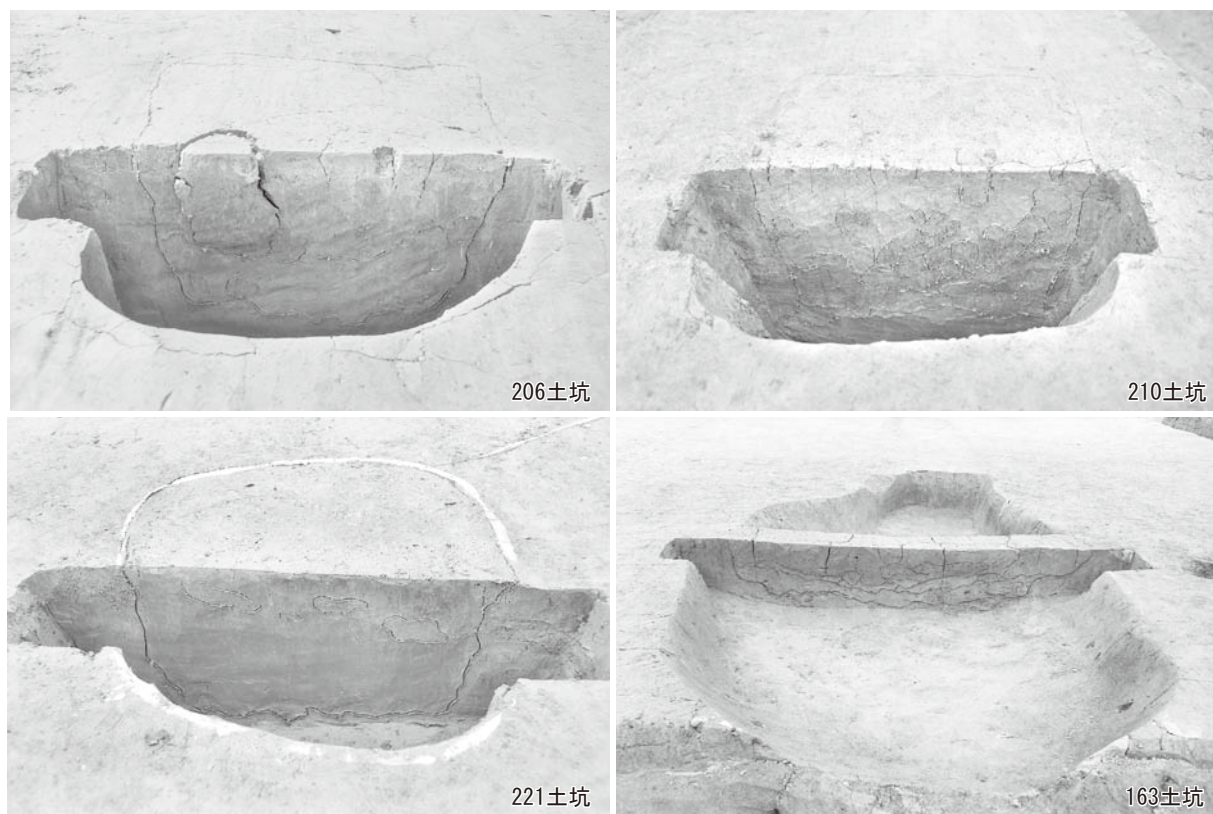


写真 18 古代・中世土坑

面や掘削している地層の中に作土に適切な土壌化層が存在するものは少ない。平面形が方形で深さも一定程度あり、土坑の形状も墨書土器を埋納した226土坑に類似しているものが多いことから、現段階では、これらの土坑が祭祀に関する可能性が高いと考えている。なお、今回検出した土坑について、土坑内埋土に砂の割合が低いものについて、土壌の洗浄を行い、植物の種子などの採取に努めたが、土坑の性格を示唆するような資料は得られなかった。採取した植物種子や花粉は、土坑の埋土である第9層や第10層に由来するもので、両段階の周辺環境を示すデータと考えるのが妥当である。

(5) 第8層・第9層出土遺物 (図39)

瓦器、陶器、瓦質土器、土師器、須恵器、鉄製品などが出土した。(78・79)は暗文を密に施す12世紀前葉の瓦器碗。(80)は7世紀中～後半の土師器碗で、側溝からの出土である。遺構に伴うものであるかどうかは判断できなかったが、2/3以上が残存しており、土器埋納遺構に伴う遺物と考えられる。

(86)は東播系の片口鉢。(87)は須恵器の甕片。(99)は提瓶の口縁部片で、一部肩部に吊り手の粘土が確認できる。(89～92)は須恵器の杯身・杯蓋。(93)は鎌の刃部。(95)は鋏・鋤の風呂部片である。(94)は火打金。平面二等辺三角形で、頂部に3mmの紐掛穴がある。

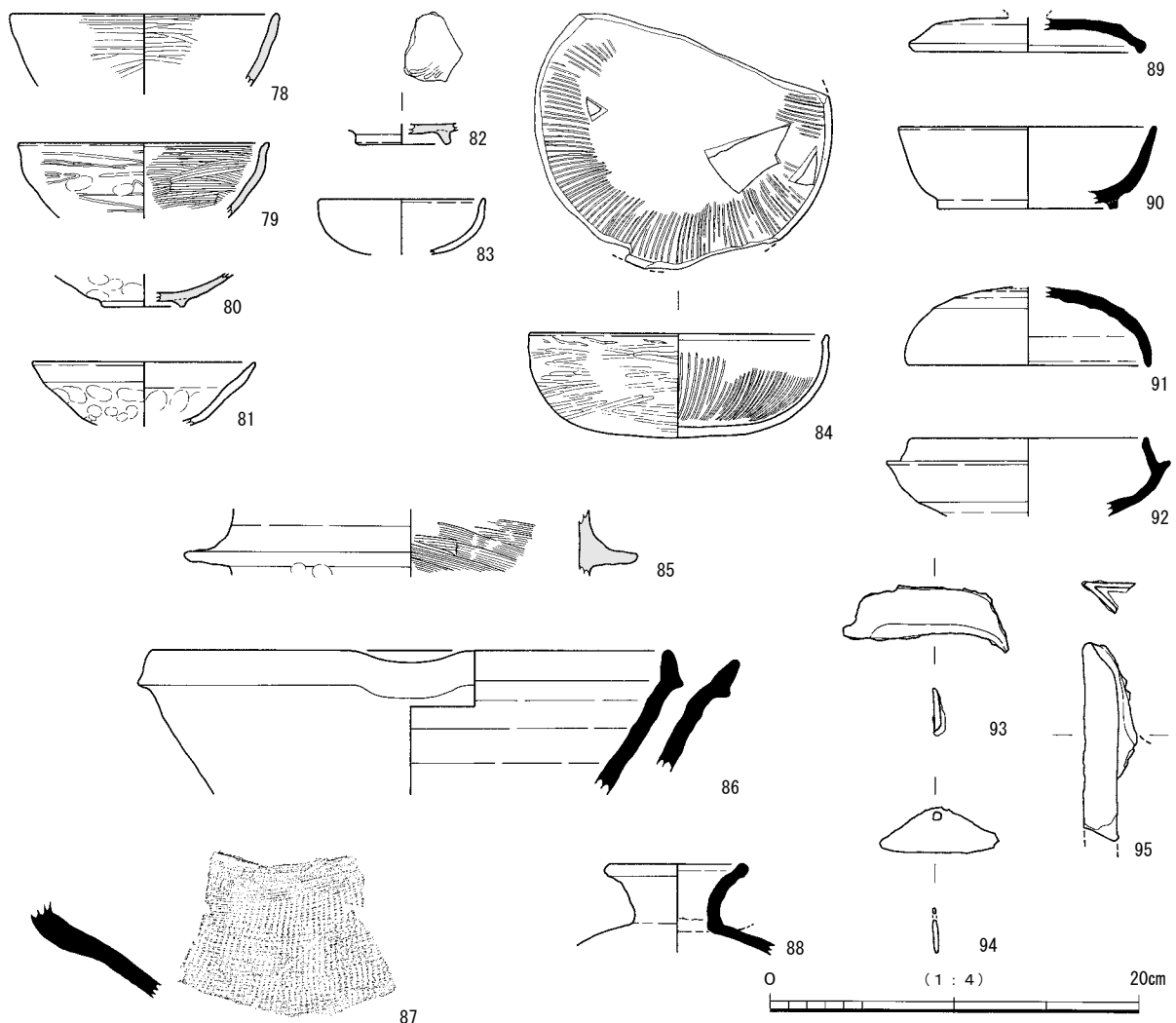


図39 第6層～第9層 出土遺物

第5章 古墳時代から縄文時代後期の遺構と遺物

第1節 古墳時代の遺構と遺物

(1) 第10面 (図40)

第10面は、第9層を除去して検出した遺構面である。調査区の南東部や西側は、第5層を除去した段階で第10層に達している箇所もあり、遺構面の残存状態は良くない。第10面の地形は起伏が少ないものの、調査区の西側と北側、調査区の南東側が若干高くなっている。これらの高まりについては、古代以降の耕作による攪拌を受け、スキ溝や偶蹄目の動物足跡などが認められる。高まり地形の成因については、西側と南東側の高まりは、その範囲が第11面段階の280流路と重なることから、流路とその周辺に堆積した氾濫堆積物に起因すると考えられる。また、調査区北側の高まりについては、第11b層段階の

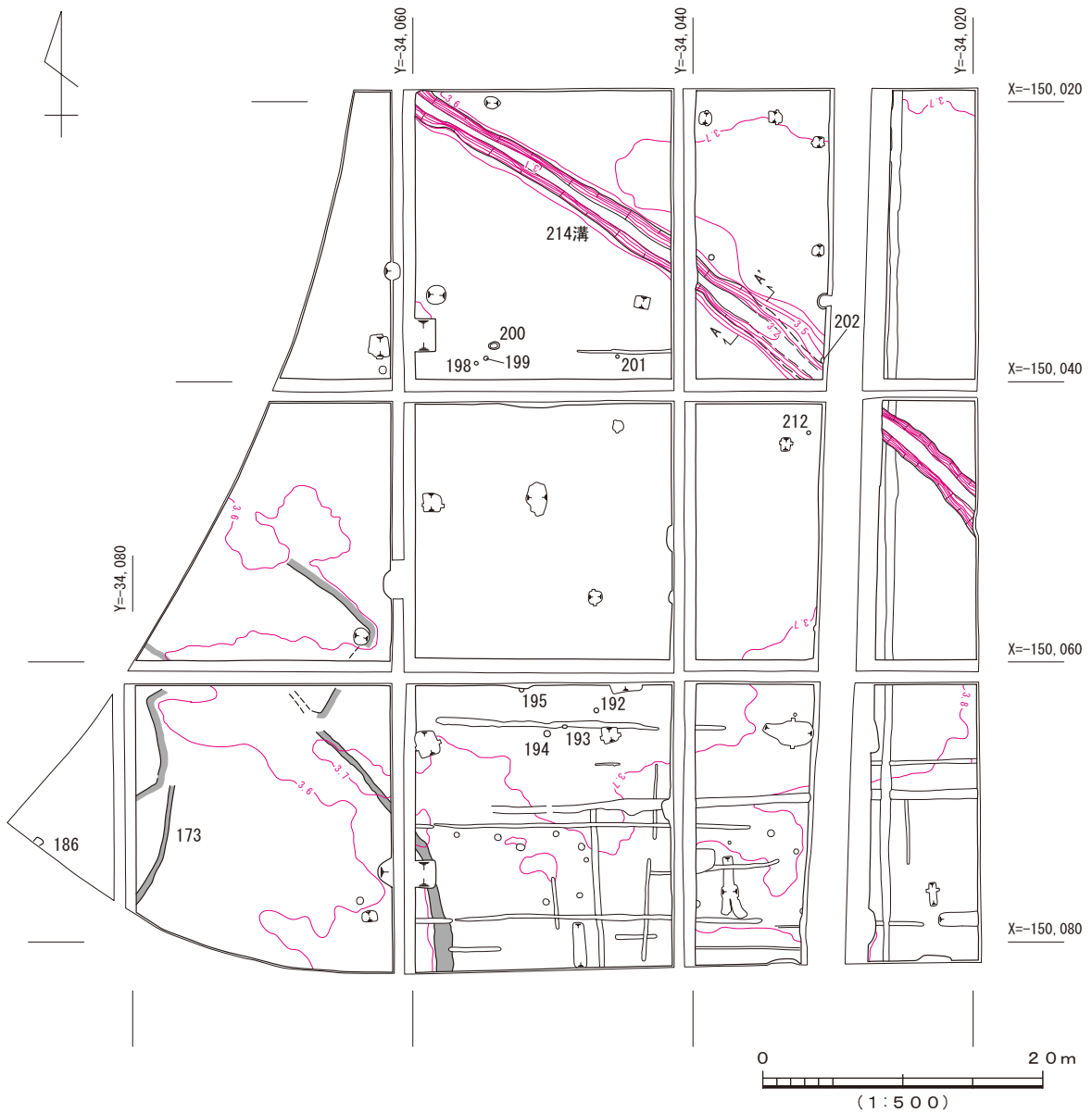


図40 第10面 平面図

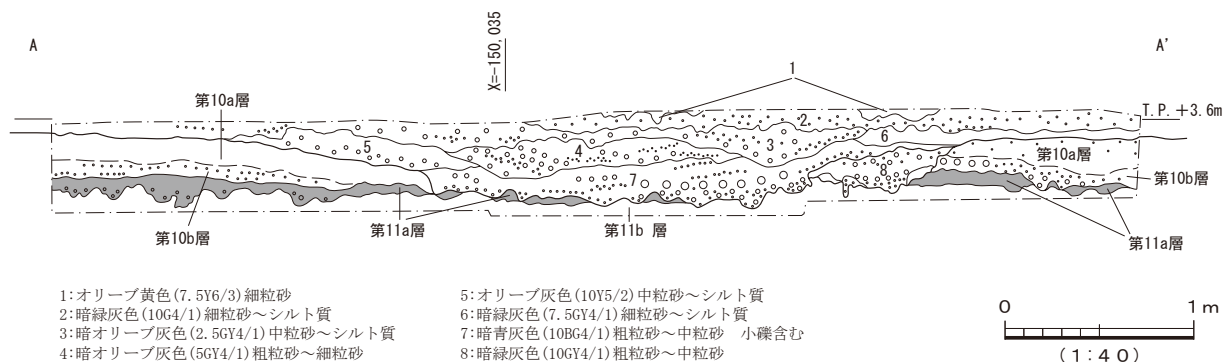


図 41 214 溝 断面図

流路の堆積物によるものである。なお、調査区北西側では、第9層を構成する灰色のシルトが暗緑灰色を基調とする第10層中にマール状に混入しており、地震動による変形を受けていることがわかる。

第10面では、調査区の北側において、南東から北西方向に流下する214溝を、調査区の南側でピット群、調査区の南西部で水田畦畔の痕跡を検出した。

214溝は、幅1.4m～2.5m、深さ0.3m～0.4mの溝である。溝の肩部近くに、崩落土とみられる暗緑灰層が堆積し、溝内埋土には細礫を含む粗粒砂～中粒砂が堆積する。溝埋土の下部、シルト質礫層からは布留甕の口縁部片 (97) (98) が出土し、溝埋土の中・上層からは須恵器杯蓋、杯身 (100～102) が出土した。214溝は遺構の位置から、池島I期地区の7溝に接続していると考えられる。『池島・福万寺遺跡3』（廣瀬2007）報告では、7溝は時期幅を有するものの、「第IV期・V期」とした布留Ⅲ～Ⅳ期を中心とする時期の遺構であると考えられている。溝の年代については、今回の出土遺物からも追認できる。

水田畦畔 調査区南西部において、コンターラインに並行して幅0.3m～1.2mで鉄分が比較的多く、帯状に土色が異なる遺構を検出した。凸状に検出できたわけではないので確証は得られないが、畦畔痕跡の可能性が高いと考えている。また、調査区の東側でも擬似畦畔状の土の変化が認められるが、上層からの攪拌の可能性が高いと判断し図示していない。

ピット群 第10面では、5d・6d、5g・6gでピットを検出した。これらは円形・楕円形の平面形で、深さは0.1m～0.2mほどで、埋土にブロック土が確認できるものもあるが、ピットの機能は不明である。この他に、214溝に隣接して土器埋納土坑の202土坑を検出した。214溝に後出する遺構であり、214溝が埋まった後に形成されたものである。南北の長さ0.7m、残存する東西の長さ0.3m、検出面からの深さ0.2mであり、現代水路の攪乱によって東半分が削られている。土坑の底部から0.15m上で土師器椀が出土した。土器は正位置で置かれており、1/4程度残存している。土坑の検出時に既に土器が確認できたこと、土器の上部が欠損していることから、本来の土坑掘削面は検出面より上であったと考えられ、古代から中世の段階の耕作によって上部が攪拌されていると判断できる。土器内の埋土を洗浄し種子の洗い出しをおこなったが、検出した植物の種子はわずかである。また、花粉分析を実施したところ、埋土が乾燥した状況にあったものの、イネが優占し、周辺に水田の分布が考えられるという結果が出ている（第6章第3節・第5節参照）。

(2) 第10層の出土遺物 (図43)

第10層の出土遺物は、土師器の高杯、杯、小型壺、甕、須恵器の杯身、杯蓋、手づくねの壺、弥生土器がある。遺構出土の遺物としては、214溝・202ピットからのものがある。214溝からは、5世紀後半から6世紀代の遺物が多く出土しているが、溝の下層からは布留式甕の口縁部片 (97) (98) が出土している。

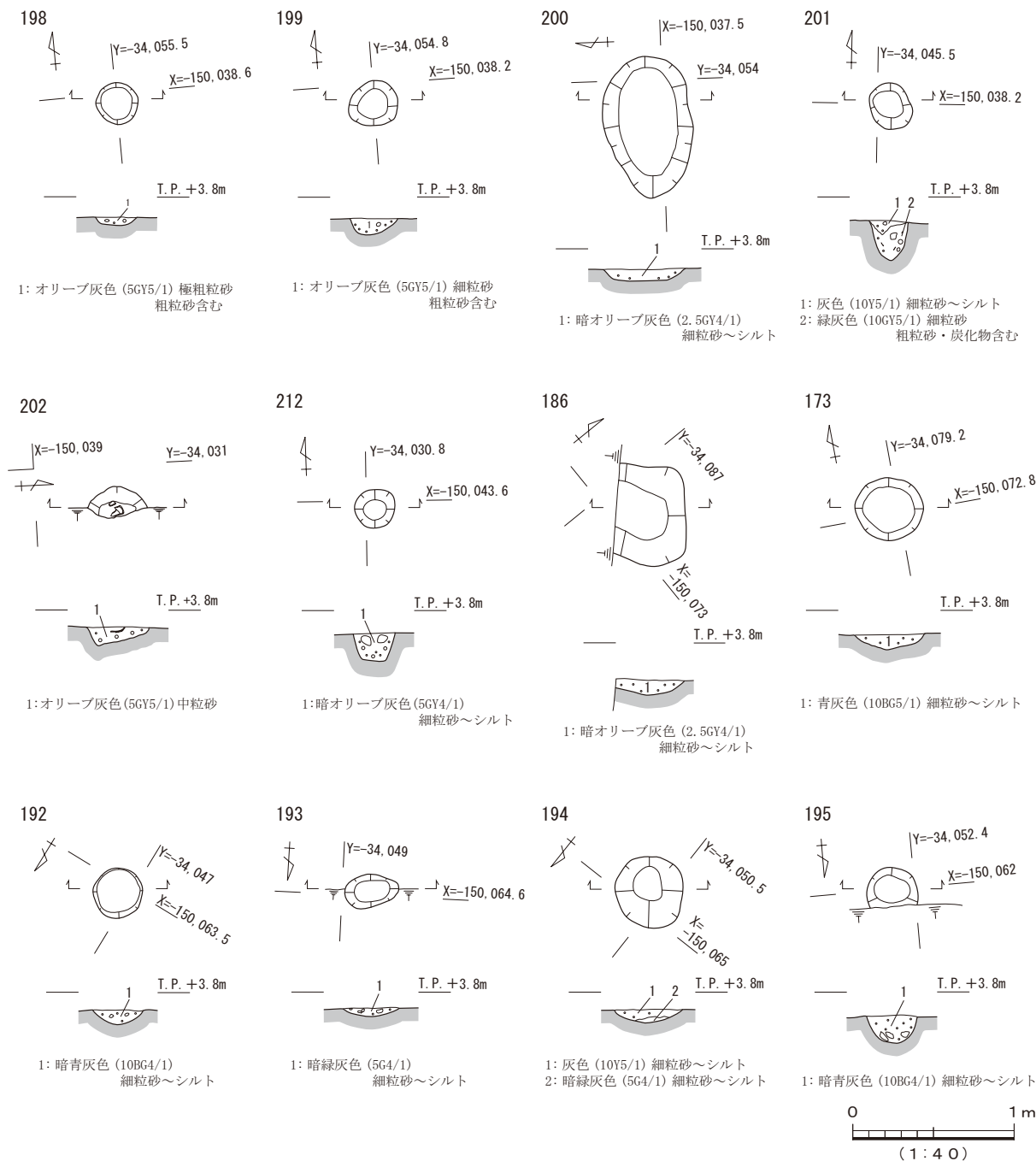


図42 第10面ピット 平面図・断面図

(97) は内面にケズリを施した甕の口縁部で、外面は摩滅しているが、口縁部にもハケを施す。(98) も同様に口縁部にハケ調整の痕跡が残る。214溝の中層、上層からは須恵器が出土している。(100)・(102)はTK47型式、(101)はTK23型式であり、これらは214溝の埋没年代を示す資料といえる。このほか、土師器の小型壺(99)、高杯(96)などが出土した。(96)は杯部内面に放射状の暗文を施すことから新しい資料であろうか。202ピットから出土した土師器杯(103)は状態が悪く、調整は不明瞭であるが、5世紀中頃の年代を示す。第10層・第10b層中からの出土遺物(104～116)は、須恵器から弥生V期の遺物まで出土している。(104)は土師器の杯で、口縁部がわずかに外反する。(105)は第10b面出土の5世紀前半の土師器高杯。(106)は弥生土器高杯の脚部で、河内V-0期か。同じく(110)は河内V期である。(107)は土師器の小型壺である。摩滅のため調整は不明であるが、

4世紀後半か。(108)は土師器甕の口縁部で6世紀中頃。(109)は口縁部が外反する弥生時代後期の小型鉢である。(111)は弥生時代後期の壺の底部片である。(112)は口縁部を摘み上げて成形する手づくねの壺である。3eの第10層中から出土した。(114)～(116)は須恵器で、TK43からTK209までの資料である。須恵器は、上層の破片と接合するものもあり、第10層が耕作などにより攪拌されていることを示している。

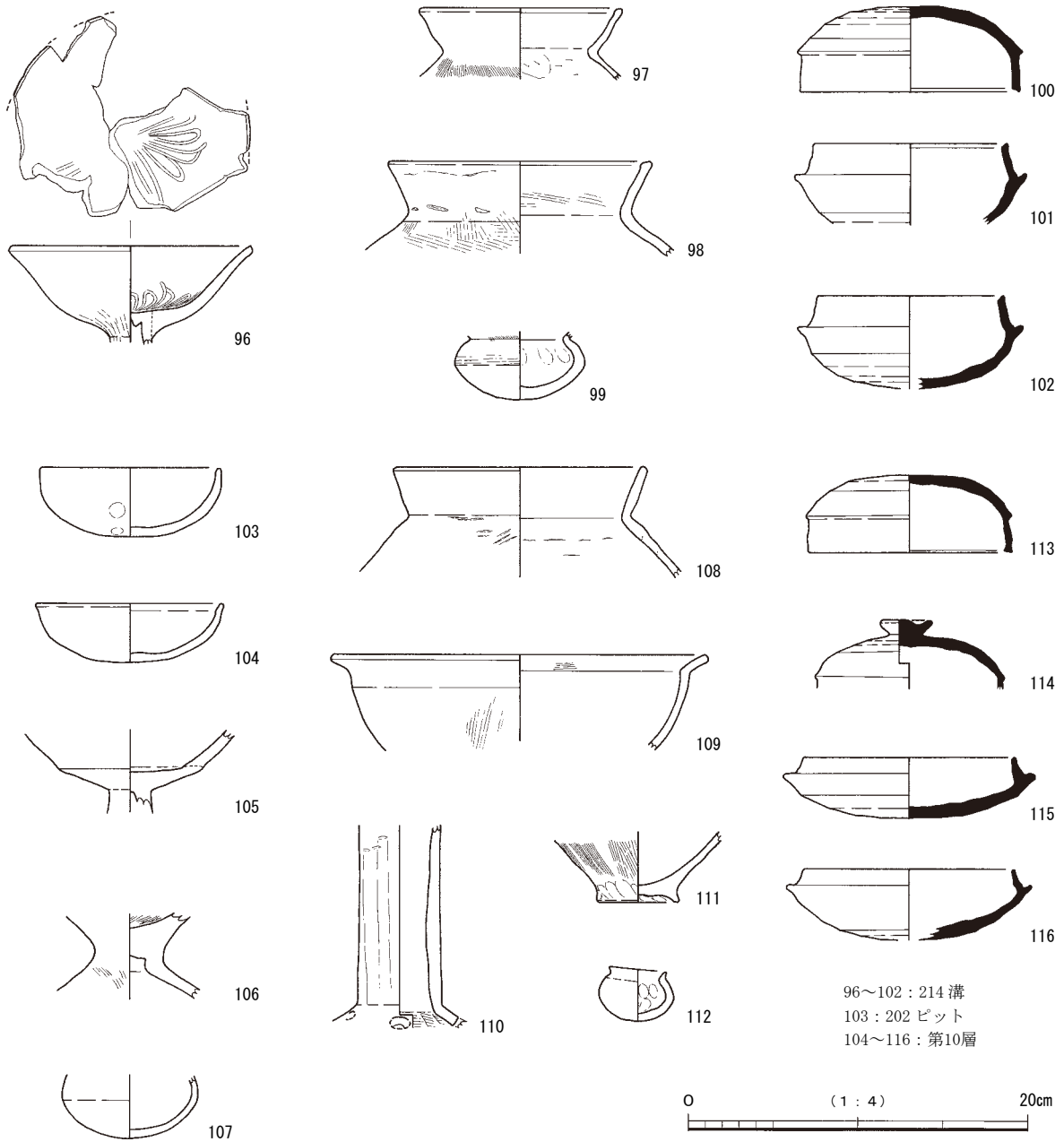


図43 第10層 出土遺物

第2節 弥生時代後期の遺構と遺物

(1) 第11面 (図44)

第11面は、第10b層を除去して検出した遺構面である。第11面は調査区の東部と北部が高くなっており、この部分では古代から中世の耕作によって第11b層まで攪拌されている。このため遺構面の残りは良くない。第11面の地形は、280流路が南から南西へ流れ、北および東には微高地が形成されている。第11b層の堆積状況を検討すると、東の微高地は第11b層中の流路(284流路)が形成要因となったもので、砂・シルトなどの氾濫堆積物により形成されている。調査区の南西側に広がる微高地にも、第11b層中の流路(285流路)が位置しており、流路の洪水堆積物によって微高地が形成されていることがわかる。調査区中央部の280流路の北東部分では、第11面の地形が平坦になっており、281盛土や278流路を検出した。この付近が耕作域であった可能性も考えられるが、流路脇に堤や畦畔が見られなかったことや、第11層の攪拌が顕著ではないことから、耕作地としては利用されていないものと判断した。な

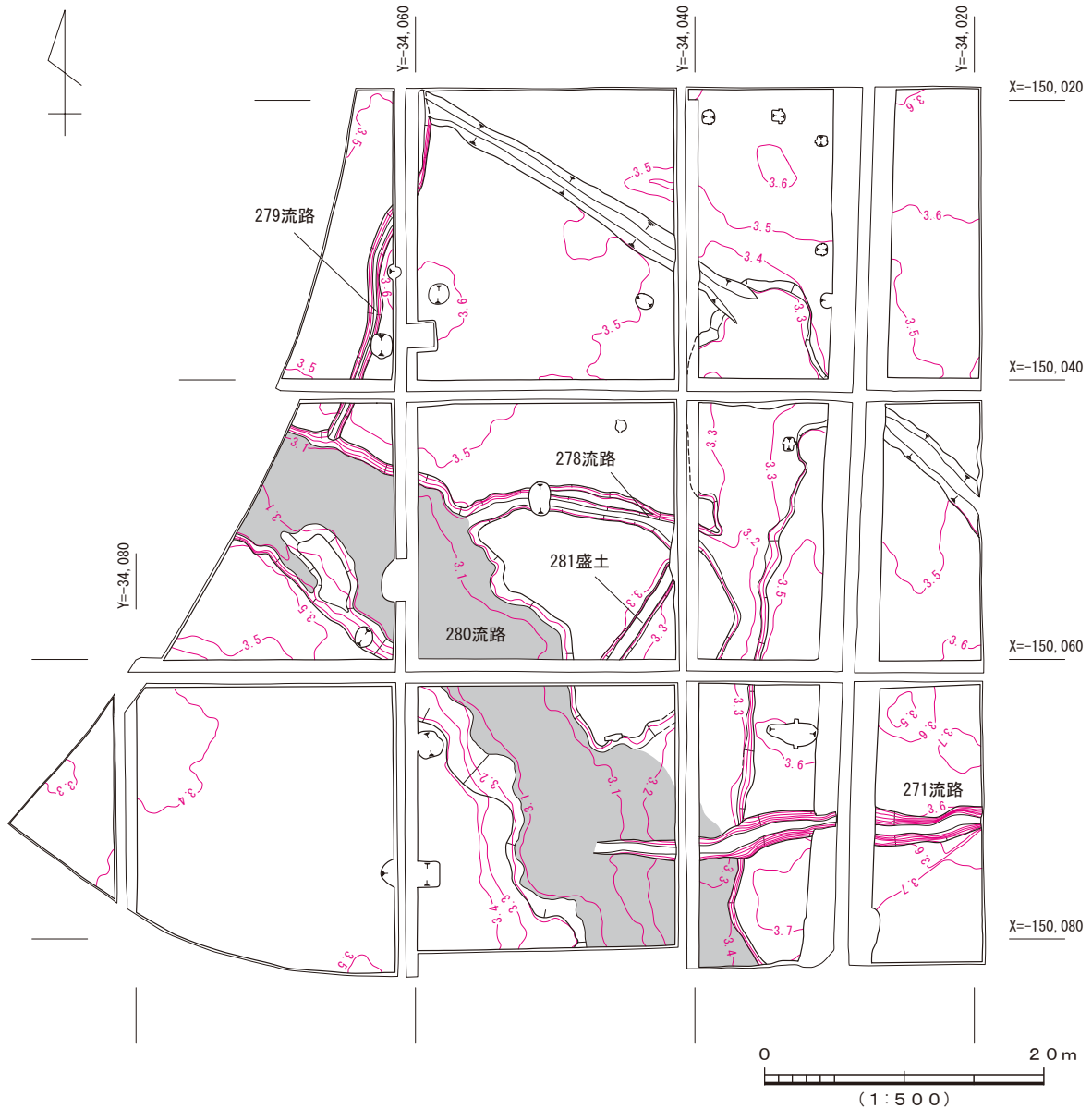


図44 第11面 平面図

お、5g、6g、5h、6hでは280流路に沿って、足跡が多く検出された。

280流路は、調査地の南端部中央から調査地の西端部中央に向かって流れる幅11m以上の流路である。流路内堆積土は、下層に粗粒砂を含むシルト質礫、上層は礫質シルトとなっている。流路内から、みかん割りした木材（125）が出土している。280流路は第11b層によって形成された調査区の東西にある自然堤防の間を流れているが、6d付近では西側の自然堤防を横断するように流れる。自然堤防を横断する箇所については、人為的に掘削された可能性も考えられる。断面図からは、第11面に相当する土壌化層は断面図（図45-①）の6層であり、その下層には0.5m以上の厚さで砂礫層が堆積する状況にあり、最下部は第14層にまで達している。これは第11面段階で、流路底が抉られたことによるものと判断できる。断面図を作成した箇所以外では、このように流路底が抉られた場所は確認できない。なお、この280流路は、池島Ⅰ期地区の溝21に接続すると考えられる。

278流路は調査区の中央部5e・6eに位置する。幅1.3m～2.1m、深さ0.2m～0.4m。南東から西へ280流路に注ぎ込むように接続する。調査区の中央部は、断面図でみると溝の肩部が比較的シャープになっており、人為的に掘られた可能性も考えられる。東側は微高地の縁辺で南側に折れているようであるが、上流側の状況は不明である。4e・4fでは細粒砂を主体とする砂質シルトが堆積しており、湿地状の環境であったと考えられる。

281盛土は4fに位置する。幅1.0m～1.3m、高さ0.2mで、長さ約11mにわたって畦のように盛り土された遺構として検出した。盛り土は278流路の掘削に伴うものか、耕作地の造成に伴うものと考えられるが、これに付随する畦畔などは検出しておらず、最終的に耕作地として利用された特徴は見出せない。

271流路は調査区の南東部5h・4h・3hに位置する。幅1.8m～2.1m、深さ0.5m～0.7mの規模を持ち、調査区の東端から西流し、280流路に流れ込む。流路は最下層に砂質礫が堆積し、その上にシルト質礫が堆積する。最下層の砂質礫は280流路の底を削りこんで堆積している。流路埋土の最下層から土器（177）が出土した。

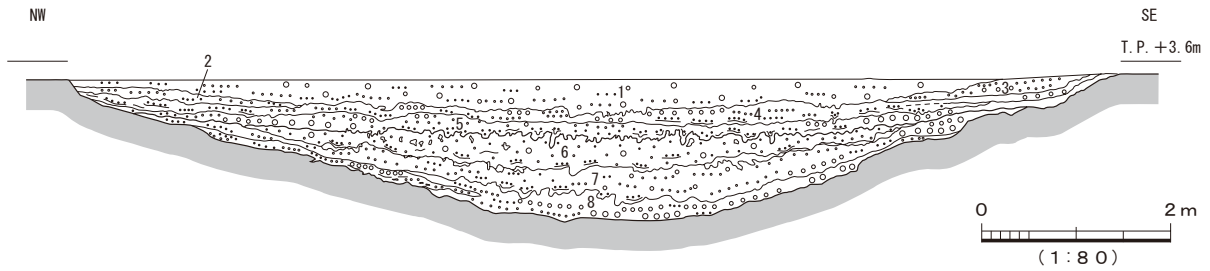
279流路は調査区の北西部を南流して280流路に接続する。幅0.9m、深さ0.2m～0.3mの規模を持つ。流路内堆積土は下層に礫質シルト、上層にシルト・砂質礫が確認できる。流路内から遺物は出土していない。調査区の北側は粘土・砂質礫の微高地となっており、279流路はこの微高地の雨裂であろうか。

第11面検出の流路のうち、278流路は断面形態から、人為的に掘削された可能性が高いが、水路が埋まる過程で底部や側面が侵食を受けているため、加工痕跡などは確認できなかった。271流路は、砂質礫層の微高地を280流路に向かって流れる流路であり、断面にも加工痕などは確認できなかった。これらの流路がどのような性格を有するのかについては、周辺の調査成果も踏まえて判断したい。また、本調査区では第11面の水田についても、検出できなかった。今後、周辺調査区の成果とあわせて検討する必要がある。

（2）第11b層について

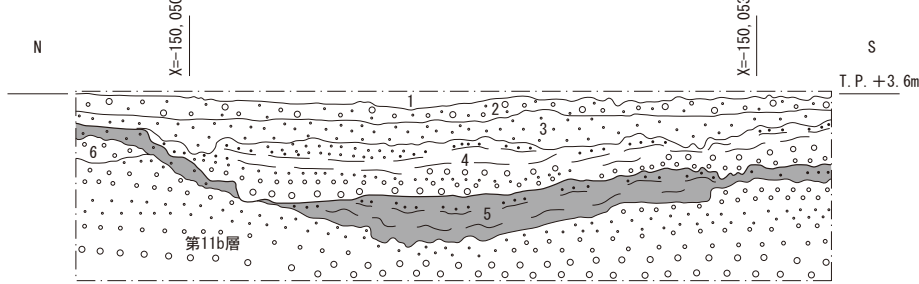
第11b層は、層厚が0.6m以上におよぶ氾濫堆積層で、調査区全域で認められる。粒径の小さい極細粒砂から細粒砂を主体とする下部の層と、粗粒砂や極粗粒砂、細礫を主体とする上部の層に大別することができる。池島地区では、下部のシルト層とそれより上部の砂礫層との間で、柳などの立木が検出されることが知られており、氾濫堆積物の供給が一時的に停止した段階が想定されている。池島Ⅱ期地区04-2調査区においても、第11b層の下部でシルト質～細粒砂を主体とするシルト質砂層が認められ、立

① 280流路



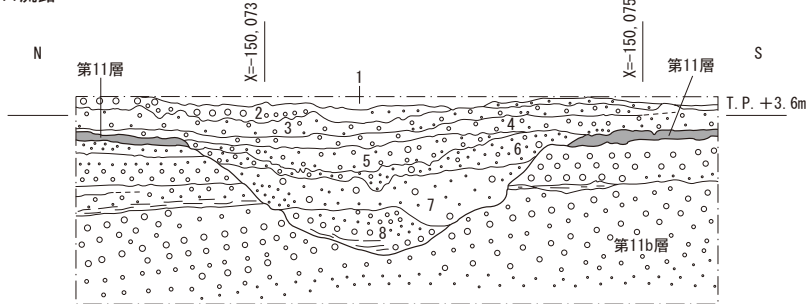
- 1: 灰オリーブ色(7.5Y5/1)・灰色(10Y5/2) 細粒砂～シルト質
- 2: 暗緑灰色(5G4/1) 細粒砂
- 3: 青灰色(10BG5/1) 細粒砂～シルト質
- 4: 暗青灰色(10BG4/1) 極細粒砂～シルト質
- 5: 暗青灰色(10BG4/1) 極細粒砂～シルト質 粗粒砂含む
- 6: オリーブ黒色(10Y3/1) 細粒砂～極細粒砂 灰色(10Y6/1)シルトブロック多く含む 第11面相当
- 7: 暗緑灰色(7.5GY4/1) 細粒砂～シルト質
- 8: 暗オリーブ灰色(5GY4/1) 粗粒砂～中粒砂

② 278流路



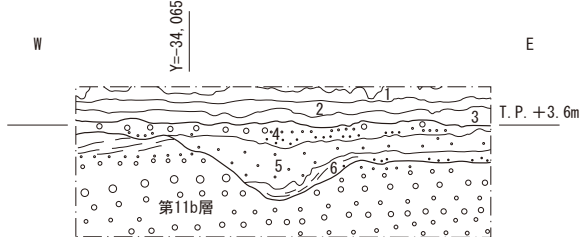
- 1: 緑灰色(10GY5/1) 中粒砂～シルト質
- 2: 暗オリーブ灰色(5GY4/1) 細粒砂～シルト質
- 3: 緑灰色(5G5/1) 粗粒砂～中粒砂
- 4: 暗オリーブ灰色(5GY4/1) 粗粒砂～細粒砂
- 5: 暗青灰色(5PB3/1) 細粒砂～シルト質 第11層
- 6: 緑灰色(10G5/1) 中粒砂～細粒砂

③ 271流路



- 1: 暗オリーブ色中粒砂～シルト質 第9層
- 2: 青灰色(5PB5/1) 中粒砂～シルト質 第10層
- 3: 青灰色(10BG5/1) 中粒砂～シルト質
- 4: 青灰色(10BG5/1) 細粒砂～シルト質
- 5: 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1) 中粒砂～シルト質
- 6: 暗緑灰色(5G4/1) 中粒砂～シルト質
- 7: 暗青灰色(5B4/1) 細粒砂～シルト質
- 8: 極粗粒砂・粗粒砂主体

④ 279流路



- 1: 暗緑灰色(5G3/1) 細粒砂～シルト質 第5層
- 2: 灰色(7.5Y4/1) 細粒砂～シルト質
- 3: 灰色(10Y4/1) 細粒砂～シルト質 第9層
- 4: 暗緑灰色(5H4/1) 中粒砂～シルト質 第10b層
- 5: オリーブ灰色(5G5/1) 細粒砂～シルト質 極粗粒砂含む
- 6: 緑灰色(10G5/1) 中粒砂～シルト質

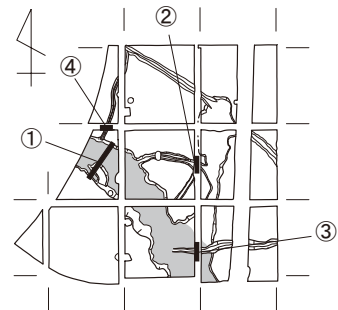


図45 第11面流路 断面図

木が検出されている。本調査区においても、調査区内における層上面のレベルはほぼ一定しており、この段階で立木を検出した。池島・福万寺遺跡の広い範囲で、同様の堆積状況が確認されている。なお、池島Ⅰ期地区の報告書において、第11b層中で広域に土壌化が進行したことを示す土壌化層の存在について注意喚起されている（井上2007a）。本調査区では土壌化層は確認していないが、洪水停止面がこれに関係するのか今後の検証が課題である。

（3）第11層出土遺物

（117）～（125）は第11面の遺構から出土したものである。（117）～（120）は小形甕である。外面をタタキで調整するものと、ハケで調整のものがある。（117）は271流路から出土した胴部から口縁部の資料、（118）は280流路から出土したほぼ完形の資料である。ともに、外面に右上がりのタタキを螺旋状に施し、内面は右下からなで上げるようにハケメを施す。外面に煤が付着している。（119）は内・外面ともにハケ調整を施した甕である。底部から胴部は縦方向、口縁部内面は横方向のハケを施す。外面には全面に煤が付着する。（120）は271溝から出土した甕の底部片で、右上がりのタタキを螺旋状に施している。（121）は278流路から出土した鉢。1/2程度残存する。外面はハケ調整の後、縦方向にミガキを施し、内面も縦方向にミガキを施す。（122）は甕の底部か。外面はケズリ調整を施す。全体的に煤が付着する。（123）は278流路から出土した壺の底部。内面はハケ調整、外面は縦方向に密にミガキを施す。（124）は280流路から出土した器台の端部。端部外面に竹管文をスタンプした円形浮文で飾る。破片のため装飾の単位などは不明である。（125）は280流路内から出土した板状木材である。みかん割りした材で、樹種はコナラ亜属である。280流路からは図示したものの他にも木材の細片が4点出土している。出土した箇所は、砂質礫の流路内堆積土中でも、わずかに砂質シルトが堆積していた箇所である。

（126）～（133）は第11層、第11b層出土遺物である。（126）は第11層中から出土した広口壺の口縁端部である。端部外面に凹線文をめぐらせ、竹管文をスタンプした円形浮文で飾る。円形浮文は四個一対になっていると見られる。口縁上部には、竹管文が等間隔にめぐる。（127）は第11b層中から出土した手焙り形土器。胴部の最大径のある箇所に刻み目を施した貼付突帯が一条めぐる。口縁部は緩やかに屈曲し、覆い部分は剥離痕跡が一部認められる。胴部以外は小片となっており、上部の破片は第5層から第10層中からも出土している。（128）は無頸壺である。280流路の第11b層を掘削中に出土した。口縁部は一部のみ残存するが、体部から底部は良く残る。胴部の上部に幅広の簾状文を施す。口縁部は折り返し気味に肥厚させ、外面に列点文を施す。胴部下半は横方向のミガキを三分割で施し、底面もミガキを施す。内面は板ナデによって調整する。（129）は高杯の脚部か。9hにおいてトレンチ掘削中に出土したものであるが、第11b層の砂質礫中から出土したものである。脚部端部は貼付によるもので、脚部は縦方向のミガキの後、竹管文を施し、内側にはシボリ痕が残る。内面は縦方向のナデを施す。（130）は弥生時代後期の甕。（131）は水差しである。第11b層中からの出土である。把手部は剥落しているが、はめ込み式の把手である。外面は縦方向・横方向のミガキを施す。（132）は壺の底部片。内面外面ともに摩滅している。（133）は甕の口縁部片である。外面は横方向にミガキを施す。

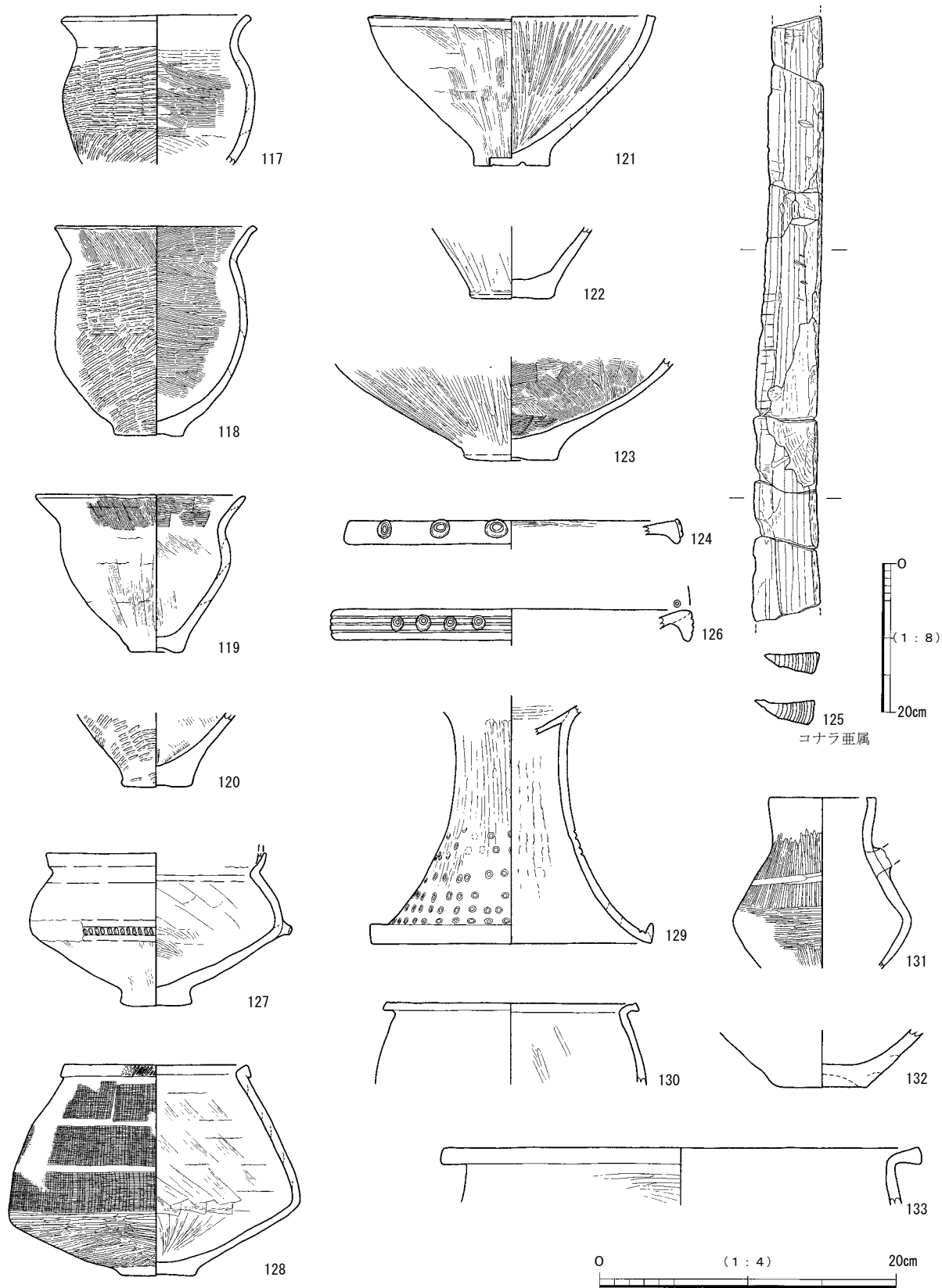


図46 第11層 出土遺物

第3節 弥生時代中期の遺構と遺物

(1) 第12面 (図47)

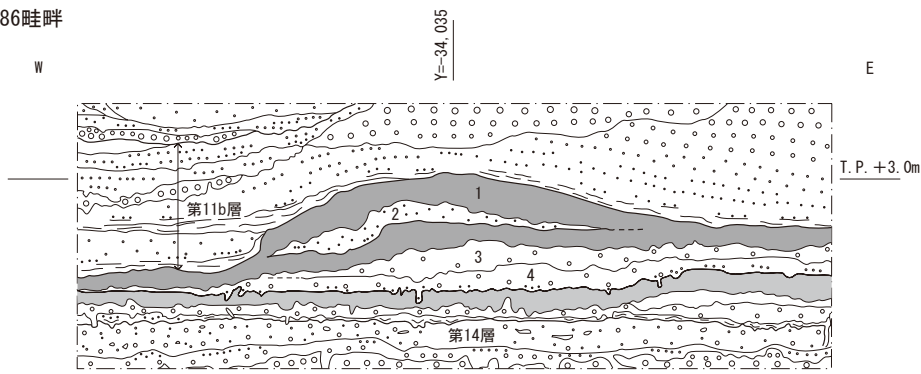
第12面は、氾濫堆積物である第11b層を除去して検出した遺構面である。シルト質砂の暗色系の第12層上面を遺構面としている。第12面では、基幹畦畔、支線畦畔、溝、杭列を検出した。これまでの調査成果から、池島側の第12面は遺構面の直上をシルトから細粒砂の氾濫堆積物が覆っているため、全体的に残りが良いことが知られている。本調査区では、シルト質の第11b層下部に覆われている箇所の遺構面は残りが良かったものの、第11b層段階の流路によって遺構面が流出している範囲も広い。特に、調査区の西側は285流路によって、東端部は284流路によって第14-2b層に達するまで深く削り込まれている。また、調査区の北側も広い範囲で第12面が流出している。第12面の遺構検出状況図を図47に示した。調査区北側では、第12b面で畦畔痕跡を確認しており、これについても図上で合成している。

以下第12面検出の遺構について、調査区の東側から詳述する。



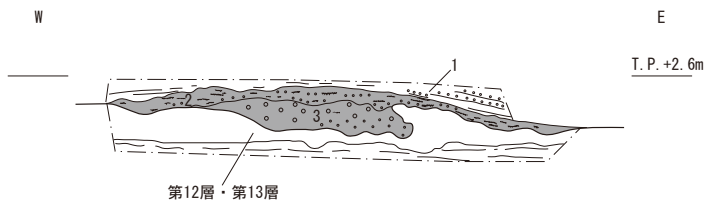
図47 第12面 平面図

①286畦畔



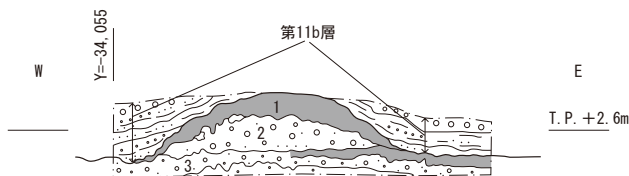
- 1: 暗青灰色(5B4/1) 細粒砂～シルト シルト粒含む 第12層
- 2: 暗青灰色(5B4/1) 極細粒砂 286畦畔盛り土
- 3: 緑灰色(5G5/1) 細粒砂 粗粒砂含む
- 4: 暗緑灰色(5G4/1) 極細粒砂 粗粒砂含む

②301畦畔

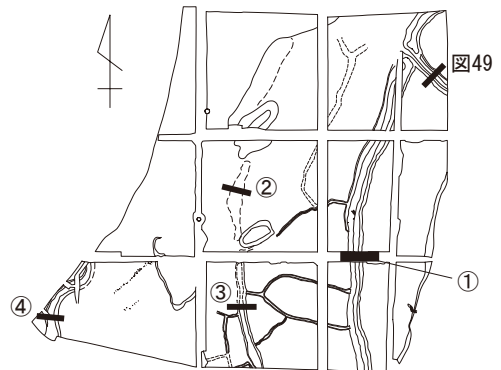


- 1: 青灰色(5B5/1) 細粒砂～シルト質 第11b層
- 2: 青灰色(5B6/1) 中粒砂～シルト質 炭化した植物多く含む 301畦畔盛り土 第12層
- 3: 青灰色(5B6/1) 中粒砂 炭化物多く含む 301畦畔基盤 第12層

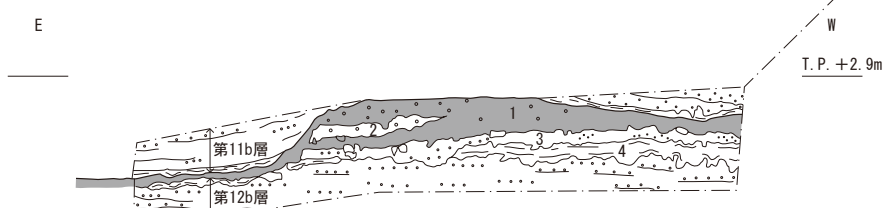
③290畦畔



- 1: 暗青灰色(5PB4/1) 中粒砂～シルト 極粗粒砂含む 第12層
- 2: 青灰色(5B5/1) 細砂～シルト 極粗粒砂・シルトブロック含む 290畦畔盛り土
- 3: 灰色(N4/0) 細砂～シルト 炭化物多く含む 第13b層



④297畦畔



- 1: 暗青灰色(5B4/1) 細粒砂～シルト 粗粒砂含む 第12層
- 2: 灰色(N4/0) 細粒砂～シルト シルト 炭化物含む 297畦畔盛り土
- 3: 灰色(N4/0) 細粒砂～シルト 細粒砂～シルト シルトブロック含む 土壌化の弱い第12層
- 4: 緑灰色(5G6/1) シルト 第12b層



図48 第12面畦畔 断面図

284流路は、第11b層段階の流路である。西肩部が調査区の南東部にかかっている。断面観察からは、284流路の西側で、地震により第14層から第12層が流路のある東側に横ズレを起こした痕跡が確認できる。また、流路の西肩付近では立木を検出している。立木は根の部分のみを検出したため、帰属面は明らかではないが、これまでの成果からは第11b層下部であろう。284流路の最下部は調査の掘削限界であるT.P.0.9m以下に達している。

298微高地は、調査区の東側で検出した南北にのびる高まりである。標高はT.P.2.7m～2.9mで、水田面との比高は0.4m程である。高まりの上面は平坦ではなく凹凸をもつ。平面・断面の観察から、微高地上では人が手を加えた痕跡は認められず、非耕作域であった可能性が高い。298微高地は289溝の北側にも高い地形として続いているが、289溝の北側ではT.P.2.75mの平坦面となっており、288畦畔と305水口を検出した。このことから298微高地北側の平坦面は水田域になっていたものと考えてよい。

286畦畔は、298微高地の西側の縁辺部、傾斜変換点につくられた幅1.4m～3.0m、東側の水田面との比高差0.5m程の南北の基幹畦畔である。286畦畔の東側の298微高地は非水田域であったと考えられることから、東の微高地から水田への雨水流入を防ぐ機能を持っていたと推測できる。

287畦畔は、289溝を挟んで、286畦畔と一連の基幹畦畔である。287畦畔の東側は289溝に沿って289畦畔がのびており、水田域を形成していたことがわかる。また、西側は第12層が流出していたため水田畦畔は検出できなかったが、平坦な地形であることから水田域と考えてよい。

289溝は、調査区の北東部で検出した溝である。底面は南東から北東方向へ傾斜し、幅は1.3m～1.5m、深さ0.25m～0.28mをはかる。最下部にシルトブロックを含む加工時形成層が確認でき、その直上に炭化物を挟在するシルトが堆積する。このシルトは土壌化しており、第12面の機能時堆積層と判断できる。溝に伴う施設は検出していないが、溝の北側で288畦畔と305水口を検出している。

調査区の中央部では南北の基幹畦畔と東西の支線畦畔、畦畔の水口に位置する380杭列、1001杭列を検出した。

290畦畔は、幅1.3m～2.0m、高さ0.17m～0.31mである。北に位置する301畦畔、1002微高地に位置する畦畔とともに南北方向の基幹畦畔を形成していたと考えられる。290畦畔両側の水田との比高は0.05mであり、6hでは290畦畔西側の水田の方が標高が高い。なお、北側の301畦畔との間には水口があったと考えられるが、第11b層堆積時の洪水砂によって付近が挟られている。

301畦畔は第11b層の洪水砂によって削られており、畦畔のそのもの高まりはわずかである。上部は洪水によって流出しているが、基底部分が幅1.0m～2.5mにわたって凸状に残存していることから畦畔が存



写真 19 286 畦畔 (南から)



写真 20 297 畦畔断面 (北から)

在したことがわかる。301畦畔は、深さ0.2m程の溝を掘削し、粗粒砂～細粒砂を基質として炭化物、植物遺体を多く含む土で溝状の窪みを充填した後、盛土して造成する。福万寺地区の調査においても、第11面の畦畔内に植物遺体を多く含む例（塚本ほか2008）が報告されており、畦畔の基底部構造を考える上で興味深い事例の一つである。

1003微高地は、301畦畔の北側、5c・6dに位置する。285流路をはじめとする第11b層段階の洪水によって遺構面が流出しているが、幅2.5m程の範囲で、東側の水田域とは0.1m～0.15mの比高差のある微高地を形成している。位置的に290畦畔、301畦畔に連続することから、

ここに南北方向の基幹畦畔が存在していたと考えられる。なお、301畦畔との間には1006窪地が形成されており、その存在が想定される水口を含めて、付近の遺構面は大きく抉られている。

380杭列は、6fに位置する。290畦畔と301畦畔間にあり、本来この場所に存在した水口に伴う可能性が高い。この水口部は第12層を含めて流出し、窪地（1005窪地）が形成されている。380杭列はこの窪地の西側で3本確認した。

1001杭列は301畦畔から1002畦畔間の南北8.0mの範囲に認められる杭列で、14本の杭を検出した。杭列の機能としては、301畦畔と1002微高地間の水口と関連するもの、あるいは301畦畔の補強を目的としたものと考えられる。

調査区中央部の水田は、286畦畔－287畦畔と、290畦畔－301畦畔－1003微高地の間に7枚以上の水田を確認した。南側の水田は残存状態が良かったが、北側は第12層が流出した範囲が広く、遺構面の残りは良くない。調査区の北側にも本来は支線畦畔が存在していたものと考えられる。水田間の水回しは、南から北へと傾斜する地形にしたがって配水されていた。なお、調査区の北側の水田には、380杭列付近の水口や、1006窪地付近の水口の他に、289溝をとおしての給水も考えられる。290畦畔の西側においても支線畦畔を検出し、5枚の水田を確認した。ここでも地形にしたがって南から北へと配水していたことがわかる。

調査区西側では、1002微高地、297畦畔、319杭列、322杭列を検出した。

1002微高地は上部の標高がT.P. 2.6mで、297畦畔東側との比高は0.3m以上ある。微高地の上は、検出レベルや位置関係から、池島I期地区のG地区水田域につながる可能性がある（図79）が、調査区の西端にあるため詳細は不明である。

297畦畔は、1002微高地の縁辺部につくられている。調査区の南西端に位置しており、幅2.0m、高さ0.4m程である。畦畔の東側は第11b層段階で第12層が削られており、わずかに畦畔縁辺部に第12層が

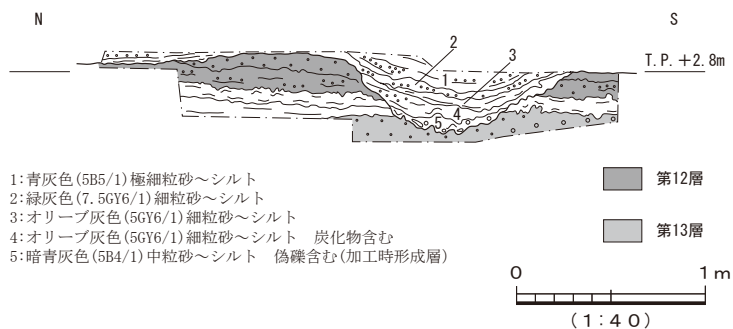


図49 289溝 断面図



写真21 289溝断面（西から）

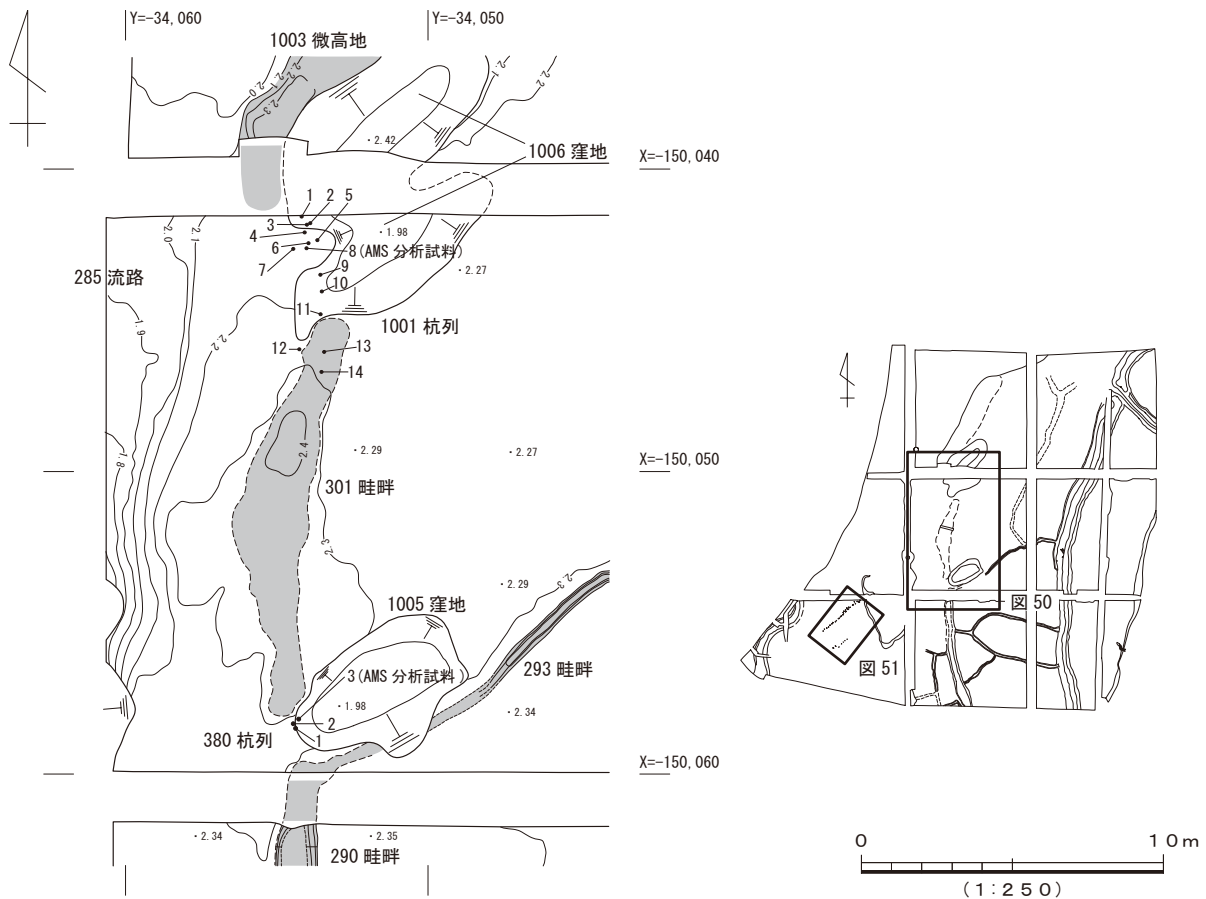


図 50 380 杭列・1001 杭列 平面図



写真 22 380 杭列付近 (南西から)



写真 23 285 流路底面 (南東から)

残存している程度である。このため、支線畦畔は検出できなかったが、残存する第12層のあり方から T.P. 2.3m で平坦面が続いていたと考えられること、第12層がシルト粒を多く含み攪拌されているなど作土層としての特徴がみえることから、畦畔の東側が水田域であった可能性は高い。

319杭列は、東西幅8.6mにわたって、31本が残存する。杭が抜けた跡に砂礫が充填した杭痕跡も検出している。また、285流路の底面で、下流方向に幅4cm、深さ3cmほどの溝状に地表面を引っかいたような痕跡を検出したが、これらの中には杭が押し流される過程で形成されたものも含まれると考えられる。杭の配置状況から、東西端から数本までを一行に打設し、中央部を2行に打設した構造であることがわかる。

322杭列は、319杭列の上流に位置し、東西幅3.6mの範囲に9本残存している。また、322杭列の周辺で

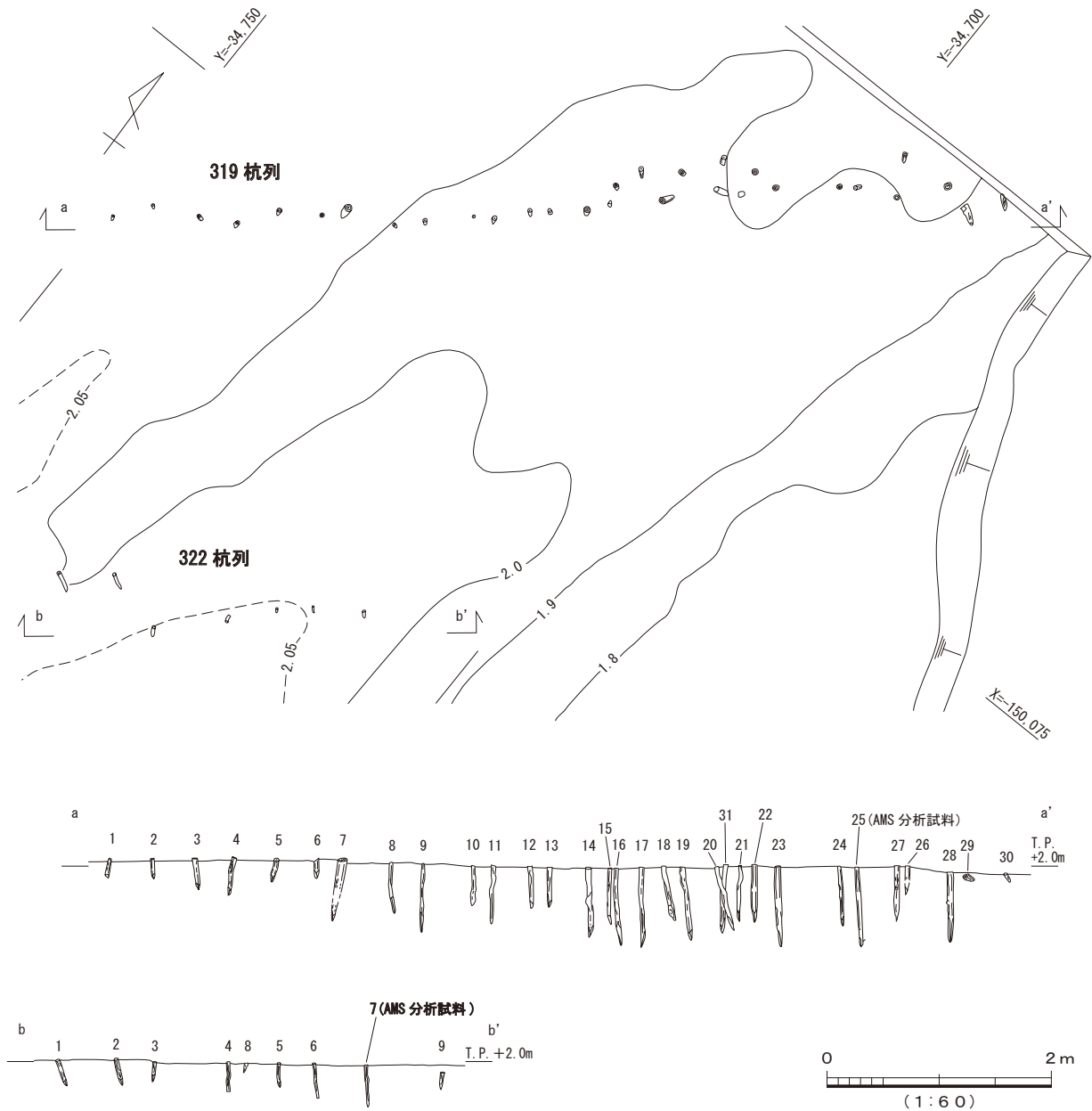


図 51 319 杭列・322 杭列 平面図・断面図

は杭の痕跡とみられる砂礫の入ったピットが7個確認できる。両杭列付近の第12面段階の地形を復元すると、杭列のある場所は微高地に挟まれた浅い谷状の地形であったと考えられる。西には297畦畔などの南北の基幹畦畔を介して、東は290畦畔などの南北基幹畦畔によって谷の両側を雛壇状に造成し、水田域を確保していたものと想定される。319杭列・322杭列はこの谷状の地形につくられた水路に設けられた堰であったと考えられる。

(2) 第12層出土遺物 (図52・53)

杭は枝・節をはらい、先端を1面から6面に削って尖らせたものである。杭の直径は2cmから7cmのものまで様々である。杭の長さは、上部が失われているため地中に残された分しかわからないが、最長のもので67cmである。樹種は、ヤナギ属・サカキ・ヤマグワ・ケヤキである(表2)。12面検出の各杭列において、樹皮の残る試料を用いてAMS分析を行っている(第6章第2節参照)。AMSによる成果からは、319

杭列・322杭列・1001杭列の試料が紀元前2～1世紀、杭列380が紀元前2世紀の年代範囲を示している。

第12層および、第12b層からの土器の出土は少量である。(134)は把手付鉢。把手部は欠損するが、鉢と把手の接合部を穿孔し、剥離痕も確認できる。河内IV-1～IV-2か。石庖丁(135)は、4gの286畦畔中から出土した。(136)はサヌカイトの石核である。

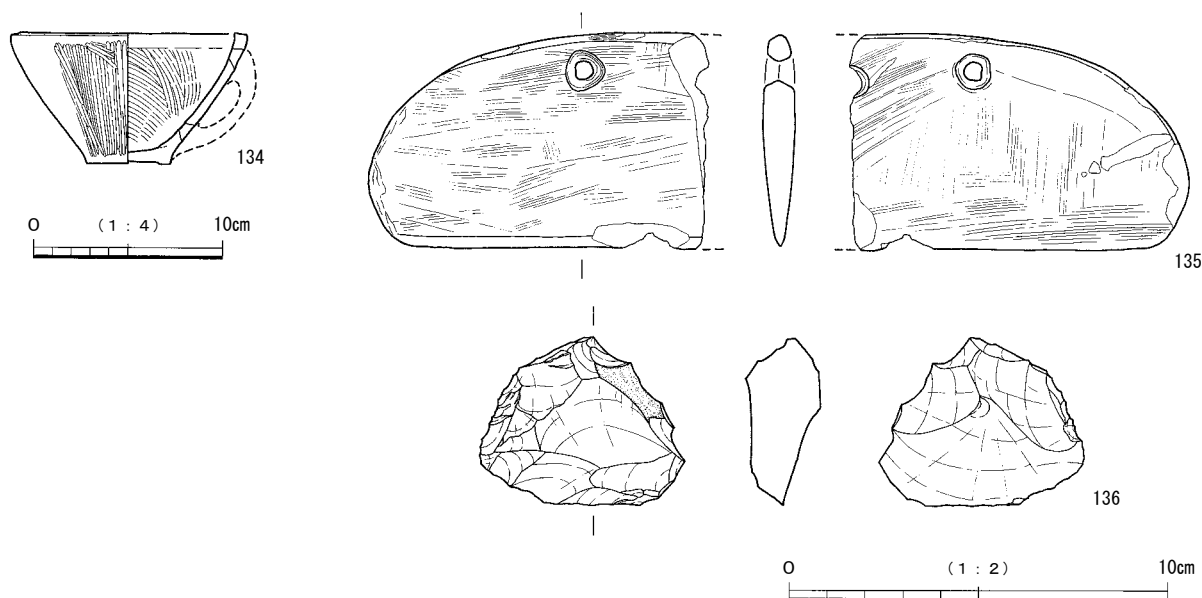


図52 第12層 出土遺物

遺構名	杭No.	樹種	先端加工	法量直径(cm)	備考
319杭列	1	ヤナギ属	1面	1.9	
319杭列	2	ヤナギ属	1面	2.0	
319杭列	3	ヤナギ属	4面	1.8	
319杭列	4	ヤナギ属	—	2.6	
319杭列	5	ヤナギ属	3面	3.3	
319杭列	6	ヤナギ属	—	3.2	
319杭列	7	ヤナギ属	6面	7.0	
319杭列	8	ヤナギ属	2面	2.3	
319杭列	9	ヤナギ属	3面	2.5	
319杭列	10	ヤナギ属	2面	2.6	
319杭列	11	ヤナギ属	3面	2.9	
319杭列	12	ヤナギ属	2面	3.0	図53
319杭列	13	ヤナギ属	—	3.5	
319杭列	14	ヤナギ属	5面	4.2	
319杭列	15	ヤナギ属	5面	4.0	図53
319杭列	16	ヤナギ属	3面	3.4	
319杭列	17	ヤナギ属	3面	3.2	図53
319杭列	18	サカキ	2面	4.2	
319杭列	19	ヤマグワ	3面	3.2	
319杭列	20	ヤナギ属	5面	3.3	
319杭列	21	ヤマグワ	—	3.6	
319杭列	22	ヤナギ属	3面	3.8	図53
319杭列	23	ヤナギ属	3面	4.8	図53
319杭列	24	ヤナギ属	6面	2.2	
319杭列	25	ヤナギ属	5面	4.0	2063BP±19 図53
319杭列	26	ヤナギ属	—	3.1	
319杭列	27	ヤナギ属	4面	2.8	図53
319杭列	28	ヤナギ属	3面	4.6	図53
319杭列	29	—	—	—	残存しない
319杭列	30	—	—	—	残存しない
319杭列	31	ヤナギ属	3面	4.2	

遺構名	杭No.	樹種	先端加工	法量直径(cm)	備考
322杭列	1	ヤナギ属	4面	3.0	図53
322杭列	2	ヤナギ属	4面	2.7	図53
322杭列	3	ヤナギ属	3面	2.1	
322杭列	4	サカキ	—	3.0	
322杭列	5	ヤナギ属	1面	1.6	
322杭列	6	ヤナギ属	—	2.5	
322杭列	7	ヤナギ属	—	4.0	2092BP±23
322杭列	8	ヤナギ属	3面	1.9	
322杭列	9	ヤナギ属	—	3.2	
380杭列	1	ヤマグワ	—	2.4	
380杭列	2	ヤマグワ	3面	2.6	
380杭列	3	ヤマグワ	—	3.8	2139BP±18
1001杭列	1	ヤブツバキ	—	1.2	
1001杭列	2	ヤナギ属	—	1.4	
1001杭列	3	ケヤキ	2+α面	3.4	
1001杭列	4	ヤナギ属	—	2.1	
1001杭列	5	ヤナギ属	—	2.1	
1001杭列	6	ヤナギ属	—	2.1	
1001杭列	7	サカキ	—	1.5	
1001杭列	8	ヤナギ属	—	2.8	2115BP±18
1001杭列	9	ヤマグワ	—	3.7	
1001杭列	10	ケヤキ	—	3.0	
1001杭列	11	ヤマグワ	3面	3.0	図53
1001杭列	12	ヤナギ属	—	1.7	
1001杭列	13	ケヤキ	—	1.4	
1001杭列	14	ヤマグワ	—	1.9	
1001杭列	15	ヤマグワ	1+α面	3.6	図53

表2 第12面検出杭列 樹種一覧表

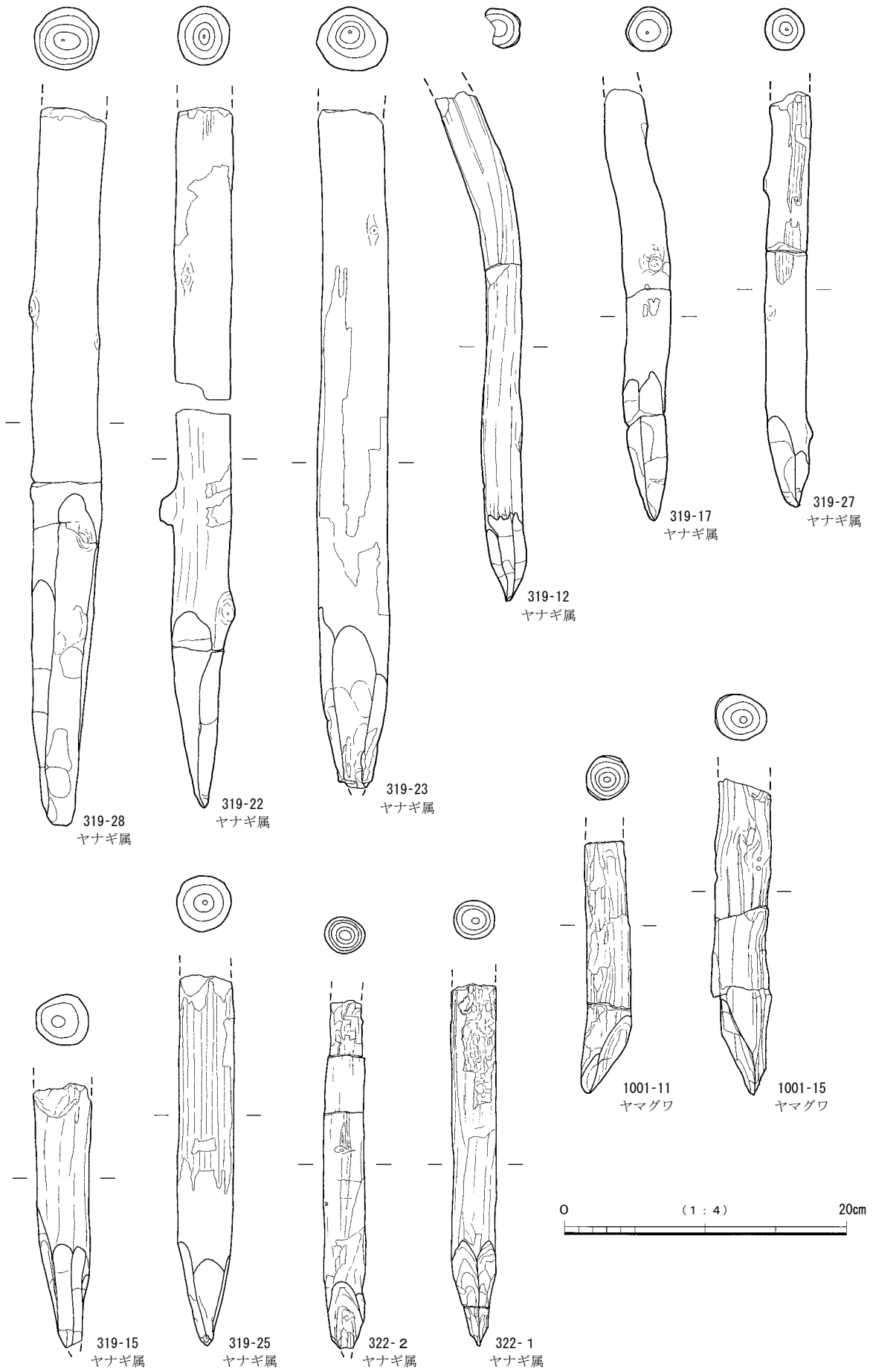


図53 319 杭列・322 杭列・1001 杭列 出土杭

第4節 弥生時代中期前半から前期末の遺構と遺物

(1) 第13面 (図54)

第13面は、第12層、第12b層を除去して検出した遺構面である。調査区の地形は第12面と同じく、東側の標高が高く、西に向かって標高を減じる。第12b層は、第12面段階で微高地であった調査区の南西端部と東側で厚く堆積しているが、第12面段階で水田域であった調査区中央部は、層厚が薄く第12層、第13層の分層も困難であった。第13面では水田畦畔と水田域とみられる平坦地、微高地と溝、ピットを検出した。第12面段階の298微高地の下からは340微高地を検出した。340微高地を覆う氾濫堆積物(第12b層)は、その広がりや粒径の大きな砂の分布から、調査区の東側から供給されていることがわかる。340微高地の東側に第13面段階に主要な流路や溝が存在していた可能性が考えられ、周辺地形を考える上で示唆的である。340微高地上からは溝や土坑、ピットを検出している。調査区の中央部では第13b面検出の際に、溝・ピットを検出した。340微高地上とよく似た状況を示している。第12面段階で1002微高地のあった調査区南西部では、層厚0.4mの第12b層の下から水田畦畔を検出した。

水田 第13面の水田域は、第12面の水田域と重複していること、および水田域での第12b層の層厚が薄いことから、第12面段階で攪拌されていると考えられ、畦畔の検出ができたのは8g、8hの調査区南西部に限られている。この場所は、第12面の1002微高地の下にあたり、第12b層によって水田面が良好に残存している。水田域はT.P. 2. 10m～T.P. 2. 15mのほぼ平坦な地形である。検出した畦畔は水田面との比高が0.05m程と低いため、支線畦畔と考えられる。東側は第11b層中の285流路によって削られているが、285流路の東側でも334畦畔が確認できることから、第13面段階では、340微高地までが水田域であったと考えられる。調査区中央部の334畦畔付近の水田はT.P. 2. 36mであり、調査区西側の水田域とは0.2m程の比高がある。おそらくこの間には大畦畔などがあり、雛段状に造成されていたと考えられる。なお、調査区中央部の第13層は、層中にシルト粒があり、作土層の特徴を見せている。また、4e・5e付近では第14-1面の調査時に第13層からの踏み込み痕跡が顕著に認められた。一部疑似畦畔のように見える箇所もあったが確定するには至らなかった。

340微高地の溝群 340微高地は、水田域との比高0.1m～0.3m。この微高地上に南南西から北北東方向へのびる347溝、349溝、351溝・352溝と、これに直交する東西方向の343溝、その他に345土坑、346溝、348溝を検出した。南から北方向へ流下する溝群を343溝が切っており、343溝が後出の遺構であることがわかるが、南北の溝群が埋没した後に掘られたものではなく、溝の掘削土で先行する溝を埋めた



写真 24 第13面畦畔検出状況(東から)

状況も確認できなかった。溝埋土からは、溝群が同時期に埋没したものであることがわかる。

347溝は幅0.3m、深さ0.05mで、南側は第11b層中の284流路の影響や地震による変形によって、溝の輪郭が不明瞭になっている。349溝は、南側は幅0.4m、深さ0.06mであるが、351溝と合流し幅0.8m、深さ0.1mで調査区の北側に続いている。351溝は幅0.3m、深さ0.06mで南側は現代水路によって不明瞭であるが、位置関係から同規模の352溝と一連のものであると

考えられる。これらの溝に直交する**343溝**は、調査区東側の340微高地を東西方向にはしる溝である。幅1.3m～2.0m、深さ0.35mで、最下層に黄褐色のシルト・砂質礫が堆積し、上層に向かって細粒化する。この343溝は、微高地を横断した後、北西の平坦地で輪郭が不明瞭になる。平坦地は水田域にあたると考えられるが、第12面の水田による耕作や、第11b層段階の285流路による第13層、第12層の流出によって343溝の平面形や水田との関係は不明である。溝内からは弥生時代前期末から弥生時代中期初頭の土器が出土している。微高地上の溝群について、南北方向の狭く浅い溝は、下流側の調査区北側で合流して調査区北東側に続いている。微高地上の排水を意図していると考えられるが、詳細は不明である。東西の343溝は、南北溝に比して規模も大きく、微高地を横断して調査区北側の水田域に配水するための溝と考えられる。遺構の残存状況が悪いのでそれ以上のことは不明である。

この他、微高地上では浅い楕円形の土坑（345土坑）や、346溝、348溝を検出したが、遺構の性格は明らかではない。また、土壌化層の第13a層を除去し、第13b面で検出した遺構には、366ピット～371



図54 第13面 平面図

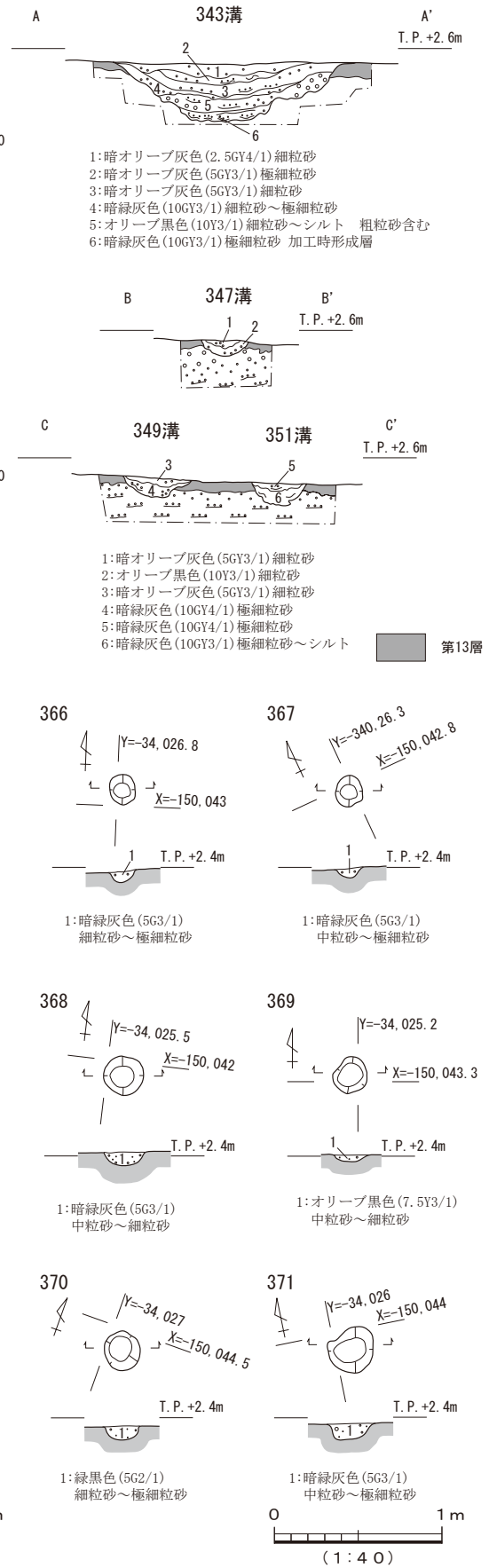
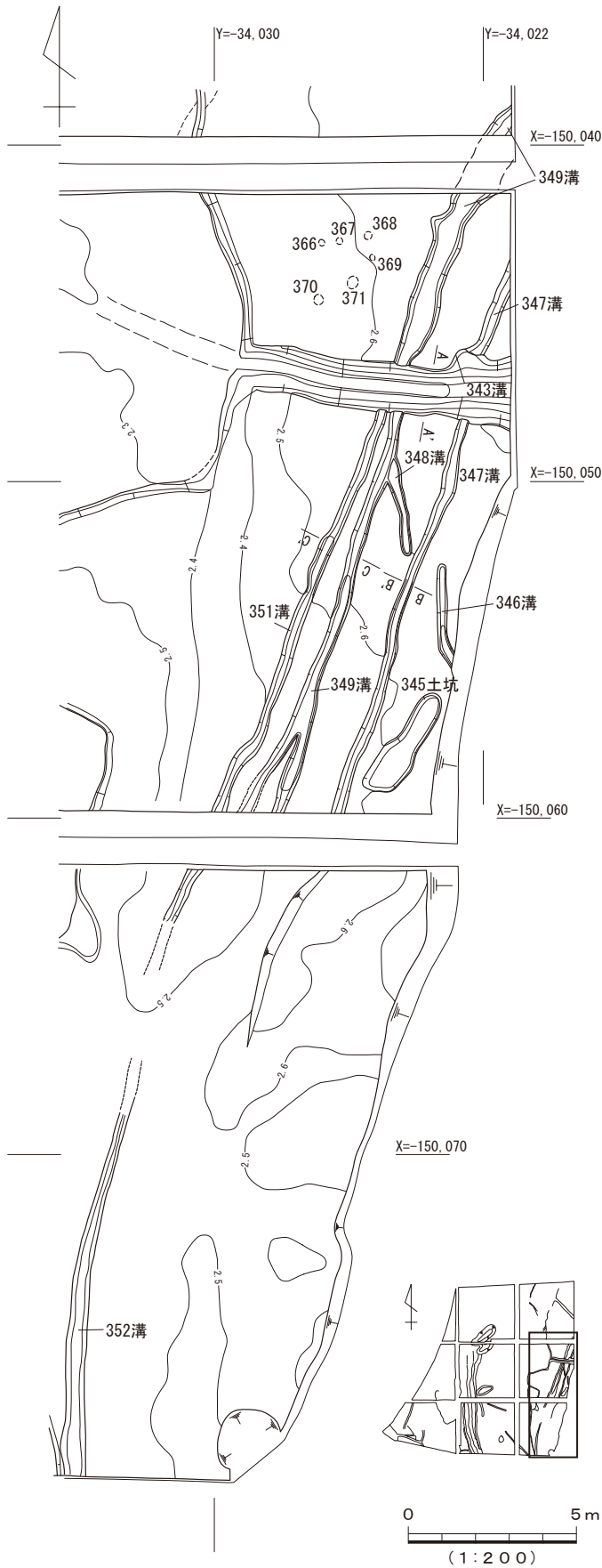


図 55 340 微高地の溝 平面図・断面図

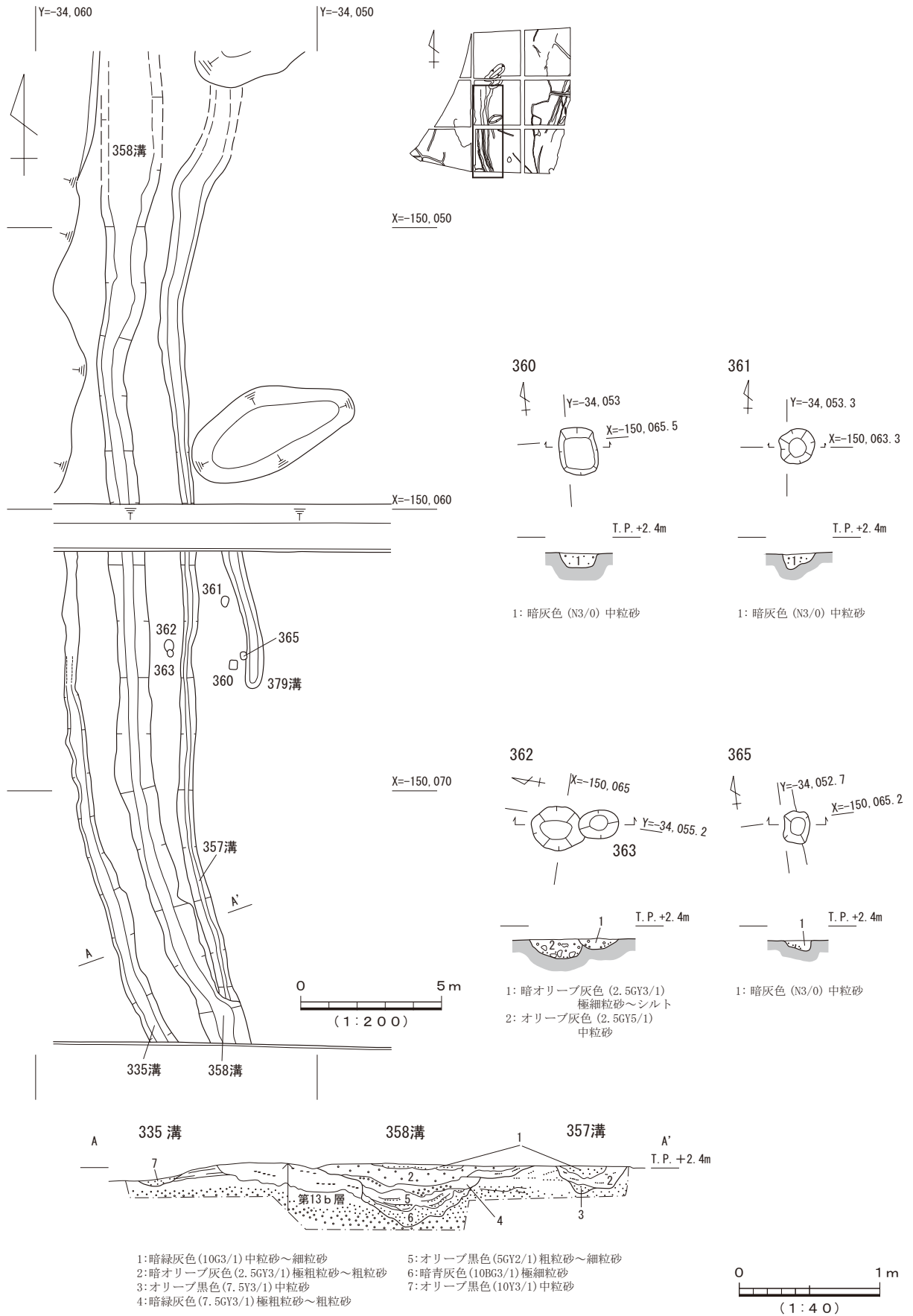


図56 第13b面溝 平面図・断面図

ピットがある。これらの遺構は人為的に掘削された可能性が考えられるが、詳細は不明である。

(2) 第13b面

土壌化層である第13層を除去して検出した遺構を第13b面検出遺構とする。

第13層上面では検出できなかった畦畔痕跡の検出を期待したが、顕著なものは検出できなかった。第13b層は調査区全面に一定程度の厚みをもって堆積しているが、調査区の中央部では層厚が薄く、第13層を除去した段階で第14-1面が現れる箇所もあった。先述のように5e・6eにおいては、第14-1面に第13層が充填された踏み込みが顕著であったが、水田区画を復元できるほどの状況ではない。また、調査区中央部では、南北方向溝（379溝・357溝・358溝・355溝）とピット群を検出した。これらの遺構は、水田域と推定している箇所とは0.1mほどの比高をもつ微高地に位置する。ここでは第12層の直下に第13b層が位置しているが、遺構内埋土から判断して、これらの溝群は、第13面段階の遺構と考えられる。

379溝は幅0.4m～0.5m、深さ0.05mの浅い遺構で、北側の状況は不明である。**357溝**は幅0.4m～1.3m、深さ0.20mで、358溝に先行して掘削された溝であるが、357溝内の上層の埋土と358溝の埋土が同じ構造をしており、最終的な埋没時期は同時であったと考えられる。**358溝**は幅1.1m～2.0m、深さ0.45mである。北側は第11b層の280流路によって削られており、不明瞭になっている。溝埋土には、極細粒砂の砂質シルトのほかに、粗粒砂を主体とするシルト質砂が堆積しており、流水の状況にあったことをうかがわせる。南北に並行する溝の中では、最も規模の大きい溝である。**355溝**は幅0.4m～0.9m、深さ0.05m、北側は不明瞭になっている。これらの溝群は、北側の水田域に配水するためのものと考えるのが妥当であろう。他に**360ピット～363ピット**、**365ピット**を検出した。方形のピット（360ピット）や埋土にブロックを含むもの（362ピット）があるが、遺構の性格は不明である。

第13b層はシルト・砂質礫層の洪水堆積物である。第14面で検出した390流路は調査区の東側に第13b層を供給した流路であり、この周囲に砂質礫が厚く堆積している。390流路については次節で詳述するが、第13b層中からは弥生時代前期から中期初頭の時期の土器が出土した。弥生時代前期の壺（145）は器表面の摩滅が激しいが、同じく壺（146）はシルト質砂層から出土し、ローリングを受けておらず、器表面の調整痕も良好に残存している。

(3) 第13層・第13b層出土遺物（図57）

第13層中からは少量の土器片が出土したものの、図示しうるものはなかった。（137）は第13b面の365ピットから出土した甕の底部から体部にかけての資料。（138）～（139）は弥生時代前期の壺底部片。（140）は木葉文を線刻した弥生時代前期の壺片である。（141）は390流路から出土した無形壺の口縁部片。外面に櫛描直線文と櫛描弧文を施す。（142）は第13b層中から出土した。サヌカイト製の無基式石鏃。（143）は甕の底部。（144）は壺の底部から体部にかけての資料。器表面の剥離が著しいが、外面は密にミガキを施したことがわかる。（145）～（148）はいずれも390流路出土遺物である。（145）は広口壺。口縁部が片口になっている。頸部に一条の沈線、肩部に二条の沈線が廻る。流路中からの出土であり、外面の摩滅が著しい。内面はミガキを施している。河内Ⅰ-2～3様式。（146）は広口壺。最大径が胴部の低い位置にあり、頸部は短く外反する。胴部が大きく広がり、頸部の屈曲が明瞭になっている。胴部は二条の削出突帯、頸部は上方に三条の削出突帯と段を設けている。ミガキは粗雑でまとまりに欠けている。口縁部付近に一箇所だけ穿孔をしている。底面は一方のミガキを施している。河内Ⅰ-2～3様式。（147）は甕。体部はやや丸みを帯び、口縁部は大きく外反する。口縁端部に弱く刻み目を施し、頸部に三条の沈線をめぐらす。外面はヘラ状の工具で強くナデ上げて仕上げ、内面もナデによる調整である。（148）は緑色粘板岩製。

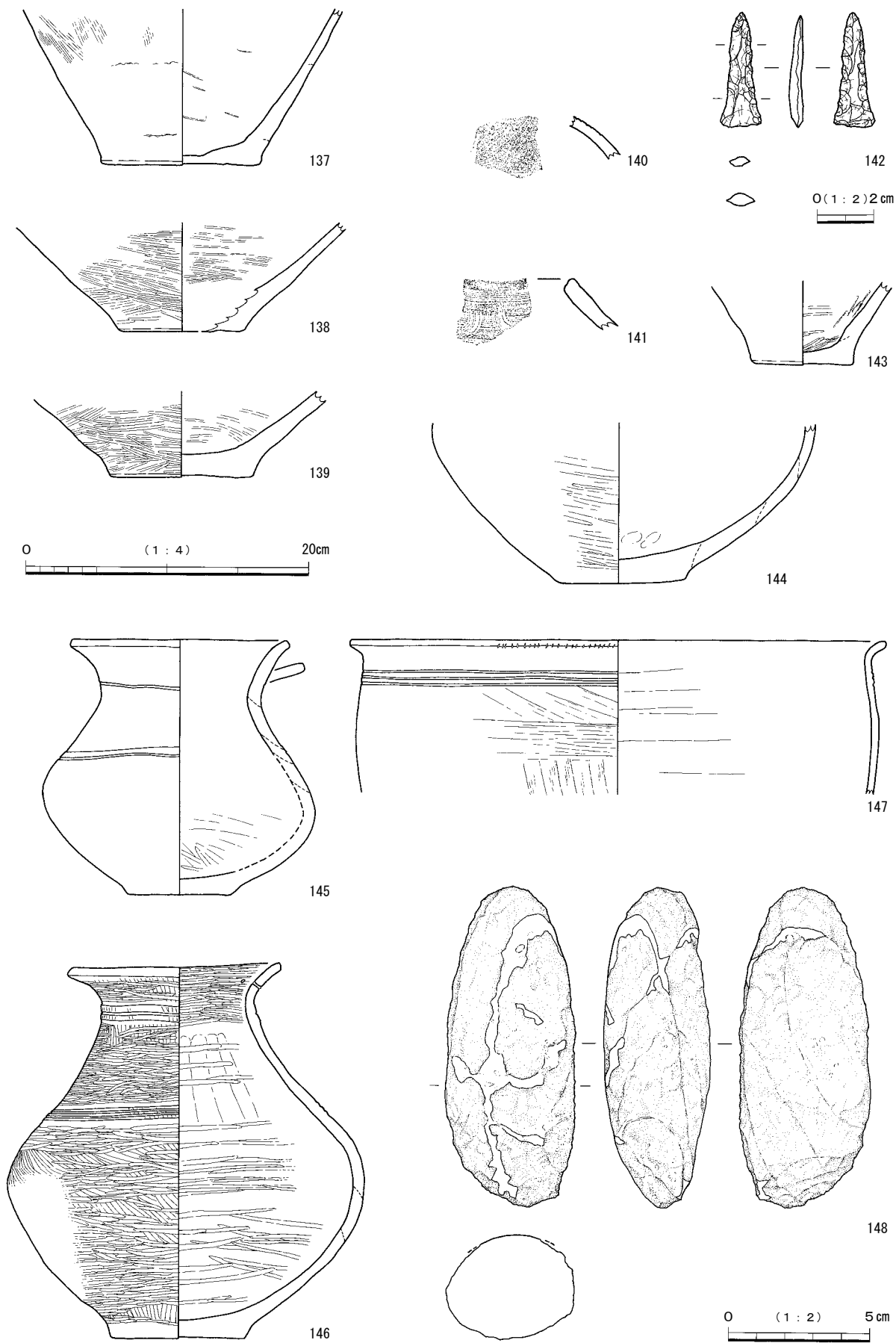


图57 第13層 出土遺物

第5節 弥生時代前期から縄文時代晩期の遺構と遺物

(1) 第14-1面

第13b層を除去して検出した遺構面である。第14-1層は、シルト質砂の水成層で、上部が土壌化している。第14-1面はその土壌化した上面を遺構面としている。

本調査区では、標高の低い箇所第14-1層が認められる。調査区の南西部で0.05m、北東部においては0.05m～0.15mの厚さで第14-1層が分布している。微高地上の第14-1層としたものは、細礫～粗粒砂を多く含む第14-2層の上に堆積する砂質シルトの薄層である。本調査区では、第14-1面においては、人為的な遺構は検出できなかった。

この段階の景観について、池島I期地区の成果からは、付近一帯が帯水状態になり沼沢地的な景観が広がっていたと想定されている。本調査区では標高の低い箇所は池島I期地区と同様の条件下にあると考えられたが、微高地上については層の同定や環境条件が異なる可能性があり、自然科学的な分析を実施することとした。調査区南西部の水田域直上の第14-1層と、調査区東側の微高地上の第14-1層のサンプルを採取し、珪藻分析、種実同定を実施した（詳細は第6章第6節参照）。分析の結果、低地の第14-1層中からは、好止水性の珪藻類と、流水性の珪藻が確認された。水が滞留しつつ流れも存在した環境が復原できる。また、微高地上の第14-1層からは、好止水性の珪藻が検出された。このことから、第14-1層の堆積段階では、本調査区においても全域が沼沢地的な環境にあったものと考えられる。プラントオパール分析では、第14-2面の水田域直上の第14-1層中に水田域の第14-2層に匹敵する密度のプラントオパールが存在するという結果を得た。現地調査では第14-1層に水田作土の特徴は確認できていないことから、第14-1層の層厚が薄く、堆積過程で第14-2面の作土を巻き上げた可能性が想定できる。

(2) 第14-2面 (図58)

第14-1層を除去した遺構面である。第14-2面は、調査区の南東部が高く、南西部に向かって低くなる。全体的に遺構面の残存状況は良好であり、特に地形的に低い部分は第14-1層の分布が顕著で、遺存状況も良好であった。水田域を検出した調査区南西部では、土壌化した上部に比して色調が薄い青灰色の自然堆積層（第14-1b層）が水田域を覆うように分布している。第14-2面で検出した遺構は、水田畦畔・溝（水路）・堤・微高地である。なお、南西部や南東部は、第11b層段階の流路による削平を受けており、遺構面自体が失われている箇所もある。また、地震による地盤の崩れや横ズレも顕著である。地震による遺



写真 25 第14-2面 畦畔検出状況（西から）

構面の変形は、中央部から東部にかけて多く、地割れによる溝、噴砂に伴う砂脈や地盤の陥没などの変形構造が認められた。以下、第14-2面の遺構について詳述する。

水田は、調査区の南西部で検出した。水田域の東側は微高地となっており、水田域と微高地の比高差は0.2m～0.4mである。水田域の東側には397溝と398溝が南東から北西へ流下する。この2本の溝は、水田域の東側と調査区の西端近くで、第11b層段階の流路によって遺構面ごと

削られている。水田域の南は417堤・418堤があり、調査区の南西端部では399溝の一部を検出した。

水田の標高はT.P. 1.71m～1.76mであり、調査区の南東に位置する450水田がもっとも高く、北西の440水田に向かって低くなる。各水田の面積・標高などは表3に記した。検出した畦畔の高さは、水田面からは0.04m～0.07mであり、454水田と448水田間の畦畔のように畦畔と水田面の標高差が少なく、畦畔が不明瞭な箇所もある。なお447水田・450水田の東側は第11b層段階の285流路により削られており、畦畔は検出していないが、溝や微高地の位置関係から、450水田の東側は水田一枚分が存在していたと考えられる。

水田の水まわしは、南東から北西へ方向と考えられる。畦畔に水口を設けるものと設けないものがあり、水口による水まわしと、田越しによる水まわしを併用している。416水口は399溝と、424水口は421溝と結んでおり、443水田・444水田より西側では、これらの水口から水を引き入れていたものと想定される。一方、それより東側の水田については、第11b層で削られた箇所に水口が設けられていた可能性がある。

プラント・オパール分析の結果（第6章第6節参照）、各水田とも500個/g～1500個/gの密度でプラント・オパールを検出したが、いずれも水田としては低い密度である。その理由として①水田の耕作期間



図58 第14-2面 平面図

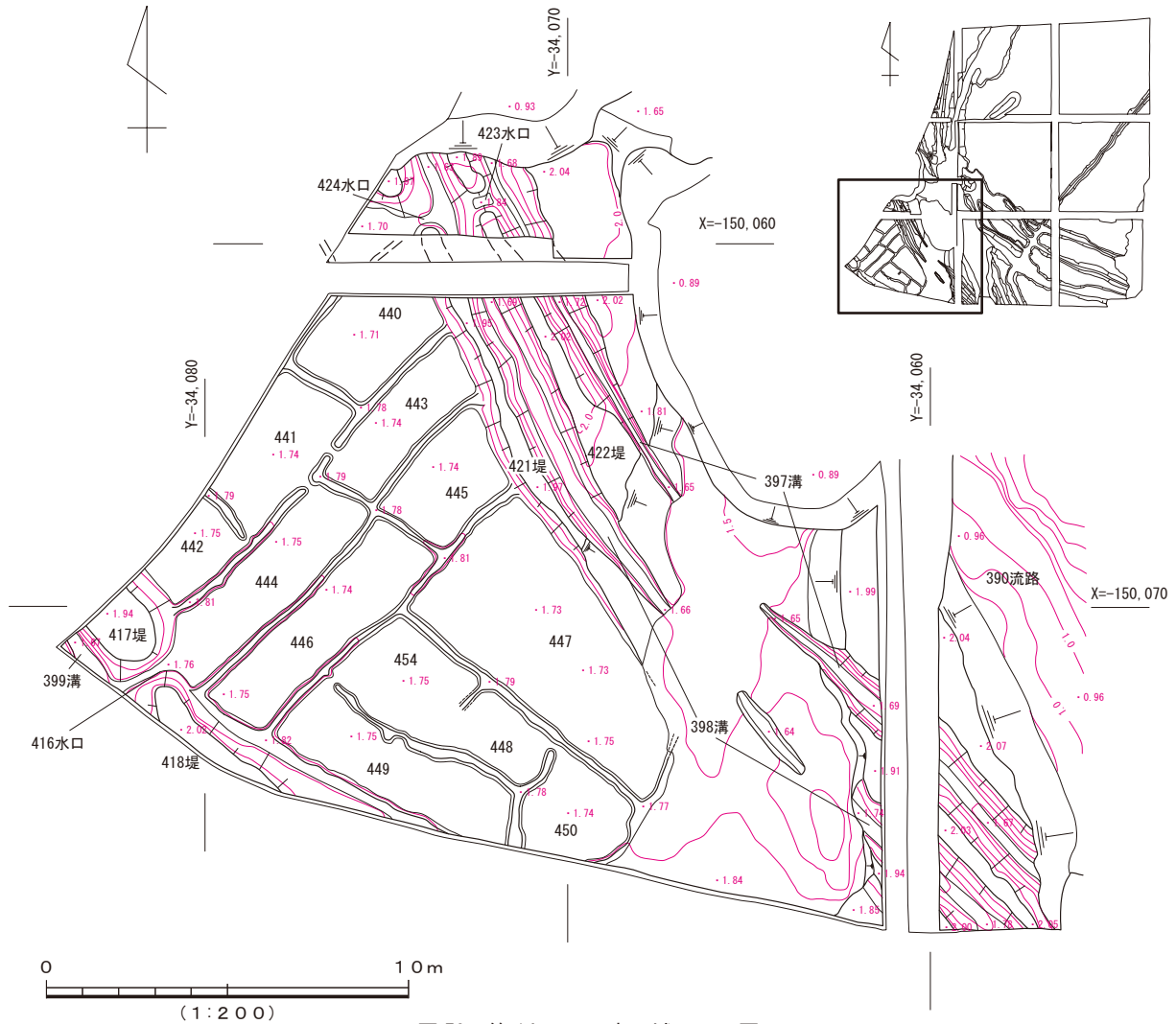


図 59 第 14 - 2 面水田域 平面図

遺構番号 (水田番号)	標高 (T.P.)		面積 m ²	
	低所	高所	検出した面積	想定される面積
440	1.71 m	1.73 m	6.04 m ²	8 ~ 9 m ²
441	1.73 m	1.75 m	8.05 m ²	10 m ²
442	1.74 m	1.76 m	3.75 m ²	6 ~ 7 m ²
443	1.72 m	1.74 m	6.89 m ²	—
444	1.73 m	1.76 m	10.77 m ²	—
445	1.73 m	1.74 m	6.19 m ²	—
446	1.74 m	1.75 m	11.26 m ²	—
447	1.73 m	1.75 m	25.96 m ²	26 m ²
448	1.74 m	1.76 m	2.97 m ²	—
449	1.74 m	1.76 m	10.41 m ²	≒ 10.5 m ²
450	1.74 m	1.76 m	5.83 m ²	≒ 7 m ²
454	1.73 m	1.75 m	7.04 m ²	—

※448水田は454水田と合わせると面積16.5m²。

表 3 第 14 - 2 面水田 面積一覧表

が短かった。②池島 I 期地区の南東部に広がる水田域の、実際の営農形態は、水田域の一部のみを利用する形であったため、結果的に密度が低くなった③水田作土の母材となった第14-2b層の土質により下層に透過した。などが考えられる。同じ水田ブロックとみられる97-3調査区の植物化石分析でも同様の数値となっており、今後、他の水田ブロックとの比較が必要であろう。今回のプラントオパール分析結果は、検出量は少ないものの調査で検出した水田遺構において水稻耕作が行われていたと認定するに足るものと考えられる。397溝と398溝は南東から北西方向に並行して流下する二条の溝である。ともに微高地の縁辺部に掘削されている。397溝は幅1.2m~1.5m、深さ0.30m~0.38m、溝の底面のレベルは、西端で

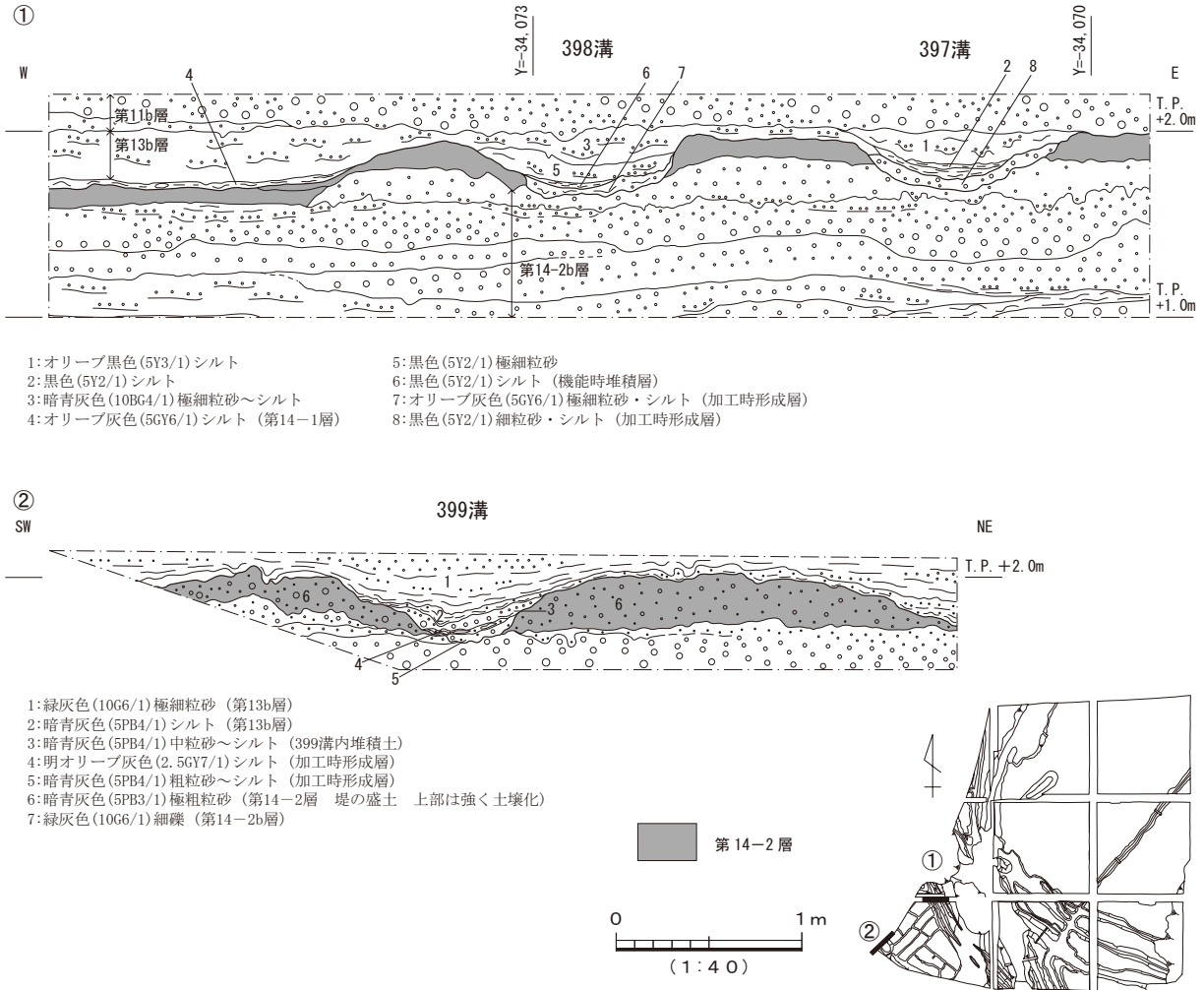


図60 397溝・398溝・399溝 断面図

T.P. 1.71mである。断面観察からは、溝の最下層に極細粒砂・シルト質ブロックを含む加工時形成層(図60①の8)が確認でき、その直上にシルト質の機能時堆積層(図60①の2)を確認することができる。398溝は幅1.5m、深さ0.3m、溝の底部レベルは西端でT.P. 1.63mであり、397溝より5cm～8cmほど低い。溝と関係する遺構には堤と水口がある。421堤、422堤は第14-2b層起源の礫を多く含む礫シルト質土で盛り土されており、溝の掘削土によって構築されたものである。397溝と398溝は423水口によって連結されており、並行する二本の溝が関係していたことがわかる。また、398溝と水田域は、424水口を介して接続している。424水口と423水口は近接しており、両者がセットになって水田域へ配水した状況が復元できる。堰などの施設は検出できなかったが、溝の機能時には何らかの施設で水位を上げ、水田へと配水したのであろう。397溝の埋土からは弥生時代前期の壺の口縁部片が出土している。

399溝は、調査区の南西端で検出した溝である。一部分の検出にとどまるが、北側は417堤・418堤と416水口を介して水田域と連結している。399溝やその周囲から杭などの構造物は確認していない。溝の断面観察からは、最下層で厚さ5cmほどの加工時形成層が確認できる。これは、第14-2層に由来するシルトブロックを含み、層の上面が土壌化している(図60②の1)。この加工時形成層の直上にシルトの薄層が堆積しているが、これが機能時堆積層と考えられる。機能時堆積層の直上(図60②の3)は、上部に向かって粗粒化するシルト質砂とシルト砂質礫の第13b層が堆積している。なお、堤に近い箇所では、堤からの流入土も若干堆積している様子が見られる。第14-1面に相当する段階は、溝の底に極細粒

砂層が堆積し、堤からの流入土が堆積したこの段階であろう。なお、この399溝の堆積環境については自然化学分析の項に述べている（第6章第4節参照）。

390流路は、調査区の西よりの南端部から調査区の中央付近の北端部に向かって緩やかに屈曲する形状である。390流路は第13b層の堆積によって完全に埋没し、第13b面の検出時には390流路を埋めた砂礫が帯状に広がる状況を確認した。この部分が13面段階では高まりを形成していたことは既に述べたとおりである。第13面段階では、この高まりの上に南北溝が掘られ、第12面段階では大畦畔がつくられている。

図61は流路内の堆積状況を示したものである。①が調査区の北側の流路断面図、②が調査区の南側の流路断面図であり、390流路が南東から北西方向に流下する404溝を切っている箇所当たる。下流側の①断面図では、390流路の本来の肩部分が第13b層が堆積する過程で削られており、流路の底も第15層付近まで大きく抉られ、肩部は第14-2層を削り込んでオーバーハングしている。流路内は礫～粗粒砂を主体とする砂質礫で充填されており、第14-2層がブロックとなり堆積している。

②の断面図では、底部分や西肩部が13b層によって削られている状況がわかる。最下層は流木を多く含む砂礫層で、上部に向かって細粒化している。最下部から0.2mほど上で細粒砂の層を挟んで、粗い砂礫が堆積しており層境が明瞭である。第13b層段階の流路が、第14-2b層を削りながら形成された後に一時的に堆積が収まった様子がうかがえる。この層境より上部はおおむね細礫から細粒砂へと細粒化する堆積状況である。390流路と南東から北西へと流下する397溝、398溝や、404溝、407溝との関係であるが、②の断面図は、両者が接する付近の状況を示している。404溝は最下層に粗粒砂混じりの加工時形成層が認められ、その上層に粗粒砂～細粒砂の礫・シルト質砂層があり、これが404溝内埋土と考えられる。それより上層は390流路を埋めた第13b層と同時に埋まった状況を示している。この第13b層は、404溝の加工時形成層を切って堆積している。

404溝は、調査区の南端から北流する溝である。390流路と交わる部分まで検出した。深さ0.2m～0.3m、幅1.8m～2.0m。断面観察からは、最下層に粗粒砂が混じる加工時形成層が確認でき（図61②の14）、粗粒砂～細粒砂のシルト質砂で溝が埋まっている。なお、390流路の東斜面で1008溝を検出した。1008溝は幅2.1m～3.5m、深さ0.26m～0.39mであり、407溝と交わる付近まで続いている。404溝の痕跡とみられ、この溝の位置関係から404溝と407溝は連結していたと推定できる。

407溝は、調査区の東南端から西流し、390流路と交わる部分までを検出した。東端部は11b層段階の284流路によって削られ、遺構面が残存していない。また、地震の変形によって3h付近の溝は大きく変形している。390流路と交わる付近では、第13b層段階で大きく削られているため、390流路との関係は不明である。



写真 26 390 流路断面（北東から）

404溝と合流していたと考えられるが、北西方向へどのように続いているのかは不明である。溝の断面観察からは、最下部から0.2mほどの厚さでシルト、細粒砂層が堆積しており、上面がわずかに土壌化している加工時形成層（図62①の4～8）が確認できる。溝の最下層は踏み込みの痕跡が顕著である。この直上にシルトや極細粒砂の薄層が認められ、これが機能時堆積層であると考えられる。

408溝は、幅1.5m～2.2m、深さ0.20m～0.25

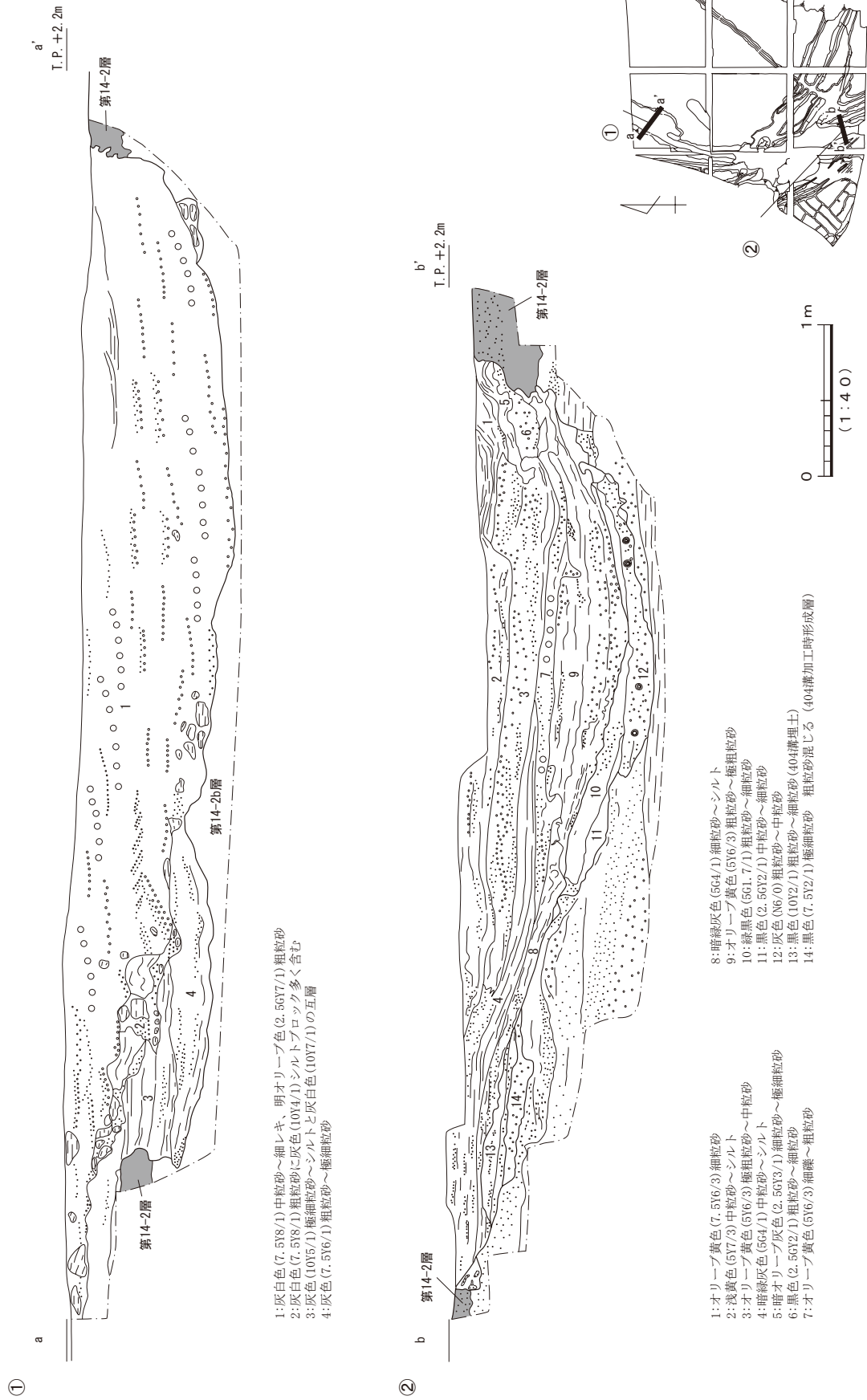


図 61 390 流路 断面図

m。407溝と平行する溝で、5fで409溝の延長である411溝と合流する。なお、この5fでは、408溝と並行する地割れが多く、平面形状からも溝の肩部が変形を受けている様子が窺える。また、390流路に接する箇所でも地震による横ズレによって大きく変形しているとともに、第13b層段階の抉れによって接続の状況は不明である。

409溝は幅1.0m～2.0m、深さ0.12m～0.18m。406溝以西は411溝に接続し、5fで408溝と合流する。調査区東端部3gでは第11b層284流路によって削られている。

411溝は幅0.8m、深さ0.25m。409溝と同一の溝で、408溝と合流する。平面形は地震による変形の影響を受けており、409溝に比べて約2m南にずれている。408溝との合流部もトレンチや地震の変形によって不明瞭である。

400溝は、調査区の西北部7c・7d・7eで検出した幅1.5m～2.0m、深さ0.21m～0.27mの溝である。7dで401溝が分岐している。第13b層が堆積する過程で、390流路との接続箇所が削られており、390溝との関係は不明である。また、402溝との接続箇所も同様に削られており不明である。

402溝は、7eで検出した幅0.9m～1.5m、深さ0.20m～0.28mの溝である。400溝や390流路との接続箇所は第13b層によって削られており詳細は不明である。

406溝・405溝は、5hから3dにかけて、調査区を南西から北東方向に流下する溝である。微高地上の他の溝が南東から北西方向であるのに対し、これに直行するように南から北東方向にはしる溝である。当初、調査区南側の405溝と北側の406溝を別の遺構と認識していたが、407流路の底部の加工面まで掘削した段階で、405・406溝の方がより深く掘り込まれていることが確認できたことから、一連の溝であることがわかった。交差する溝群とは開削時期に差があると考えられるが、ともに機能時堆積層の上に浅黄色のシルト質砂が堆積しており、溝の埋没時には両者は並存していたことがわかる。なお、溝が交差する付近に堰などの施設は確認していない。溝の埋土から弥生時代前期の土器（151・152）が出土した。

1012土器溜まり 調査区の北側中央部4dに位置する。T.P. 1.3m～T.P. 1.5mと周囲に比べて0.5mほど低い窪地に、土器片を多く含む砂質シルト層が堆積している。土器の出土する範囲は南北7m、東西3m程であり、窪地は南東から北西方向に長軸を持つ長楕円形である。調査段階では遺構番号を与えていなかったが、第14-2面出土遺物の中では、395土器溜まりに次いでまとまった量が出土していることから、報告書では土器溜まりとして報告する。33点を図化した。破片点数では158点が出土した。弥生土器と突帯文土器を区別できる範囲で比較すると、弥生土器が7割、突帯文土器が3割ほどで、弥生土器の割合が高い。395土器溜まりとは一連の微低地にあるが、両者の間には遺物が疎になる場所があることから、別のものと認識した。

395土器溜まり 調査区の東側3e・3fに位置する。土器の出土する範囲は南北7m、東西4mであるが、周辺部からも多くの遺物が出土している。395土器溜まりの北西側は、1012土器溜まりにつづく微低地に接続している。弥生土器・突帯文土器・石器の破片が多く出土した。遺物は、第14-2面上や第14-2層中から出土し、完形に復元できるものは少ない。32点を図化した。他に破片が380点出土した。土器は395土器溜まりとした範囲を超えて接合しており、弥生土器の口縁部片（197）は15mほど北側の第14-2層中のものと接合した。395土器溜まり出土土器の内容は、弥生土器が3割、突帯文土器が7割ほどで、突帯文土器の割合が高い。

この他に4hの調査区南端部でも第14-2層中から突帯文土器片が多く出土している。

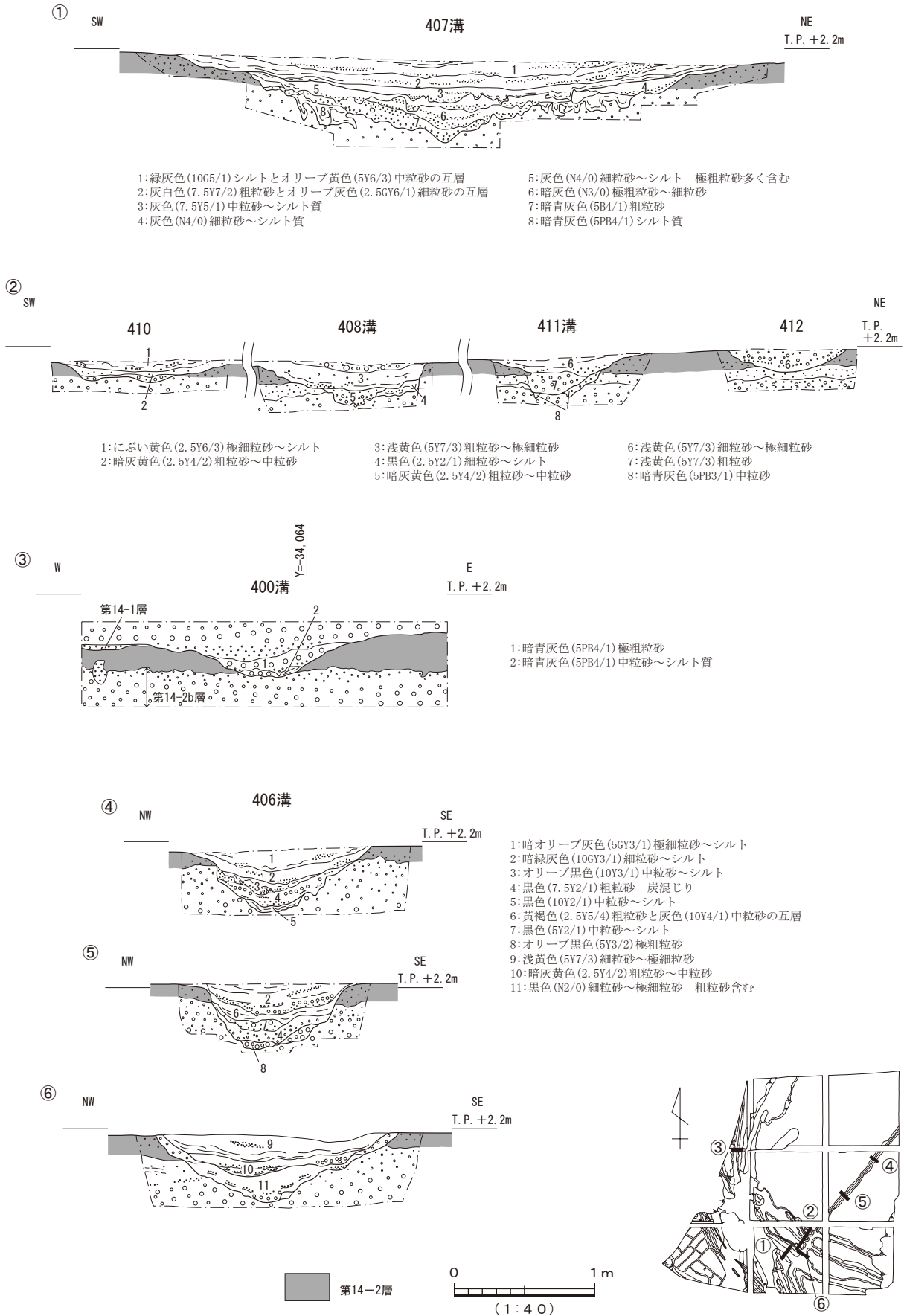


図62 第14-2面溝 断面図

(3) 地震痕跡について

第14-2面では、調査区東側の微高地上で噴砂、地盤の陥没により形成された土坑、溝に並行して地盤が横に滑った痕跡など、地震による変形構造をいくつか検出した。

噴砂は、微高地上において顕著に認められた。砂脈の方向は主に南北方向である。平面的には第14-1面調査時に砂脈を検出したが、断面観察からは、噴砂は第13b層の下部にまで達しており、そこで高さ0.05mの砂丘を形成していることが確認できた。噴砂は層厚約0.1m～0.15mの極粗砂混じりの土壌化層（第14-2層）の直下の砂質礫層（第14-2b層）から噴き上がっていることから、第13b層が堆積する段階で大規模な地震が起きていたことがわかる。同様の所見は池島Ⅰ期地区98-1調査区や、池島Ⅱ期地区の02-2調査区、06-2調査区でも示されている。

地震による地盤の陥没現象は、かつての池島・福万寺遺跡の調査でも検出されており、「縄文土坑」と呼称されたこともあるが、地震による噴砂やそれに伴う地盤の横ズレなどの変形によって土坑状に地盤が陥没したものであることが判明している（亀井2005）。平面形は馬蹄形を呈するものが多く、長軸方向が東西方向にあるという特徴をもっている。この「縄文土坑」に類するものとしては、3fの1011土坑がある。第14-1面調査時に検出しており、長軸1.5m、短軸1.2mの長楕円形の平面形を持つ。西側に現代水路の鋼矢板引抜時の地盤の変形があることと、周辺から土器片や石器類が他に比べて多く出土したことから、地震痕跡か遺構かの判断が難しかったが、最終的には鋼矢板の引き抜きに伴う変形部分に対になる土坑が存在する地震痕跡であると判断した。このほかに、第14-2b面調査時に5dで馬蹄形に第14-2層が落ち込む地震痕跡を確認している。

微高地上の溝に並行する溝状の地震痕跡は、幅0.3m～0.5m、深さ0.3m程の規模で、第14-1面検出時に多数確認した。埋土は第13b層下部のシルト質砂であり、第14-1面の調査段階で溝内を掘削しているが、溝としては幅や深さが一定せず、不自然な遺構であった。後に埋土の状態や、断ち割りによる下層との関係等を検討した結果、基盤層の第14-2層・第14-1層が溝に沿って横方向に移動した結果生じた地震痕跡であると判断した。地震の生じた第13b層の堆積段階では、第14-2面の溝は溝内が完全に埋まりきっていない状況であったと考えられる。窪地状に残っていた溝の中に、第14-2層・第14-1層の地盤が溝内に落ち込むように移動した結果、溝に並行して窪地が生じ、そこに第13b層下部のシルト質土が埋土として流入し堆積したと考えられる。調査区の中央部付近で特に顕著に見られ、遺構番号をつけたもの（412・410・407など）もある。410としたものは、407溝と並行にはしる幅0.4m～1.0m、深さ0.06m～0.15mの溝状の窪みであり、412としたものは、409溝の延長線上に位置する幅0.7



写真 27 土層断面の噴砂



写真 28 第14-2面検出の砂脈

m～0.9m、深さ1.1m～2.2mの溝状の窪みである。平面的には他の溝と似ており、埋土も第13b層であることから、調査時には14-2面の遺構と判断したが、その後の検討で、溝の幅が一定せず溝底部に緩やかな凹凸を持つこと、加工時形成層がないこと、土壌化層が溝の肩部から溝内に垂れ込まずに途切れているという特徴を持つことから地震痕跡と判断した。

今回検出した地震痕跡は、弥生時代中期初頭の段階で池島・福万寺遺跡が大きな地震動を受けたことを示している。同時期の他遺跡の例では、新上小阪遺跡、田井中遺跡において噴砂などの地震痕跡が認められている。寒川旭はこの地震について南海地震の可能性を指摘する（寒川2007）。

(4) 池島 I 期地区の遺構との対応関係について

次に本調査区で検出した溝群と池島 I 期地区の遺構の対応関係についてみていきたい。

今回検出した水田は、池島 I 期地区南東部で検出した水田（以下J地区）と同一の水田と考えられる。J地区は東西約70m、南北30m以上の水田域であり、水田の標高は1.37m～1.65m、南東部から北西へとわずかに傾斜する平坦面に、水田一枚の面積の平均が15㎡の小区画水田が4つのブロックに分かれて配置されている。各ブロックは、等高線に平行するように幹線畦畔を配し、それを支線畦畔で区切って、別々の給水口から導水しつつ、それぞれが有機的に関連して水田域を構成していたものと復原されている。本調査で検出した水田域はJ地区の東端からの距離が40mとはなれているものの、水田標



図 63 池島 I 期地区と調査地の第 14 - 2 面遺構

高が1.72m～1.76mであり、J地区の東端との高低差はわずか0.07mである。

次に、溝についてみると399溝・397溝・398溝は今回検出した水田域に配水するほか、J地区の水田にも配水していたと想定できる。具体的に今回検出した溝とJ地区の溝の対応関係を検討すると、399溝は、溝の位置と溝底のレベル値から、J地区の東端の水田ブロックに給水していたと考えるのが妥当であろう。J地区の水田域のレベルからは、399溝は復原のラインよりも南側を回って、西へのびている可能性も考えられる。397溝・398溝については、微高地縁辺部を並行してはしること、水口で接続する箇所もあることから、より安定的な給水が行えるよう2本の溝がセットで機能していたと考えられる。これらに接続する溝は、J地区の北側の微高地縁辺を、弧を描きつつ南西に流れる38溝がその候補となりうる。池島I期地区の34溝は北西方向に流れ、C地区・B地区に注ぎ、35溝も同じく北西に流れてH地区に注いでいる。平面図からは本調査区がこれらの溝の上流に相当するが、これらに対応する溝は、本調査区で南東から北西方向に流れる主要な溝である407溝と408溝が該当すると考えられる。残念ながら第11b層の流路や第13b層段階の流路によって遺構面が失われていたため、詳細は不明であるが、408溝が409溝と合流しているように、より安定した水の供給のための工夫がうかがえる。また、本調査区の北西で検出した400溝は、北流してI地区に配水する溝であった可能性が高い。

(5) 第14層出土遺物 (図64～図70)

第14-2層の出土遺物としては、第14-2面検出の溝から出土したものが若干あるが、大半は1012土器溜まり、395土器溜まりから出土している。出土遺物は縄文時代晩期から弥生時代前期の時期を主体とする。

406溝から弥生土器の壺底部(151)、壺あるいは鉢の底部(152)、突帯文土器の口縁部片(149)が出土した。406溝出土資料は、破片数では弥生土器が優勢である。突帯文片(149)は、口縁端部からやや下がった箇所に刻み目を施した突帯をめぐらす。弥生土器は実測図を提示できたものは底部片に限られるが、ほかに壺の胴部片なども出土している。408溝からは弥生土器の底部(150)が出土した。状態は悪いがミガキを施している。第14-1面の出土遺物として取り上げた(153)は底部片であるが外面をハケ状の工具でナデあげて調整しており、甕の底部であろう。同様に第14-1面として取り上げた(154)は、6fの148溝の北肩部から出土した壺である。第14-2面に接しており、第14-2面直上の土器といえる。口頸部に1箇所焼成前の穿孔が確認できる。頸部と肩部に3条の削りだし突帯がめぐり、頸部と口縁部の境は段表現の名残を示すように一段低くなっている。外面はハケ調整後、密にミガキを施す。内面も口縁部は横方向のミガキを密に施す。第13b層出土の壺(146)に比べ、胴部最大径がやや上部に位置しており、河内I-2様式からI-3様式に位置付けられる。報告書で示した出土層位は異なるが、両者はほぼ同じ時期に廃棄されたものと考えられる。(155)は第14-1面検出時に出土した弥生土器の壺胴部片である。肩部の破片であるが、3条の沈線が2箇所にめぐっている。外面は横方向のミガキを施す。

1012土器溜まりの資料として(156)～(188)を図示した。(156)・(157)は鉢。(156)は口縁部が端面を有し、外反する。内外面ともに密にミガキを施す。(157)は丸みをもった体部を持ち、口縁が「く」の字状に外反する。外面は、ハケ調整後にミガキを施しており、頸部には2条の沈線をめぐらす。内面は、口縁部付近は斜め方向のハケ調整、体部は横方向のミガキである。(158)・(159)は壺の口縁部片。内外面ともに横方向のミガキを密に施す。(160)はわずかに外反して立ち上がる猪首状の頸部を持つ古

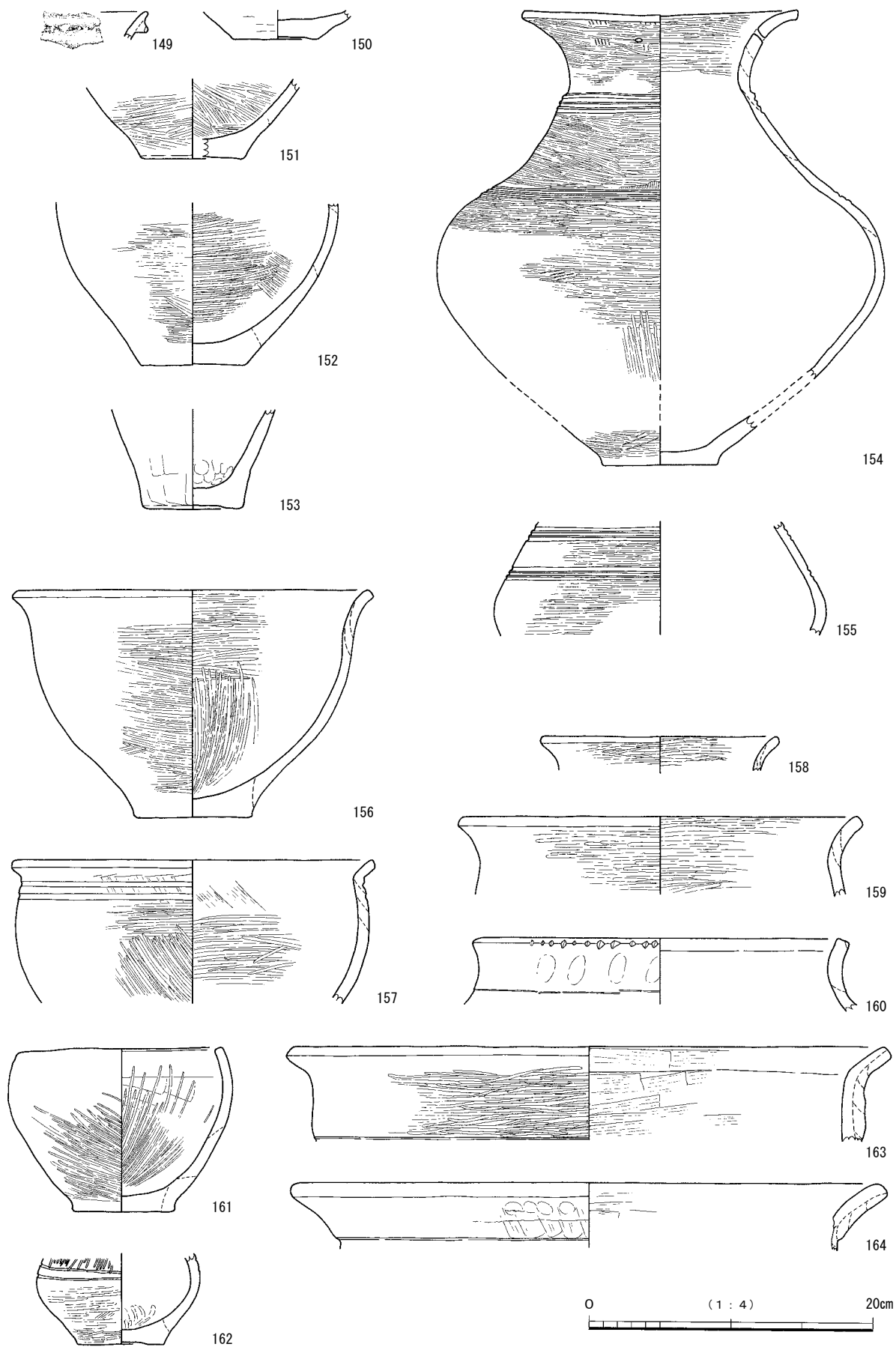


图64 第14-2層 出土土器(1)

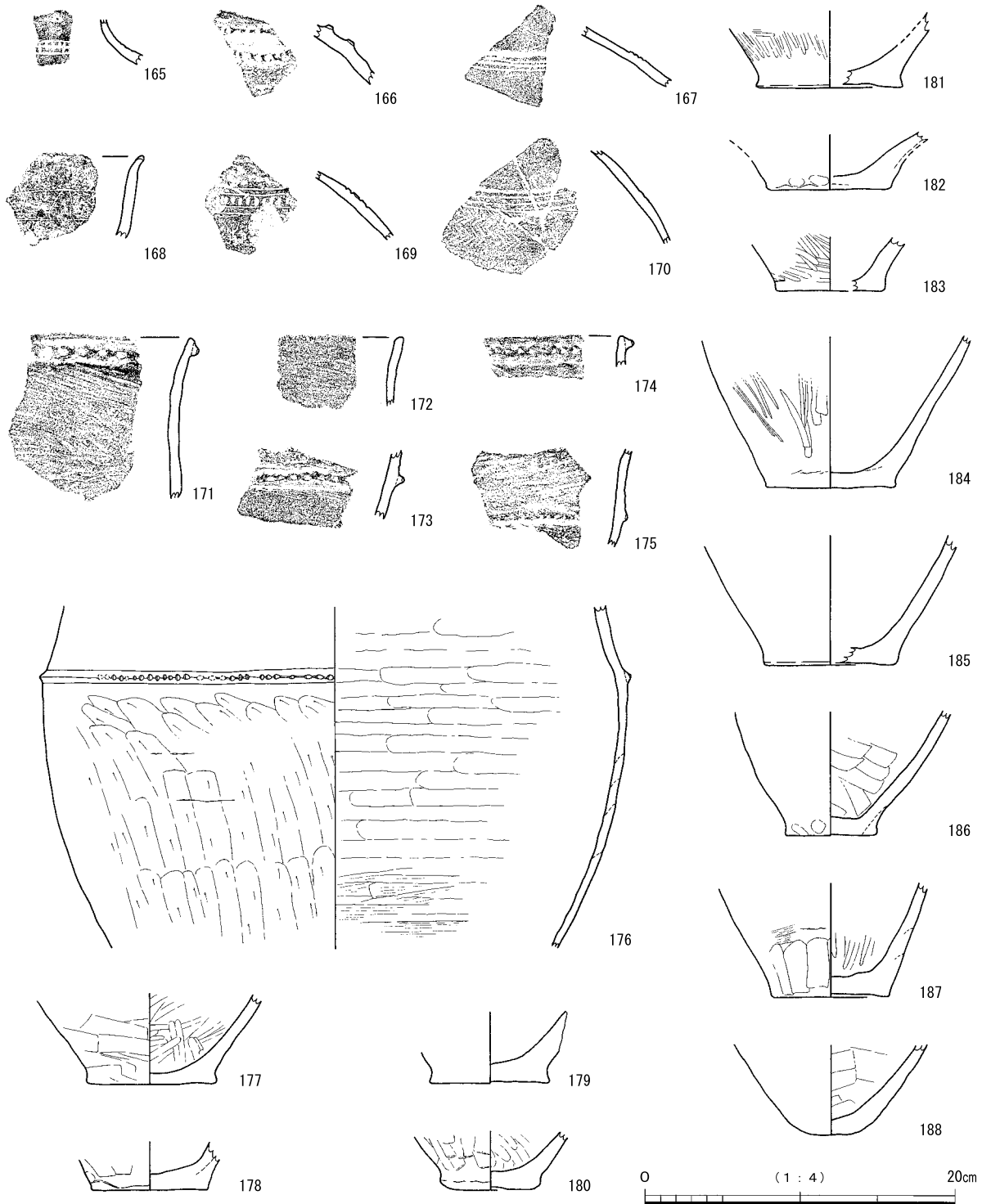


図 65 第 14 - 2 層 出土土器 (2)

式の形態の壺と考えられる。口縁端部に刻み目を施し、頸部にはヘラで段表現を施す。(161)は無頸壺。広がりがない体部をもち、内外面ともにミガキを施す。(162)は小型壺の底部から肩部の資料。肩部に2条の沈線がめぐり、その上方に縦方向の線刻を施す。外面は底面も含めて密にミガキを施す。(163)は鉢形土器。「く」の字状に外反する口縁部を持ち、頸部との境に段を表現する。外面は横方向のミガキを密に施し、内面は横方向のヘラナデで仕上げる。(164)は壺の口縁部片である。器厚が1.4cmと厚く、復元口径も41.0cmと大きい。内外面ともにヘラ状の工具でナデ調整する。頸部との境には段の表

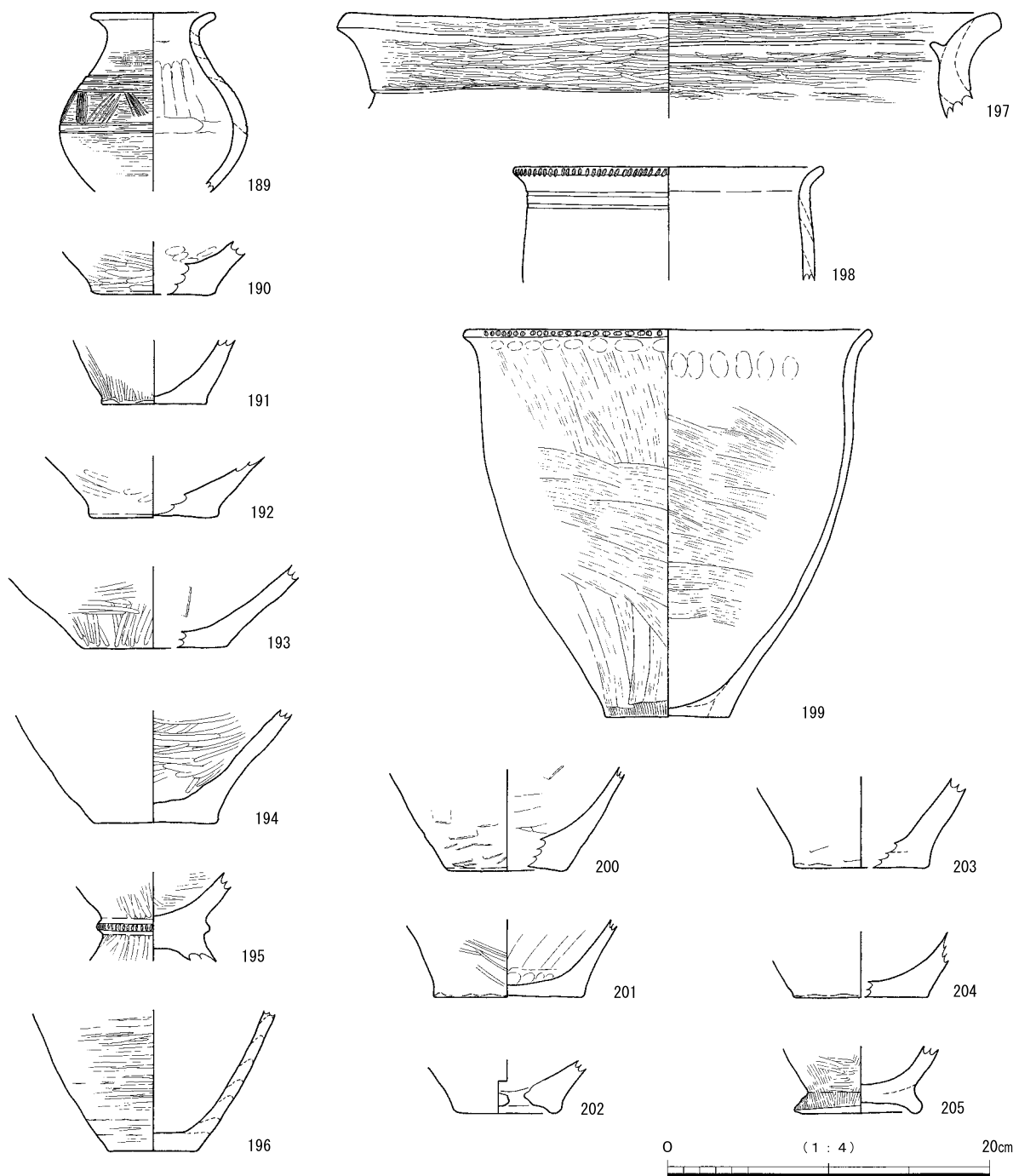


図66 第14-2層 出土土器(3)

現が確認できる。(165)は2条の沈線とこれに直交して刻み目を施した壺の頸部片。(166)は貼り付け突帯を2条めぐらし、突帯頂部に刻み目を施す壺の肩部片。(167)は壺の肩部で3条の沈線をめぐらせる。(168)は口縁が弱く外反する甕である。口縁端部に刻み目を施し、頸部に線刻を2条めぐらせ、その間を鋸歯文状に施文する。(169)は壺の口縁部片である。4条の沈線をめぐらし、中央の沈線間に刺突文を刻む。(170)は4条の沈線とその下に2列の綾杉文をめぐらせた壺の肩部である。(171)～(175)は突帯文土器の深鉢の頸部片である。(171)はやや外反する口縁部片で、口縁端部にD字状の刻み目を施した突帯をめぐらせる。頸部は板状の工具で横方向にナゲ調整する。(172)は口縁端部の突帯が剥離したものである。頸部は板状の工具で調整する。(174)は口縁端部に小D字状の刻み目を施したものである。

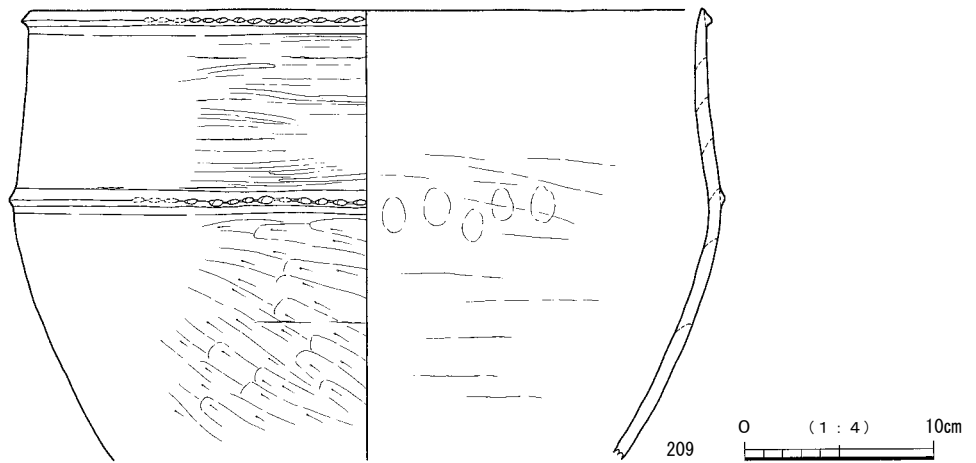
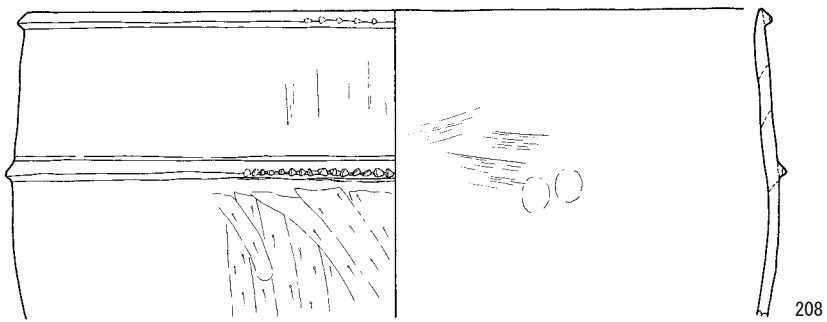
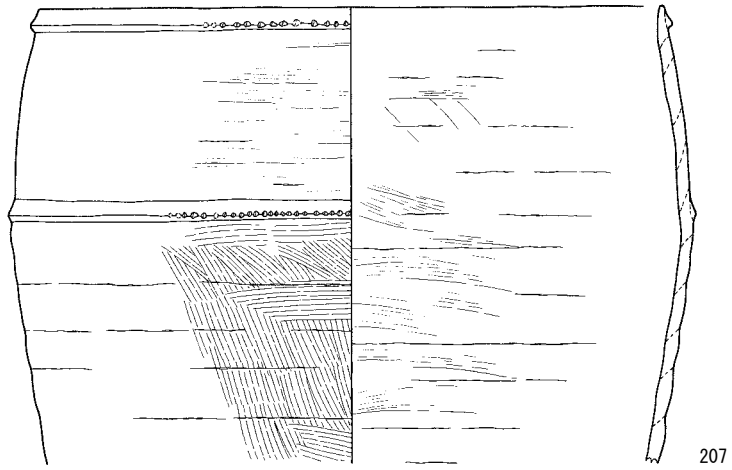
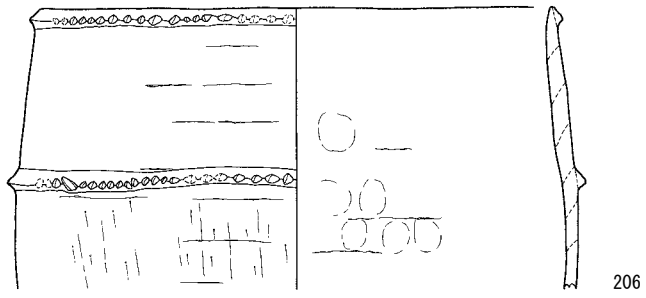


图 67 第 14 - 2 层 出土土器 (4)

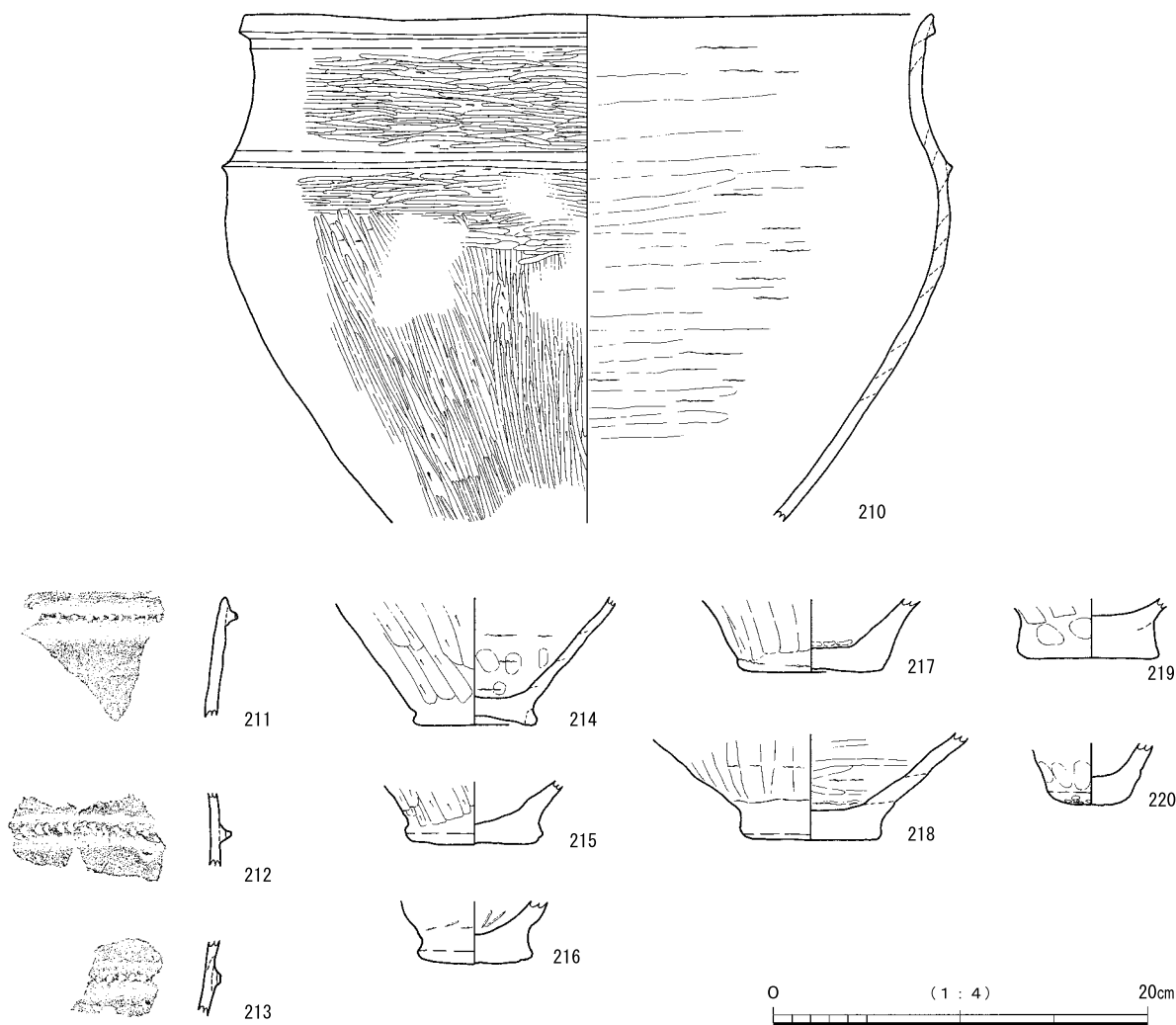
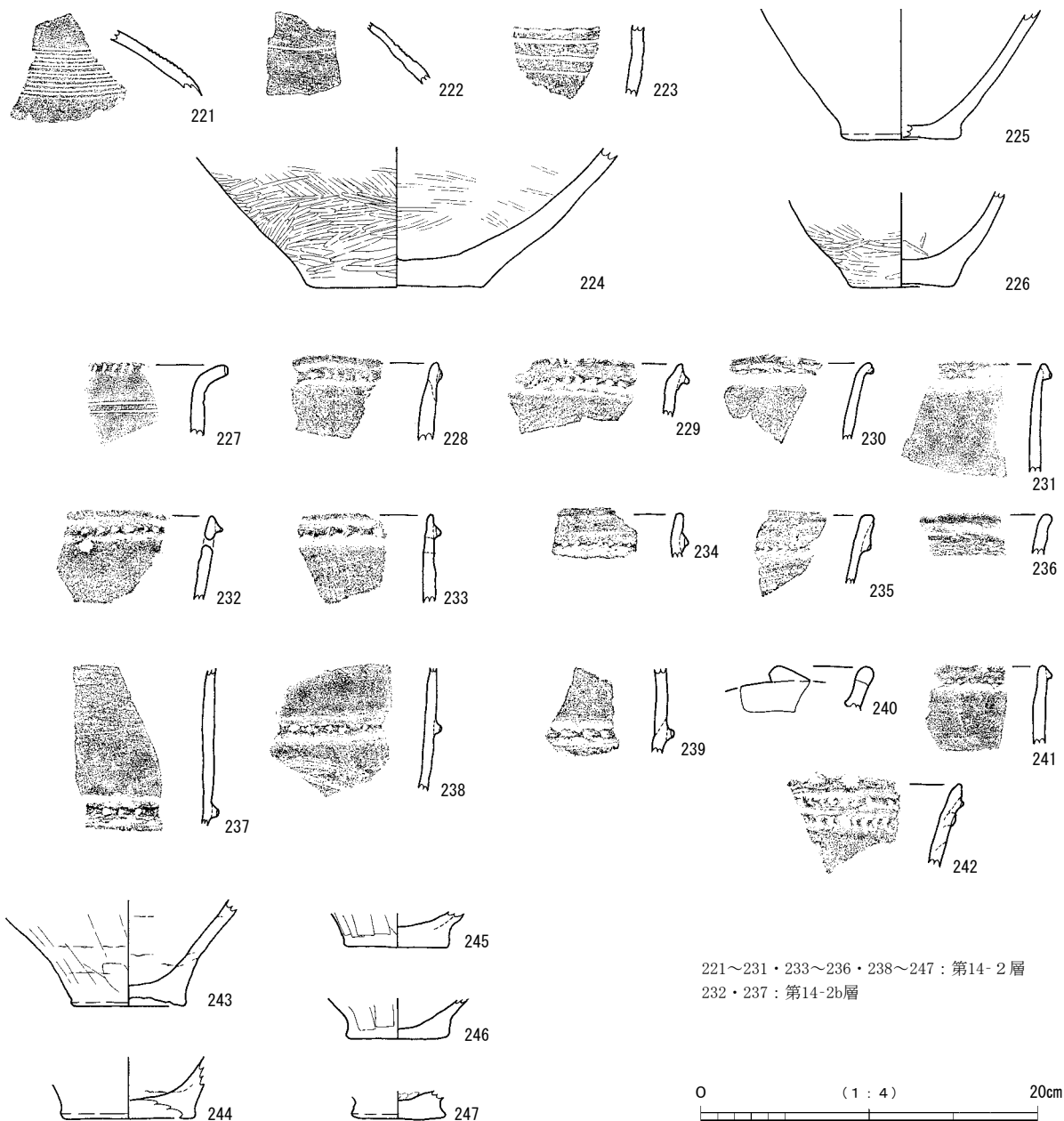


図68 第14-2層 出土土器(5)

(176) は突帯文土器深鉢の頸部から胴部にかけての資料である。突帯は突出度が弱く、小D字の刻み目を施す。胴部は外面を縦方向に削り、内面はナデで仕上げる。(177) から (180) は突帯文土器の底部片。粘土が外面にはみ出した形状のもの (179)、底面の端部が丸くおさまるもの (180) がある。外面はヘラ状の工具で強くなでている。(181) から (185) は弥生土器の甕の底部か。外面に縦方向、横方向のミガキを施す。(186) は底面近くの粘土が外側にはみ出し、強くナデつけて整形する。(187) もヘラ状の工具で外面を強くなで上げている。(188) は丸底の土器で表面は摩滅しており調整は不明である。1012 土器溜まり出土土器は、弥生土器を主体的に、突帯文土器を客体的に出土する。

395土器溜まり出土土器として (189)～(220) を図示した。(189) は小型の広口壺。頸部と肩部との間に段を設け、直下に2条の沈線を、胴部にも2条の沈線をめぐらせ、その間の頸部の装飾文様には平行線文を山形に配している。外面はハケの後、横方向のミガキで調整し、内面はナデ調整である。河内 I-3～4 様式。(190)～(193) は弥生土器の壺・甕の底部。外面はミガキ、ハケによる調整、内面は粗いミガキを施す。(195) は高杯の基部。刻み目を施した突帯をめぐらせる。杯部、脚部ともに縦方向のミガキで調整する。河内 I-3 様式の特徴を示す。(196) は鉢あるいは壺の底部から体部にかけての資料。外面は横方向のミガキを施す。内面は塗布されたように黒色物質が付着し、外面にも一部付着して



221～231・233～236・238～247：第14-2層
232・237：第14-2b層

図 69 第 14 - 2 層・第 14 - 2b 層 出土土器

いる。また、内面には粘土紐の痕跡が明瞭に残る。漆を塗布した可能性が高い土器である。(197) は大型の広口壺の口縁部片。口縁は短く外反し、内面に突帯をつくりだしている。頸部には段を設けている。外面・内面ともに横方向のミガキを密に施す。(198) は口縁端部に刻み目を施し、頸部に 2 条の沈線をめぐらせた甕。(199) は口縁端部に小 0 字形の刻み目を施したものである。内外面ともにハケ調整し、頸部の内外面に指頭圧痕が残る。(200)～(205) は弥生土器の甕の底部の資料である。外面は板状工具の痕跡を残すもののほか、ハケ調整、ハケ調整後ミガキを施すものがある。(202) は内外面両面から穿孔した甕の底部片である。(206)～(220) は突帯文土器の資料である。(206) は突帯文土器の深鉢で、頸部はほぼ直立して口縁部にいたる。粘土紐接合痕跡が明瞭に残る。口縁部・肩部の突帯断面はほぼ三角形で、D 字形の刻目を施す。内面と外面頸部は横方向の板ナデ、外面胴部は縦方向の強いケズリ。外面にはススが付着する。(207) は頸部がわずかに内傾し口縁部にいたる。突帯の突出は弱く、突帯頂部

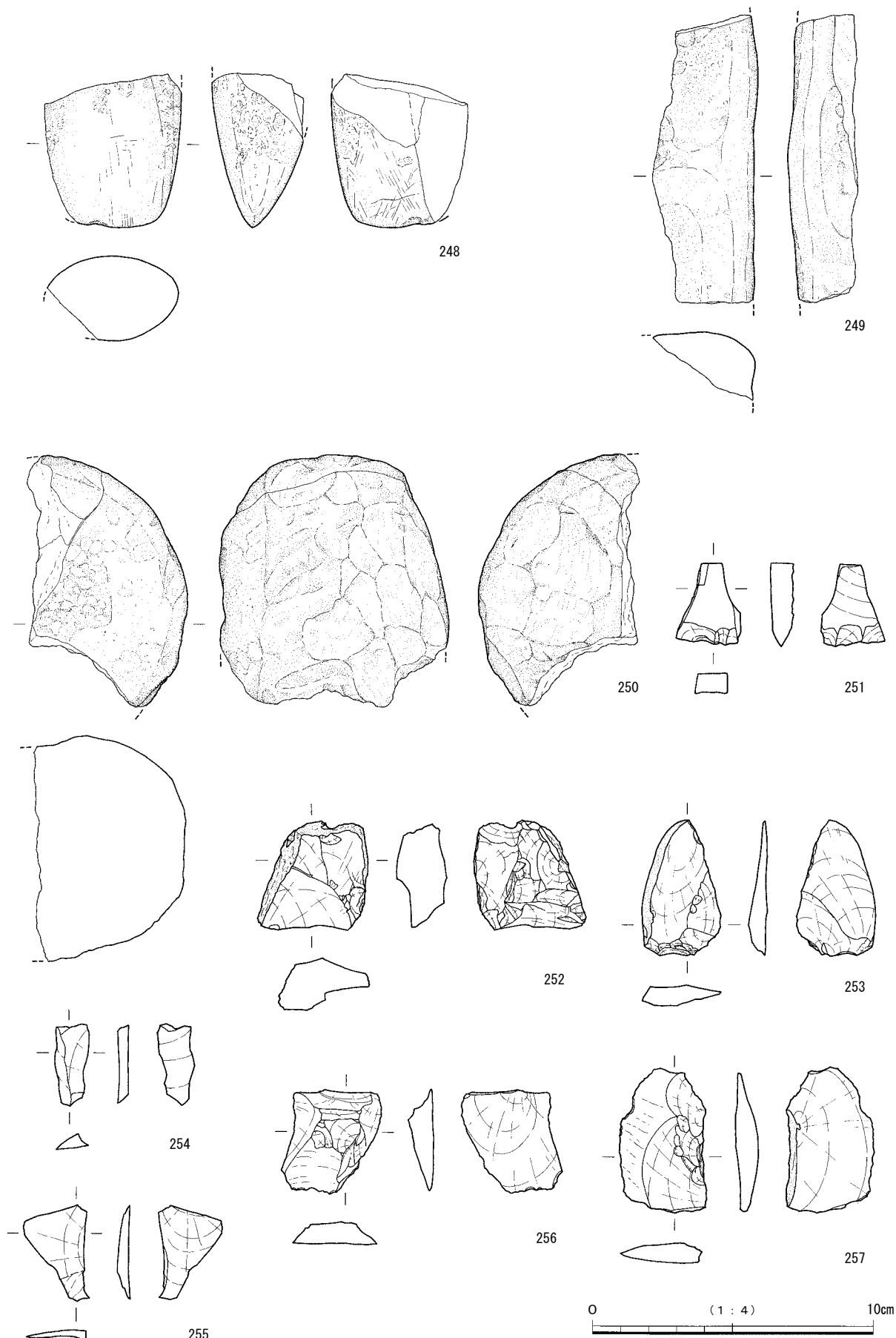


图 70 第 14 - 2 層 出土石器

に小D字形の刻目を施す。内面と外面頸部は横方向の板ナデ、胴部外面は縦方向の後横方向のハケメ調整。粘土紐の単位が良くわかる。(208)はほぼ直立して口縁部にいたる頸部をもつ。突帯の突出は弱く、突帯頂部に小D字形の刻み目を施す。(209)は胴部から頸部にかけて内傾し、口縁短部が先細りになる。(206)～(209)は長原段階の資料である。(210)は外面に削りを施した後、口縁部から肩部を横方向に、肩部から下を縦方向にミガキを施したもので、突帯は断面三角形で、突帯の突出は弱く刻みは施さない。(211)～(222)は突帯文土器の口縁部および頸部、深鉢の底部片である。底部片の資料では、内面に板状工具の痕跡が残り、外面は板状の工具で強くなで上げている。粘土が外面にはみ出たもの。端部を丸くおさめたものがある。(220)は丸底の底部で形態的に古い様相を示す。

(221)～(247)は第14-2層と第14-2b層中から出土した土器である。(221)～(227)は弥生土器の資料である。(221)は壺の肩部であるが、多条沈線が施された河内I-4の資料である。(222)は細い6条の線刻がめぐる壺の肩部である。(223)は3条の沈線が施された甕の頸部。(224)は内外面にミガキを施した壺の底部片である。(225)は内外面が摩滅しているが、甕であろうか。(226)は外面にミガキを施した壺か鉢の底部である。(227)は「く」字状に外反する甕の口縁部片。口縁端部に刻み目を施し、頸部には2条の沈線がめぐる。(228)～(247)は突帯文土器を中心とする資料である。口縁部の突帯の位置には、口縁よりやや下がった位置にあるもの(229)・(232)～(236)があり、突帯端部の刻み目も、D字形、小D字形、0字形などがある。(242)は突出の弱い突帯を2条貼り付け、頂部を小V字形の刻み目で飾る。

このほかに、刳圧痕の認められる土器片を写真図版22に掲載した。(258)は第14-2b層中から出土した突帯文土器の深鉢の胴部外面に刳圧痕が付着したものである。(259)は395土器溜まりから出土した突帯文土器の深鉢で、胴部の内面に刳圧痕が認められるものである。

(248)～(257)は第14-2層出土の石器である。石斧、楔形石器、剥片、叩石がある。(248)は磨製石斧である。大型蛤刃石斧の刃部から身部にかけての資料で、身部から基部にかけては欠けている。緑色粘板岩製と見られる。(249)は破片資料であるが、平滑な面を持つ砂質ホルンフェルスの石皿か。(250)は敲打痕のみられる玄武岩の叩石である。(251)はサヌカイト製の楔形石器である。(252)～(257)はサヌカイト製の剥片である。このほか、図示していないが、平滑な面を持った花崗岩の破片や、蛇紋岩の破片などが出土している。これらの石器は土器溜まりの周辺で多く出土する傾向にある。

第6節 縄文時代後期遺構面の調査

(1) 第15-2面 (図71)

第14-2b層・及び第15-1層を除去して検出した遺構面である。池島Ⅰ期地区や池島Ⅱ期地区04-2調査区において、検出されている第15-2面としたものと同一の遺構面である。第15-1層は層厚0.05mほどの細粒砂層であり、弱く土壌化している。第14-2層の洪水流による影響を受けて、部分的に確認できるのみである。

第15-2面は地形の起伏が少なく、これまでに池島地区で確認された第15面はT.P. 0.9m前後である。

本調査区では、490流路、491流路を検出した。流路の底はいずれも掘削限界のT.P. 0.9m以下である。流路内には、第14-2b層の砂礫層が堆積し、調査区北部の4c区では立木や流木が認められた。調査区の南端部4hでは、人の足跡、鳥類の足跡を検出している。足跡の内部は砂礫で満たされており、踏み込み面は第14-2b層段階と考えられる。第14-2b層の最下部が一時的に安定した環境にあった時について足跡と考えられる。第15-1・第15-2層中から遺物は出土していない。

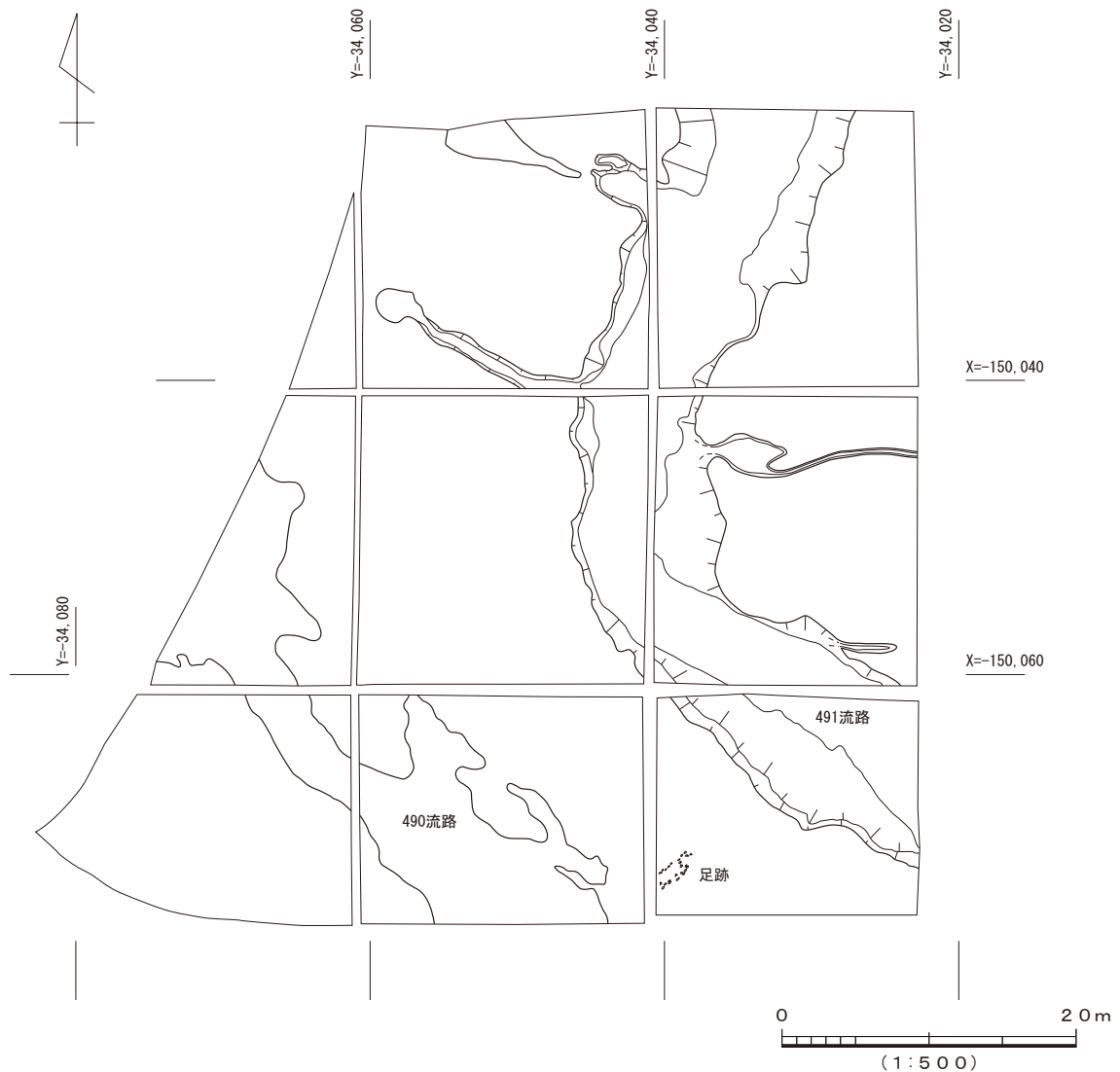


図71 第15-2面 平面図

第6章 自然科学的分析

第1節 分析の目的

今回の調査では、古代から弥生時代の各遺構面において、以下の項目で報告する自然科学的分析を実施した。ここでは各分析の目的を述べ、第2節以下で分析結果を要約して掲載する。なお、第6節は第14-1層・第14-2層を対象として実施した珪藻分析、種実同定分析、プラント・オパール分析の結果を掲載しているが、これは、農業と環境の関係史の解明に取り組む総合地球環境学研究所のプロジェクトチーム（代表：佐藤洋一郎教授）が、当調査区の試料を分析した成果の一部を掲載したものである。

（1）AMS放射性炭素年代測定

弥生時代中期の遺構面である第12面で検出した木杭を対象とした。319杭列・322杭列、380杭列、1001杭列は、第11b層を除去した段階で検出したため、第12層に帰属する遺構であると考えられたが、周囲が洪水砂によって削られていることから、杭の打ち込み面を確定することはできなかった。さらに、319杭列・322杭列は溝の中の堰として設置されたのに対して、380杭列、1001杭列は水田畦畔の補強を目的として設置されたと考えられ、設置時期に違いがある可能性も考えられた。今回の分析は、第12面におけるこれらの杭が打設された時期の検討を目的としており、その成果から導き出される結果は、当調査区のみならず周辺の水田景観を復元するための基礎資料となるものと考えた。

（2）花粉分析

9面検出の土坑197土坑・226土坑・206土坑）・10面検出の202ピット・12面の289溝・301畦畔・14-2面の399溝の埋土を分析対象とした。古代の遺構面や遺構内埋土、弥生時代の溝内の試料から、弥生時代前期から古代の周辺環境を考える資料とすることを主眼としている。また、土坑内の試料については、大型種子同定とともに、土坑内の埋納物を検討する目的で分析を実施した。

（3）珪藻分析

第12面の289溝、第14-2面の399溝を対象とした。12面の289溝は、調査区の東から西へと微高地を貫いて水田域へといたる水路であり、14-2面の399溝は調査区の南西端の溝で、弥生時代の前期水田に給水していた水路である。これらの水路の珪藻分析を行うことによって、水田使用時と埋没前の堆積環境および古環境を明らかにすることを主眼としている。

（4）大型植物遺体同定分析

中世～古代の206土坑、208土坑、第10面の202ピット、12面の289溝、第14-2面の399溝を対象とした。中世～古代の土坑および古墳時代のピットの埋土の分析については、土坑内の埋納物を推定する手がかりを得る目的と、周辺環境を明らかにする目的で実施した。第12面の289溝は、弥生時代中期の微高地の植生、周辺の植生を復元する目的で、第14-2面の399溝は、池島I期のJ区水田との比較を行う目的と、プラント・オパール、花粉分析などの成果と合わせて、植生分析、環境復元についての資料を得る目的で実施した。

（5）第14-1層・第14-2層の分析

第14-1層と第14-2層を対象に、水田域の植生と水田廃絶後の環境を明らかにする目的、非水田域

の植生と水田廃絶後の環境復元、および水田域と非水田域の比較を目的として、第14-2面の各水田の作土層、非水田域（微高地）の土壤化層から土壤サンプルを採取し、プラント・オパール分析・珪藻分析を実施した。

第14-1層については、資料採取地点の環境が異なると考えられるため、同一時期に形成されたものかどうかは検討が必要である。また、第14-1層上面段階の景観復原では、池島・福万寺遺跡の全域にわたって沼沢地が広がる状態であると考えられている。しかし、この景観復原の元になったものはTP+1.7m以下の地点から得られたデータであり、試料採取地点Cのような高まり上のサンプルは採取されていない。高まり上の第14-1層の堆積環境を探ることは、「沼沢地」の具体的な内容を解明する上で有益であると考えた。

第14-2面の水田については、各水田のプラント・オパールの量を比較する目的で分析を行った。比較試料として微高地の土壤化層（第14-2層）と、水田域の上層である第14-1層についてプラント・オパールの量を測った。

第2節 放射性炭素年代測定

1. はじめに

放射性炭素年代測定（AMS法）は、測定をパレオ・ラボに委託して実施した。作業の実際は、パレオ・ラボAMS年代測定グループ（小林紘一・丹生越子・伊藤茂・廣田正史・瀬谷薫・Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani、中村賢太郎）が実施した。

2. 試料と方法

試料は319杭列・322杭列・380杭列・1001杭列を構成する生材4点であり、いずれも外皮が残存する試料であり、測定部位は最外年輪である。

試料は超音波洗浄、酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1N，塩酸：1.2N）を施して調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、14C年代、暦年代を算出した。

3. 結果

表4に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}C$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した14C年代、14C年代を暦年代に較正した年代範囲を、図71に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

14C年代の暦年較正には0xCal3.10（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、0xCalの確率法を使用して算出された14C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2 σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は14C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

参考文献

中村俊夫 2000 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C年代, 3-20.

Ramsey, C.B. 1995 Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.

Ramsey, C.B. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hoog, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Ramsey, C.B., Reimer, R.W., Remmele, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029-1058.

(株式会社 パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 年代範囲	2 σ 年代範囲
PLD-8331 試料No. : 319-25	-27.65 \pm 0.21	2063 \pm 19	2065 \pm 20	110BC (68.2%) 40BC	170BC (93.3%) 20BC 10BC (2.1%) O AD
PLD-8332 試料No. : 322-7	-25.31 \pm 0.18	2092 \pm 23	2090 \pm 25	170BC (68.2%) 50BC	180BC (95.4%) 40BC
PLD-8333 試料No. : 380-3	-27.94 \pm 0.13	2139 \pm 18	2140 \pm 20	205BC (57.8%) 160BC 135BC (10.4%) 115BC	350BC (11.2%) 310BC 210BC (84.2%) 100BC
PLD-8334 試料No. : 1001-8	-27.58 \pm 0.11	2115 \pm 18	2115 \pm 20	180BC (68.2%) 105BC	200BC (95.4%) 50BC

表 4 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

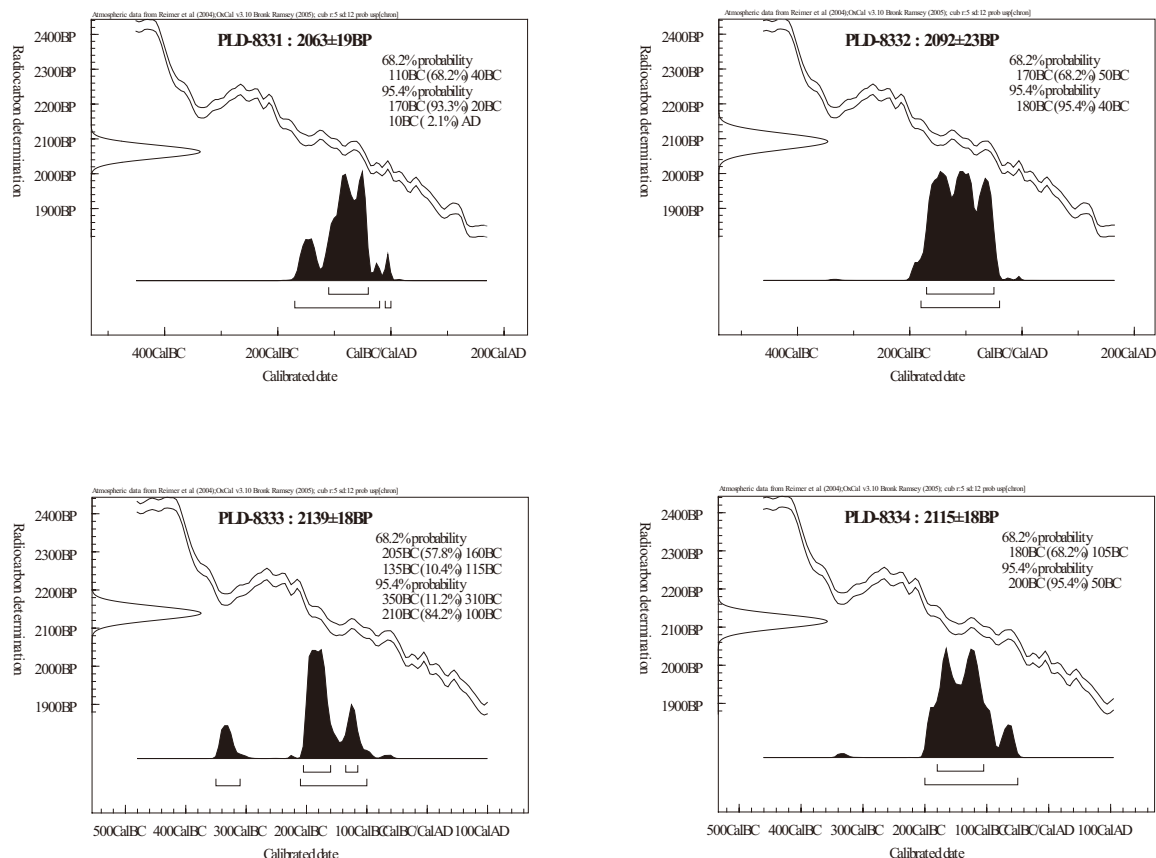


図 72 暦年較正結果

第3節 花粉分析

1. はじめに

花粉分析は株式会社古環境研究所に委託して実施した。分析の対象とした古代、古墳時代の土坑内埋土や土層の中には乾燥した環境下であり、必ずしも良好に花粉が残存していない試料もあった。

2. 分析方法

花粉の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎
- 2) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 4) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す
- 5) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行う。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行う。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示す。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

3. 分析結果

（1）分類群

産出した分類群は、樹木花粉30、樹木花粉と草本花粉を含むもの5、草本花粉24、シダ植物孢子3形態の計62である。花粉数が200個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図72に示す。なお、200個未満であっても100個以上の試料については傾向をみるため参考に図示した。主要な分類群の顕微鏡写真を写真29に示す。また、寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。

（2）花粉群集の特徴

1) 197土坑

下位より花粉構成と花粉組成の変化の特徴を記載する。

試料197-3では、樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉では、イネ科が高率に産出し、カヤツリグサ科、ヨモギ属などが伴われる。樹木花粉では、スギ、マツ属複雑管束亜属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、コナラ属アカガシ亜属、シイ属などが産出し、シダ植物孢子のミズワラビが産出する。試料197-2と試料197-1では、花粉密度が低くなり、樹木花粉の占める割合が高くなり、コナラ属アカガシ亜属、シイ属、クリが増加する。草本花粉では、イネ科にイネ属型が伴われるようになり、ミズアオイ属、オモダカ属が産出し、クワ科-イラクサ科が増加する。試料197-1では、ソバ属が産出する。

2) 226土坑

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。イネ科（イネ属型を含む）が優占し、ヨモギ属、カヤツ

リグサ科などが伴われる。樹木花粉では、下位ではコナラ属アカガシ亜属、シイ属を主に、コナラ属コナラ亜属、クリなどが伴われ、上位ではイチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科、スギ、マツ属複維管束亜属などが増加する。

3) 206土坑および第11b層

試料206-2と試料206-1では、花粉密度がやや高くなり、樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉では、イネ科（イネ属型を含む）が高率に産出し、カヤツリグサ科、ヨモギ属などが伴われる。樹木花粉では、スギ、イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科、シイ属、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属などが産出する。c4第11b層は花粉密度が極めて低く、ほとんど検出されない。

e4の第11b層は花粉密度が低く、シダ植物胞子の占める割合が3割を超える。樹木花粉の占める割合が草本花粉より高い。樹木花粉では、シイ属、コナラ属アカガシ亜属、クリ、スギ、コナラ属コナラ亜属などが産出する。草本花粉では、イネ科（イネ属型を含む）、ヨモギ属、カヤツリグサ科などが産出する。

4) 202ピット

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉では、イネ科（イネ属型を含む）が高率に産出し、ヨモギ属、カヤツリグサ科、アブラナ科、セリ亜科などが伴われ、ササゲ属などが産出する。樹木花粉では、シイ属、スギ、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属、イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科、マツ属複維管束亜属などが低率に産出する。

5) 289溝

樹木花粉の占める割合が草本花粉よりわずかに高い。樹木花粉では、イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科、コナラ属アカガシ亜属、スギを主に、シイ属、コナラ属コナラ亜属、クリ、マツ属複維管束亜属などが産出する。草本花粉では、イネ科（イネ属型を含む）が優占し、ヨモギ属、カヤツリグサ科などが伴われる。

6) 301畦畔

樹木花粉の占める割合が草本花粉より高い。樹木花粉では、イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科、スギ、コナラ属アカガシ亜属を主に、クリ、シイ属、コナラ属コナラ亜属などが産出する。草本花粉では、イネ科（イネ属型を含む）が優占し、カヤツリグサ科、ヨモギ属などが伴われる。

7) 399溝

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉では、ヨモギ属、カヤツリグサ科、イネ科などが優占する。樹木花粉では、イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科、スギ、コナラ属アカガシ亜属が比較的多く、クリ、シイ属、コナラ属コナラ亜属などが伴われる。

4. 推定される植生と環境

(1) 197土坑

下位の試料197-3では、イネ科が高率に産出し、コナラ属アカガシ亜属、シイ属が低率で、他の花粉群集とは異なる。イネ科を主にカヤツリグサ科、ヨモギ属の草本が生育し、スギ、イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科、マツ属複維管束亜属の針葉樹がやや多く生育していたとみられる。試料197-2と試料197-1では、イネ属型を伴うイネ科が優占し、ミズアオイ属、オモダカ属が伴われることから、周辺に水田の分布が示唆される。人為地に生育するカナムグラ等のクワ科ーイラクサ科も生育していた。試料197-1では、ソバ属の産出よりソバなどの畑作物も推定される。周辺地域ではコナラ属アカガシ亜属、シイ属の照葉樹を主に、イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科、スギの針葉樹、クリ、コナラ属アカガシ亜属

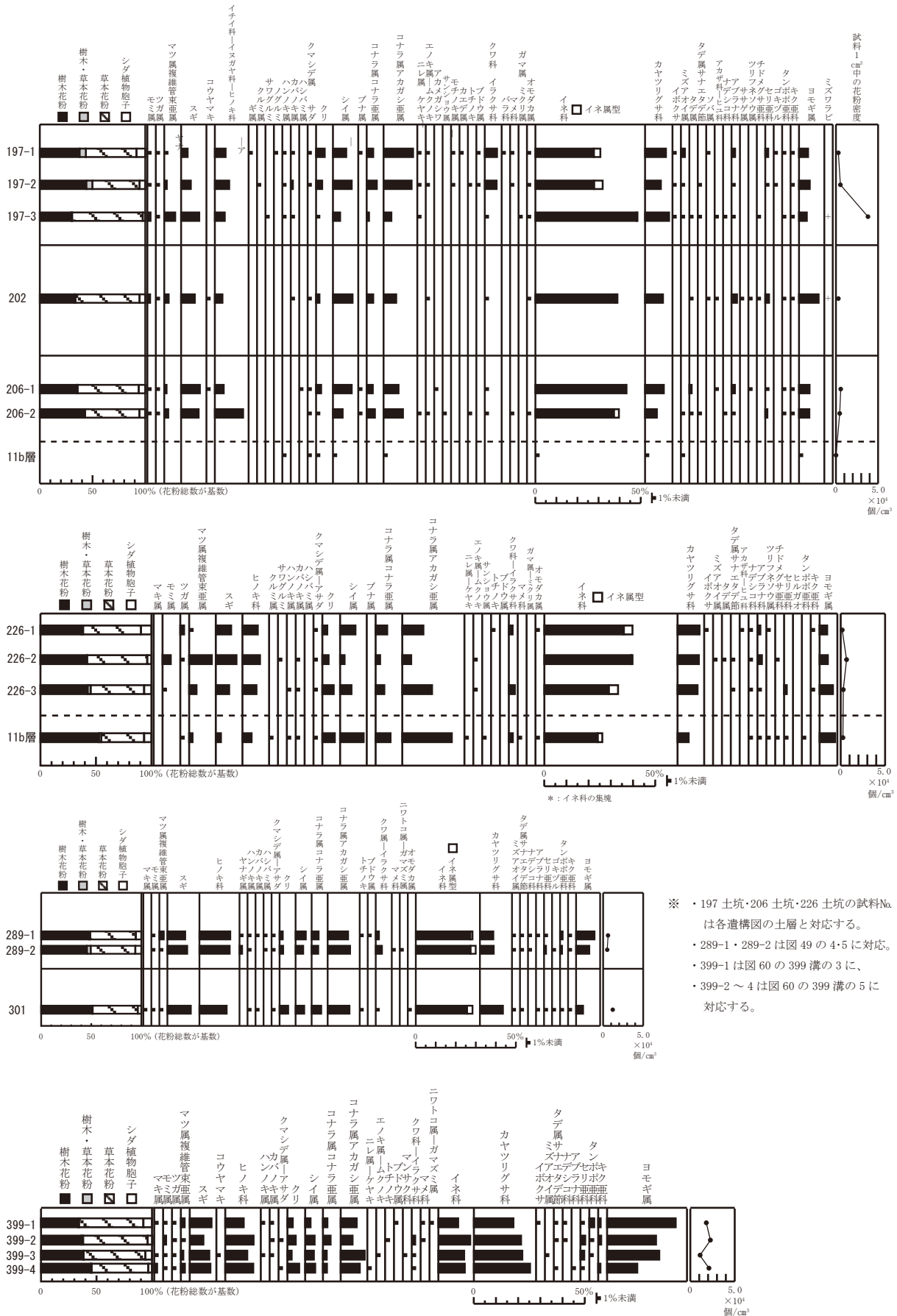


図 73 花粉ダイアグラム

の落葉広葉樹の森林が分布していた。

(2) 226土坑

イネ科（イネ属型を含む）が優占し、ヨモギ属、カヤツリグサ科などが伴われることから、周辺での水田の分布が示唆される。周辺地域にはコナラ属アカガシ亜属を主とする照葉樹林が分布し、イチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科、スギ、シイ属、コナラ属コナラ亜属、マツ属複雑管束亜属などの樹木が伴われる。

(3) 206土坑および第11b層

試料206-2と試料206-1では、イネ属型を含むイネ科が優占し、ヨモギ属、カヤツリグサ科などが伴われることから、周辺での水田の分布が示唆される。ソバ属が産出し、ソバなどの畑の分布が推定される。周辺地域にはスギ、イチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科の針葉樹、シイ属、コナラ属アカガシ亜属の照葉樹の森林が分布していた。c4の第11b層では花粉がほとんど検出されず、乾燥した環境や淘汰の著しい環境や堆積速度の速い環境が考えられる。e4の第11b層からは花粉密度が低いものの、樹木花粉の占める割合が高い。周辺にはシイ属、コナラ属アカガシ亜属、クリ、スギ、コナラ属コナラ亜属の照葉樹を主に、落葉広葉樹、針葉樹を伴う森林が分布していた。また、イネ科（イネ属型を含む）、ヨモギ属、カヤツリグサ科などの産出から、水田も分布していたと推定される。

(4) 202土坑

イネ属型を含むイネ科が優占し、ヨモギ属、カヤツリグサ科、アブラナ科、セリ亜科などが伴われる。周辺での水田の分布が示唆される。ササゲ属が産出し、マメなどの畑の分布も推定される。周辺地域にはシイ属、スギ、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属、イチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科、マツ属複雑管束亜属などの照葉樹、針葉樹、落葉広葉樹の森林が分布していた。

(5) 289溝

草本では、イネ科（イネ属型を含む）が優占し、ヨモギ属、カヤツリグサ科などが伴われ、水田の分布が示唆される。森林要素ではイチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科、スギの針葉樹とコナラ属アカガシ亜属、シイ属の照葉樹が多く生育する。

(6) 301畦畔基底部

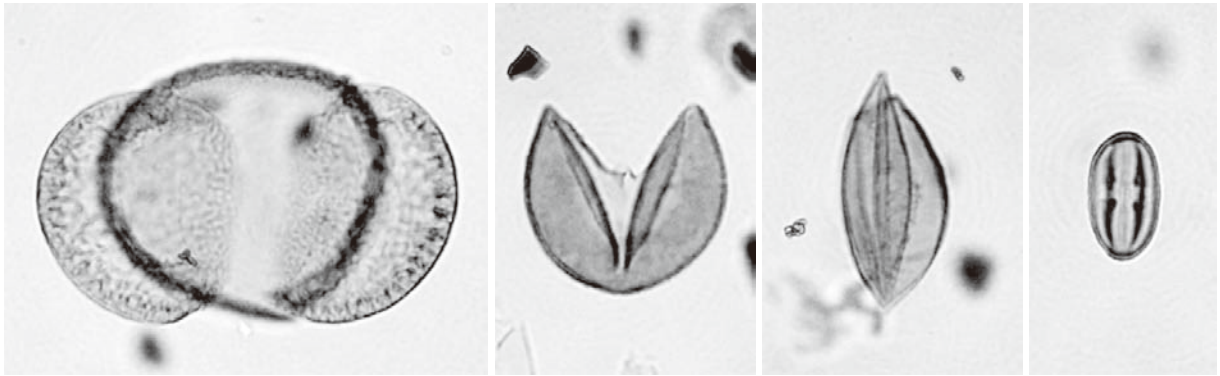
草本では、イネ科（イネ属型を含む）が優占し、ヨモギ属、カヤツリグサ科などが伴われ、水田の分布が示唆される。森林要素ではイチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科、スギの針葉樹とコナラ属アカガシ亜属、シイ属の照葉樹が多く、コナラ属コナラ亜属、クリの落葉広葉樹が伴われる。

(7) 399溝

周辺にはヨモギ属、カヤツリグサ科、イネ科を主とする草本が多く生育していた。カヤツリグサ科が多いことから湿地の環境が推定される。上位に向かってヨモギ属が増加し、相対的な乾燥化が行われた。森林では、コナラ属アカガシ亜属、シイ属の照葉樹林が分布するが、イチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科、スギの針葉樹林が多い。

5. まとめ

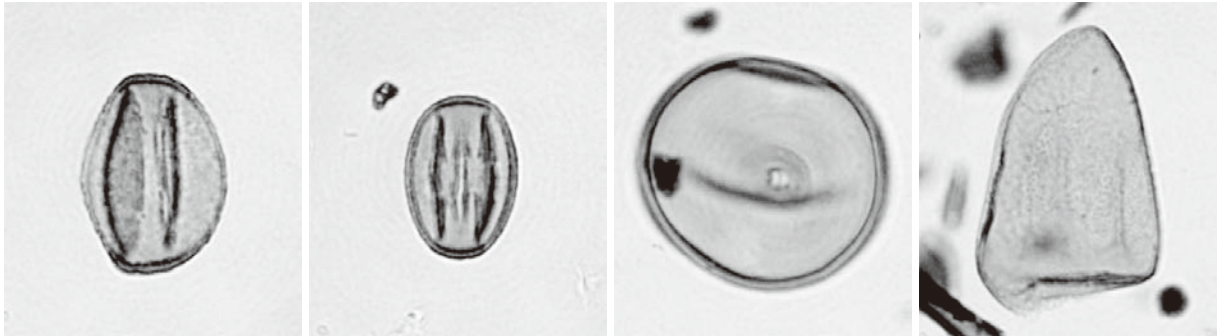
下位より14-2面（14-2層：弥生前期～縄文晩期）の399溝では、カヤツリグサ科、ヨモギ属、イネ科の草本が多く、周辺に湿地の分布が示唆された。森林ではスギ、イチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科の針葉樹が安定して多いのが特徴である。12面（12層：弥生後期）の289溝、301畦畔基底部では針葉樹が多い特徴以外に、イネ科が多くなり、イネ属型の産出から水田が分布するようになる。10面検出（10



1 マツ属複維管束胚属

2 スギ

3 イチイ科-イヌガヤ科
4 シイ属
-ヒノキ科

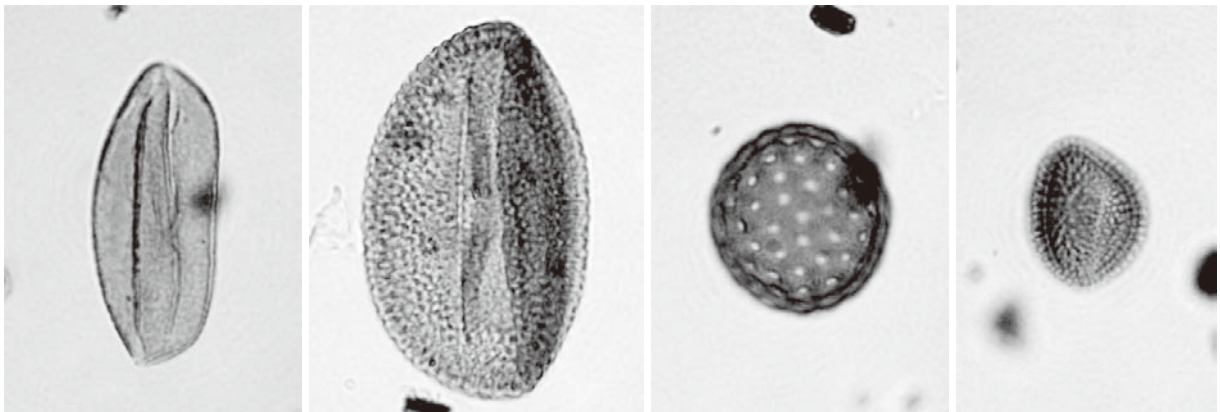


5 コナラ属コナラ胚属

6 コナラ属アカガシ胚属

7 イネ属型

8 カヤツリグサ科

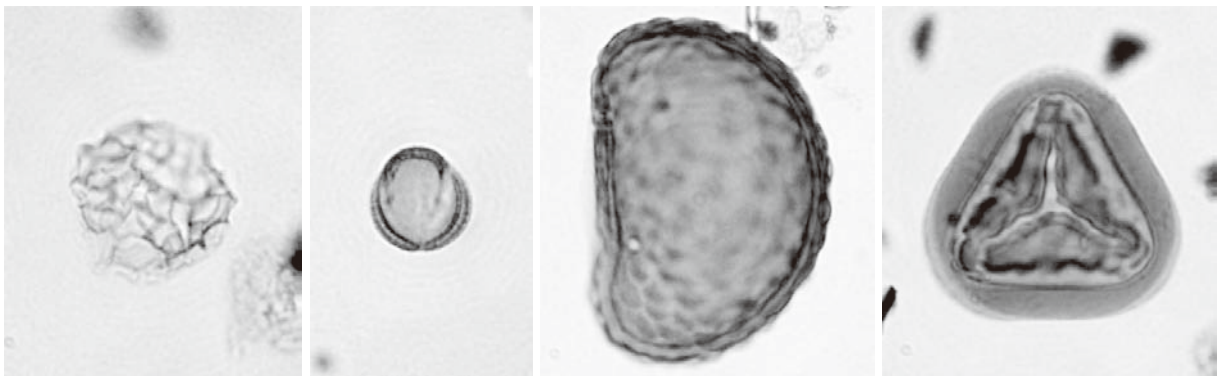


9 ミズアオイ属

10 ソバ属

11 アカザ科-ヒユ科

12 アブラナ科



13 ササゲ属

14 ヨモギ属

15 シダ植物単条溝孢子

16 シダ植物三条溝孢子

— 10 μm

写真 29 花粉・孢子写真

層：古墳時代)の202ピットでは、周辺で水田の分布が想定される。9面検出(9層：古代)の197土坑、206土坑、226土坑では同様に水田の分布が示唆されるほかに、森林要素において針葉樹がやや減少し、コナラ属アカガシ亜属とシイ属の照葉樹林が多くなる傾向が示された。コナラ属アカガシ亜属とシイ属の照葉樹林要素は、土坑および層準によってばらつきがあり、時期による変遷と偏在が著しかったと考えられる。この時期にはソバ属やササゲ属の畑の分布も示唆される。

参考文献

- 金原正明 1993 花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p. 248-262.
- 島倉巳三郎 1973 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.
- 中村 純 1973 花粉分析. 古今書院, p. 82-110.
- 中村 純 1974 イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として. 第四紀研究, 13, p. 187-193.
- 中村 純 1977 稲作とイネ花粉. 考古学と自然科学, 第10号, p. 21-30.
- 中村 純 1980 日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.
- Asai, K. & Watanabe, T. 1995 Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2) Saprophyllous and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, p. 35-47.
- K. Krammer · H. Lange-Bertalot 1986-1991 *Bacillariophyceae* · 1-4.

(株式会社 古環境研究所)

第4節 珪藻分析

1. はじめに

珪藻分析は株式会社古環境研究所に委託して実施した。採取した資料は第12面の289溝、第14-2面の399溝の土壌である。以下、古環境研究所の分析報告書による。

2. 分析方法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

- 1) 試料から1cm³を秤量
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温反応させながら1晩放置
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドと薬品を水洗(5~6回)
- 4) 残渣をマイクロピペットでカバーガラスに滴下して乾燥
- 5) マウントメディアによって封入し、プレパラート作成
- 6) 検鏡、計数

検鏡は、生物顕微鏡によって600~1500倍で行う。計数は珪藻被殻が100個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行う。

3. 分析結果

(1) 分類群

産出した珪藻は、中-真塩性種(汽-海水生種)2分類群、貧-中塩性種(淡-汽水生種)1分類群、貧塩性種(淡水生種)68分類群である。表1に分析結果を示し、珪藻総数を基数とする百分率を算定した珪藻ダイアグラムを図73に示す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性はLowe(1974)や渡辺(2005)等の記載による。陸生珪藻は小杉(1986)、環境指標種群、淡水生種は安藤(1990)による。また、主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

(2) 珪藻群集の特徴

1) 289溝

珪藻密度は低く、陸生珪藻の占める割合が高く、次いで流水不定性種が多い。陸生珪藻では、Hantzschia amphioxys、Pinnularia schroederii、Navicula muticaが優占する。流水不定性種では、Gyrosigma spp.、Amphora copulata、Cymbella cuspidata、Caloneis lautaなどが産出する。真・好流水性種では、Gomphonema parvulumや、沼沢湿地付着生環境指標種群のNavicula elginensis、真・好止水性種では、Fragilaria construensなどがわずかに産出する。

2) 399溝

陸生珪藻と流水不定性種で占められ、真・好止水性種が低率に産出する。陸生珪藻では、Pinnularia schroederii、Navicula mutica、Hantzschia amphioxysが多く産出する。流水不定性種では、Amphora copulata、Caloneis lauta、Cymbella cuspidataや、沼沢湿地付着生環境指標種群のEunotia praerupta、Eunotia pectinalisが産出する。真・好止水性種では、Aulacoseira spp.、Navicula americana、Pinnularia majorや、沼沢湿地付着生環境指標種群のEunotia minor、Pinnularia acrosphaeria、Stauroneis phoenicenteronなどがわずかに産出する。

4. 珪藻分析から推定される堆積環境

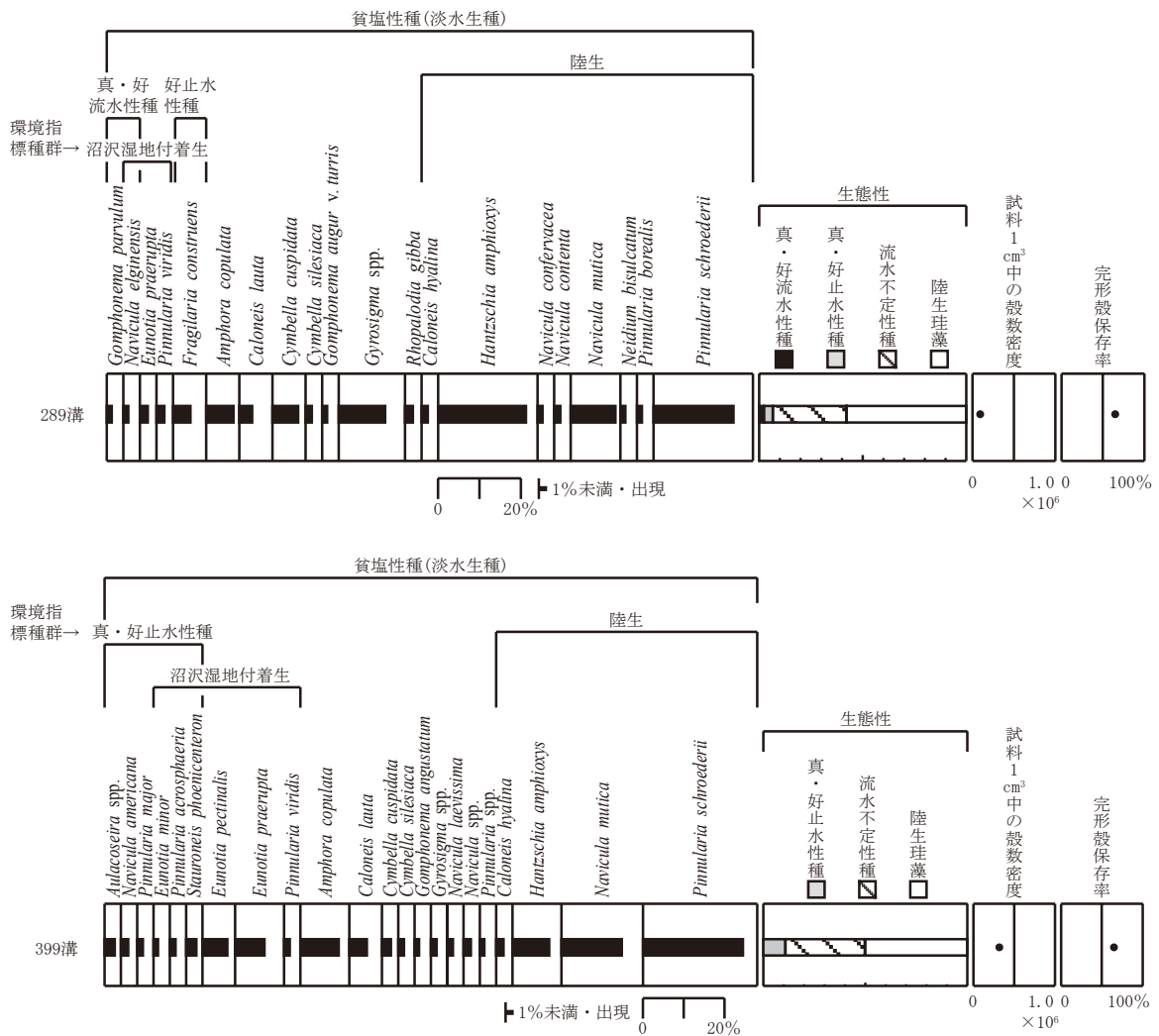
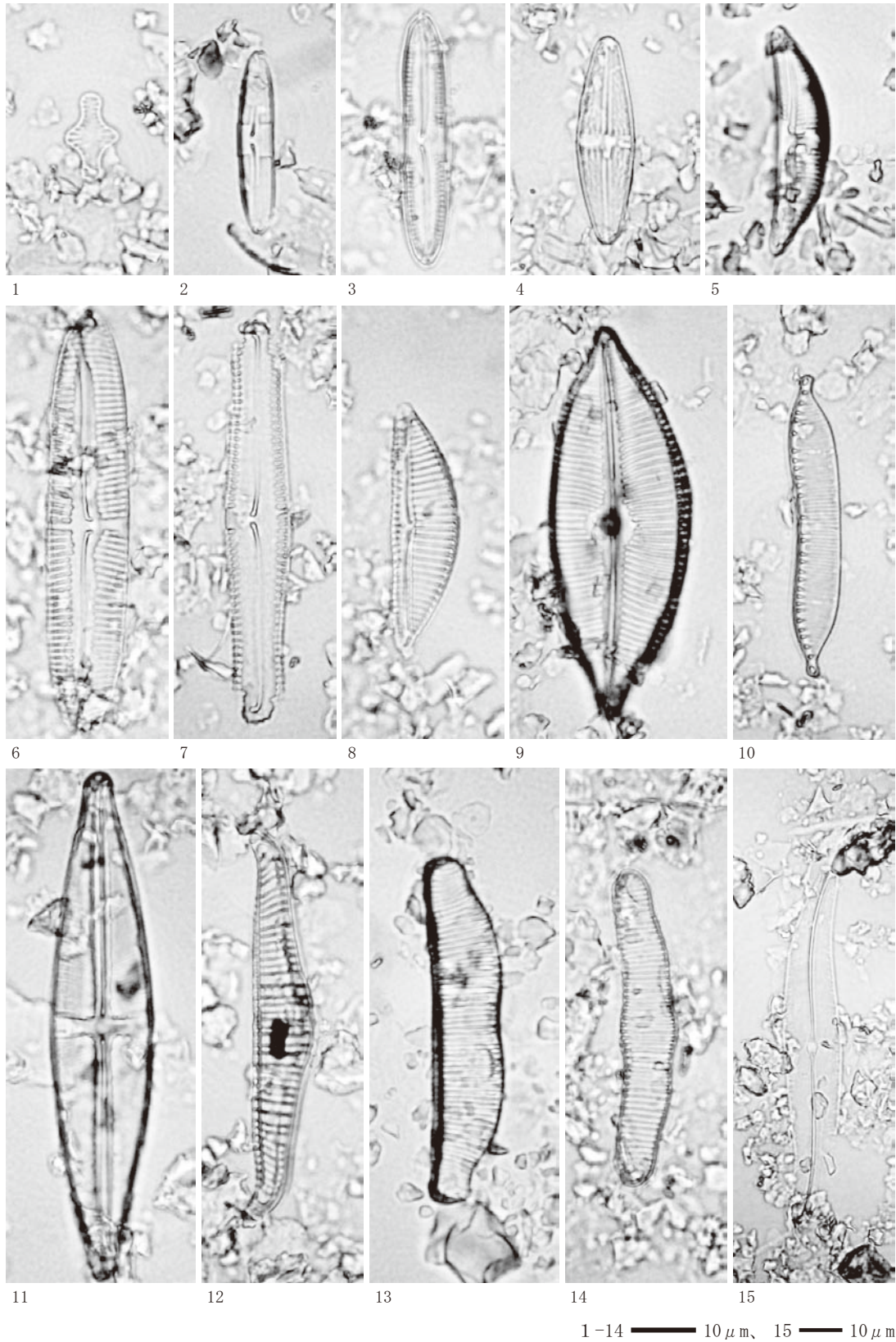


図 74 珪藻分析ダイアグラム



1. *Fragilaria construens* 2. *Caloneis lauta* 3. *Pinnularia schoederii* 4. *Navicula mutica* 5. *Amphora copulata*
 6. *Pinnularia viridis* 7. *Pinnularia acrosphaeria* 8. *Cymbella silesiaca* 9. *Cymbella cuspidata* 10. *Hantzschia amphioxys*
 11. *Stauroneis phoenicenteron* 12. *Rhopalodia gibba* 13. *Eunotia praerupta* 14. *Eunotia pectinails* 15. *Gyrosigma* spp.

写真 30 珪藻写真

(1) 289溝

珪藻密度は低く、陸生珪藻の占める割合が高く、次いで流水不定性種が多く、真・好流水性種、真・好止水性種、沼沢湿地付着生環境指標種群が伴われる。289溝は湿った環境が主であるが、部分的あるいは時期によって、浅く淀みつつ流れる状況であったと考えられる。

(2) 399溝

陸生珪藻と流水不定性種で占められ、真・好止水性種が低率に出現し、沼沢湿地付着生環境指標種群も含まれる。湿った環境が主であるが、不安定に淀み水生植物が生育していた。真・好流水性種が出現せず、流水は極めて一時期であったと考えられる。

参考文献

- Asai, K. & Watanabe, T. 1995 Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, p. 35-47.
- K. Krammer・H. Lange-Bertalot 1986-1991 *Bacillariophyceae*・1-4.
- 安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. *東北地理*, 42, p. 73-88.
- 伊藤良永・堀内誠示 1991 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. *珪藻学会誌*, 6, p. 23-45.
- 小杉正人 1986 陸生珪藻による古環境解析とその意義—わが国への導入とその展望—. *植生史研究*, 第1号, 植生史研究会, p. 29-44.
- 小杉正人 1988 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用. *第四紀研究*, 27, p. 1-20.
- 渡辺仁治 2005 淡水珪藻生態図鑑 群集解析に基づく汚濁指数DAI_{po}, pH耐性能. 内田老鶴圃, pp. 666.

(株式会社 古環境研究所)

第5節 大型植物遺体同定分析

1. はじめに

大型植物遺体同定分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託して実施した。以下、報告書からの引用である。なお、試料の名称は各遺構図の層名に対応する。

2. 分析方法

土壌試料は、200cc (289溝埋土2は150cc) を水に浸し、粒径0.5mmの篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な種実などの大型植物遺体を抽出する。

大型植物遺体を双眼実体顕微鏡下で観察する。現生標本および石川(1994)、中山ほか(2000)等との対照から、種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。100個以上の炭化材は容量(cc)を求める。実体顕微鏡下による区別が困難な複数種間は、ハイフォンで結んで表示する。

3. 分析結果

(1) 大型植物遺体の産状

結果を表5に示す。全資料を通じて、木本1分類群(カジノキ属)1個、草本17分類群(イバラモ属、イネ科、ホタルイ属、カヤツリグサ科、イボクサ、ミズアオイ属、イラクサ科、タデ属、キジムシロ属—ヘビイチゴ属—オランダイチゴ属、カタバミ属、エノキグサ、スマレ属、セリ科、イヌコウジュ属、シロネ属、ナス科、カタサブロウ)522個の種実が検出された。その他、ジャジクモ科の卵胞子、炭化材、昆虫、高師小僧(褐鉄鉦)が確認された。大型植物遺体群集はいずれの試料も人里植物に属す

る草木主体の種類構成で、水生植物のイバラモ属、ホタルイ属（一部）、イボクサ、ミズアオイ属、シャジクモ科や、やや湿った場所に生育するセリ科、シロネ属、タカサブロウなどが確認された。以下に、時代別に大型植物遺体の産出状況を記す。

・古代：206土坑・208土坑

各土坑を通じて、木本のカジノキ属1個、草本10分類群（イバラモ属、イネ科、ホタルイ属、カヤツリグサ科、イボクサ、ミズアオイ属、タデ属、エノキグサ、シロネ属、タカサブロウ）184個が確認された。産出量は土坑間で差異があり、208土坑において種類・量ともに多産した。

・古墳時代：202ピット

草本2分類群（ホタルイ属、エノキグサ）、昆虫が確認された。

・弥生時代中期：289溝

大型植物遺体群集は、4・5層とも同様な産状を示す。木本由来の分類群が確認されず、草本由来の分類群からなり、ホタルイ属、カヤツリグサ科、イボクサ、イラクサ科、カタバミ属、エノキグサ、スマレ属、セリ科、ナス科の9分類群256個が産出した。

・弥生時代前期：399溝

大型植物遺体群集は、加工時形成層中が多産する。産出分類は、草本植物由来の分類群からなり、ホタルイ属、カヤツリグサ科、イボクサ、イラクサ科、キジムシロ属—ヘビイチゴ属—オランダイチゴ属、エノキグサ、セリ科、イヌコウジュ属の8分類群112個が産出した。

（2）産出分類群の形態学的特徴

〈木本〉

・カジノキ属（*Broussonetia*）クワ科

種子の破片が検出された。灰黄褐色、径2,2mm、厚さ1mm程度の直方体状広倒卵体。一側面は狭倒卵形で、他方は稜になって薄

分類群	部位	上段:試料番号 中段:遺構名 下段:分析層位・試料名							
		試料①				試料②		試料③	試料④
		206土坑	208-1土坑	208-3土坑	202ピット	289溝		399溝	399溝
					4層	5層	3・4層	5層	
木本	カジノキ属	種子	—	—	1	—	—	—	—
草本	イバラモ属	種子	—	9	—	—	—	—	—
	イネ科	果実	—	1	—	—	—	—	—
	ホタルイ属	果実	—	55	5	1	—	1	1
	カヤツリグサ科	果実	1	—	—	—	1	6	34
	イボクサ	種子	—	17	1	—	1	3	15
	ミズアオイ属	種子	—	2	—	—	—	—	—
	イラクサ科	果実	—	—	—	—	51	62	1
	タデ属	果実	—	23	3	—	—	—	—
	キジムシロ属—ヘビイチゴ属—オランダイチゴ属	核	—	—	—	—	—	1	6
	カタバミ属	種子	—	—	—	—	1	5	—
	エノキグサ	種子	—	30	14	4	3	2	2
	スマレ属	種子	—	—	—	—	1	1	—
	セリ科	果実	—	—	—	—	70	43	1
	イヌコウジュ属	果実	—	—	—	—	—	—	2
	シロネ属	果実	—	1	—	—	—	—	—
	ナス科	種子	—	—	—	—	1	13	—
タカサブロウ	果実	—	17	—	—	—	—	—	
シャジクモ科	卵胞子	—	3	—	—	—	—	—	
炭化材		10	1	12	—	1.5cc	1cc	1cc	2cc
昆虫		1	15	4	1	5	40	37	11
高師小僧(褐鉄鉱)		—	—	—	—	—	3	—	—
	分析量	—	—	—	—	150cc (211.1g)	200cc (280g)	200cc (311.2g)	200cc (313.6g)

表5 大型植物遺体分析結果

い。基部に突起を持つ。表面には疣状の微細な隆起が散在する。

〈草本〉

・イバラモ属 (Najas) イバラモ科

種子が検出された。淡-茶褐色、針状長楕円体。長さ2-2.2mm、径0.6mm程度。両端は細く尖る。種皮は薄く透き通り、表面には縦長の網目模様が縦列する。

・イネ科 (Gramineae)

果実が確認された。灰褐色、長さ3mm、径1.7mm程度の半狭卵形で背面は丸みがあり腹面は偏平。果皮表面には微細な縦長の網目模様が配列する。

・ホタルイ科 (Scirpus) カヤツリグサ科

果実が検出された。黒褐色、径2mm、厚さ1.3mm程度の片凸レンズ状広倒卵体。果実頂部は尖る。背面正中線上は鈍稜。基部は切形で、刺針状の花被片が伸びる個体がみられる。果皮表面は光沢があり、不規則な波状の横皺状模様が発達する。

・カヤツリグサ科 (Cyperaceae)

果実が検出された。ホタルイ属以外の形態上差異のある複数種を一括した。淡-黒褐色、径1.2-3mm程度の三稜またはレンズ状倒卵体。頂部の柱頭部分は伸び、基部は切形。果皮表面は平滑または微細な網目模様がある。長さ1.2mm、径0.7mm程度の三稜状倒卵体で表面には微細な疣状突起が密布する、カヤツリグサ属 (Cyperus) に似る個体や、径3mm程度の三稜状倒卵体で頂部の柱頭部分がわずかに伸び、表面には微細な網目模様がある、スゲ属 (Carex) に似る個体などを含む。

・イボクサ (Aneilema Keisak Hassk) ツユクサ科イボクサ属

種子が検出された。淡褐色、長さ1.5mm、径1.5-3mm程度の半横長楕円体。背面は丸みがあり、腹面は平ら。臍は線状で腹面の正中線上にあり、胚は一側面の浅い円形の凹みに存在する。種皮は柔らかく、表面には円形の小孔が散在する。

・ミズアオイ属 (Monochoria) ミズアオイ科

種子が検出された。淡褐色、長さ1mm、径0.6mm程度の楕円体。種皮は薄く透き通り、柔らかい。表面には10本程度の太い縦隆条と、その間に細い横隆条が密に配列する。

日本に分布するミズアオイ属は、ミズアオイとコナギの2種があるが、実体顕微鏡下の観察による区別は困難である。

・イラクサ科 (Urticaceae)

果実が検出された。淡黄褐色、径1-1.3mm程度の両凸レンズ状非対称広倒卵体で両端は尖る。果皮は薄く表面は粗面。

・タデ属 (Polygonum) タデ科

果実が検出された。形態上差異のある複数種を一括した。黒褐色、長さ2.5mm、径1.5mm程度の丸みのある三稜状卵体。頂部は尖り、基部は切形で萼が残る。果皮表面はやや平滑で光沢がある、ハナタデやイヌタデに似る個体が多く確認された。

・キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属 (Potentilla-Duchesnea-Fragaria) バラ科

核 (内果皮) が検出された。淡灰褐色、径1mm程度のやや偏平な腎形。内果皮は暑く硬く、表面は粗面で数本の隆条が斜上する。

・カタバミ属 (Oxalis) カタバミ科

種子が検出された。黒褐色、長さ1.5mm、幅1mm程度の偏平な倒卵形。基部は尖る。種皮は柔らかく、縦方向に裂けやすい。表面には4-7列の肋骨状横隆条が配列する。

・エノキグサ (Acalypha australis L.) トウダイグサ科エノキグサ属

種子が検出された。黒褐色、長さ1.8mm、径1.4mm程度の倒卵体。基部はやや尖り、Y字状の筋がある。種皮は薄く硬く、表面には粒状の微細な凹みが密布しざらつく。

・スミレ属 (Viola) スミレ科

種子が検出された。淡灰褐色、長さ1.2mm、径1mm程度の倒卵体。基部は尖りやや湾曲する。頂部は円形の臍点がある。表面には

縦方向に走る1本の縫合線がある。種皮は薄く、種皮表面は細い縦筋が走りざらつく。種皮内面は横長の細胞が配列する。

・セリ科 (Umbelliferae)

果実が検出された。灰黄褐色、長さ2.5mm、幅2mm、厚さ0.8mm程度のやや偏平な楕円体。果皮はスポンジ状で、腹面と背面には数本の幅広い稜があり、その間に半透明で茶褐色の油管が配列する。

・イヌコウジュ属 (Mosla) シソ科

果実が検出された。淡-灰褐色、径1mm程度の倒広卵体。基部には臍点があり、舌状にわずかに突出する。果皮はやや厚く硬く、表面は浅く大きく不規則な網目模様がある。

・シロネ属 (Lycopus) シソ科

果実が検出された。灰褐色、長さ1.5mm、径1mm程度の三稜状広倒卵体。背面は平らで、両側にある幅0.3mm程度の淡褐色、スポンジ状の翼を欠損する。腹面の正中線上は鈍稜をなし、基部は切形で長楕円形の臍がある。

・ナス科 (Solanaceae)

種子が検出された。淡灰褐色、径1.4-1.8mm程度の歪な腎臓形で偏平。基部のくびれた部分に臍がある。種皮表面には微細な星形状網目模様が臍から同心円状に発達する。

・タカサブロウ (Eclipta prostrate (L.) L.) キク科タカサブロウ属

果実が検出された。灰褐色、長さ2.8mm、径1.5mm程度のやや偏平な倒狭皮針体。両端は切形、表面はスポンジ状で、背腹両面には瘤状突起が分布する。縁には翼があり、水に浮きやすい。

〈シャジクモ類〉

・シャジクモ科 (Characeae)

卵孢子が検出された。黒褐色、長さ0.7mm、径0.5mm程度の楕円体。孢子壁は薄く弾力があり、表面には鱗状の隆起が螺旋形に配列する。

4. 各時期の大型植物化石群集の特徴と古植生について

(1) 弥生時代前期の399溝埋土 (試料③・④)

試料③と資料④の大型植物遺体群集は同様の分類群からなり、水湿地のホタルイ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属、エノキグサ、セリ科、イヌコウジュ属からなる。これらは当時の溝内およびその集水域や溝近辺の植生を構成する要素であったとみられる。また、木本類がまったく産出しないことを考え合わせると、溝周辺は開けた場所であったことが窺える。まお、大型植物遺体の産出量が試料⑤で減少しているが、これは堆積環境の変化に起因する可能性が高い。

(2) 弥生時代中期の289溝埋土 (試料③)

289溝は第12層形成期に構築された溝である。分析を行った溝埋土の試料③は擾乱された砂混じり泥質堆積物からなり、機能時の堆積物と推定される。試料③の大型植物遺体群集の産状は類似している。木本由来の分類群がまったく確認されず、草本由来の分類群からなり、ホタルイ属、カヤツリグサ科、イボクサ、イラクサ科、カタバミ属、エノキグサ、スミレ属、セリ科、ナス科といった水湿地生および人里植物に属する分類群からなる。弥生時代中期の289溝周辺は開けた領域であり、溝内およびその集水域にホタルイ属やイボクサなどの水湿地生植物、溝周辺にはカタバミ属などの草本植物が生育していたと考えられる。

(3) 古墳時代の202土坑の埋土 (試料①)

草本のホタルイ属、エノキグサが産出した。開けた環境にあると考えられるが、土坑埋土であるため、人為的攪乱の影響が大きいと考えられる。

(4) 古代の206土坑・208土坑埋土 (試料①)

産出した大型植物遺体はの産状は、土坑間で差異があるが、これは埋土の成因の違いによる遺体群集の形成過程(タフォノミー)の違いに起因する可能性が高い。産出した分類群は、木本のカジノキ属、草本のイバラモ属、イネ科、ホタルイ属、カヤツリグサ科、イボクサ、ミズアオイ属、タデ属、エノキグサ、シロネ属、タカサブロウであり、草本由来が圧倒的に多い。

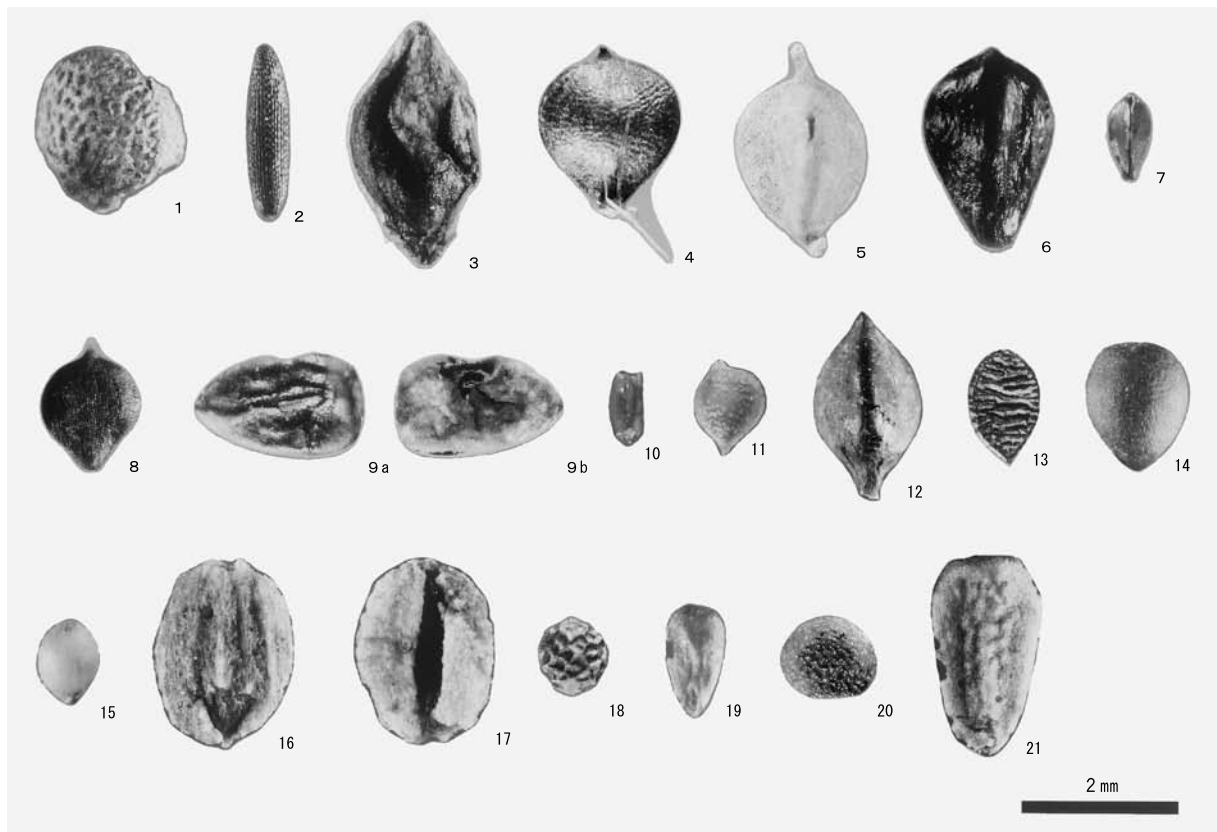
208土坑から一個のみ確認された木本種実のカジノキ属は、森林の林縁部などの比較的明るい林地を好み、伐採地や崩壊地などに先駆的に侵入する落葉広葉樹である。当時も調査区近辺に育成していたものと考えられる。なお、カジノキ属は果実が食用可能で樹皮は紙や布に利用可能な有用植物であることから、当時利用された可能性もある。

草本植物の分類群は、人里植物に属する分類群が多いことから、調査区周辺域は明るく開けた草地環境で、人為的攪乱の影響が強かったことが考えられる。また、イバラモ属、ホタルイ属、イボクサ、ミズアオイ属、シロネ属、タカサブロウなどの種実や、シャジクモ科の卵胞子などの水生および湿地生植物も確認される。このうち、ミズアオイ属やタカサブロウなどは水田雑草の種類でもある。

引用文献

石川茂雄 1994『原色日本植物種子写真図鑑』 石川茂雄図鑑刊行委員会 328p.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志 2000『日本植物種子図鑑』 東北大学出版会 642p.



- | | | | |
|----------------------|-----------------------|----------------------|-----------------------|
| 1: カジノキ属種子 (208 土坑) | 6: カヤツリグサ科果実 (399 溝) | 11: イラクサ科果実 (289 溝) | 16: セリ科果実 (289 溝) |
| 2: イバラモ属種 (208 土坑) | 7: カヤツリグサ科果実 (399 溝) | 12: タデ属果実 (208 土坑) | 17: イヌコウジュ属果実 (399 溝) |
| 3: イネ科果実 (208 土坑) | 8: カヤツリグサ科果実 (399 溝) | 13: カタバミ属種子 (289 溝) | 18: シロネ属果実 (208 土坑) |
| 4: ホタルイ属果実 (208 土坑) | 9: イボクサ科種子 (208 土坑) | 14: エノキグサ種子 (208 土坑) | 19: ナス科種子 (289 溝) |
| 5: カヤツリグサ科果実 (399 溝) | 10: ミズアオイ属種子 (208 土坑) | 15: スミレ属種子 (289 溝) | 20: タカサブロウ果実 (208 土坑) |

写真 31 種実写真

第6節 第14層の分析（プラント・オパール分析・珪藻分析・種実同定分析）

1. 試料

試料の採取地点は、水田域のある調査区南西部で2箇所（A・B）、高まり地形の調査区東部で1箇所（C）、そして第14-2面で検出した各水田から試料を採取している（図75）。水田域と高まり地形との比高差は、第14-2面では、0.25m～0.30mである。試料は第14-1層、第14-2層のものである。以下、地層の概要について略記する。

a. 第14-1層

シルト質の水成堆積層であり、上部は土壌化している。既往の調査によると、この層は植物遺体を多く含み、層中にヒシの実、アシが多く見られることが報告されている。足跡は確認できるものの、水田耕作など人為が加えられた状況は確認されておらず、沼沢地的な景観が復原されている。層中から遺物が出土していないが、下層の第14-2層が弥生時代前期～縄文時代晩期、上層の第13層が弥生時代前期末～中期初頭であることから、弥生時代前期末に形成された地層と考えられる。

・**試料採取地点A・B** 弥生時代前期の水田域を覆っており、第14-1層の上面は、TP1.78m。層厚は0.08mほどである。上部は土壌化して黒色（7.5Y2/1）であるが、下部では暗オリーブ灰色（2.5GY7/1）の極細粒砂～シルト質の水成層である。

・**試料採取地点C** シルト質の層で、層厚は0.05m以下である。第14-1層の上面は、TP2.15m。高まりの上に全面的に確認できる層ではなく、水田域の第14-1層とのつながりについて明らかではない。発掘調査の中でも、水田と微高地の間に溝があることや、微高地上の第14-1層の層厚が薄いこと、第13b層が堆積する段階で発生した地震による第14層の変形などにより、地層のつながりを十分に検証することができなかった。試料採取地点の第14-1層は、細粒砂～極細粒砂を主体としており、色調が明るくしまりが弱いという特徴を示す。

b. 第14-2層

小礫～細粒砂を多く含むシルト質礫の層である。強く土壌化しており、黒褐色から黒色を呈する。第14-2層上面からは水田・溝などが検出されている。第14-2層の直上からは弥生時代前期の土器が出土し、第14-2層中からは弥生時代前期の土器とともに、縄文時代晩期の長原式段階を主体とする突帯文土器が出土する。

・**試料採取地点A・B** 水田作土層である。平面調査では一枚の水田面積が数平米の小区画水田を検出している。作土層の層厚は0.10m～0.15mである。黒色（7.5Y2/1）から暗青灰色（5PB3/1）の中粒砂～シルト。第14-2層と第14-1層は明瞭に区別することができる。

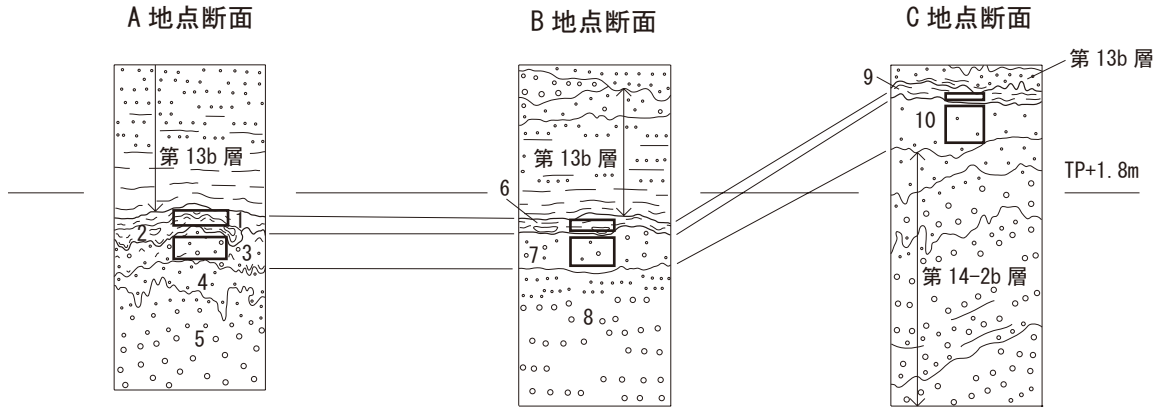
・**試料採取地点C** 高まり上に位置している。暗青灰色（5PB3/1）中粒砂～細粒砂の土壌化層である。断面観察からは、耕作などで攪拌されていないと判断している。平面調査でも地形の凹凸を確認したのみで特に人為の痕跡は認められなかった。ただし、試料採取地点の北10m付近では縄文時代晩期から弥生時代前期の土器片が出土している（395土器溜り・1012土器溜り）。

・**水田域の試料** 調査区南西部の水田域については、水田毎に試料を採取した。

2. プラント・オパール分析（引用）

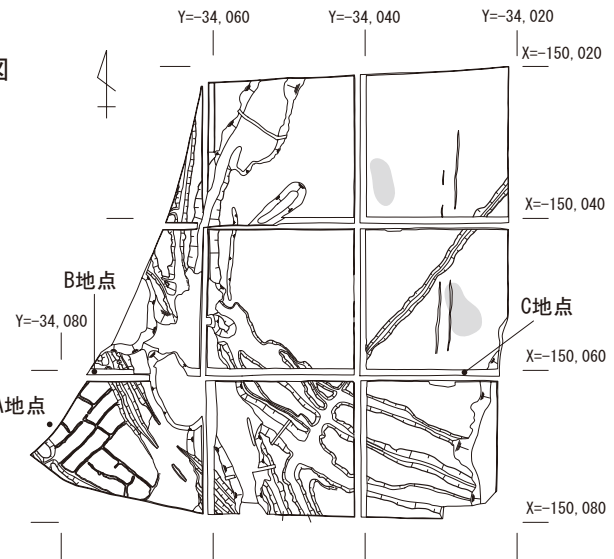
（1）分析方法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の

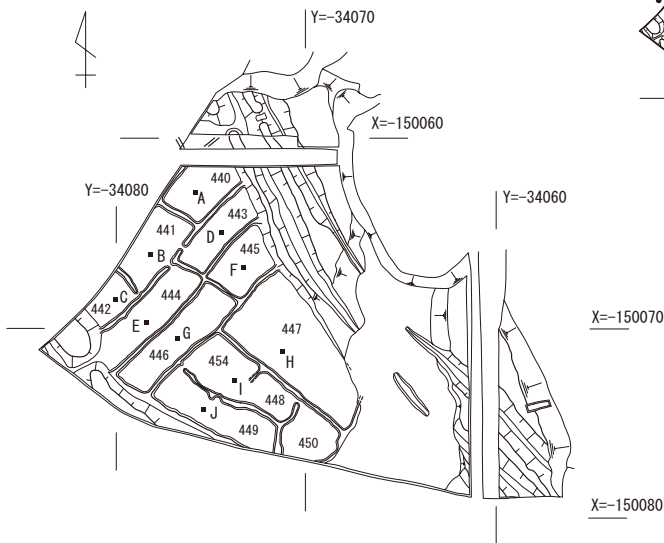


- 1: 暗青灰色 (5PB4/1) シルト質 第14-1層上部
- 2: 明オリーブ灰 (2.5G7/1) シルト質 第14-1層下部
- 3: 暗青灰色 (5PB3/1) 中粒砂多く含む 第14-2層 (作土) 上部
- 4: 暗青灰色 (5PB4/1) 中粒砂多く含む 第14-2層 (作土) 下部
- 5: 緑灰色 (10GY6/1) 上部: 細粒砂~シルト 下部: 粗粒砂~中粒砂 第14-2b層
- 6: オリーブ灰色 (5GY6/1) シルト質 第14-1層
- 7: 黒色 (7.5Y2/1) シルト質 第14-2層
- 8: 青灰色 (5BG5/1) 砂質礫 第14-2b層
- 9: 暗灰色 (5PB4/1) シルト質砂 第14-1層
- 10: 暗青灰色 (5PB3/1) シルト質砂 中粒砂~シルト 第14-2層

第14-2面全体平面図



第14-2面水田域



0 20m
1:1000

0 20m
1:100

図75 第14層 分析試料採取地点

手順で行った。

- 1) 試料を105°Cで24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに直径約40 μ mのガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550°C・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20 μ m以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料1g中のプラント・オパール個数（試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（ここでは1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重，単位：10⁻⁵g）を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、チマキザサ節は0.75である（杉山，2000）。

（2）プラント・オパール分析の結果

分析試料から検出されたプラント・オパールは、イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科（メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、その他）および未分類である。これらの分類群について定量を行い、その結果を表6、図76に示した。主要な分類群については顕微鏡写真を示す。以下に、プラント・オパールの検出状況を記す。

1) A地点

14-1層と14-2層では、ともにイネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、メダケ節型、ネザサ節型が検出されている。14-1層では、ヨシ属がやや高い密度である以外は、いずれも低い密度である。14-2層では、ススキ属型とネザサ節型がやや高い密度である。

2) B地点

14-2層では、イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、メダケ節型、ネザサ節型が検出されている。ヨシ属とススキ属型がやや高い密度である。

3) C地点

14-1層では、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、メダケ節型、ネザサ節型およびチマキザサ節型が検出されている。ススキ属型とネザサ節型が比較的高い密度である。

14-2層では、ヨシ属、ススキ属型、ネザサ節型が検出されている。ススキ属型が高い密度である以外は、いずれも低い密度である。

4) 14-2層検出水田

イネはすべての区画で検出されているが、いずれも低い密度である。ヨシ属、ススキ属型、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型もすべての試料で検出されている。このうち、ヨシ属は試料D、試料

検出密度 (単位: ×100個/g)		14-2層水田域																	
		A地点		B地点		C地点		D		E		F		G		H		I	
分類群 (和名・学名)	層位	14-1層	14-2層	14-1層	14-2層	14-1層	14-2層	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J		
イネ科																			
Gramineae (Grasses)																			
イネ	<i>Oryza sativa</i>	12	6	6	6	12	6	8	6	6	6	6	6	6	6	6	15	5	
キビ族型	Panicaceae type	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	24	18	24	24	12	6	8	24	30	24	30	24	6	24	10	5		
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	12	24	36	36	42	42	48	30	30	12	42	18	42	54	30	20		
タケ亜科																			
Bambusoideae (Bamboo)																			
メダケ節型	<i>Pleioloblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	6	6	12	12	12	12	4	18	4	12	6	6	6	6	10	10		
ネザサ節型	<i>Pleioloblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	12	30	18	18	42	6	12	30	8	12	12	6	12	12	10	5		
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	6	6	6	6	6	6	4	6	4	12	12	18	12	12	5	10		
その他	Others	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6		
未分類等	Unknown	185	167	187	187	132	121	114	114	91	157	145	120	114	96	86	90		
プラント・オパール総数 Total		263	263	289	289	252	175	216	210	153	235	253	198	198	210	166	145		

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m²・cm) : 試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	<i>Oryza sativa</i>	0.35	0.18	0.18	0.18	0.35	0.18	0.22	0.18	0.18	0.18	0.18	0.18	0.18	0.18	0.44	0.15
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	1.51	1.13	1.53	1.53	0.76	0.38	0.48	1.52	1.90	1.51	1.51	0.38	1.51	0.64	0.31	
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.15	0.30	0.45	0.45	0.45	0.53	0.38	0.15	0.52	0.22	0.52	0.67	0.37	0.25		
メダケ節型	<i>Pleioloblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	0.07	0.07	0.14	0.14	0.07	0.21	0.04	0.14	0.07	0.07	0.07	0.07	0.07	0.12	0.12	
ネザサ節型	<i>Pleioloblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	0.06	0.14	0.09	0.09	0.20	0.03	0.06	0.14	0.04	0.06	0.06	0.03	0.06	0.05	0.02	
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.03	0.03	0.09	0.09	0.13	0.09	0.09	0.09	0.04	0.07	

表6 プラント・オパール分析結果

E、試料F、試料Hで、ススキ属型は試料A、試料B、試料C、試料E、試料G、試料H、試料Iで、ネザサ節型は試料Bで比較的高い密度である。

(3) 池島・福万寺遺跡05-2 調査区における水田稲作

プラント・オパール分析で水田跡の可能性を判断する際の基準は、試料1gあたり5,000個以上の密度でイネ機動細胞プラント・オパールが検出された場合とされている。これは、発掘調査に先だって行われた分析において、イネ機動細胞プラント・オパールが5,000個/g以上の密度で検出された地点をもとに推定された水田跡の分布範囲と、実際の発掘調査において検出された水田域とがよく対応する結果が得られていることによる(藤原ほか、1984)。ただしその後の各地の調査事例で、2,000~3,000個/gの密度でも水田遺構が検出されている例が多々あることから、5,000個/gはあくまで目安であり、プラント・オパールの産出状況や遺構の状態をふまえて判断する必要がある。

南西部で検出された水田遺構(14-2層)では、分析を行ったすべての区画においてイネが検出されている。また、検出水田遺構の西側隣接部(A地点)と北側隣接部(B地点)の14-2層においてもイネが検出されている。こうしたことから、当該水田跡において稲作が営まれていた可能性が考えられる。なお、プラント・オパール密度は500~1,500個/gと全体に低い値である。プラント・オパール密度が低いことに関しては、耕作期間(稲作が行われた年数)が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、イネの生産性が悪かったこと、土壌の容脱作用等でプラント・オパールが風化をうけ、未成熟のものが分解されたこと、洪水などによって耕作土が流出したこと、などの要因が考えられる。

A地点の14-1層でも1,200個/gの密度でイネが検出されている。プラント・オパール密度は水田遺構が検出された14-2層とほぼ同等である。同時に行った珪藻分析、種実同定分析においても14-1層は水田耕作土の可能性が示唆されており、これらの結果を総合すると、分析の対象となった堆積物(土壌)は水田土壌であった可能性が考えられる。ただし発掘調査による所見では、当該層は自然堆積層であり、水田耕作土とは認定されていない。このことから、14-1層堆積時に14-2層(耕作土)が混入したか、土壌中の微生物等の攪乱により下位層が巻き上げられたことなどが考えられよう。東側のC地点では、14-1層、14-2層ともにイネは出されていない。したがって、C地点周辺において稲作が行われた可能性は考えにくい。なお、発掘調査の結果でも本地点は非水田域とされており、分析結果はこのことと矛盾しない。

(4) プラント・オパール分析から推定される植生と環境

ヨシ属は湿地的なところに生育し、ススキ属の多くやタケ亜科は比較的乾燥したところに生育している。このことから、これらの植物の出現状況を検討することによって、堆積当時の環境(乾燥・湿潤)を推定することができる。おもな分類群の推定生産量をみてみると、全体にヨシ属が優勢であり、次いでススキ属型が多い。こうしたことから、14-1層、14-2層の堆積当時は、調査地あるいは近辺はヨシ属などが生育する湿地的な環境であり、14-2層では水田の近辺や畔などにススキ属が生育していたと考えられる。

(5) まとめ

池島・福万寺遺跡05-2 調査区においてプラント・オパール分析を行い、弥生時代前期頃の土地利用について検討を行った。その結果、南西部で検出された水田遺構およびその隣接地では、分析を行ったすべての地点で低密度ではあるもののイネ機動細胞プラント・オパールが検出され、当該遺構において稲作が営まれていたことが確認された。なお、調査区東側(C地点)については稲作が行われた痕跡は

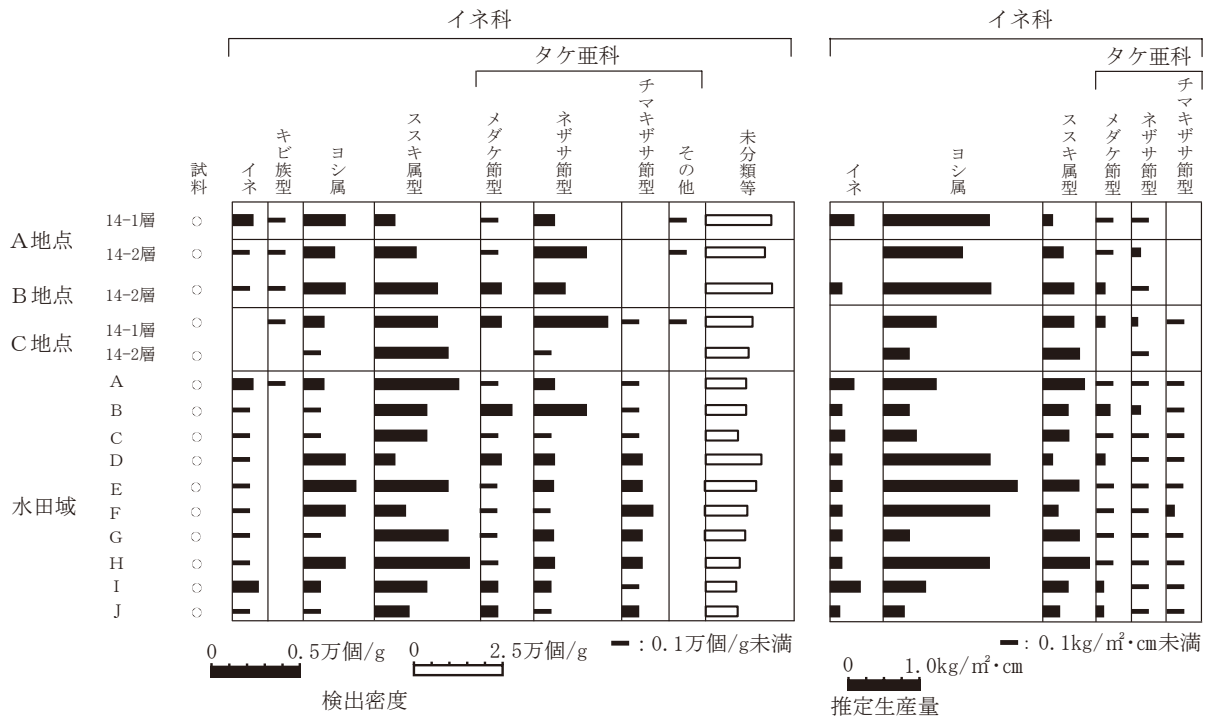


図 76 第 14 層 プラント・オパール分析結果

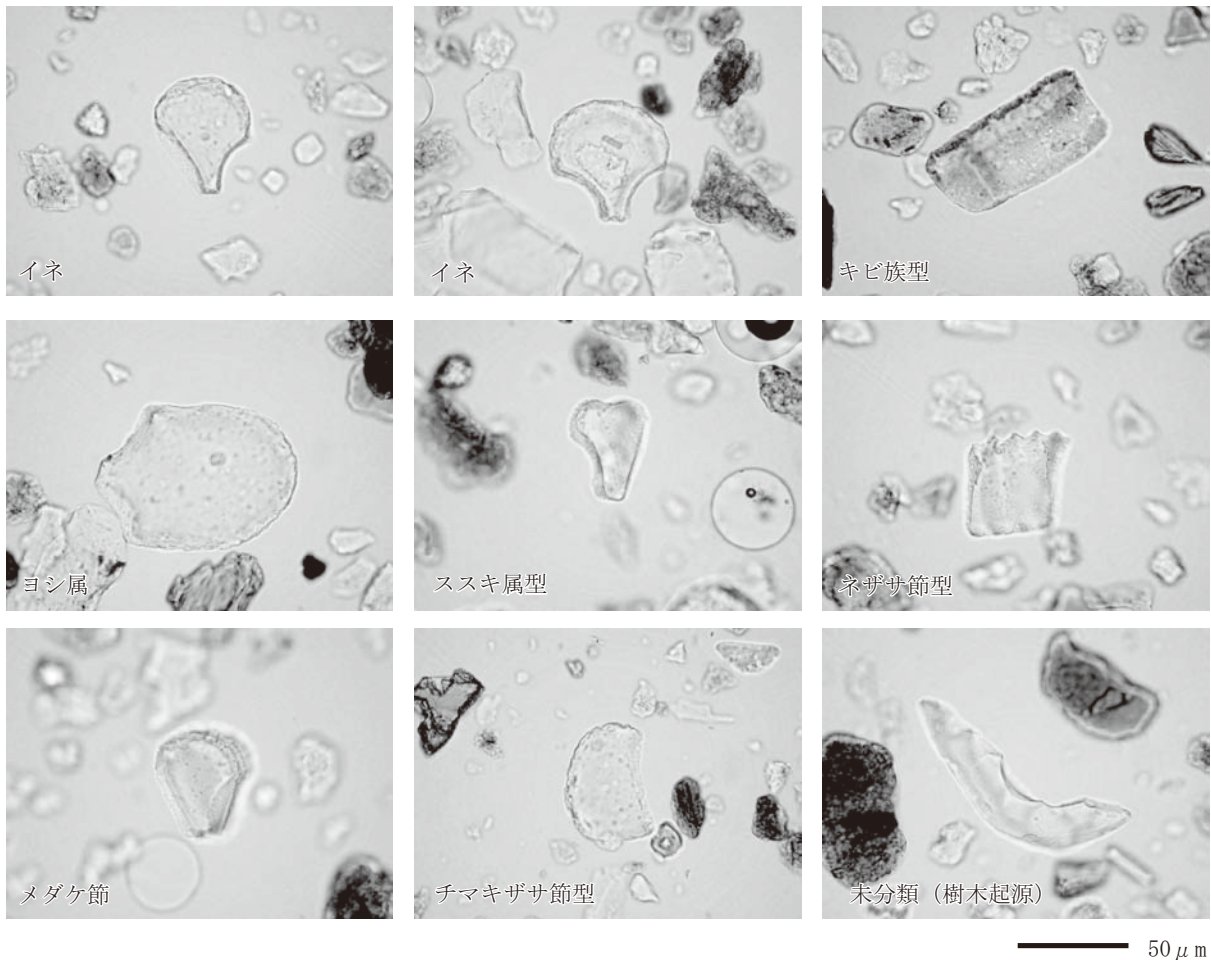


写真 32 プラント・オパール顕微鏡写真

認められなかった。

調査区および周辺は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であり、そこを利用して水田稲作が行われていたと推定された。

参考文献

杉山真二 1987 タケ亜科植物の機動細胞珪酸体. 富士竹類植物園報告, 第31号, p. 70-83.
 杉山真二 2000 植物珪酸体 (プラント・オパール). 考古学と植物学. 同成社, p. 189-213.
 藤原宏志 1976 プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-. 考古学と自然科学, 9, p. 15-29.
 藤原宏志・杉山真二 1984 プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)-プラント・オパール分析による水田址の探査-. 考古学と自然科学, 17, p. 73-85.

3. 珪藻分析(引用)

(1) 分析の方法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

- 1) 試料から 1 cm³を採量
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温反応させながら 1 晩放置
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドと薬品を水洗 (5~6 回)
- 4) 残渣をマイクロピペットでカバーガラスに滴下して乾燥
- 5) マウントメディアによって封入し、プレパラート作成
- 6) 検鏡、計数

検鏡は、生物顕微鏡によって600~1500倍で行った。計数は珪藻被殻が200個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

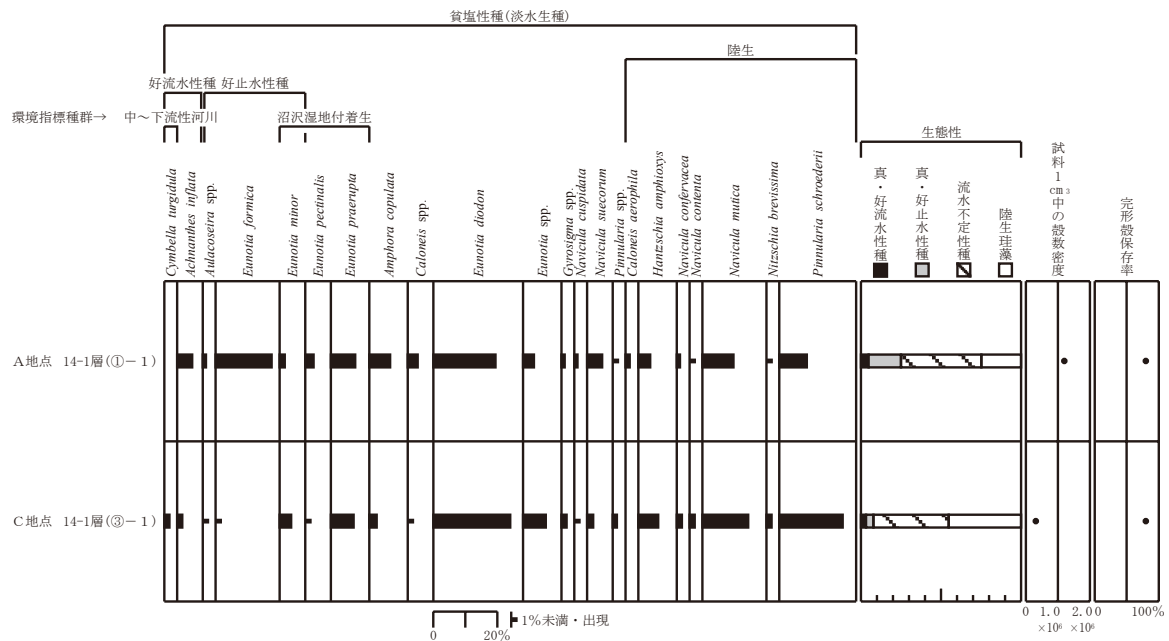


図 77 第 14-1 層 主要珪藻ダイヤグラム

(2) 珪藻分析の結果

1) 分類群

試料から出現した珪藻は、貧—中塩性種（淡—汽水生種）4分類群、貧塩性種（淡水生種）54分類群である。珪藻総数を基数とする百分率を算定した珪藻ダイアグラムを図77に示す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性はLowe(1974)や渡辺（2005）等の記載により、陸生珪藻は小杉（1986）により、環境指標種群の淡水生種は安藤（1990）による。また、主要な分類群について顕微鏡写真を示した。以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記載する。

〔貧塩性種〕

Achnanthes inflata, *Amphora copulata*, *Aulacoseira* spp., *Caloneis aerophila*, *Caloneis* spp., *Cymbella turgidula*, *Eunotia diodon*, *Eunotia formica*, *Eunotia minor*, *Eunotia pectinalis*, *Eunotia praerupta*, *Eunotia* spp., *Gyrosigma* spp., *Hantzschia amphioxys*, *Navicula confervacea*, *Navicula contenta*, *Navicula cuspidata*, *Navicula mutica*, *Navicula suecorum*, *Nitzschia brevissima*, *Pinnularia schroederii*, *Pinnularia* spp.

2) 珪藻群集の特徴

A地点、14—1層

貧塩性種（淡水生種）で占められ、流水不定性種が約50%を占め、陸生珪藻、真・好止水性種も比較的多い。*Eunotia*属が優占種で、流水不定性種の*Eunotia diodon*を主に、*Eunotia* spp.や、沼沢湿地付着生環境指標種群の*Eunotia praerupta*, *Eunotia pectinalis*、好止水性種の*Eunotia formica*が出現し、流水不定性種の*Amphora copulata*, *Navicula suecorum*, *Caloneis* spp.、などが伴われる。陸生珪藻では*Navicula mutica*, *Pinnularia schroederii*, *Hantzschia amphioxys*、好流水性種では*Achnanthes inflata*が出現する。

C地点、14—1層

流水不定性種と陸生珪藻がほぼ同じ割合で約90%を占める。流水不定性種では*Eunotia diodon*を主に、*Eunotia* spp.、沼沢湿地付着生環境指標種群の*Eunotia praerupta*などが出現する。陸生珪藻では*Pinnularia schroederii*, *Navicula mutica*, *Hantzschia amphioxys*などが優占する。好止水性種では沼沢湿地付着生環境指標種群の*Eunotia minor*が低率に出現する。好流水性種では*Achnanthes inflata*、中～下流性河川環境指標種群の*Cymbella turgidula*が低率に出現する。

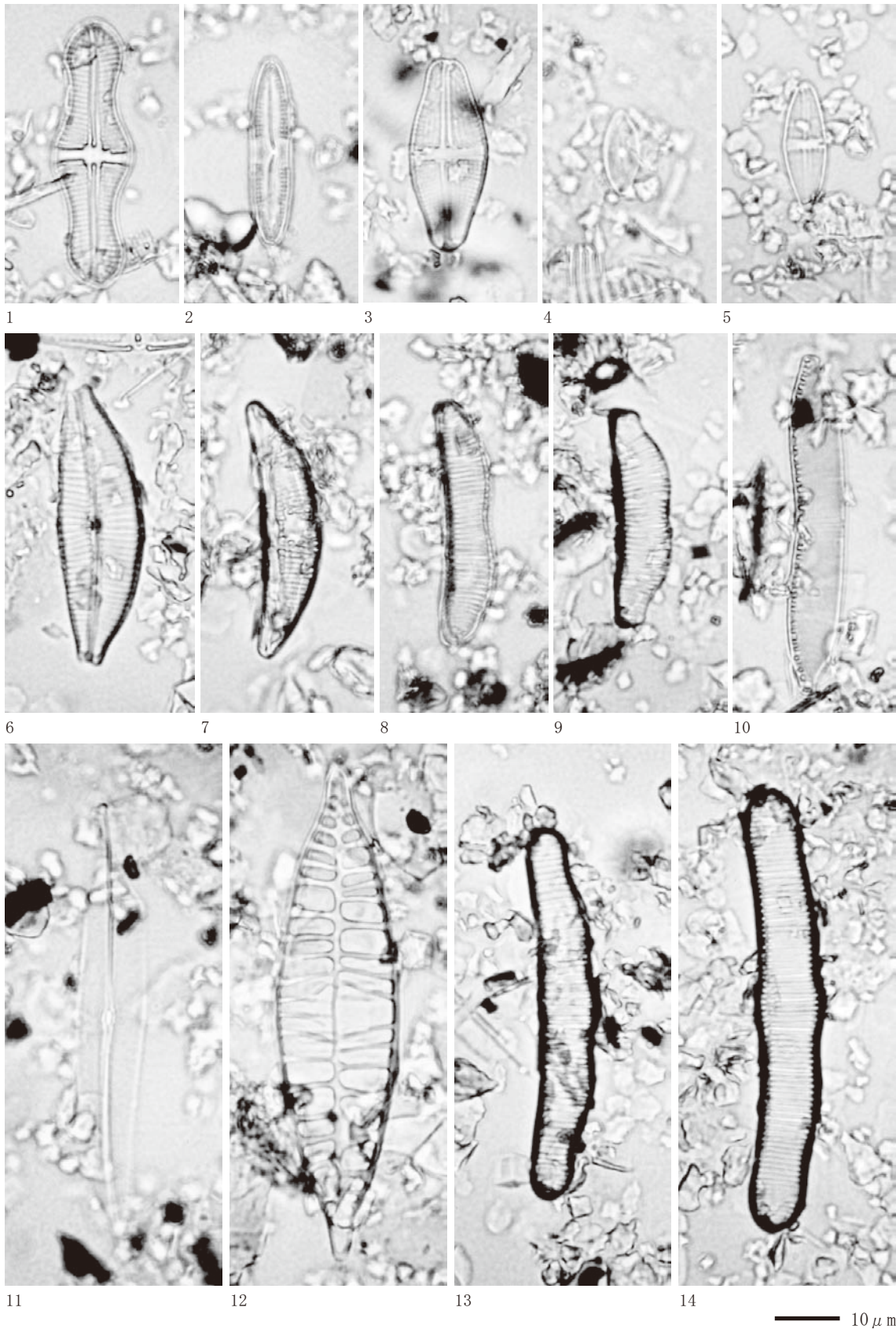
(3) 珪藻分析から推定される堆積環境

1) A地点、14—1層

完形殻の保存率が高いことから、現地性の高い珪藻遺骸群集とみなされる。*Eunotia diodon*を主とする流水不定性種が最も優占し、次いで*Eunotia formica*を主とする好止水性種、*Navicula mutica*、*Pinnularia schroederii*などの陸生珪藻が続く。*Eunotia praerupta*, *Eunotia pectinalis*などの沼沢湿地付着生環境指標種群の生育から、水草の生育する湿地から沼沢の環境が示唆される。また、流水不定性種が多産することから、不安定な環境が想定され、水田層であった可能性も考えられる。

2) C地点、14—1層

完形殻保存率が高く、現地性の高い珪藻遺骸群集とみなされる。*Eunotia diodon*を主とする流水不定性種と、*Navicula mutica*, *Pinnularia schroederii*などの陸生珪藻が優占することから、湿地ないし不安定な浅い沼沢の環境が示唆される。



10 μm

1. *Achnanthes inflata* 2. *Pinnularia schroederii* 3. *Navicula suecorum* 4. *Navicula confervacea* 5. *Navicula mutica*
 6. *Cymbella turgidula* 7. *Amphora copulata* 8. *Eunotia diodon* 9. *Eunotia praerupta* 10. *Hantzschia amphioxys*
 11. *Gyrosigma* spp. 12. *Navicula cuspidata* 13. *Eunotia pectinalis* 14. *Eunotia formica*

写真33 第14層 珪藻写真

(4) まとめ

池島・福万寺遺跡05-2調査区において、弥生時代前期末とされる14-1層について珪藻分析を行った。その結果、調査区南西部のA地点は、水草の生育する湿地から沼沢の環境が示唆され、不安定な堆積環境であったと推定された。調査区東側のC地点では、湿地ないし不安定な浅い沼沢の環境が示唆された。

参考文献

Hustedt, F. (1937-1938) Systematische und ologische Untersuchungen über die Diatomeenflora von Java, Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch. Hydrobiol., Suppl. 15, p. 131-506.

Lowe, R. L. (1974) Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. 333p., National Environmental Reserch. Center.

K. Krammer · H. Lange-Bertalot (1986-1991) Bacillariophyceae · 1-4.

4. 種実同定分析 (引用)

(1) 分析の方法

試料(堆積物)に以下の物理処理を施して、抽出および同定を行う。

- 1) 試料500cm³に水を加え放置し、泥化
- 2) 攪拌後、沈んだ砂礫を除去しつつ、0.25mmの篩で水洗選別
- 3) 残渣を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実を同定計数

種実類の同定は、試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって行う。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

(2) 分析の結果

樹木・草本1、草本12の計13分類群が同定される。学名、和名および粒数を表7に示し、主要な分類群を写真33に示す。500cm³中の種実数を図78に示す。以下に同定の根拠となる形態的特徴を記載する。

分類群		部位	A地点		B地点	C地点	
学名	和名		14-1	14-2	14-2	14-1	14-2
Herb	草本						
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属	果実	2				
<i>Scirpus</i>	ホタルイ属	果実	11	5			
		(破片)		3			
<i>Carex</i>	スゲ属	果実	2	14	3		
Cyperaceae	カヤツリグサ科	果実	11	183	69		
Juncaceae	イグサ科	種子		10			
<i>Aneilema keisak</i> Hassk.	イボクサ	種子		6			
<i>Polygonum</i>	タデ属	果実	9	3	1		
<i>Mollugo pentaphylla</i> L.	ザクロソウ	種子			4		
Rosaceae	バラ科	核		19	15		
<i>Hypericum</i>	オトギリソウ属	種子			1		
Apiioideae	セリ亜科	果実	1	5			
<i>Perilla</i>	シソ属	果実		2			
Asteroideae	キク亜科	果実			2		
		(破片)		1			
Total	合計		36	251	95	0	0

(500cm³中0.25mm篩)

表7 第14層 種実同定結果

〔樹木・草本〕

バラ科 Rosaceae 核

黄褐色で腎臓形を呈す。表面はやや粗い。

〔草本〕

オモダカ属 Sajittaria 果実 オモダカ科

淡褐色～黄褐色で歪んだ倒卵形を呈す。周囲は翼状部が傷んでおり、その概形が判別できないため、属レベルの同定にとどめる。

ホタルイ属 Scirpus 果実 カヤツリグサ科

黒褐色でやや光沢がある。広倒卵形を呈し、断面は両凸レンズ形である。表面には横方向の微細な隆起があり、基部に4～8本の針状の付属物を持つ。

スゲ属 Carex 果実 カヤツリグサ科

茶褐色で倒卵形、扁平である。果皮は柔らかい。

カヤツリグサ科 Cyperaceae 果実

茶褐色で倒卵形を呈し、断面は扁平のもの、茶褐色でやや狭い倒卵形を呈し、断面は両凸レンズ形のもの、茶褐色で倒卵形を呈し、断面は三角形のも等が認められる。

イグサ科 Juncaceae 種子

半透明の黄褐色ないし茶褐色で、ゆがんだ卵形を呈す。両端は尖り、黒褐色である。表面には網目模様がある。

イボクサ Aneilema Keisak Hassk. 種子 ツユクサ科

黒褐色～黒色で楕円形を呈す。腹部に一文字状のへそがあり、側面にくぼんだ発芽孔がある。

タデ属 Polygonum 果実 タデ科

黒褐色で先端がとがる卵形を呈す。表面にはやや光沢があり、断面は三角形である。

ザクロソウ Mollugo pentaphylla L. 種子 ザクロソウ科

黒色でやや光沢がある。円形を呈し一ヶ所が切れ込み、白い種柄がある。表面には微細な網状斑紋がある。

オトギリソウ属 Hypericum 種子 オトギリソウ科

暗褐色で円柱状長楕円形を呈す。表面に不明瞭な網目模様が発達する。

セリ亜科 Apioideae 果実

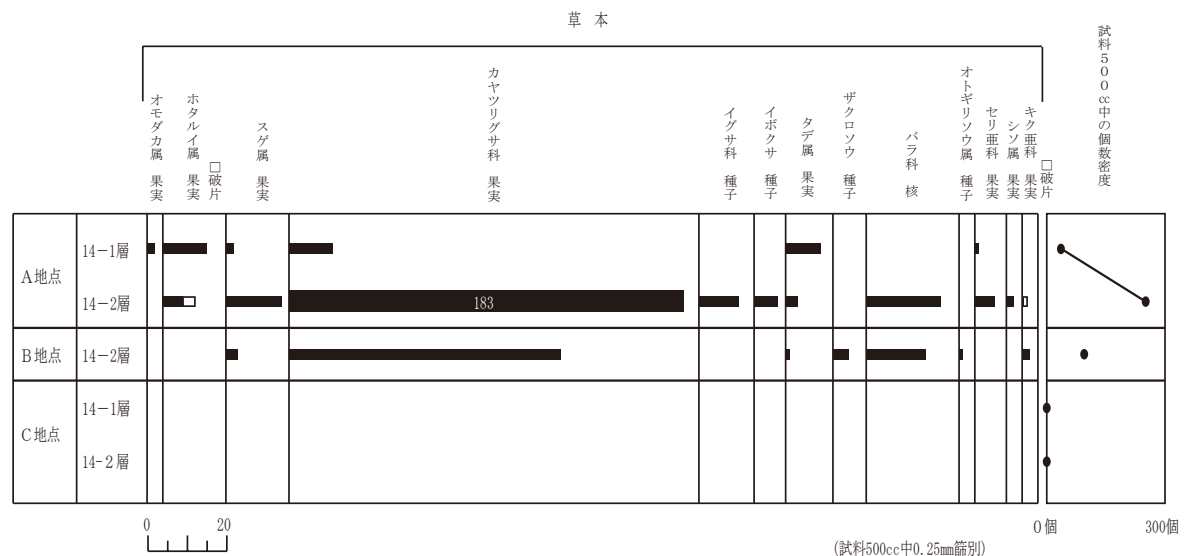


図 78 第 14 層 種実ダイヤグラム

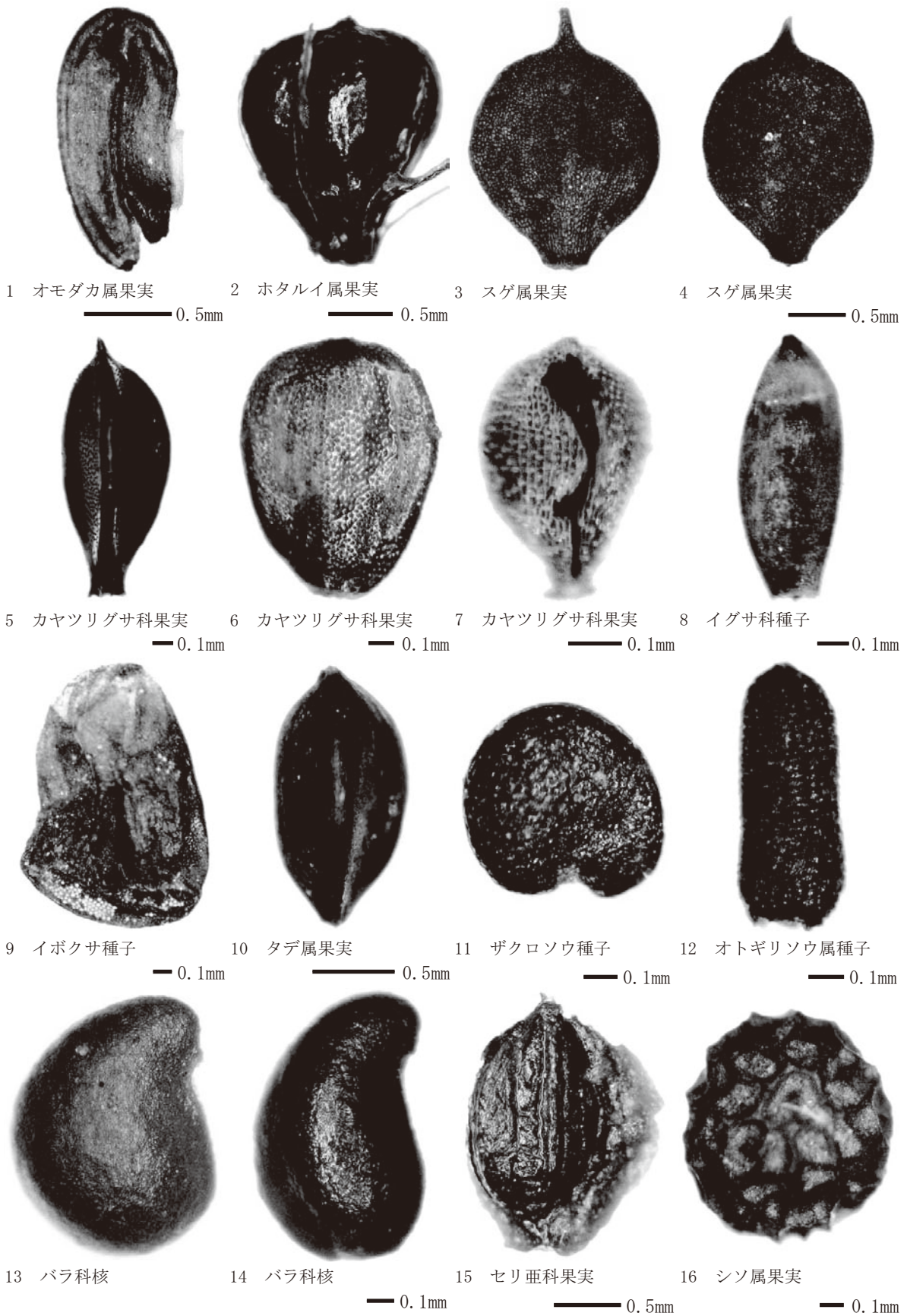


写真34 第14層 種実写真

淡褐色～黄褐色で楕円形を呈す。果皮はコルク質で厚く弾力があり、片面に3本の肥厚した隆起が見られる。断面は半円形である。

シソ属 *Perilla* 果実 シソ科

茶褐色で球形を呈し、下端にへそがある。表面には大きい網目模様がある。

キク亜科 *Asteroideae* 果実 キク科

茶褐色で楕円形を呈し、両端は切形となる。表面には縦方向に8本程度の筋が走る。

(3) 種実遺体群から推定される植生と環境

1) A地点

下部の14-2層では、カヤツリグサ科を主にスゲ属、イグサ科、ホタルイ属、イボクサ、セリ亜科、タデ属などの抽水から湿性の水生植物が繁茂し、沼沢湿地の環境が推定される。バラ科、シソ属、キク亜科の生育から、近接して湿った環境かやや乾燥したところも分布していたと考えられる。また、検出された水生植物はいずれも水田雑草にもなるものであるが、オモダカやコナギといった典型的な水田雑草は欠けている。

上部の14-1層では、やや種実が少ない。カヤツリグサ科、ホタルイ属、タデ属を中心にスゲ属、オモダカ属、セリ亜科の抽水から湿性の水生植物が繁茂する沼沢湿地の環境が示唆される。なお、いずれも水田雑草にもなる植物である。

2) B地点

14-1層では、カヤツリグサ科を主にスゲ属、タデ属の抽水から湿性の水生植物が生育し、概ね沼沢湿地の環境が示唆される。バラ科、ザクロソウ、オトギリソウ属、キク亜科などの湿った環境かやや乾燥したところに生育する草本の生育も認められる。これらは試料採取地点の北側に近接して分布していたと考えられる。

3) C地点

14-1層および14-2層からは種実を検出されなかった。試料採取地点は、種実類が分解するような乾燥あるいは乾燥と湿潤を繰り返すような堆積環境であったと推定される。

参考文献

- 笠原安夫 1985 日本雑草図説, 養賢堂, 494p.
笠原安夫 1988 作物および田畑雑草種類. 弥生文化の研究第2巻生業, 雄山閣 出版, p.131-139.
南木睦彦 1992 低湿地遺跡の種実. 月刊考古学ジャーナルNo.355, ニューサイエンス社, p.18-22.
南木睦彦 1993 葉・果実・種子. 日本第四紀学会編, 第四紀試料分析法, 東京大学出版会, p.276-283.

(株式会社 古環境研究所 松田隆二)

第7章 総括

今回の調査地は、池島・福万寺遺跡内に建設される恩智川治水緑地池島Ⅱ期地区の南西端部にあたる。隣接する調査区としては、北西に池島Ⅰ期地区の東南端部の97-3調査区がある。池島Ⅰ期地区とⅡ期地区を分ける堤防をはさんで、30m～40m離れていたが、条里地割りでは同じ二十二坪であり、土層の対応関係を確認した。その一方で、池島・福万寺遺跡は南東側に標高が高くなることから、池島Ⅰ期地区と本調査区の堆積状況の違いも明らかになった。

本調査区では、弥生時代後期の堆積物により地形の高まりが形成された結果、古代から中世にかけては、洪水による土砂の堆積が少なく、安定的な耕作地として土地利用された様子が明らかになった。その一方で、古墳時代の様相については不明な点も多い。弥生時代後期以前については、おおむね従前の調査成果と整合するが、遺構が十分に捉えられなかった第11面と第13面については、周辺の調査成果により検証されるべき課題が残っている。また、第14-2面については調査区の東側で比較的多くの土器が出土したことから、居住域の縁辺部に位置する可能性も想定できる。弥生時代前期の居住地については実態が明らかになっておらず、今後の調査に期待したい。以下、今回の調査成果を要約して総括とする。

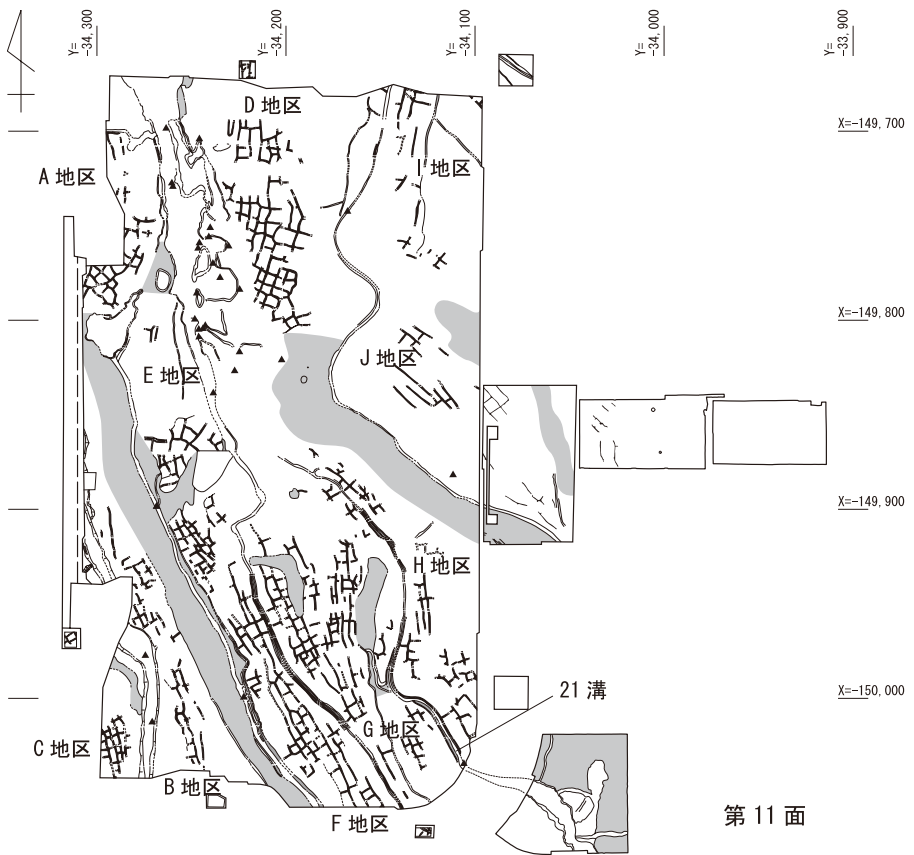
1) 近世から古代

本調査区では、池島・福万寺遺跡の標準層序をもとに、各層・遺構面を調査した。池島Ⅰ期地区では近世の第2層を5層に分層し、中世後期の第3層を3層～5層に分層している。本調査区でもこれに対応しているが、中世前半の第4層以下古墳時代の第10層までは、堆積物の供給が活発ではなかったため、各層の層厚が薄く、土壌化層が連続する状況にあった。第4層・第5層は土質・色調、層序的な整合性を検討し対応関係を確定した。第5層以下第10層までは部分的には分層が可能であったが、調査区全域で各遺構面を峻別することは困難であった。この状況は古墳時代の遺構面である第10面でも同じであり、調査区内の起伏はわずかで、遺構面は上面からの攪拌がおよんでいた。

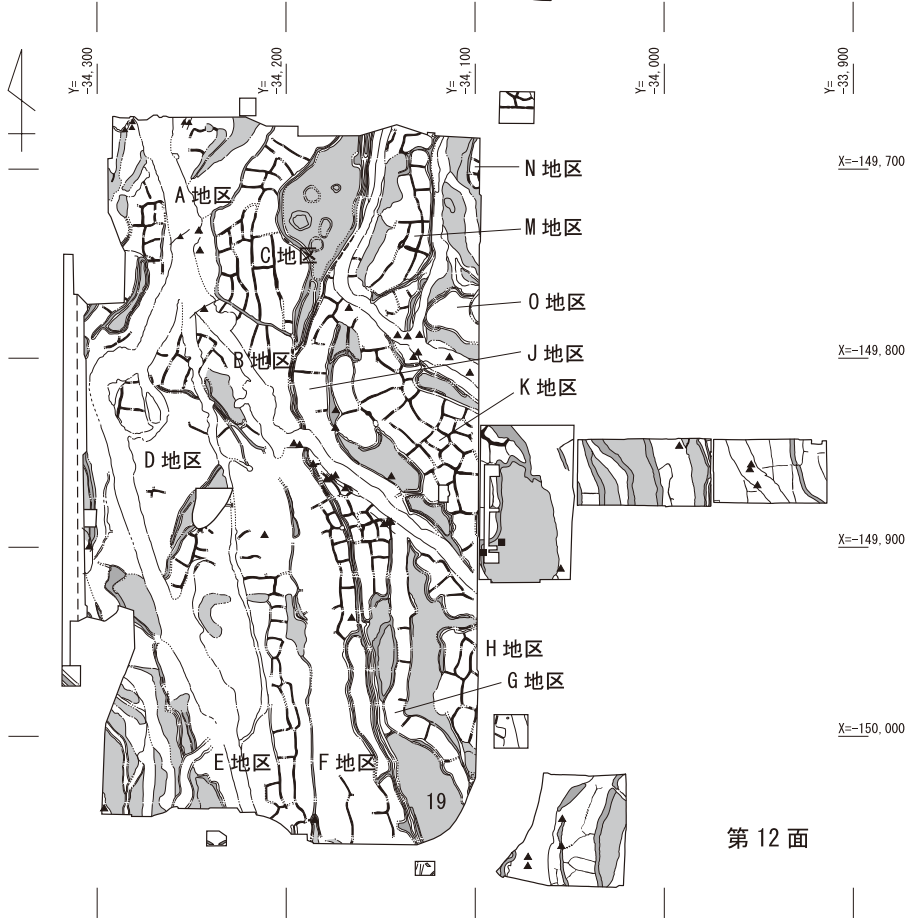
近世面（第2-1面～第2-5面）では、島畠、畑、水田畦畔を検出した。条里地割による呼称では河内国河内郡字「河」二十二坪にあたる。坪内の地割りは東西方向であり、島畠の変遷や畠・水田の変化など、土地利用の変遷を追うことができた。

中世面（第3-1面～第5面）は、第3-1面と第3-2面を除いて土壌化層が連続する状況にあり、遺構の残りも良くなかったが、島畠、水田畦畔を検出した。坪内は東西方向の地割りであり、水田畦畔や耕作痕跡も東西方向で確認できた。島畠は洪水砂を芯にして拡張を繰り返している様子がわかる。また、第5層下面からは土坑や溝を検出した。なお、第5層下面検出の土坑や古代面で検出した土坑には、土器が出土していないため所属時期が不明なものが17基ある。

古代面（第8面・第9面）は、遺構面の残存状況が悪い。これは、堆積物の供給が少なかったことに加えて、地震により遺構面が変形するなどの影響を受けていることによる。このなかで、出土遺物から、古代の遺構と認定できるものは、墨書土器を埋納した226土坑と土器埋納土坑の239土坑である。土器を納めた土坑はこの2基だけであったが、他に側溝から完形に近い土器が出土しており、これも土器埋納遺構と考えられる。本調査では、古代面の畦畔など、水田区画に関する遺構は検出できなかったが、これら土坑は、古代の区画の実態を明らかにする上での検討資料となる。



第 11 面



第 12 面

- 微高地
- 大畦畔
- ▲ 杭列
- 土器

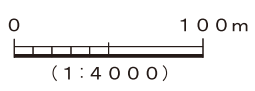


图 79 池島地区第 11 面 · 第 12 面

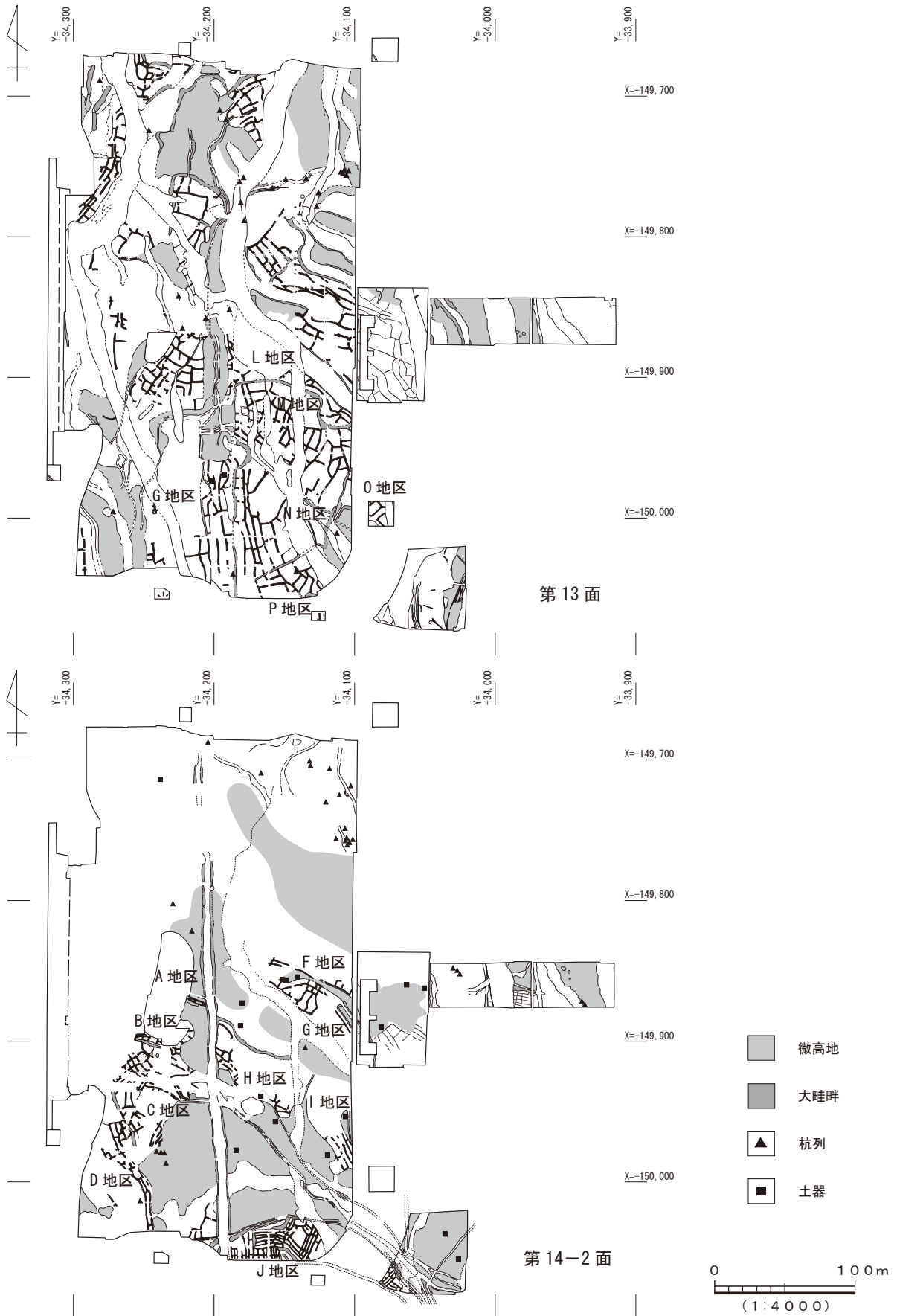


图80 池島地区第13面・第14-2面

2) 古墳時代から縄文時代後期

古墳時代面（第10面）は、調査区の北側で214溝を、南西部で水田畦畔の痕跡を確認したが、遺構面の残存状況から全域の土地利用のあり方を明らかにすることができなかつた。214溝は池島Ⅰ期地区の21溝と接続する。

弥生時代後期（第11面）は、280流路を中心にいくつかの流路を検出したが、水田域は確認できなかつた。280流路については、幅が広く緩やかな横断面形状であることから自然の谷状地形を利用したものと考えられ、池島Ⅰ期地区の21溝と接続するものと考えられる（図79）。この21溝は池島Ⅰ期地区の基幹的な用水路と考えられており、周囲の水田を灌漑する重要なものであつた。周辺の状況からは、池島Ⅰ期地区との間に堰などを設けていたことが想定され、本調査区で検出した幅広の流路は貯水や水温調節のための施設として機能していた可能性が考えられる。

弥生時代中期遺構面（第12面）は水田畦畔、杭列、微高地を検出した。微高地を除いて調査区全域で水田耕作が行われる。東から西へ標高を減じる地形に合わせて、南北方向の基幹畦畔を設け雛壇状に水田域を造成している。基幹畦畔で仕切られた水田域は各々南から北へ給排水しているが、これとは別に、微高地を南東から北西に横断する289溝や、380杭列や1001杭列付近では南西方向から水を得ていたことがわかる。調査区の南西部では、堰の存在を示す杭列（319杭列・322杭列）を検出しているが、弥生時代後期の流路によって削られているため詳細は明らかではない。この堰付近は谷状地形となっており、池島Ⅰ期地区のG地区、H地区に連続すると考えられる（図79）。

弥生時代中期初頭遺構面（第13面）は水田域と南北方向の微高地を検出した。水田は東から西へと傾斜する地形に合わせて雛壇状に築造していることが想像できる。微高地上では、幅の狭い数条の溝が南北に並行する状況と、これらと直交する主要な水路と想定される溝を検出した。微高地上の溝はこれに続く遺構を検出できていないことから、その性格について判断しかねるが、これまでにも第13面では、微高地上で溝が検出されており、地区を越えて水回しを行い、より広い範囲で水田域間の連携を図つたと考えられている。今回検出した溝も当時の灌漑システムを示す遺構といえる。

弥生時代前期遺構面（第14-2面）では、水田・溝を検出した。水田は、調査区の南西部の低地にあり、面積6㎡～26㎡の小区画水田である。池島Ⅰ期地区南東部のJ地区と同一の水田域を形成する（図80）。溝は調査区南側の微高地上で検出した。南東から北西方向の溝、南から北方向の溝、そして、南から北東方向の溝を検出した。本調査区と池島Ⅰ期地区との関係は第5章で詳述しているが、池島地区では各水田ユニットに数本の水路が長く設けられており、各ユニットは、個別の灌漑用水路を持ち、独立した水田域を形成する。今回検出した溝群は南東方向に伸び、調査区外へと続く、弥生時代前期水田の取水源については、治水緑地の南側にある生駒山西麓を北西に流れる河川から、井堰を設けて取水していたと考えられる。

第14層における出土遺物では、突帯文土器・弥生土器が出土した。中でも出土量が多かつたのは、第14-2面の1012土器溜りと395土器溜りであり、河内Ⅰ-2・3段階の弥生土器と突帯文土器が出土している。これら土器溜りの資料は、土坑の資料とは異なり、長期間にわたる堆積によって形成されたものと考えられるため、厳密な意味での共伴とすることができない。これまでの調査においても、第14-2層中からは船橋式・宮滝式・長原式が混在し、第14-2面に弥生土器が出土することが知られている。今回の調査における弥生土器と突帯文土器の出土状況についても、第14-2層の土壌化層の形成が長期に及んでいる結果と考えられる。

参考文献

- 秋山浩三 1999「近畿における弥生化の具体相」『論争 吉備』 考古学研究会
- 秋山浩三 2000「「刻目段甕」型式変遷の効用」『突帯文と遠賀川』 土器持寄会論文集刊行会
- 秋山浩三・朝田公年編 2000『池島・福万寺遺跡1』 大阪府文化財調査研究センター
- 泉 拓良 1990「西日本凸帯文土器の編年」『文化財學報 第8集』 奈良大学文学部文化財学科
- 井上智博 1993「池島・福万寺遺跡における水稻農耕の始まり」『大阪文化財研究』第4号 大阪文化財センター
- 井上智博ほか 2002『池島・福万寺遺跡』2 大阪府文化財センター
- 井上智博 2007 a「層序対比の問題点—第12層・第14～15層の検討—」『池島・福万寺遺跡』3 大阪府文化財センター
- 井上智博 2007 b「水田稲作受容期の河内平野」『月刊文化財』8月号(527号)文化庁文化財部
- 江浦 洋編 1991 a『池島・福万寺遺跡発掘調査概要—89—1～6調査区の概要—』 大阪文化財センター
- 江浦 洋1991 b「河内潟東南部における弥生時代前期の集落と水田—池島・福万寺遺跡の評価—」『各地のお米づくりの開始』Ⅲ分冊 埋蔵文化財研究会
- 江浦 洋 1991 c「古墳時代集落の変遷と特質—池島・福万寺遺跡の古墳時代集落の評価をめぐる予察—」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅱ—90—3・6調査区の概要—』 大阪文化財センター
- 江浦 洋 1992「条里型水田面をめぐる諸問題」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅶ—90—3調査区(1991年度)の概要—』大阪文化財センター
- 江浦 洋 1996「古代の土地開発と地鎮め遺構」『帝京大学山梨文化財研究所報告』第7集 帝京大学山梨文化財研究所
- 大木 要・後川恵太郎 2007「私部南遺跡出土土器の基礎分析—縄文時代晩期～弥生時代前期を中心にして—」『私部南遺跡Ⅰ』大阪府文化財センター
- 大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター 1991『河内平野遺跡群の動態Ⅱ』
- 大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター 1992『河内平野遺跡群の動態Ⅴ』
- 大阪府文化財センター 2003『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』
- 亀井 聡 2002「池島・福万寺遺跡における近現代の井戸」『大阪文化財論集Ⅱ』 大阪府文化財センター
- 鐘方正樹 2003『井戸の考古学』 同成社
- 関西縄文文化研究会 2007『関西の突帯文土器』 関西縄文文化研究会
- 工楽善通 1991『水田の考古学』東京大学出版
- 古代の土器研究会編 1992『古代の土器1 都城の土器集成』
- 古代の土器研究会編 1993『古代の土器2 都城の土器集成Ⅱ』
- 古代の土器研究会 1994『古代の土器3 都城の土器集成Ⅲ』
- 小林謙一・春成秀爾・坂本稔・秋山浩三 2008「河内地域における弥生前期の炭素14年代測定研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第139集 国立歴史民俗博物館
- 財団法人大阪府文化財調査研究センター 1996『巨摩・若江北遺跡発掘調査報告—第5次—』
- 財団法人東大阪市文化財協会 1997『鬼塚遺跡第8次発掘調査報告書』
- 財団法人東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員会 1997『水走遺跡第3次・鬼虎川遺跡第21次発掘調査報告』
- 佐藤 隆 1992「平安時代における長原遺跡の動向」『長原遺跡発掘調査報告書Ⅴ』 大阪市文化財協会
- 寒川 旭 2002「池島遺跡で検出された液状化現象の痕跡」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要28』 大阪府文化財センター
- 寒川 旭 2007「池島・福万寺遺跡で検出された地震の痕跡」『池島・福万寺遺跡』3 大阪府文化財センター
- 島崎久恵ほか 2005「第3節弓削ノ庄遺跡 第2項調査成果」『弓削ノ庄遺跡他』 大阪府文化財センター

- 田中清美 2000「河内潟周辺における弥生文化の着床過程」『突帯文と遠賀川』 土器持寄会論文集刊行会
- 田辺昭三 1966『陶器古窯址群Ⅰ』平安学園研究論集第10号
- 田畑直彦 1997「畿内第Ⅰ様式古・中段階の再検討」『立命館大学考古学論集Ⅰ』 立命館大学考古学論集刊行会
- 中世時研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社
- 趙 哲済 1995「本書で用いる層位的堆積額の見方からの用語」『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ 大阪市文化財協会
- 趙 哲済 2003「地層の見方」『環境考古学マニュアル』 同成社
- 塚本浩二編 2008『池島・福万寺遺跡』4 大阪府文化財センター
- 辻 美紀 1999「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室10周年記念論集
- 辻本裕也・辻康男・伊藤良永・堀内誠示・田中義文・高橋敦・松本美由紀・馬場健司 2007 「池島・福万寺遺跡の古環境変遷
2」『池島・福万寺遺跡』3 大阪府文化財センター
- 寺沢 薫・森井貞雄 1989「河内地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編1』 木耳社
- 中村健二 2000「播磨系突帯文深鉢について」『突帯文と遠賀川』 土器持寄会論文集刊行会
- 中村友博 1977「和歌山県瀬戸遺跡の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和51年度』京都大学農学部構内遺跡調査
会・京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所構内遺跡調査会
- 野口哲哉 1993「近畿地方縄文時代晩期終末突帯文土器の二態」『古代』第95号
- 林日佐子 2008「第6章2. 突帯文土器の分類と変遷」『池島・福万寺遺跡5』 大阪府文化財センター
- 濱田延充 2003「弥生集落遺跡から出土する突帯文土器の意味—高宮八丁遺跡出土の突帯文土器—」『立命館大学考古学論集Ⅲ』
立命館大学考古学論集刊行会
- 深澤芳樹 2000「刻目段甕のゆくえ—前期弥生土器における広域編年の試み—」『突帯文と遠賀川』 土器持寄会論文集刊行会
- 東大阪市教育委員会・財団法人東大阪市文化財協会 1998『水走・鬼虎川遺跡発掘調査報告』
- 廣瀬時習編 2007『池島・福万寺遺跡』3 大阪府文化財センター
- 廣瀬時習編 2008『池島・福万寺遺跡』5 大阪府文化財センター
- 松尾信裕 1983「第Ⅳ章考察 第1節縄文時代から弥生時代の遺構と遺物の検討 第i項長原式土器深鉢A類にみる器形の変化」
『長原遺跡発掘調査報告Ⅲ』 財団法人大阪市文化財協会
- 松田順一郎 1996「山賀遺跡第9次発掘調査報告」『東大阪市埋蔵文化財協会ニュース』Vol. 6 東大阪市文化財協会
- 豆谷和之 2000「大和的凸帯文」『突帯文と遠賀川』 土器持寄会論文集刊行会
- 三好孝一 1996「河内潟における遠賀川系土器の始原—若江北遺跡第5次調査の成果から—」『巨摩若江北遺跡発掘調査報告—第
5次—』 大阪府文化財調査研究センター
- 盛 峰雄 2000「陶器の編年 1. 碗・皿」『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念』九州近世陶磁学会
- 森岡秀人 1996「初期水田の拡大と社会の変化」『弥生文化の成立』（角川選書265） 角川書店
- 森島康雄 1990「河内の羽釜」『中近世土器の基礎研究』Ⅶ 日本中世土器研究会
- 山田隆一 1994「古墳時代初頭前後の中河内地域」『弥生文化博物館研究報告』第3集 大阪府立弥生文化博物館
- 家根祥多 1981「近畿地方の土器」『縄文時代の研究4 縄文土器Ⅱ』 雄山閣
- 家根祥多 1982「第Ⅴ章 出土遺物 第2節第i項 縄文土器」『長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』 大阪市文化財協会
- 家根祥多 1984「縄文土器から弥生土器へ」『縄文から弥生へ』 帝塚山考古学研究所
- 家根祥多 1993「刻目突帯文土器研究の現状と課題」『突帯文土器から条痕文土器』突帯文土器研究会
- 家根祥多 1995「近畿地方の突帯文土器出現期の様相」『第6回中四国縄文研究会』資料 中四国縄文研究会
- 若林邦彦 2000「河内潟沿岸地域における弥生文化成立期の様相」『弥生文化の成立』 埋蔵文化財研究会

図番号	遺物番号	写真図版	器種	層序	遺構・出土地区	時期	法量 (cm) () 推定・残存	残存率	特徴 外面調整 内面調整	色調	胎土	焼成	備考
15	1	13	磁器 波佐見碗	1b層	7f	18c	口径:(13.6) 器高:(4.2)	1/10	染付け	灰白 5GY8/1	—	—	
15	2	13	磁器 唐津碗	1b層	5e	17c~18c	高台径:2.9 器高:(3.7)	1/1	施釉	釉:灰白 5Y8/1 露胎:にぶい襷 7.5YR6/3	長石・雲母	—	
15	3	13	磁器 波佐見碗	1b層	7f	18c	高台径:(4.4) 器高:(3.0)	3/5	染付け	外:灰白 5GY8/1 内:灰白 10Y8/1	—	—	
15	4	13	磁器 碗	1b層	7d	17c	高台径:4.5 器高:(3.0)	1/1	施釉	釉:灰 5Y6/1・灰オリーブ 5Y6/2 露胎:にぶい襷 7.5YR5/3	—	—	
15	5	13	陶器 肥前系小壺	1b層	3e	17c	口径:(9.2) 器高:(3.4)	1/10	施釉	釉:黒 7.5YR1.7/1 断:灰白 10YR8/2	黒色粒 緻密	良	
15	6	13	土師質台付椀	1b層	3d	—	高台径:(11.0) 器高:(3.5)	1/8	脚部穿孔1つ	にぶい橙 5YR7/4	石英・雲母	良	
15	7	13	磁器 肥前系皿	1b層	5d	17c	口径:(17.8) 器高:(2.2)	1/10	染付け	灰白 5GY8/1	—	—	
15	8	13	磁器 肥前系皿	1b層	5e	17c	口径:(14.0) 器高:(2.2)	1/10	染付け	明オリーブ灰 7.5GY8/1	—	—	
15	9	13	陶器 播鉢	1b層	7f	18c後~ 19c前	口径:(27.4) 器高:(3.5)	1/20	外:ナデ・ケズリ 内:ナデ・播り目	外:明赤襷 2.5Y5/6 内:にぶい橙 2.5Y6/4~橙 2.5Y6/6	長石・石英	良	塚摺鉢
15	10	13	磁器 転用円盤	1b層	5h	—	直径:4.9 器高:1.9	1/1	施釉(鉄釉)	釉:黒襷 2.5Y8/2 露胎:にぶい襷 7.5YR5/3~ 7.5YR4/6 断:灰白 2.5Y8/2	長石・雲母	—	
15	11	13	土製品 小型人形	1b層	6e	近世	長:(3.1) 最大幅:2.9 最大厚:2.2	脚部		にぶい黄橙 10YR7/3	雲母 緻密	良	
15	12	13	磁器 波佐見碗	1b面	003 井戸	18c	高台径:4.2 器高:(5.3)	1/3	染付け 梅花文付	外:灰白 N8/ 内:淡黄 2.5Y8/3	—	—	
15	13		鉄製品 鉢	1b面	036 土坑	近・現代	縦長:25.5 横長:14.7	1/1	—	—	—	—	
15	14	13	木製品 井戸桶側	1b面	001 井戸	近・現代	縦長:96.4 横長:8.4 厚:2.1	1/1	墨書「八〇〇〇」	—	—	—	
15	15	13	木製品 井戸桶側	1b面	001 井戸	近・現代	縦長:96.0 横長:14.5 厚:2.0	1/1	墨書「八ヨ極〇」	—	—	—	
15	16	13	井戸瓦	1b面	001 井戸	近・現代	縦長:26.5 横長:24.0 厚:3.0	1/1	凸面:楔形文	凸面:オリーブ灰 2.5GY6/1 凹面:灰 N4/	長石・石英・雲母	良	
15	17	13	井戸瓦	1b面	001 井戸	近・現代	縦長:26.3 横長:25.0 厚:3.0	1/1	凸面:楔形文	凸面:灰 N4/ 凹面:灰 N5/	長石・石英・雲母	良	
15	18	13	井戸瓦	1b面	001 井戸	近・現代	縦長:26.2 横長:25.4 厚:3.0	1/1	凸面:楔形文	灰 7.5Y5/1	長石・石英・雲母	良	
20	19		磁器 肥前系碗	2-1層	3d	17c~18c	口径:(12.0) 器高:(5.0)	1/12	染付け 外:口縁端部二重線 内:口縁端部一重線	灰白 5Y8/1	—	—	
20	20		陶器 唐津碗	2-1層	4f	17c	高台径:(4.6) 器高:(3.5)	3/10	施釉 高台釉たれ	釉:灰オリーブ 5Y6/2 露胎:明赤襷 2.5YR5/6 断:にぶい橙 2.5YR6/3・灰黄 2.5Y7/2	—	—	
20	21	14	磁器 肥前系皿	2-1層	5d	17c	高台径:(7.0) 器高:(2.1)	1/6	鴛鴦絵染付け	外:灰白 2.5GY8/1・灰 白 5GY8/1 内:灰白 2.5GY8/1・ 灰白 N8/	—	—	
20	22		陶器 仏花瓶	2-1層	6e	—	脚柱径:5.8 器高:(4.6)	脚部	外:ナデ・釉残 内:ロクロ挽き 底:糸切り痕	外:灰黄 2.5Y7/2 内:にぶい橙 5YR6/4	長石・雲母	良	
20	23	14	土師器 焙烙	2-1層	4i	17c	口径:(28.0) 器高:(5.2)	1/10	外:タタキ・ナデ 内:ナデ	外:にぶい橙 7.5YR7/3 内:にぶい橙 7.5YR7/4	長石・石英・雲母・赤 色粒	良	
20	24	14	瓦質土器 甕	2-2層	4f	16c	器高:(5.1)	細片	外:タタキ・ハケ・ ナデ 内:ハケ・ナデ	オリーブ灰 5GY6/1	長石・雲母・黒色粒	良	
20	25		陶器 播鉢	2-2層	4h	15c代	底径:(15.6) 器高:(2.6)	1/8	外:ナデ 内:播り目	にぶい赤襷 2.5YR5/4	長石・雲母	良	
20	26	14	瓦質土器 火鉢	2-2層	6g	15c代	—	破片	突帯2条・七花弁文 スタンプ	灰 N4/	石英・雲母 緻密	やや軟	
20	27	14	陶器 鉢	2-2層	6g	14c代	口径:(26.0) 器高:(3.8)	1/20	外:ケズリ・ヨコナ デ・自然釉 内:ケズリ・ヨコナ デ	灰白 7.5Y7/1	長石・石英	良	
20	28		瓦質土器 火鉢	2-3・4層	5c	—	器高:(3.1)	破片	唐草文スタンプ	灰 5Y4/1	雲母 緻密	良	
20	29	14	瓦質土器 鍋?	2-3・4層	8f	—	口径:(28.0) 器高:(6.7)	1/12	外:指押さえ・ヨコ ナデ 内:ハケ	灰黄 2.5Y7/2	長石・石英・雲母・黒 色粒	良	
20	30	14	陶器 壺?	2-3・4層	4i	—	底径:(12.0) 器高:(5.3)	1/16	外:回転ロクロ・ケ ズリ・自然釉 内:回転ロクロ・ケ ズリ	青灰 5PB5/1	長石・雲母・黒色粒	良	

表8 遺物観察表(1)

図 番号	遺物 番号	写真 図版	器種	層序	遺構・ 出土地区	時期	法量 (cm) () 推定・残存	残 存 率	特徴 外面調整 内面調整	色調	胎土	焼成	備考
20	31	14	瓦質土器 播鉢	2-5層	3d	16c代	底径:(9.2) 器高:(4.8)	1/8	外:指押さえ 内:播り目	外:灰黄2.5Y6/2 内:黄灰2.5Y6/1	長石・石英・雲母・黒色粒	良	
20	32	14	瓦質土器 播鉢	2-5b層	6g	15c代	口径:(30.0) 器高:(5.5)	1/8	外:ヨコナデ・ナデ 内:ハケ・ナデ	外:淡赤橙2.5YR7/3 内:灰白5Y8/1 断:明赤灰2.5YR7/2	長石・石英・雲母	良	
20	33	14	陶器碗 転用円盤	2-1層	5d	—	径:4.3~4.4 厚:1.0	1/1	施釉(鉄釉) 9面どり・研磨	外:赤褐10R5/3 内:暗赤褐5YR3/2 断:灰白2.5Y8/1 釉:灰褐7.5YR4/2	長石	良	
20	34	14	陶器碗 転用円盤	2-2層	4e	—	径:4.35~4.4 厚:1.05	1/1	施釉 8面か9面どり	露胎:灰褐7.5YR5/2 ~にふい褐 7.5YR5/3 断:灰白10YR8/1	石英・雲母	良	
20	35	14	土師質 ニチャリ羽釜	2-2層	2c	18c~ 19c	口径:6.8 鏝径:9.6 器高:(5.3)	1/5	外・内:ナデ	外:にふい黄橙 10YR7/3 内:灰白10YR8/2 断:灰褐5YR1/2	長石・雲母	良	
20	36	14	土製品 紡錘車	2-2層	3g	—	径:(7.7~7.9) 圧:1.9	1/2	ナデ	灰白5Y7/1	長石・石英・雲母	やや軟	
20	37	14	瓦質土器 転用円盤	2-4層	5h	—	径:3.6~3.9 厚:2.0	1/1	縁研磨、6面か7面 どり	灰7.5Y4/1	長石・雲母	やや軟	
20	38		丸瓦	2-2層	6i	—	—	破片	凹面:布目	凸面:灰黄2.5Y7/2 凹面:黄灰2.5Y5/1	長石・石英・雲母	良	
20	39	15	銅銭 元豊通宝	2-1層	6e	—	直径:2.472 孔径:0.677 質量:2.6g	1/1	—	—	—	—	篆書 初鑄:北宋 1078年
24	40	14	瓦質土器 播鉢	3-1層	7f	15c代	口径:(28.0) 器高:(5.5)	1/20	外:ケズリ 内:ナデ・播り目	外:灰白7.5Y7/1・ 緑灰5G5/1 内:灰白5Y8/1	長石・石英・雲母	良	
24	41	14	瓦質土器 浅鉢	3-1層	4g	15c代	口径:(33.0) 器高:(6.0)	1/20	外:ハケ・ナデ 内:ナデ	外:暗灰N3/~灰白 N8/ 内:灰N4/ 断:灰白5Y8/1	長石・雲母・黒色粒 緻密	良	
24	42	14	陶器 鉢	3-2層	4h	13c初	口径:(31.0) 器高:(4.2)	1/20	外:ヨコナデ・自然釉 内:ケズリ後ヨコ ナデ	灰7.5Y6/1・灰オリ ープ7.5Y6/2(釉)	長石・石英・雲母	良	
24	43	14	土師質 羽釜	3-2面	130 島島	15c後	鏝径:(41.0) 器高:(3.8)	1/10	外:ナデ 内:ハケ	外:橙5YR6/6・灰褐 7.5YR5/2 内:浅黄橙7.5YR8/4	長石・石英・チャ ート	良	
24	44		瓦器 椀	3-2層	3h	13c中	高台径:(4.6) 器高:(1.7)	1/4	外:ナデ・ヨコナデ ・指押さえ 内:輪状暗文	外:灰N4/ 内:暗灰N3/	長石・雲母 緻密	良	
24	45	14	青磁 碗	3-2層	4f	14c末~ 15c前	高台径:(6.8) 器高:(3.4)	2/5	施釉 15花卉	釉:明緑灰10GY7/1 断:灰白2.5GY8/1	長石 緻密	良	龍泉窯
24	46		土師器 皿	3-2層	4f	15c前	口径:(10.0) 器高:(2.1)	3/20	外・内:ヨコナデ	灰黄褐10YR5/2	長石・雲母	良	
24	47		土師器 皿	3-2層	4e	15c後	口径:(9.6) 器高:(2.9)	1/10	外・内:ヨコナデ	外:黄灰2.5Y5/1 内:黄灰2.5Y5/1・灰 7.5Y4/1 断:にふい橙 2.5YR6/4	長石・石英・雲母・赤 色粒	良	
24	48		土師器 皿	3-2層	5g	15c中~ 後	口径:(9.4) 器高:2.1	1/10	外・内:ヨコナデ・ ナデ	外:にふい黄2.5Y6/3 内:黄灰2.5Y6/2・ 橙5YR6/6	長石・雲母・赤色粒	良	
24	49		瓦器 皿	3-2面	132 島島	14c中	口径:(10.0) 器高:(2.2)	3/20	外・内:ヨコナデ・ ナデ	灰白5Y8/1	長石・石英	良	
24	50		土師器 壺	3-2b層	5h	—	口径:(8.0) 器高:(3.6)	1/4	外・内:ナデ	外:にふい黄橙 10YR7/4 内:にふい黄橙 10YR7/4 断:明オリープ灰 2.5GY7/1	雲母・赤色粒・黒色 粒	良	
24	51		土師器 皿	3-3層	3f	?	口径:(7.0) 器高:(1.9)	1/5	外:ナデ・指押さえ 内:ナデ	外:灰黄褐10YR5/2 内:にふい褐 7.5YR5/4	雲母・黒色粒	良	
26	52		土師器 皿	4層	3e	14c前	口径:(7.4) 器高:1.5	1/4	外:ナデ・指押さえ 内:ナデ	外:にふい黄橙 10YR7/3 内:断:灰黄褐 10YR6/2	長石・石英・雲母	良	
26	53	14	土師器 皿	4層	8i 側溝	14c代	口径:(7.9) 器高:1.65	1/2	外:ナデ・指押さえ 内:ナデ	外・内:灰黄2.5Y6/2 断:黄灰2.5Y6/1~灰 黄2.5Y6/2	長石・雲母・薄茶の 石	良	
26	54		土師器 皿	4層	7e	14c代	口径:(8.0) 器高:(1.5)	1/5	外:ナデ・指押さえ 内:ナデ	にふい黄橙10YR6/4	長石・雲母	良	
26	55		土師器 皿	4層	6e	15c中~ 後	口径:(9.5) 器高:1.6	1/4	外:ナデ・指押さえ 内:ナデ	外:灰黄褐10YR6/2 内:にふい黄橙 10YR7/2~7/3 断:にふい橙 7.5YR7/3	長石・雲母	良	
26	56		土師器 皿	4層	3e	15c後	口径:(9.5) 器高:(2.0)	1/5	外:ナデ・指押さえ 内:ナデ	外・内:灰黄2.5Y7/2 断:灰白2.5Y7/1	長石・石英・雲母	良	
26	57		土師器 皿	4層	8f	11c後	口径:(10.4) 器高:(2.0)	1/6	外:ナデ・指押さえ 内:ナデ	灰白10YR8/2	長石・石英・雲母・黒 色粒	良	
26	58	14	瓦器 椀	4層	5g	11c中	高台径:(5.7) 器高:(2.1)	1/4	外:ナデ・指押さえ 内:ミガキ・格子状 暗文 貼付高台	外・断:灰白N8/ 内:暗オリープ灰 2.5GY3/1	石英・雲母	良	
26	59	14	瓦器 椀	4層	5c	12c中	高台径:4.4 器高:(0.7)	3/4	外:ナデ 面:平行暗文 貼付高台	外:灰N4/ 内:灰N5/~6/ 断:灰白N8/	石英・雲母	良	

表9 遺物観察表(2)

図番号	遺物番号	写真図版	器種	層序	遺構・出土地区	時期	法量 (cm) () 推定・残存	残存率	特徴 外面調整 内面調整	色調	胎土	焼成	備考
26	60		黒色土器 椀	4層	5g	11c 代	口径:(15.0) 器高:(3.7)	1/20	外:ミガキ	黒 7.5Y2/1	長石・石英	良	B類
26	61	14	土師質 羽釜	4層	5f	14c ~ 15c	口径:(14.2) 鏝径:(19.4) 器高:(2.8)	1/12	外:ナデ・指押さえ 内:ナデ	外・内:灰白 2.5Y8/2 断:灰黄 2.5Y7/2	長石・石英・雲母・黒色粒	良	
26	62	14	瓦質土器 足釜	4層	3g	—	長:(7.5) 厚:	破片	外:ヘラナデ 内:ナデ	外・内:暗オリーブ灰 2.5GY4/1	長石・雲母・黒色粒	良	
26	63	14	陶器 御目皿	4層	7d	14c 中?	口径:(14.8) 底径:(10.4) 器高:4.7	1/5	外:ケズリ・ナデ 内:施釉	外:浅黄 2.5Y7/3 内:オリーブ灰 5Y6/2	長石・石英	—	黄瀬戸
26	64	14	青磁 碗	4層	3g	14c 末~ 15c 前	口径:(15.0) 器高:(5.9)	1/10	施釉 16 花卉	外・内:オリーブ灰 10Y6/2 断:灰白 N8/	—	—	龍泉窯
26	65	15	鉄製品 鍬・鋤	4層	6f	—	縦長:(5.3) 横長:3.6 厚:0.5	破片	—	—	—	—	—
26	66	15	鉄製品 鍬・鋤	4層	6h	—	縦長:(12.5) 横長:(7.2) 厚:0.5	破片	—	—	—	—	—
30	67	15	瓦器 椀	5層	5g・6g	12c 中	高台径:5.2 器高:(1.9)	1/1	外:ナデ 内:ナデ・平行暗文 貼付高台	外・内:オリーブ黒 7.5Y3/1 断:灰白 N7/	長石 緻密	良	
30	68	15	瓦器 椀	5層	5g・6g	12c 後	高台径:(5.2) 器高:(1.1)	1/4	外:ヨコナデ・ナデ 内:ナデ・格子状暗文	灰 10Y4/1	長石 緻密	良	
30	69		瓦質土器 火鉢	5層	5f・6f	14c 代	器高:(6.3)	破片	外・内:ナデ	外:灰 N4/ 内:灰白 2.5Y8/2 断:灰白 2.5Y8/1	長石・石英・黒色粒	良	浅鉢 II
30	70	15	陶器 平碗	5層	8h	13c 中	口径:(18.8) 器高:(5.7)	1/8	外:回転ケズリ後 施釉 内:施釉	釉:浅黄 5Y7/3 断:灰白 2.5Y7/1	長石・雲母	良	黄瀬戸
30	71	15	巴軒丸瓦	5層	9g	15c ?	—	瓦当 1/4	—	外:暗灰 N3/ 内:灰 5Y4/1	長石・石英・雲母	良	
30	72	15	土師質 羽釜	7面	162 溝	13c 中?	鏝径:(30.6) 器高:(5.1)	1/4	外・内:ナデ・ 指押さえ	外・断:にぶい黄褐 10YR4/3 内:にぶい黄褐 10YR5/3 ~ にぶ い黄橙 10YR6/3	長石・石英・黒色粒	良	河内 A 型式
30	73		土師器 杯	5層	7e	6c 後	口径:(8.4) 器高:2.7	1/6	外・内:ナデ	外:にぶい黄褐 10YR7/3 内:浅黄橙 10YR8/4 断:褐灰 10YR5/1	長石・石英・雲母	良	
30	74		須恵器 杯身	5層	7e	TK209	口径:(11/8) 器高:(3.6)	1/6	外:回転ナデ・回転 ケズリ 内:回転ナデ	青灰 5PB6/1	長石・石英・雲母	良	
30	75		須恵器 杯身	5層	4e・4f	TK47	稜径:(13.0) 器高:(3.6)	1/4	外:回転ナデ・ケズ リ後指押さえ 内:回転ナデ	外:紫灰 5RP6/1 内:青灰 5PB6/1 断:紫灰 5PR5/1	長石・石英・雲母	良	
33	76	16	土師器 杯	9面	226 土坑	9c 初頭	口径:15.8 器高:4.95	8/9	外:ヨコナデ・ケズ リ後指押さえ ナデ・底部墨書 「福」 内:ヨコナデ・ナデ	外:にぶい黄褐 10YR7/2 内:にぶい黄褐 10YR7/3 断:にぶい褐 7.5YR6/3	長石・石英・雲母・黒 色粒	良	
33	77	16	土師器 杯	9面	239 土坑	飛鳥IV 7c 後~末	口径:11.4 器高:3.85	3/5	外:ヨコナデ・ナデ 内:ヨコナデ・ナデ ・放射状暗文	外:橙 2.5YR6/8 内:橙 2.5YR6/6 断:にぶい橙 2.5YR6/4	長石・石英	良	
37	78	15	瓦器 椀	6~8層	7h・8h	12c 前	口径:(14.4) 器高:(3.9)	1/8	外:ミガキ 内:ミガキ	灰 N4/	長石・石英 緻密	良	和泉型 (II-1)
37	79	15	瓦器 椀	9層	6h	12c 前	口径:(13.4) 器高:(4.0)	1/4	外:ミガキ・ヨコナ デ・指押さえ 内:ミガキ・ヨコナ デ	外:暗灰 N3/ ~ 灰 N4/ 内:暗灰 N3/ 断:灰白 N8/	長石・雲母	良	大和型 (1-D)
37	80		瓦器 椀	6・7層	5e	12c 後	高台径:(4.6) 器高:(1.7)	1/4	外:ヨコナデ・指押 さえ 内:平行暗文	外:灰 N4/ 内:暗灰 N3/	石英 緻密	良	
37	81	16	土師器 椀	9面	224 土坑	9c 中	口径:12.0 器高:(3.4)	1/2	外:ヨコナデ・指押 さえ 内:ヨコナデ・ナデ	外:にぶい橙 7.5YR7/3 内:にぶい黄褐 10YR7/3 断:にぶい褐 7.5YR6/3	長石・石英・雲母	良	
37	82		瓦器 椀	6~8層	5i・6i	12c 中?	高台径:(5.2) 器高:(1.1)	1/3	外:ヨコナデ・ケズ リ 内:ミガキ・暗文	暗灰 N3/	長石・石英 緻密	良	
37	83		土師器 椀	6・7層	7e・8e	6c 後	口径:(9.0) 器高:(2.9)	1/6	外・内:ヨコナデ	外:にぶい黄褐 10YR7/3 内:にぶい黄褐 10YR7/3 ~ 7/4 断:にぶい黄褐 10YR7/2	長石・石英	良	
37	84	16	土師器 杯	5~10b 層	4i 側溝	飛鳥III 7c 中~後	口径:16.1 器高:5.6	1/5	外:ミガキ・ヨコナ デ・ケズリ 内:ヨコナデ・放射 状暗文	外・内:灰白 10YR8/2 断:褐灰 10YR6/1	長石・石英・赤色粒	良	
37	85	15	瓦質土器 羽釜	9層	3f	—	鏝径:(24.6) 器高:(3.6)	1/6	外:ナデ・指押さえ 内:ハケ	外:褐灰 10YR4/1 内:黒褐 10TR3/1 断:灰白 10YR8/1	石英・雲母	良	
37	86	15	須恵器 片口鉢	6~8層	5g	—	口径:(28.0) 器高:(7.75)	1/10	外・内:回転ナデ	外:灰白 N7/ 内:暗灰 N3/ 断:灰 N6/	長石・雲母・茶色粒	良	東播系
37	87	15	須恵器 甕	9層	5g	—	—	破片	外:回転ナデ・カキメ 内:回転ナデ	灰白 N7/	長石・雲母	良	

表 10 遺物観察表 (3)

図 番号	遺物 番号	写真 図版	器種	層序	遺構・ 出土地区	時期	法量 (cm) () 推定・残存	残 存 率	特徴 外面調整 内面調整	色調	胎土	焼成	備考
37	88	15	須恵器 提瓶	9層	8g	TK10	口径:6.7~7.7 器高:(4.8)	1/2	ナデ 外・内:把手剥離痕	外・内:明青灰 5PB7/1 断:紫灰 5PR5/1~6/1	長石・石英・雲母	良	
37	89		須恵器 杯蓋	9層	8f	平城Ⅲ 8c前~中	口径:(12.2) 器高:(1.8)	1/5	外:回転ケズリ・回 転ナデ 内:回転ナデ ツマミ欠損	灰 N6/	長石・雲母・黒色粒	良	
37	90	15	須恵器 杯身	6~8層	7h・8h	平城Ⅲ 8c前~中	口径:(14.0) 高台径:(9.8) 器高:4.4	1/8	外・内:ナデ	灰 N6/	長石・黒色粒	良	
37	91		須恵器 杯蓋	9層	7e	TK43	口径:(13.0) 器高:4.2	1/6	外:回転ケズリ・回 転ナデ 内:回転ナデ	外:灰 N6/~灰白 N7/ 内:灰 N6/ 断:灰白 N7/	長石・石英・雲母	良	
37	92		須恵器 杯身	6~8層	7h・8h	MT15	口径:(12.8) 器高:(4.2)	1/4	外:回転ケズリ・回 転ナデ 内:回転ナデ	外:灰 N6/~灰白 N7/ 内:灰 N6/ 断:灰白 N6/	長石・石英・雲母	良	
37	93	15	鉄製品 鎌	6~9層	8h	—	長:(8.6) 最大幅:(2.8) 厚:0.3	1/1	—	—	—	—	
37	94	15	鉄製品 火打金	9層	7f	—	長:(6.4) 最大幅:(1.4) 厚:0.2	1/1	—	—	—	—	
37	95	15	鉄製品 鋤	6~9層	7c	—	長:(10.7) 最大幅:(2.9) 厚:0.2	破片	—	—	—	—	
43	96		土師器 高杯	10面	214溝	6c後	口径:(14.0) 器高:(5.6)	1/5	外:ヨコナデ・ミガキ 内:ヨコナデ・放射 状暗文	外:灰白 2.5Y8/2 内:にぶい橙 7.5YR7/4 断:黒褐 2.5Y3/1	長石・石英・雲母・赤 色粒・チャート	良	
43	97		土師器 甕	10面	214溝	5c前	口径:(11.8) 器高:(4.15)	1/5	外:ヨコナデ・ハケ 内:ヨコナデ・ケズリ	外・断:にぶい褐 7.5YR5/4 内:にぶい赤褐 5YR5/4	長石・石英・雲母	良	
43	98	16	土師器 甕	10面	214溝	5c前	口径:(15.2) 器高:(5.5)	2/5	外:ヨコナデ・ハケ 内:ヨコナデ・ハケ ・ナデ	外・断:灰黄褐 10YR6/2 内:にぶい黄橙 10YR6/3	長石・石英・雲母	良	
43	99		土師器 壺	10面	214溝	6c代	体部最大径: (7.6) 器高:(4.0)	3/7	外:ナデ・ハケ 内:ナデ	外:にぶい黄橙 10YR6/4 内・断:にぶい橙 7.5YR6/4	長石・石英・雲母・赤 色粒	良	
43	100	16	須恵器 杯蓋	10面	214溝	TK47	口径:12.9 器高:5.05	1/2	外:回転ケズリ・回 転ナデ 内:回転ナデ	外:灰白 N7/ 内:灰 N6/	長石・石英・雲母	良	
43	101		須恵器 杯身	10面	214溝	TK23	口径:(11.4) 器高:(4.7)	口:1/9	外:回転ケズリ・回 転ナデ 内:回転ナデ	灰 N6/~灰白 N7/	長石・石英・雲母	良	
43	102		須恵器 杯身	10面	214溝	TK47	口径:(11.0) 器高:5.3	口:1/12	外:回転ケズリ・回 転ナデ 内:回転ナデ	灰白 N8/	長石・石英・雲母・黒 色粒	良	
43	103		土師器 杯	10面	202 ピット	5c中	口径:(10.5) 器高:4.0	1/9	外:ヨコナデ・指押 さえ 内:ヨコナデ・ナデ	外・断:にぶい黄橙 10YR7/4 内:浅黄橙 10YR8/4	長石・石英・雲母・黒 色粒	良	
43	104		土師器 杯	10層	4g	5c後	口径:(11.0) 器高:3.4	1/12	外:ナデ 内:ヨコナデ	外:浅黄橙 7.5YR8/4 内:にぶい橙 7.5YR7/4 断:浅黄橙 7.5YR8/3	長石・石英	良	
43	105		土師器 高杯	10b面	241 土器溜り	5c前	口径:(8.4) 脚柱径:2.4 器高:(4.5)	1/3	調整不明	外:にぶい黄橙 10YR6/4 内:にぶい黄橙 10YR7/4 断:黄灰 2.5Y5/1	長石・石英・雲母・赤 色粒	良	
43	106		弥生土器 高杯	10b層	7e	弥V-0?	脚柱径:4.0 器高:(5.1)	2/3	外:ナデ・ミガキ? 内:ナデ・ミガキ?	外・内:にぶい褐 7.5YR5/3 断:褐灰 10YR4/1	長石・石英・雲母・赤 色粒・チャート	良	
43	107		土師器 壺	10層	5c・6c	5c後	体部最大 径:(8.0) 器高:(3.7)	1/5	外:ヨコナデ・ナデ 内:ナデ	外:にぶい黄橙 10YR6/4 内:にぶい褐 7.5YR5/4 断:灰黄褐 10YR5/2	長石・石英・雲母	良	
43	108		土師器 甕	10層~ 10b層	3e・3f	6c中	口径:(15.6) 器高:(6・8)	1/6	外・内:ヨコナデ・ ナデ	外:淡赤橙 2.5YR7/4・ にぶい黄橙 10YR7/4 内:にぶい黄橙 10YR7/4 断:黄灰 2.5Y5/1	長石・石英・雲母・赤 色粒	良	
43	109		弥生土器 鉢	10b層	6e	弥V	口径:(21.8) 器高:(5.6)	1/15	外:ヨコナデ・ハケ 内:ハケ・ナデ	外:褐 7.5YR4/3 内・断:にぶい褐 7.5YR5/3	角閃石・長石・石英・ 赤色粒	良	
43	110		弥生土器 高杯	10b層	4g	弥V?	脚柱径:(4.8) 器高:(11.9)	1/3	外:ナデ? 内:ナデ・ハケ焼成 前穿孔2つ(5 方向?)	外・内:にぶい黄褐 10YR5/3 断:灰黄褐 10YR4/2	角閃石・長石・石英・ 雲母	良	
43	111		弥生土器 壺?	10層	5e・6e	弥V	底径:4.8 器高:(4.1)	1/1	外:ハケ・指押さえ 内:ナデ?	外:暗灰黄 2.5Y4/2 内・断:にぶい黄褐 10YR4/3	角閃石・長石・石英・ 赤色粒	良	
43	112	16	手づくね 壺	10層	3e	—	口径:3.3 器高:3.1	1/1	外:ヨコナデ・ナデ 内:指押さえ	オリープ黄 5Y6/3	角閃石・長石・石英・ 赤色粒	やや 良	

表 11 遺物観察表 (4)

図番号	遺物番号	写真図版	器種	層序	遺構・出土地区	時期	法量 (cm) () 推定・残存	残存率	特徴 外面調整 内面調整	色調	胎土	焼成	備考
43	113	16	須恵器 杯蓋	10層	7f	TK47	口径:12.0 器高:4.5	1/2	外:回転ケズリ・回 転ナデ 内:回転ナデ	灰白 N7/	長石・石英・雲母	良	
43	114		須恵器 杯蓋	10層	5e・6e	TK47	稜径:(11.2) 器高:(3.9)	口:1/9	外:回転ケズリ・回 転ナデ 内:回転ナデ 宝珠つまみ	外:灰 N5/ ~ 6/ 内:灰 N5/ 断:灰 N6/	長石・石英・雲母	良	
43	115		須恵器 杯身	10層	5c・6c	TK209	口径:(12.4) 器高:4.0	口:1/18	外:回転ケズリ・回 転ナデ 内:回転ナデ	外:青灰 5PB6/1 ~ 明青灰 5PB7/1 内:明青灰 5PB7/1 断:赤灰 5P5/1	長石・石英・雲母	良	
43	116	16	須恵器 杯身	10層	6h	TK43	口径:(12・3) 器高:4.1	口:1/9	外:回転ケズリ・回 転ナデ 内:回転ナデ	外・内:明青灰 5PB7/1 断:青灰 5PB6/1	長石・石英・雲母	良	
46	117	17	弥生土器 甕	11面	271溝	弥V-2	口径:12.8 器高:(10.1)	3/4	外:ヨコナデ・タタ キ 内:ヨコナデ・ハケ	にぶい黄褐 10YR5/3	角閃石・長石・石英・ 雲母・赤色粒	やや 良	生駒西麓産
46	118	17	弥生土器 甕	11面	280 流路	弥V-2	口径:13.2 器高:14.1	1/2	外:ハケ・タタキ 内:ハケ	にぶい黄褐 2.5Y6/3	長石・石英・赤色粒	良	
46	119	17	弥生土器 甕	11面	278溝	弥V-3	口径:(14.0) 底径:3.4 器高:10.6	口:1/10 底:1/1	外・内:ハケ・板ナデ	にぶい黄褐 10YR5/3	角閃石・長石・石英・ 雲母・赤色粒	やや 良	生駒西麓産
46	120		弥生土器 甕	11面	271溝	弥V	底径:4.7 器高:(5.0)	底:4/5	外:タタキ・ナデ 内:ハケ後ナデ	外:灰褐 7.5YR4/2 内:にぶい黄橙 10YR6/3 断:にぶい褐 7.5YR5/4	長石・石英・雲母	良	生駒西麓産
46	121	17	弥生土器 鉢	11面	278 流路	弥V-0	口径:19.4 底径:5.1 器高:10.1	1/2	外:ヨコナデ・ハケ 後ミガキ 内:ヨコナデ・ミガ キ	にぶい黄褐 10YR4/3	角閃石・長石・石英・ 赤色粒	やや 良	生駒西麓産
46	122		弥生土器 甕	11面	280 流路	—	底径:5.7 器高:(4.9)	底:3/4	外:ケズリ・ナデ 内:ナデ	外:黄灰 2.5Y4/1 内:暗灰黄 2.5Y5/2 断:褐 7.5YR4/3	角閃石・長石・石英・ 赤色粒・チャート	良	生駒西麓産
46	123		弥生土器 壺	11面	278溝	弥IV・V	底径:6.3 器高:(6.9)	底:1/1	外:ハケ後ミガキ 内:ハケ	外・内:にぶい黄橙 10YR6/4 断:にぶい黄橙 10YR6/3	角閃石・長石・石英・ 雲母	良	生駒西麓産
46	124		弥生土器 器台?	11面	280 流路	弥V	口径:(22.0) 器高:(1.5)	口:1/6	外:ヨコナデ・円形 浮文+竹管文 内:ミガキ	にぶい黄橙 10YR6/3	角閃石・長石・石英・ 雲母・赤色粒	やや 良	生駒西麓産
46	125		木材	11面	280 流路	—	長:(81.5) 幅:9.0 厚:3.2	—	コナラ垂属	—	—	—	
46	126		弥生土器 壺?	11層	4g	弥V	口径:(14.0) 器高:(2.1)	口:1/6	調整不明 外:沈線3条・円形 浮文+竹管文 4個1対 内:竹管文	にぶい褐 7.5YR6/3	角閃石・長石・石英・ 赤色粒	やや 良	生駒西麓産
46	127	17	弥生土器 手焙形	11層	4g	弥VI-1	口径:14.3 底径:4.8 器高:(10.3)	1/2	外:ヨコナデ・ハケ 後ナデ・貼付刻 目突帯 内:ヨコナデ・板ナ デ・ハケ	明黄褐 10YR6/6	長石・石英・赤色粒	やや 良	
46	128	17	弥生土器 無頸壺	11b層	6c	弥VI-3	口径:(12.3) 底径:4.8 器高:14.2	口:1/10 底:1/1	外:ミガキ・ヨコナ デ・口縁部列点 文・胴部籬状文 内:ヨコナデ・板ナ デ	にぶい黄 2.5Y6/3	角閃石・長石・石英・ 雲母	良	生駒西麓産
46	129	17	弥生土器 脚部	11b層	5i	弥VI	底径:(16.0) 器高:(18.8)	1/4	外:ミガキ・竹管文 内:ミガキ・ナデ	赤褐 5YR4/8	角閃石・長石・石英・ 赤色粒	やや 良	生駒西麓産
46	130		弥生土器 甕	11b層	4e	弥V-1	口径:(16.8) 器高:(5.5)	口 :1/12	外:ヨコナデ・ナデ 内:ヨコナデ・ナデ 後ミガキ?	外:灰黄褐 10YR6/2 内:灰黄 2.5Y6/2 断:灰黄 2.5Y7/2	長石・石英・雲母・チ ャート	良	
46	131	17	弥生土器 水差	11b層	7d	弥IV-1	口径:(7.1) 器高:(11.5)	1/4	外:ヨコナデ・ミガ キ 内:ヨコナデ・ナデ ・板ナデ はめ込み式把手	にぶい黄 2.5Y6/3	角閃石・長石・石英	良	生駒西麓産
46	132		弥生土器 壺	11層	6g	—	底径:5.8 器高:(3.9)	底:1/1	外:調整不明 内:ナデ	外:灰黄 2.5Y6/2 内:にぶい黄橙 10YR7/2	角閃石・長石・石英・ 雲母	やや 良	生駒西麓産
46	133		弥生土器 甕	11b層	7h	弥V-1	口径:(32.0) 器高:(3.4)	口:1/10	外:ヨコナデ・ミガ キ 内:調整不明	にぶい黄褐 10YR5/3	角閃石・長石・石英・ 赤色粒	やや 良	生駒西麓産
53	134	18	弥生土器 把手付鉢	12面	6h	弥IV-1	口径:(12.4) 底径:4.4 器高:6.8	口:1/8 底:1/1	外:ヨコナデ・ミガ キ 内:ヨコナデ・ハケ	黄灰 2.5Y6/1	角閃石・長石・石英・ 雲母・赤色粒	良	生駒西麓産
53	135	22	石製品 石包丁	12面	286 畦畔	—	長軸:(9.0) 短軸:5.75 厚:0.85 質量:68.9g	3/5	緑泥片岩	緑灰 7.5GY5/1	—	—	
53	136	22	石製品 剥片	12-b層	3g	—	長軸:5.45 短軸:4.4 厚:1.9 質量:41.1g	—	サヌカイト	灰 5Y6/1	—	—	
57	137	19	弥生土器 甕	13b面	365 ピット	弥I・II	底径:11.35 器高:(11・0)	底:1/1	外:ハケ後ナデ・ナ デ 内:ナデ	外:にぶい褐 7.5YR5/3 内:褐 7.5YR4/3 断:灰黄褐 10YR6/2	角閃石・長石・石英・ 赤色粒	良	生駒西麓産
57	138		弥生土器 壺	13b層	3g	弥I	底径:(9.0) 器高:(7.7)	底:1/7	外:ミガキ・ナデ 内:ミガキ	外・内:にぶい黄褐 10YR5/3 断:灰黄褐 10YR5/2	角閃石・長石・石英・ 雲母・赤色粒	良	生駒西麓産

表 12 遺物観察表 (5)

図 番号	遺物 番号	写真 図版	器種	層序	遺構・ 出土地区	時期	法量 (cm) () 推定・残存	残 存 率	特徴 外面調整 内面調整	色調	胎土	焼成	備考
57	139	19	弥生土器 壺	13b 層	3g	弥 I	底径:10.1 器高:(6.1)	底:1/1	外:ミガキ 内:ナデ後ミガキ	外・内:にぶい黄橙 10YR6/3 断:灰黄 2.5Y6/2	角閃石・長石・石英・ 雲母・赤色粒	良	生駒西麓産
57	140		弥生土器 壺	13b 層	5d	弥 I	—	破片	外:ナデ・木葉文・ 沈線1条 内:ナデ・ミガキ	外:にぶい黄橙 10YR7/3 内・断:にぶい黄橙 10YR7/2	角閃石・長石・石英・ 雲母・赤色粒・ チャート	良	
57	141		弥生土器 甕	13b 層	390 流路	弥 II -1	—	破片	外:ナデ・櫛描直線 文7本・櫛描弧 文 内:ヨコナデ・指押 さえ	外:灰黄褐 10YR6/2 内:褐灰 10YR6/1	角閃石・長石・石英・ 雲母	良	生駒西麓産
57	142	22	石製品 石鏃	13b 層	4g	—	長軸:4.0 短軸:1.4 厚:0.45 質量:1.8g	1/1	サヌカイト	暗灰 N3/	—	—	
57	143	20	弥生土器 甕	13b 層	390 流路	弥 I	底径:7.2 器高:(5.9)	底:1/1	外:ナデ 内:ナデ後ミガキ	外:暗灰黄 2.5Y5/2 内:灰黄褐 10YR5/2 断:暗灰黄 2.5Y5/2	角閃石・長石・石英	良	生駒西麓産
57	144		弥生土器 壺	13b 層	392 土器	弥 I	底径:9.0 器高:(11.2)	底:1/1	外:ミガキ 内:ナデ・指押さえ	にぶい黄橙 10YR5/4	角閃石・長石・石英・ 赤色粒	軟	生駒西麓産
57	145	18	弥生土器 大口壺	13b 層	390 流路	弥 I -2	口径:15.0 底径:7.2 器高:17.9	1/1	外:調整不明・頸部 沈線1条・胴部 削出段沈線1 条? 内:ミガキ・ナデ 片口	灰オリーブ 5Y5/2	角閃石・長石・石英・ 赤色粒	やや 軟	生駒西麓産
57	146	18	弥生土器 壺	13b 層	390 流路	弥 I -2	口径:14.6 底径:9.3 器高:26.2	1/2	外:ヨコナデ・ハケ 後ミガキ・頸部 削出突帯2条・ 肩部削出突帯 3条 内:ミガキ・ナデ 焼成前の穿孔 1つ・初圧痕	灰オリーブ 5Y5/3	角閃石・長石・石英・ 赤色粒	良	生駒西麓産
57	147		弥生土器 甕	13b 層	390 流路	弥 I -2	口径:(38.0) 器高:(10.9)	1/10	外:ヨコナデ・板ナ デ・口縁端部刻 目・頸部沈線3 条 内:ヨコナデ	暗褐 10YR3/3	角閃石・長石・石英・ 赤色粒	良	生駒西麓産
57	148	22	石製品	13b 層	390 流路	—	長軸:(11.3) 短軸:(4.6) 厚:(3.7) 質量:308.9g		緑色粘板岩	緑灰 7.5GY5/1	—	—	
64	149		縄文土器 深鉢	14-2 面	406 溝	縄文晩期 後半(長 原)	—	破片	外:ヨコナデ・貼付 刻目突帯 内:ヨコナデ	外:にぶい褐 7.5YR5/4 内:にぶい褐 7.5YR5/3	角閃石・長石・石英・ 雲母	良	生駒西麓産
64	150		弥生土器 壺?	14-2 面	408 溝	弥 I	底径:5.8 器高:(2.0)	底:1/1	外:ナデ 内:調整不明	外:にぶい橙 5YR7/4 内:明赤褐 5YR5/6	角閃石・長石・石英	良	生駒西麓産
64	151		弥生土器 壺	14-2 面	406 溝	弥 I	底径:(7.4) 器高:(5.6)	底:1/3	外・内:ミガキ	外・内:灰黄褐 10YR5/2 断:にぶい黄橙 10YR6/3	角閃石・長石・石英・ 雲母・赤色粒	良	生駒西麓産
64	152	19	弥生土器 鉢小無頸壺	14-2 面	406 溝	弥 I	底径:7.3 器高:(11.3)	底:1/1	外・内:ミガキ	にぶい黄 2.5Y6/3	角閃石・長石・石英・ 赤色粒	やや 良	生駒西麓産
64	153	20	弥生土器 甕	14-1 面	393 土器	弥 I	口径:7.0 器高:7.0	底:3/4	外:ナデ	外:灰黄褐 10YR5/2 内:にぶい褐 7.5YR6/3 断:灰黄褐 10YR4/2	長石・石英・雲母	良	生駒西麓産
64	154	18	弥生土器 壺	14-1 面	394 土器	弥 I -2・3	口径:19.2 底径:8.0 器高:(27.0)	1/2	外:ヨコナデ・ミガ キ・頸部削出段 沈線3条・肩部 削出突帯沈線 2条 内:ミガキ・ナデ 焼成前の穿孔 1つ	外:明褐 7.5YR5/6 内:褐灰 10YR6/1	長石・石英・雲母・赤 色粒・チャート	やや 軟	
64	155		弥生土器 壺	14-1 層	4g	弥 I -3	部最大径: (23.4) 器高:(8.0)	1/8	外:ミガキ・沈線3 条×2 内:ナデ	外:褐灰 10YR4/1 内:灰黄 2.5YR6/2	角閃石・長石・石英・ 赤色粒	やや 良	生駒西麓産
64	156	19	弥生土器 鉢	14-2 面	1012 土器溜り	弥 I -2	口径:(24.7) 底径:8.3 器高:16.0	口:1/9 底:1/1	外:ヨコナデ・ミガ キ・ナデ 内:ミガキ	外:にぶい黄 2.5Y6/3 内:黒 7.5YR2/1	長石・石英・赤色粒	やや 良	
64	157		弥生土器 鉢	14-2 面	1012 土器溜り	弥 I -2	口径:(25.2) 器高:(10.1)	1/10	外:ヨコナデ・板ナ デ・ミガキ・沈 線2条 内:板ナデ・ミガ キ 外:ヨコナデ・ミガ キ 内:ミガキ	明褐 7.5YR5/6	角閃石・長石・石英・ 赤色粒	やや 良	生駒西麓産
64	158		弥生土器 壺	14-2 面	1012 土器溜り	弥 I	口径:(16.4) 器高:(2.4)	1/4	外:ヨコナデ・ミガ キ 内:ミガキ	にぶい黄褐 10YR5/4	長石・石英・雲母	やや 良	
64	159		弥生土器 壺	14-2 面	1012 土器溜り	弥 I -1	口径:(27.8) 器高:(5.5)	1/4	外:ヨコナデ・ミガ キ 内:ミガキ	灰黄 2.5Y6/2	長石・石英・赤色粒	やや 良	
64	160		弥生土器 壺	14-2 面	1012 土器溜り	弥 I -1	口径:(25.0) 器高:(4.7)	1/9	外:ナデ・口縁端部 刻目・頸部削出 段 内:ヨコナデ・ナデ	にぶい褐 7.5YR5/4	角閃石・長石・石英・ 雲母・赤色粒	やや 良	生駒西麓産
64	161	18	弥生土器 無頸壺	14-2 面	1012 土器溜り	弥 I -3	口径:14.3 底部:7.1 器高:11.4	1/2	外:ナデ・ミガキ 内:ヨコナデ・板ナ デ・ミガキ	暗褐 10YR3/4	角閃石・長石・石英・ 赤色粒	やや 良	生駒西麓産

表 13 遺物観察表 (6)

図 番号	遺物 番号	写真 図版	器種	層序	遺構・ 出土地区	時期	法量 (cm) () 推定・残存	残 存 率	特徴 外面調整 内面調整	色調	胎土	焼成	備考
64	162	19	弥生土器 壺	14-2 面	1012 土器溜り	弥 I	底径:6.2 器高:(6.1)	1/1	外:ナデ又はケズ リ後ミガキ・肩 部沈線文・沈線 2条 内:ナデ	外:にぶい黄 2.5Y6/3 内:灰黄 2.5Y7/2	長石・石英・雲母・赤 色粒・チャート	良	
64	163		弥生土器 鉢	14-2 面	1012 土器溜り	弥 I -1	口径:(41.8) 器高:(6.6)	1/6	外:ヨコナデ・ミガ キ・有段 内:板ナデ	灰黄褐 10YR4/2	角閃石・長石・石英・ 赤色粒	やや 良	生駒西麓産
64	164		弥生土器 壺	14-2 面	1012 土器溜り	弥 I -1	口径:(41.0) 器高:(4.7)	1/8	外:ヨコナデ・板ナ デ・有段 内:板ナデ	にぶい黄褐 10YR6/4	長石・石英・赤色粒	やや 良	
65	165		弥生土器 壺	14-2 面	1012 土器溜り	弥 I	—	破片	外:ナデ・格子状沈 線 内:ナデ	外:にぶい褐 7.5YR5/3 内:灰黄褐 10YR6/2	長石・石英	良	
65	166		弥生土器 壺?	14-2 面	1012 土器溜り	弥 I	—	破片	外:ナデ・刻目突帯 2条 内:ナデ	外:灰黄 2.5Y7/2 内:灰白 2.5Y7/1	長石・石英	良	
65	167		弥生土器 壺	14-2 面	1012 土器溜り	弥 I	—	破片	外:ヨコナデ・ミガ キ・削出段・沈 線3条 内:ミガキ	外:オリーブ褐 2.5Y4/3 内:にぶい黄 2.5Y6/4	角閃石・長石・石英・ 雲母	良	生駒西麓産
65	168		弥生土器 甕	14-2 面	1012 土器溜り	弥 I	—	破片	外:ナデ・口縁端部 刻目・頸部沈線 2条鋸歯文状 沈線 内:ナデ	外:浅黄橙 10YR8/3 内:断:灰白 10YR8/2	長石・石英・赤色粒	やや 良	
65	169		弥生土器 壺	14-2 面	1012 土器溜り	弥 I	—	破片	外:ナデ・沈線4条 +刻目 内:ナデ・ミガキ	外:黄灰 2.5Y4/1 内:灰黄 2.5Y6/2	角閃石・長石・石英・ 雲母	良	生駒西麓産
65	170		弥生土器 壺	14-2 面	1012 土器溜り	弥 I	—	破片	外:ナデ・沈線4条 ・綾杉文2列 内:ナデ	にぶい黄橙 10YR7/3	角閃石・長石・石英・ 赤色粒	良	生駒西麓産
65	171		縄文土器 深鉢	14-2 面	1012 土器溜り	縄文晩期 後半(長 原)	—	破片	外:ナデ・板ナデ・ 刻目突帯 内:ナデ・板ナデ	外:断:にぶい黄褐 10YR5/3 内:灰黄褐 10YR5/2	角閃石・長石・石英	良	生駒西麓産
65	172		縄文土器 深鉢?	14-2 面	1012 土器溜り	縄文晩期 後半(長 原)	—	破片	外:ミガキ 内:ナデ	外:灰黄褐 10YR4/2 内:にぶい黄褐 10YR4/3 断:にぶい褐 7.5YR5/4	角閃石・長石・石英	良	生駒西麓産
65	173		縄文土器 深鉢	14-2 面	1012 土器溜り	縄文晩期 後半(長 原)	—	破片	外:板ナデ・刻目突 帯 内:ナデ	外:内:オリーブ黒 7.5Y3/1 断:灰 7.5Y4/1	角閃石・長石・石英・ 雲母	良	生駒西麓産
65	174		縄文土器 深鉢	14-2 面	1012 土器溜り	縄文晩期 後半(長 原)	—	破片	外:ヨコナデ・ナデ ・刻目突帯 内:ヨコナデ	にぶい黄褐:10YR5/3	角閃石・長石・石英・ 雲母	良	生駒西麓産
65	175		縄文土器 深鉢	14-2 面	1012 土器溜り	縄文晩期 後半(長 原)	—	破片	外:ミガキ・ナデ・ 刻目突帯 内:ナデ	外:灰褐 7.5YR6/2 内:暗灰黄 2.5Y5/2 断:黄灰 2.5Y5/1	長石・石英・雲母	良	
65	176	21	縄文土器 深鉢	14-2 面	1012 土器溜り	縄文晩期 後半(長 原)	器高:(22.0)	1/4	外:ヨコナデ・ケズ リ・刻目突帯 内:ナデ・板ナデ	明褐 7.5YR5/6	角閃石・長石・石英・ 雲母・赤色粒	やや 良	生駒西麓産
65	177	19	縄文土器 深鉢	14-2 面	1012 土器溜り	縄文晩期 後半(長 原)	底径:8.3 器高:(5.7)	底:1/1	外:板ナデ 内:板ナデ?	外:明赤褐 5YR5/6 内:黒褐 5YR2/1 断:にぶい赤褐 5YR5/4	角閃石・長石・雲母	良	生駒西麓産
65	178		縄文土器 深鉢	14-2 面	1012 土器溜り	縄文晩期 後半(長 原)	底径:7.4 器高:(3.4)	底:3/4	外:板ナデ 内:ナデ	外:にぶい褐 7.5YR5/4 内:断:にぶい黄橙 10YR7/4	長石・石英・赤色粒	良	
65	179		縄文土器 深鉢	14-2 面	1012 土器溜り	縄文晩期 後半(長 原)	底径:(7.6) 器高:(4.6)	底:3/4	外:板ナデ 内:ナデ 底部靱圧痕	外:にぶい橙 5YR6/4 内:灰褐 7.5YR6/2 断:褐灰 7.5YR5/1	角閃石・長石・石英・ 雲母	良	生駒西麓産
65	180		縄文土器 深鉢	14-2 面	1012 土器溜り	縄文晩期 後半(長 原)	底径:6.4 器高:(3.75)	底:1/1	外:板ナデ 内:ナデ	外:内:にぶい褐 7.5YR5/4 断:灰黄褐 10YR5/2 外:灰黄褐 10YR5/2	角閃石・長石・石英・ 雲母・赤色粒	良	生駒西麓産
65	181		弥生土器 甕?	14-2 面	1012 土器溜り	弥 I	底径:(9.4) 器高:(4.9)	底:1/4	外:ミガキ・ナデ 内:ナデ	外:にぶい黄褐 10YR6/3 断:にぶい黄褐 10YR7/3	角閃石・長石・石英・ 雲母・チャート	良	生駒西麓産
65	182		弥生土器 壺?	14-2 面	1012 土器溜り	弥 I	底径:7.4 器高:(3.7)	底:4/5	外:ナデ	外:にぶい橙 5YR6/4 内:浅黄 2.5Y7/3	長石・石英・雲母	良	
65	183		弥生土器 甕	14-2 面	1012 土器溜り	弥 I	底径:7.0 器高:(3.5)	底:9/10	外:ミガキ・ナデ 内:ナデ	外:にぶい黄橙 10YR7/3 内:にぶい黄橙 10YR7/2 断:浅黄 2.5Y7/3	角閃石・長石・石英・ 赤色粒	良	生駒西麓産
65	184	20	弥生土器 甕	14-2 面	1012 土器溜り	弥 I	底径:8.4 器高:(9.8)	底:1/1	外:ミガキ 内:ナデ	暗灰黄 2.5Y5/2	角閃石・長石・石英・ 雲母	良	生駒西麓産
65	185	20	弥生土器 甕?	14-2 面	1012 土器溜り	弥 I	底径:8.6 器高:(8.3)	底:1/2	外・内:ナデ	外:にぶい黄橙 10YR6/3 内:褐灰 10YR4/1 断:灰黄 2.5Y6/2	長石・石英・雲母	良	
65	186	20	弥生土器 甕	14-2 面	1012 土器溜り	弥 I	底径:5.6 器高:(8.0)	底:9/10	外:ナデ 内:板ナデ	外:オリーブ黄 5Y6/3 内:灰黄 2.5Y6/2	長石・石英・雲母	良	
65	187	20	弥生土器 甕	14-2 面	1012 土器溜り	弥 I	底径:7.4 器高:(7.4)	底:1/1	外:板ナデ 内:ミガキ	外:にぶい黄褐 10YR5/3 内:にぶい褐 7.5YR6/3	角閃石・長石・雲母・ 赤色粒	良	生駒西麓産

表 14 遺物観察表(7)

図 番号	遺物 番号	写真 図版	器種	層序	遺構・ 出土地区	時期	法量 (cm) () 推定・残存	残 存 率	特徴 外面調整 内面調整	色調	胎土	焼成	備考
65	188		縄文土器 深鉢	14-2 面	1012 土器溜り	縄文晩期 後半 (長原)	底径: 2.4 器高: (5.8)	底: 1/2	外: 調整不明 内: 板ナデ	外・断: 明赤褐 5YR5/6 内: 灰褐 5YR4/2	角閃石・長石	良	生駒西麓産
66	189	18	弥生土器 壺	14-2 面	395 土器溜り	弥 I -2	口径: (7.9) 器高: (11.1)	1/9	外: ナデ・ハケ後ミ ガキ・沈線 3 条 +山形平行線 文+沈線 2 条 内: ナデ・ヨコナデ	にぶい黄褐 10YR5/4	長石・石英・チャー ト	やや 良	
66	190		弥生土器 壺	14-2 面	395 土器溜り	弥 I	底径: (7.7) 器高: (3.3)	底: 1/4	外: ミガキ 内: ナデ	外: 灰黄褐 10YR5/2 内・断: 暗灰黄 2.5Y5/2	角閃石・長石・石英 ・雲母	良	生駒西麓産
68	191		弥生土器 甕?	14-2 面	395 土器溜り	弥 I	底径: 7.4 器高: (4.0)	底: 1/3	外: ハケ 内: ナデ	外: 灰黄褐 10YR6/2 内: にぶい黄橙 10YR7/2 断: 褐灰 7.5YR5/1	長石・石英・雲母・ チャー ト	良	
66	192		弥生土器 壺か	14-2 面	395 土器溜り	弥 I	底径: (8.0) 器高: (3.8)	底: 1/1	外: ミガキか・ナデ 内: ナデ	外: にぶい橙 5YR6/4 内: 灰黄 2.5Y7/2 断: 黄灰 2.5Y5/1	長石・石英・雲母・ チャー ト	良	
66	193		弥生土器 壺	14-2 面	395 土器溜り	弥 I	底径: (9.0) 器高: (5.0)	底: 1/3	外: ミガキ・ナデ 内: ナデ	にぶい黄 2.5Y6/3	長石・石英・雲母・赤 色粒	良	
66	194		弥生土器 壺	14-2 面	395 土器溜り	弥 I	底径: 7.4 器高: (7.0)	底: 1/1	外: ナデ 内: ミガキ	暗灰黄 2.5Y5/2	角閃石・長石・雲母	やや 良	生駒西麓産
66	195	19	弥生土器 高杯	14-2 面	395 土器溜り	弥 I -2	突帯径: 7.0 器高: (5.5)	杯部と 脚部の 境	外: ミガキ・ヨコナ デ・刻目突帯 内: 杯部ミガキ・裾 部ナデ	外: にぶい黄褐 5YR6/3 内: 杯部にぶい黄 橙 10YR6/3・裾 部黒褐 10YR3/2 断: にぶい黄橙 10YR6/4	角閃石・長石・石英 ・雲母	良	生駒西麓産
66	196	20	弥生土器 壺か鉢	14-2 面	395 土器溜り	弥 I	底径: 8.7 器高: (5.4)	底: 1/1	外: ミガキ・ナデ・ 漆? 付着 内: 漆? 付着	外: にぶい橙 7.5YR6/4 内: 黒 5Y2/1	長石・石英・雲母・チ ャー ト	やや 良	
66	197		弥生土器 壺	14-2 面	395 土器溜り	弥 I -1	口径: 40.5 器高: (6.5)	口: 1/2	外: ミガキ・ヨコナ デ・有段 内: ミガキ・貼付突 帯 1 条	にぶい黄褐 10YR5/3	角閃石・長石・石英・ 赤色粒	良	生駒西麓産
66	198		弥生土器 甕	14-2 面	395 土器溜り	弥 I -1・2	口径: 19.0 器高: (7.0)	口: 1/2	ヨコナデ・ナデ 外: 口縁端部刻目・ 頸部沈線 2 条 内: 板ナデ・ハケ・ 指押さえ・口縁 端部刻目 内: ヨコナデ・板ナ デ・ナデ	外: 黄灰 2.5Y4/1 内: 黄褐 2.5Y5/3	角閃石・長石・石英・ 雲母・赤色粒	良	生駒西麓産
66	199	19	弥生土器 甕	14-2 面	395 土器溜り	弥 I	口径: (25.5) 底径: (7.8) 器高: (24.0)	1/4	外: 板ナデ・ハケ・ 指押さえ・口縁 端部刻目 内: ヨコナデ・板ナ デ・ナデ	にぶい黄褐 10YR5/4	長石・石英・雲母・赤 色粒	良	
66	200		弥生土器 甕?	14-2 面	395 土器溜り	弥 I	底径: (7.6) 器高: (6.5)	底: 1/5	外: 板ナデ・ナデ 内: 板ナデ	外: にぶい褐 7.5YR6/3 内: にぶい黄褐 10YR5/3 断: にぶい黄橙 10YR6/3	長石・石英・雲母	良	
66	201	20	弥生土器 甕	14-2 面	395 土器溜り	弥 I	底径: 9.2 器高: (4.8)	底: 1/1	外: 板ナデ後ミガ キ 内: 板ナデ・ナデ	外・断: にぶい褐 7.5YR5/3 内: 褐 7.5YR4/3	角閃石・長石・石英・ 雲母・赤色粒	良	生駒西麓産
66	202		弥生土器 壺?	14-2 面	395 土器溜り	弥 I	底径: 6.1 器高: (3.3)	底: 1/1	調整不明 底部に焼成後の穿 孔 1 つ	褐灰 10YR5/1	角閃石・長石・赤色 粒	良	生駒西麓産
66	203		弥生土器 甕?	14-2 面	395 土器溜り	弥 I	底径: (8.0) 器高: (5.6)	底: 1/4	外・内: ナデ	外: にぶい褐 7.5YR6/3 内・断: 黄灰 2.5Y4/1	長石・石英・雲母	良	
66	204		弥生土器 甕?	14-2 面	395 土器溜り	弥 I	底径: (8.2) 器高: (4.0)	底: 1/3	外・内: ナデ	外: にぶい黄橙 10YR6/3 内: 黄灰 2.5Y5/1 断: 浅黄 2.5Y7/3 外: にぶい褐 7.5YR6/3 内・断: にぶい赤褐 5YR5/4	角閃石・長石・石英・ 雲母・赤色粒	良	生駒西麓産
66	205		弥生土器 甕?	14-2 面	395 土器溜り	弥 I	底径: (7.9) 器高: (4.2)	底: 1/1	外: ハケ後ミガキ 内: ナデ	外: にぶい褐 7.5YR6/3 内・断: にぶい赤褐 5YR5/4	角閃石・長石・石英 ・チャー ト	良	生駒西麓産
67	206	21	縄文土器 深鉢	14-2 面	395 土器溜り	縄文晩期 後半 (長原)	口径: (27.0) 器高: (14.9)	1/8	外: ヨコナデ・ケズ リ・貼付刻目突 帯 2 条 内: ナデ	黄灰 2.5Y5/3	角閃石・長石・石英・ 雲母・赤色粒	やや 良	生駒西麓産
67	207	21	縄文土器 深鉢	14-2 面	395 土器溜り	縄文晩期 後半 (長原)	口径: (33.1) 器高: (24.1)	1/12	外: ヨコナデ・板ナ デ・ハケ・貼付 刻目突帯 2 条 内: 板ナデ	明黄褐 10YR6/6	角閃石・長石・石英・ 雲母・赤色粒	やや 良	生駒西麓産
67	208	21	縄文土器 深鉢	14-2 面	395 土器溜り	縄文晩期 後半 (長原)	口径: (38.8) 器高: (16.2)	1/12	外: ヨコナデ・板ナ デ・ケズリ・貼 付刻目突帯 2 条 内: 板ナデ・板ナ デ	暗灰黄 2.5Y5/2	角閃石・長石・石英・ 雲母・赤色粒	やや 良	生駒西麓産
67	209	21	縄文土器 深鉢	14-2 面	395 土器溜り	縄文晩期 後半 (長原)	口径: (35.6) 器高: (23.8)	1/10	外: ヨコナデ・ミガ キ・ケズリ・貼 付刻目突帯 2 条 内: ナデ	浅黄 2.5Y7/3	角閃石・長石・石英・ 雲母・赤色粒	やや 良	生駒西麓産
68	210	21	縄文土器 深鉢	14-2 面	395 土器溜り	縄文晩期 後半	口径: (36.8) 器高: (27.1)	1/5	外: ヨコナデ・ケズ リ後ミガキ・貼 付突帯 2 条 内: ナデ	黄褐 10YR5/6	角閃石・長石・石英・ 雲母・赤色粒	やや 良	生駒西麓産

表 15 遺物観察表 (8)

図 番号	遺物 番号	写真 図版	器種	層序	遺構・ 出土地区	時期	法量 (cm) () 推定・残存	残 存 率	特徴 外面調整 内面調整	色調	胎土	焼成	備考
68	211		縄文土器 深鉢	14-2 面	395 土器溜り	縄文晩期 後半(長 原)	—	破片	外: ナデ・板ナデ・ 貼付刻目突帯 内: ナデ	外: 黄灰 2.5Y4/1 内: 暗黄灰 2.5Y4/2 断: 黄灰 2.5Y5/1	角閃石・長石・石英・ 赤色粒	良	生駒西麓産
68	212		縄文土器 深鉢	14-2 面	395 土器溜り	縄文晩期 後半(長 原)	—	破片	外: ヨコナデ・貼付 刻目突帯 内: ヨコナデ・指押 さえ	外: 褐灰 10YR4/1 内: 断: 褐灰 10YR5/1	角閃石・長石・石英・ 赤色粒	良	生駒西麓産
68	213		縄文土器 深鉢	14-2 面	395 土器溜り	縄文晩期 後半(長 原)	—	破片	外: ヨコナデ・ハケ ・貼付刻目突帯 内: ヨコナデ	外: 灰黄褐 10YR6/2 内: 褐灰 10YR5/1	長石・石英・雲母	良	
68	214	20	縄文土器 深鉢	14-2 面	395 土器溜り	縄文晩期 後半(長 原)	底径: 6.0 器高: (6.8)	底: 9/10	外: ケズリ 内: ナデ	外: 褐灰 10YR5/1 内: 灰黄 2.5Y5/1	角閃石・長石・雲母・ 赤色粒	やや 良	生駒西麓産
68	215		縄文土器 深鉢	14-2 面	395 土器溜り	縄文晩期 後半(長 原)	底径: 7.25 器高: (3.4)	底: 1/1	外: ナデ後ケズリ・ 板ナデ 内: ナデ	外・内: 灰黄褐 10YR5/2 断: にぶい黄褐 10YR5/3	角閃石・長石・石英	良	生駒西麓産
68	216		縄文土器 深鉢	14-2 面	395 土器溜り	縄文晩期 後半(長 原)	底径: 6.1 器高: (3.3)	底: 4/5	外・内: 板ナデ	外・内: にぶい褐 7.5YR5/4 断: にぶい黄褐 10YR4/3	角閃石・長石・石英・ 赤色粒・花崗岩	良	生駒西麓産
68	217		縄文土器 深鉢	14-2 面	395 土器溜り	縄文晩期 後半(長 原)	底径: 7.6 器高: (3.9)	底: 1/1	外: 板ナデ 内: ナデ	外: 褐灰 7.5YR4/1 内: 黒褐 7.5YR3/1 断: にぶい褐 7.5YR5/3	角閃石・長石・石英・ 雲母	良	生駒西麓産
66	218		縄文土器 深鉢	2月14日	395 土器 溜り	縄文晩期 後半(長 原)	底径: 7.4 器高: (5.7)	底: 1/1	外: 板ナデ・ナデ 内: ナデ後ミガキ	外: 灰黄褐 10YR5/2 内: 断: にぶい黄褐 10YR5/3	角閃石・長石・石英・ 雲母・赤色粒	良	生駒西麓産
68	219		縄文土器 深鉢	14-2 面	395 土器溜り	縄文晩期 後半(長 原)	底径: 7.6 器高: (3.3)	底: 1/1	外: 板ナデ・ナデ 内: ナデ	外: にぶい橙 7.5YR6/4 内: 橙 5YR6/6 断: 褐灰 7.5YR5/1	角閃石・長石・石英・ 雲母	良	生駒西麓産
68	220		縄文土器 深鉢	14-2 面	395 土器溜り	縄文晩期 後半(長 原)	底径: 4.2 器高: (3.3)	底: 9/10	外: ナデ	外・内: にぶい黄橙 10YR6/3 断: 黄灰 2.5Y6/1	長石・石英・雲母・赤 色粒	良	
69	221		弥生土器 壺	14-2 層	3g	弥 I -4	—	破片	外: ナデ・沈線 12 条 内: ナデ・指押さえ	外: にぶい橙 7.5YR7/4 内: 灰黄 2.5Y6/2 断: 灰黄褐 10YR5/2	角閃石・長石・石英・ 雲母	良	生駒西麓産
69	222		弥生土器 壺	14-2 層	7h 側溝	弥 I	—	破片	外: 板ナデ後ミガ キ・沈線 6 条 内: ミガキ	外: にぶい橙 7.5YR6/4 内: にぶい褐 7.5YR5/3 断: 黄灰 2.5Y4/1	長石・石英・雲母	良	
69	223		弥生土器 甕	14-2 層	3h	弥 I -3・4	—	破片	外: ナデ・板ナデ・ 沈線 3 条 内: ヨコナデ	外: にぶい黄褐 10YR5/3 内: 暗黄 2.5Y5/2 断: にぶい黄橙 10YR6/4	長石・石英・雲母	良	
69	224	19	弥生土器 壺	14-2 面	6f	弥 I	底径: 10.5 器高: (8.2)	底: 1/1	外: ミガキ 内: ナデ後ミガキ	外: にぶい黄橙 10YR6/3 内: 褐灰 10YR6/1 断: 灰黄褐 10YR6/2	角閃石・長石・石英・ 雲母	良	生駒西麓産
69	225		縄文土器 深鉢?	14-2 面	4h	縄文晩期 後半(長 原)	底径: (7.0) 器高: (7.7)	底: 1/2	外: ナデ 内: 板ナデ?	外・内: 灰黄褐 10YR5/2 断: 褐灰 10YR4/1	長石・石英・雲母	良	
69	226		弥生土器 壺	14-2 層	攪乱(水 路)	弥 I	底径: 6.0 器高: (5.6)	底: 2/3	外: ミガキ 内: 板ナデ?	外: にぶい黄褐 10YR5/3 内: にぶい褐 7.5YR5/4 断: にぶい褐 7.5YR5/3	長石・石英・雲母・赤 色粒	良	
69	227		弥生土器 甕	14-2 層	4h	弥 I -3	—	破片	ヨコナデ・ナデ 外: 口縁端部刻目・ 頸部沈線 2 条	暗黄 2.5Y5/2	長石・石英・雲母	良	
69	228		縄文土器 深鉢	14-2 面	7d	縄文晩期 後半(長 原)	—	破片	外: ナデ・ヨコナデ ・貼付刻目突帯 内: ヨコナデ	外: 灰黄褐 10YR6/2 内: 暗黄 2.5Y5/2 断: 黄灰 2.5Y5/1	角閃石・長石・雲母	良	生駒西麓産
69	229		縄文土器 深鉢	14-2 ~ 14-2b 層	4h 側溝	縄文晩期 後半(長 原)	—	破片	外: ナデ・貼付刻目 突帯 内: ナデ	灰黄褐 10YR4/2	角閃石・長石・雲母	良	生駒西麓産
69	230		縄文土器 深鉢	14-2b 面	4g	縄文晩期 後半(長 原)	—	破片	外: ナデ・ヨコナデ ・貼付刻目突帯 内: ヨコナデ	外: 灰黄褐 10YR4/2 内: にぶい黄褐 10YR5/3 断: 褐灰 10YR4/1	角閃石・長石・石英・ 雲母	良	生駒西麓産
69	231		縄文土器 深鉢	14-2 面	4h	縄文晩期 後半(長 原)	—	破片	外: ナデ・貼付刻目 突帯 内: ナデ	灰黄褐 10YR5/2	角閃石・長石・石英・ 雲母	良	生駒西麓産
69	232		縄文土器 深鉢	14-2b 層	3f	縄文晩期 後半(長 原)	—	破片	外: ヨコナデ・板ナ デ・貼付刻目突 帯 内: ヨコナデ 焼成前の穿孔 1 つ	外・断: にぶい褐 7.5YR5/4 内: にぶい黄褐 10YR5/4	角閃石・長石・石英・ 雲母	良	生駒西麓産
69	233		縄文土器 深鉢	14-2 層	4f	縄文晩期 後半(長 原)	—	破片	外: ナデ・ヨコナデ ・貼付刻目突帯 内: ヨコナデ	外・断: 暗黄 2.5Y5/2 内: オリーブ褐 2.5Y4/4	角閃石・長石・石英・ 雲母	良	生駒西麓産
69	234		縄文土器 深鉢	14-2 層	4e	縄文晩期 後半(長 原)	—	破片	外: ヨコナデ・貼付 刻目突帯 内: ヨコナデ・指押 さえ	外: オリーブ黒 5Y3/1 内: にぶい黄橙 10YR7/4 断: 褐灰 10YR4/1	角閃石・長石・石英・ 雲母	良	生駒西麓産

表 16 遺物観察表(9)

図 番号	遺物 番号	写真 図版	器種	層序	遺構・ 出土地区	時期	法量 (cm) () 推定・残存	残 存 率	特徴 外面調整 内面調整	色調	胎土	焼成	備考
69	235		縄文土器 深鉢	14-2層	3f	縄文晩期 後半(長原)	—	破片	外: ナデ・貼付刻目 突帯 内: ナデ	外: 黄灰 2.5Y5/1 内: 灰黄褐 10YR6/2 断: 灰黄 2.5Y6/2	長石・石英・雲母・赤 色粒	良	
69	236		縄文土器 深鉢	14-2層	3f	縄文晩期 後半(長原)	—	破片	外: ケズリ 内: ヨコナデ	外: 灰黄褐 10YR4/2 内: 灰黄褐 10YR5/2 断: 褐灰 10YR4/1	角閃石・長石・石英	良	生駒西麓産
69	237		縄文土器 深鉢	14-2～ 14-2b層	4h 側溝	縄文晩期 後半(長原)	—	破片	外: 板ナデ・ナデ・ 貼付刻目突帯 内: ナデ	外: 灰黄褐 10YR4/2 内: 黄褐 2.5Y5/3 断: 黄灰 2.5Y5/1	角閃石・長石・石英・ 雲母	良	生駒西麓産
69	238		縄文土器 深鉢	14-2層	3f	縄文晩期 後半(長原)	—	破片	外: ナデ・板ナデ・ 貼付刻目突帯 内: ヨコナデ	灰黄褐 10YR5/2	角閃石・長石・石英・ 雲母	良	
69	239		縄文土器 深鉢	14-2～ 14-2b層	4h 側溝	縄文晩期 後半(長原)	—	破片	外: ヨコナデ・ナデ ・貼付刻目突帯 内: ヨコナデ	外: 灰黄褐 10YR5/2 内: 灰褐 7.5YR5/2 断: 黄灰 2.5Y4/1	角閃石・長石・石英・ 雲母	良	生駒西麓産
69	240		縄文土器	14-2層	5g	—	—	破片	ヨコナデ・貼付突 帯?	暗灰黄 2.5Y5/2	角閃石・長石・石英	良	生駒西麓産
69	241		縄文土器 深鉢	14-2面	3f	縄文晩期 後半(長原)	—	破片	外: ヨコナデ・ナデ ・貼付刻目突帯 内: ナデ・ヨコナデ 外: ヨコナデ・ナデ ・貼付刻目突帯 2条	外: 灰黄褐 10YR4/2 内: 黄灰 2.5Y4/1	角閃石・長石・石英・ 雲母	良	生駒西麓産
69	242		縄文土器 深鉢	14-2面	4h	縄文晩期	—	破片	内: ヨコナデ・指押 さえ 口縁端部刻目	外: 灰白 10YR8/2 内: 浅黄 2.5Y7/3	長石・石英・雲母	良	
69	243	20	縄文土器 深鉢	14-2層	4f	縄文晩期 後半(長原)	底径: 6.8 器高: (6.3)	底: 1/1	外: ケズリ・板ナデ ・ナデ 内: ナデ	外: にぶい褐 7.5YR5/3 内: 断: にぶい黄褐 10YR5/3	角閃石・長石・石英・ 雲母	良	生駒西麓産
69	244		縄文土器 深鉢	14-2面	3g	縄文晩期 後半(長原)	底径: (8.0) 器高: (3.6)	底: 1/5	外: ナデ	外: オリーブ黒 5Y3/1 内: にぶい黄橙 10YR6/3 断: 黄灰 2.5Y5/1 外: にぶい橙 5YR4/6	角閃石・長石・石英・ 赤色粒	良	生駒西麓産
69	245		縄文土器 深鉢	14-2～ 14-2b層	4h 側溝	縄文晩期 後半(長原)	底径: 6.2 器高: (2.0)	底: 3/4	外: 板ナデ・ナデ 内: ナデ・指押さえ	外: 褐灰 10YR4/1 断: 灰褐 7.5YR4/2	角閃石・長石・石英・ 雲母	良	生駒西麓産
69	246		縄文土器 深鉢	14-2面	7e	縄文晩期 後半(長原)	底径: 6.0 器高: (2.5)	底: 1/1	外: 板ナデ・指押さ え・ミガキ 内: ナデ・ハケ・指 押さえ	外: 暗灰黄 2.5Y5/2 内: 断: 黄灰 2.5Y6/2	長石・石英・雲母	良	生駒西麓産
69	247		縄文土器 深鉢	14-2層	4f	縄文晩期 後半(長原)	底径: 5.5 器高: (1.7)	底: 9/10	外: ナデ 内: ナデ・指押さえ	外: 断: にぶい黄褐 10YR5/3 内: 黄灰 2.5Y4/1	角閃石・長石・石英・ 雲母・赤色粒	良	生駒西麓産
70	248	22	石製品 石斧	14-2面	395 土器溜り	—	長軸: (5.5) 短軸: (4.9) 厚: (3.0) 質量: 110.4g	刃部	緑色粘板岩	暗オリーブ灰 5Y3/1	—	—	
70	249	22	石製品 石皿?	14-2面	395 土器溜り	—	長軸: (10.25) 短軸: (3.6) 厚: (2.5) 質量: 96.2g	破片	砂質ホルンフェル ス	灰 5Y4/1	—	—	
70	250	22	石製品 敲石	14-2面	1012 土器溜り	—	長軸: (9.0) 短軸: (5.6) 厚: (8.1) 質量: 447.0g	破片	玄武岩	灰 5Y4/1	—	—	
70	251	22	石製品 剥片	14-2層	5g	—	長軸: 2.9 短軸: 2.3 厚: 0.7 質量: 1.7g	—	サヌカイト	暗灰 N3/	—	—	
70	252	22	石製品 剥片	14-2面	1012 土器溜り	—	長軸: 3.9 短軸: 3.6 厚: 1.75 質量: 25.9g	—	サヌカイト	暗灰 N3/	—	—	
70	253	22	石製品 剥片	14-2層	5g	—	長軸: 4.85 短軸: 2.8 厚: 0.7 質量: 9.5g	—	サヌカイト	暗灰 N3/	—	—	
70	254	22	石製品 剥片	14-2面	395 土器溜り	—	長軸: 2.7 短軸: 1.1 厚: 0.6 質量: 1.7g	—	サヌカイト	暗灰 N3/	—	—	
70	255	22	石製品 剥片	14層	7c	—	長軸: 3.4 短軸: 2.2 厚: 0.3 質量: 6.1g	—	サヌカイト	灰 N5/	—	—	
70	256	22	石製品 剥片	14-1層	3g・4g	—	長軸: 3.7 短軸: 3.2 厚: 0.9 質量: 9.3g	—	サヌカイト	オリーブ黒 5Y3/1	—	—	
70	257	22	石製品 剥片	14層	7h	—	長軸: 5.15 短軸: 3.0 厚: 0.8 質量: 11.6g	—	サヌカイト	暗灰 N3/	—	—	
—	258	20	縄文土器 深鉢	14-2b層	3f	縄文晩期 後半(長原)	—	破片	外: ケズリ・初圧痕 内: ナデ	外: 黒褐 2.5Y3/1 内: 断: 灰黄褐 10YR4/2	角閃石・長石・石英・ 雲母	良	生駒西麓産
—	259	20	縄文土器 深鉢	14-2面	395 土器溜り	縄文晩期 後半(長原)	—	破片	外: ケズリ 内: ナデ・初圧痕	外: 黒褐 10YR3/1 内: にぶい黄褐 10YR5/3 断: 黄灰 2.5Y5/1	角閃石・長石・石英・ 雲母・赤色粒	良	生駒西麓産

表 17 遺物観察表 (10)

写真図版



池島・福万寺遺跡全景（東上空から）



1 第2-3・4面 西半部全景（南西から）



2 第2-5面 西半部全景（南西から）



1 第3-2面 西半部全景(南西から)



2 第3-2面 西半部北側(西から)

1 第2-5面
096 島島・099 島島 (西から)



2 096 島島・099 島島の断面
(北西から)



3 132 島島の断面
(北西から)





1 第4面 西半部全景
(南西から)



2 第5層下面検出の
耕作痕跡 (東から)



3 第5層下面検出
162溝 (北から)

1 第9面 226土坑
土器出土状況（南東から）



2 第10面
214溝（南東から）



3 第11面 西半部全景
（南東から）



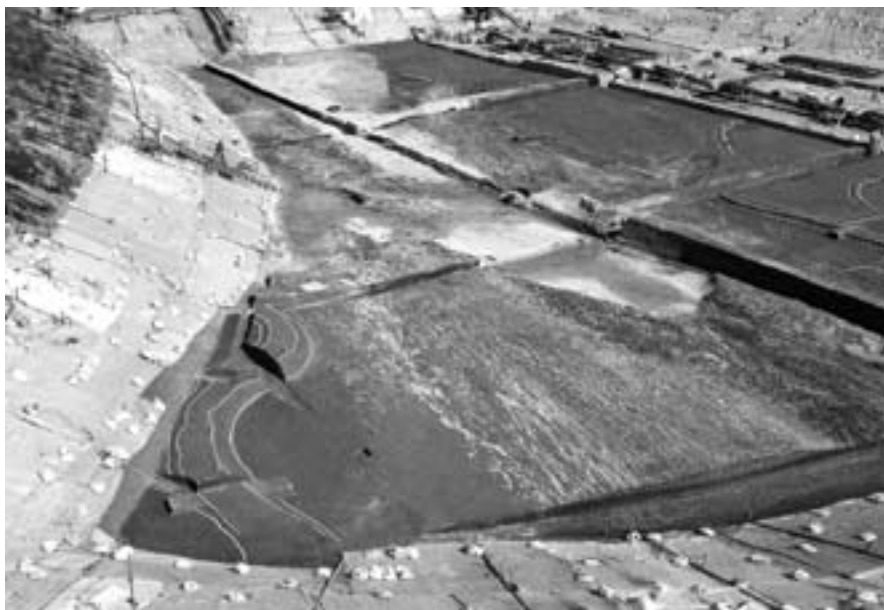


1 第12面 東側全景（南西から）



2 第12面 東側全景（南東から）

1 第12面 西側全景
(南西から)



2 第12面 290畦畔と水田域
(北西から)



3 第12面
287畦畔と289溝
(北西から)





1 第13面 全景（南西から）



2 第13面 340 微高地の溝群（南から）

1 第13 b面検出の溝群
(南から)



2 第13 b層 390 流路断面
(南から)



3 第13 b層 390 流路
土器出土状況 (南から)





1 第14-2面 水田・溝 (北西から)



2 第14-2面 水田・溝 (南東から)



1 第14-2面 溝群 (南西から)



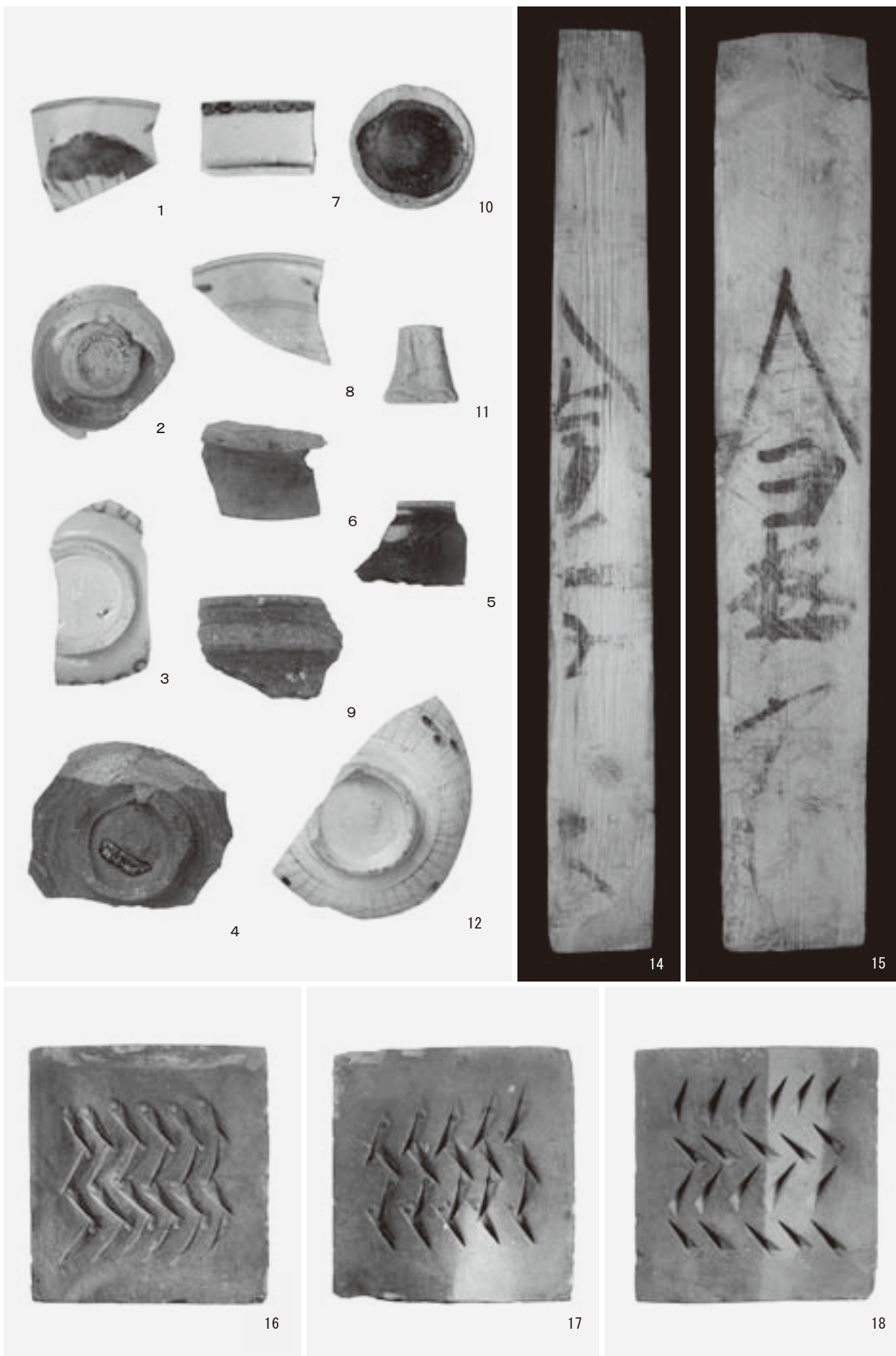
2 第14-2面 406溝 (北東から)



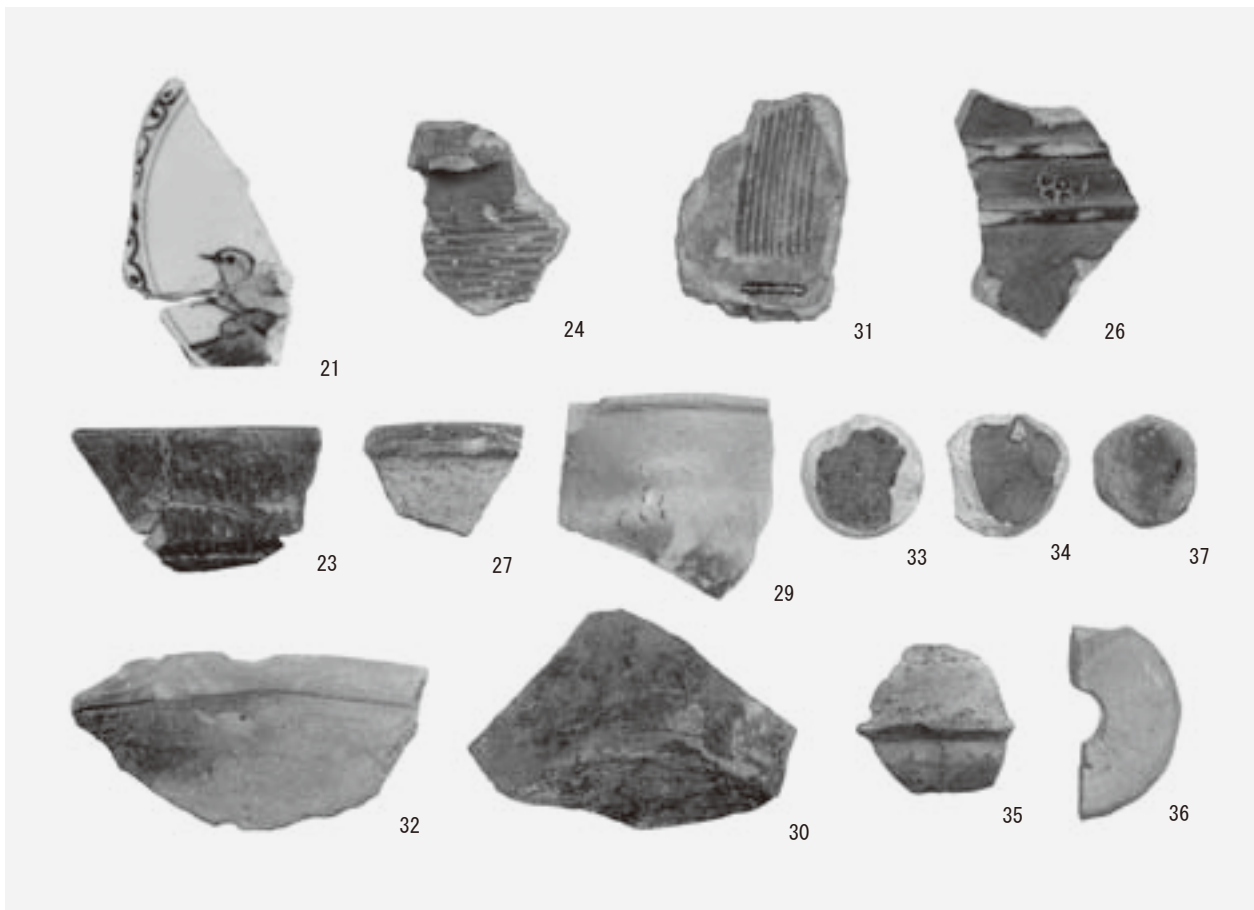
1 第15-2面 西半部全景 (南から)



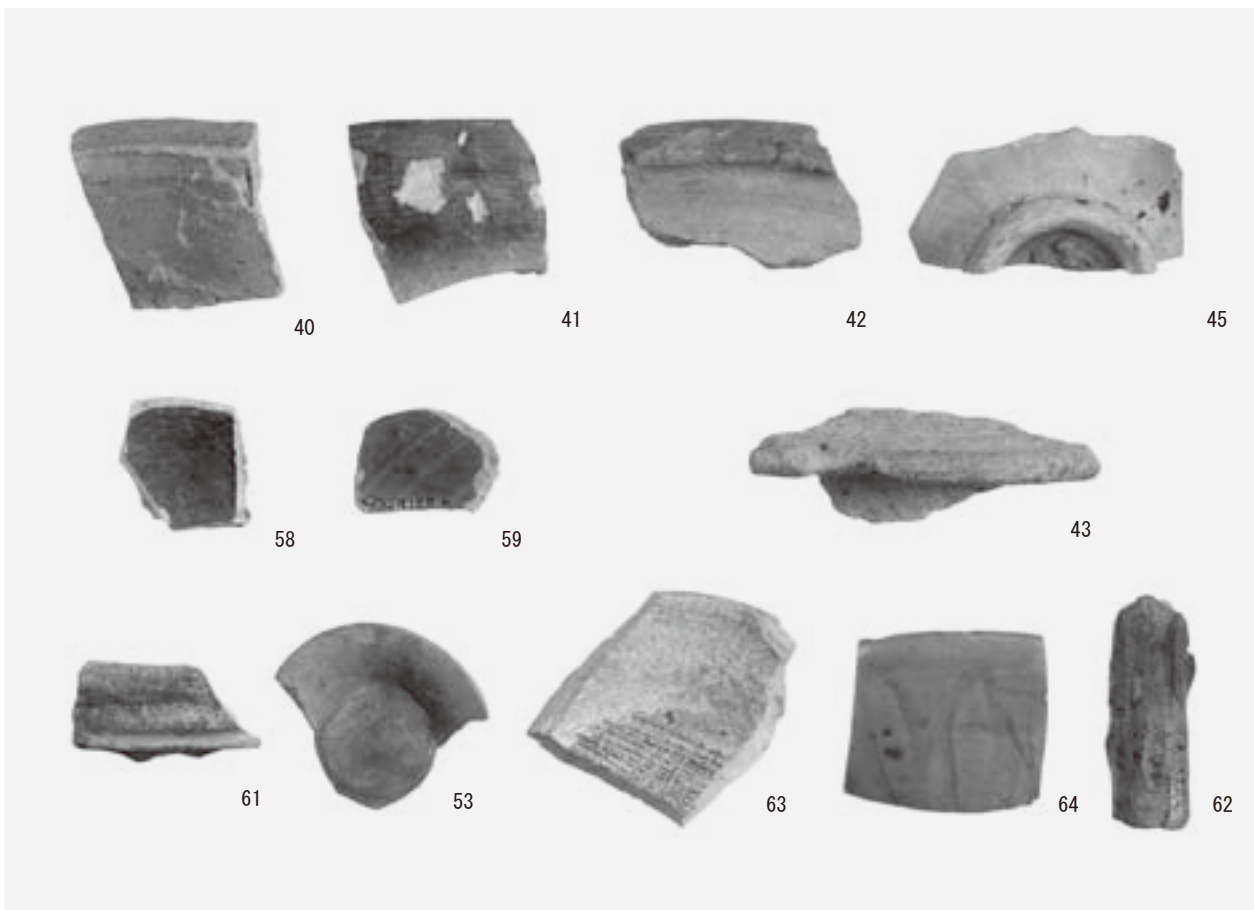
2 第15-2面 東半部全景 (南から)



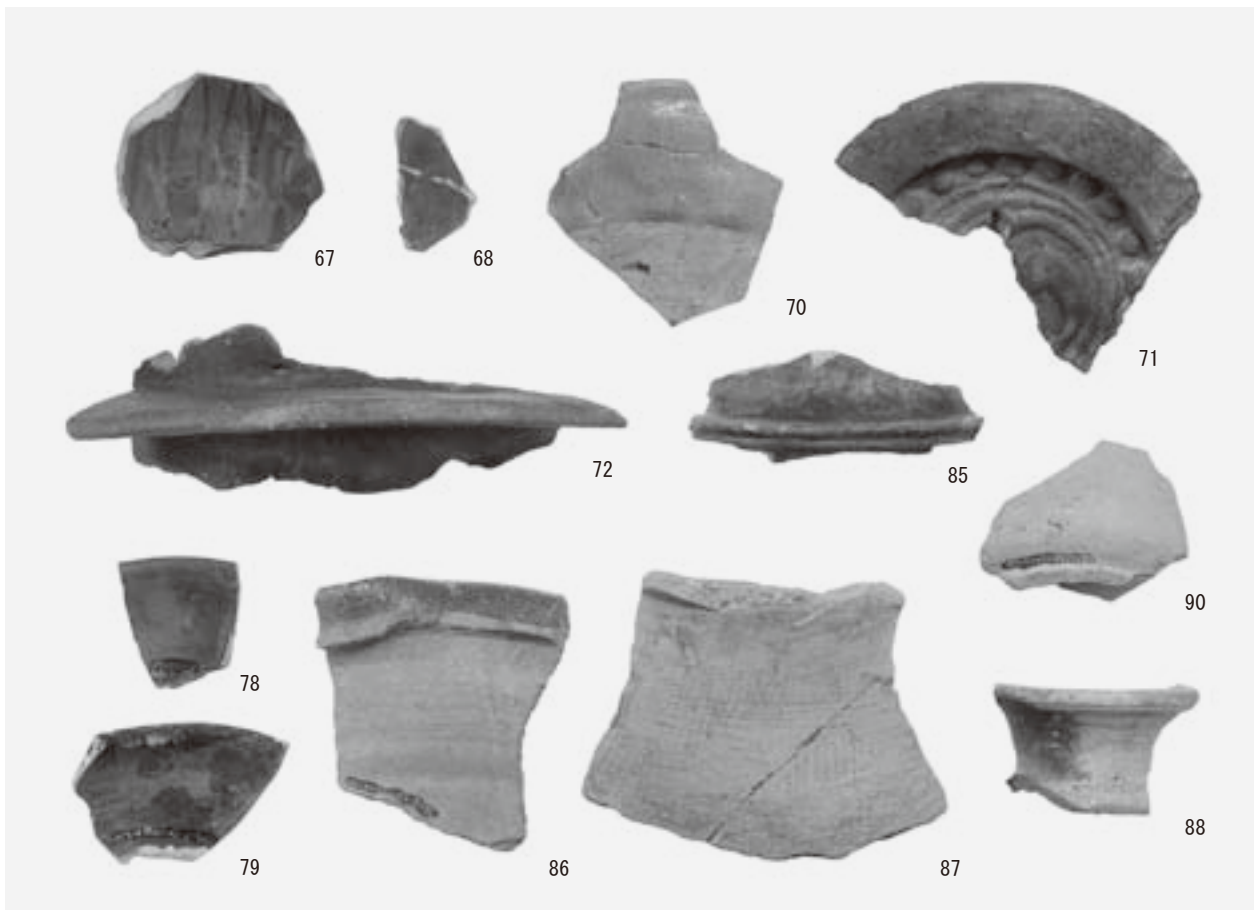
第1 b層出土遺物・001 井戸出土遺物



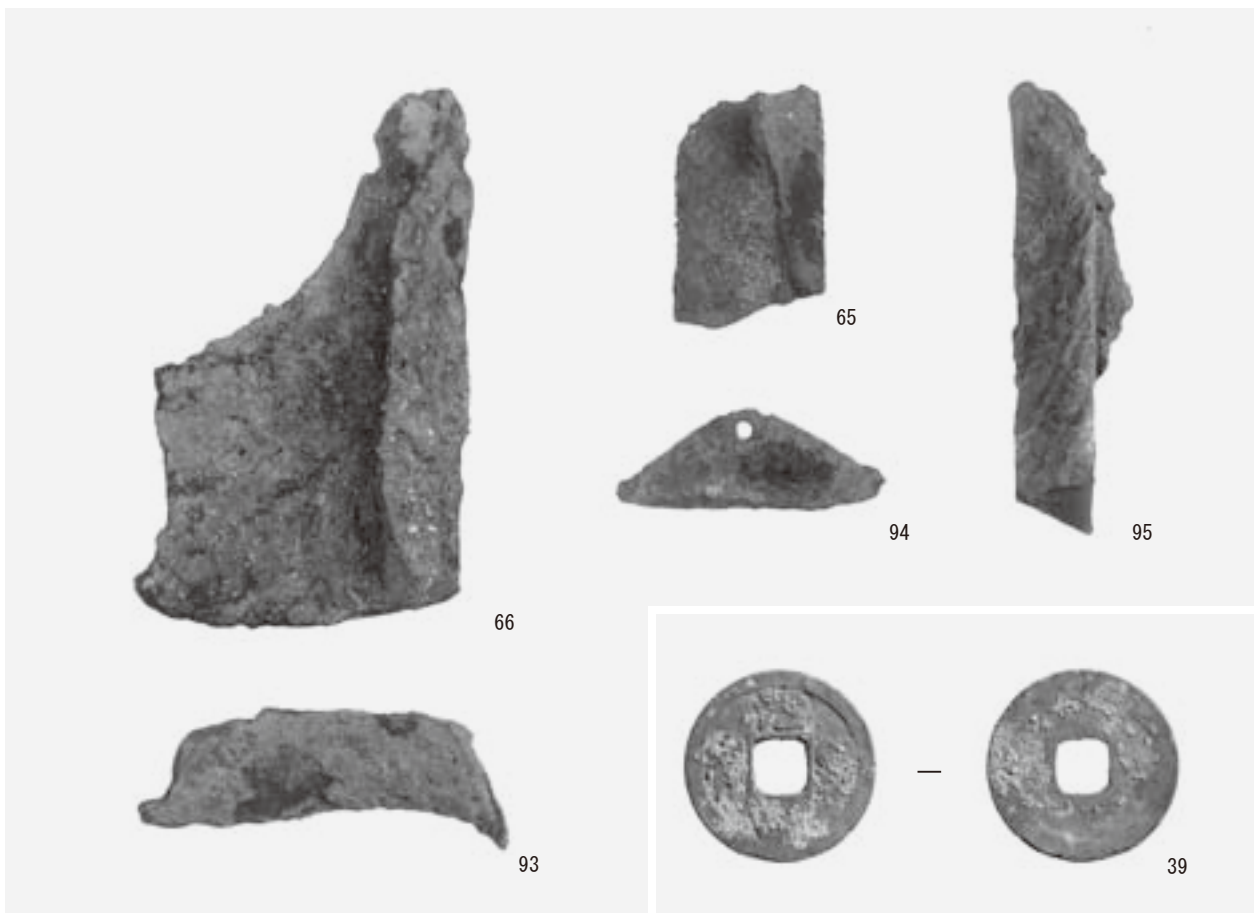
第2層出土 陶磁器・瓦質土器・土製品



第3層・第4層出土 陶磁器・瓦質土器・土師器



第5層・第6・7層出土 陶器・瓦質土器・須恵器・瓦



第2-1層・第4層・第8層・第9層出土 鉄製品・銅銭



|



76



81



84



77



100



98



113

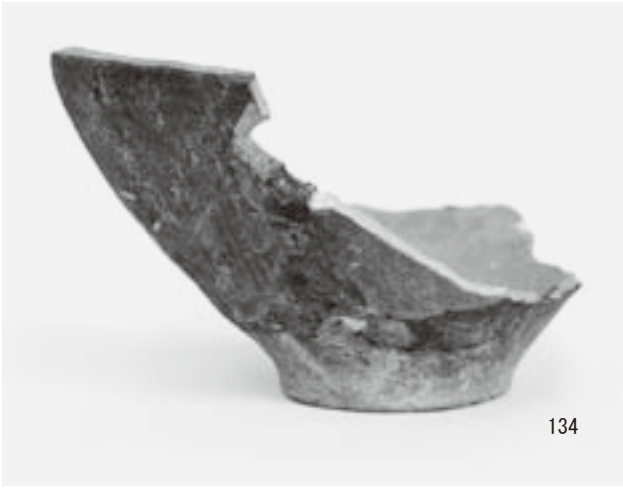


112

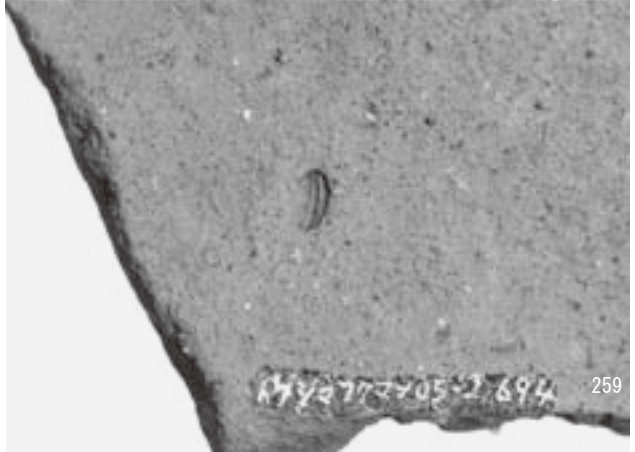
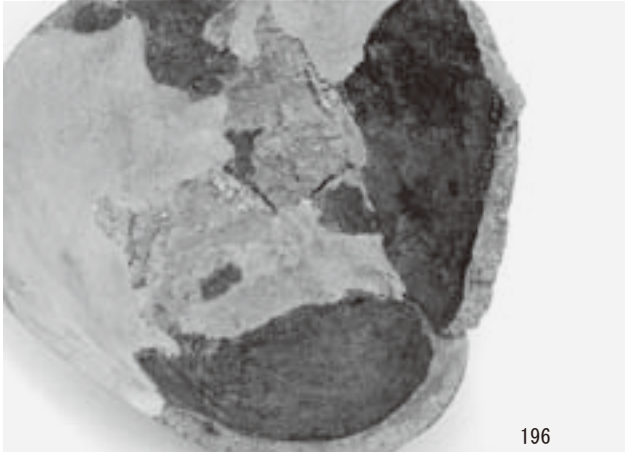
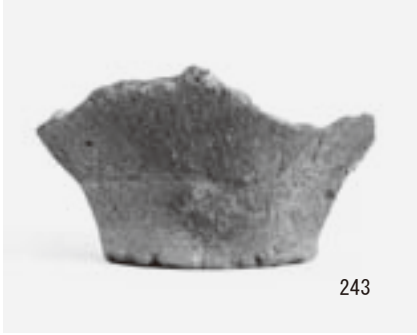
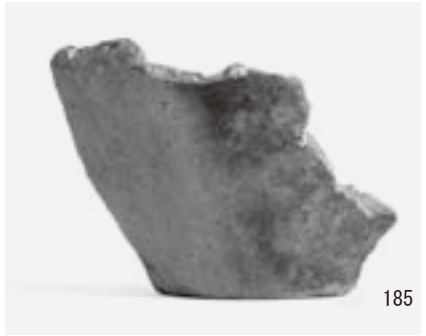
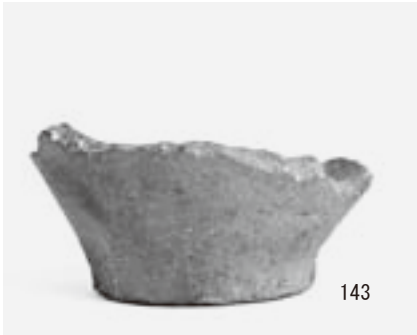


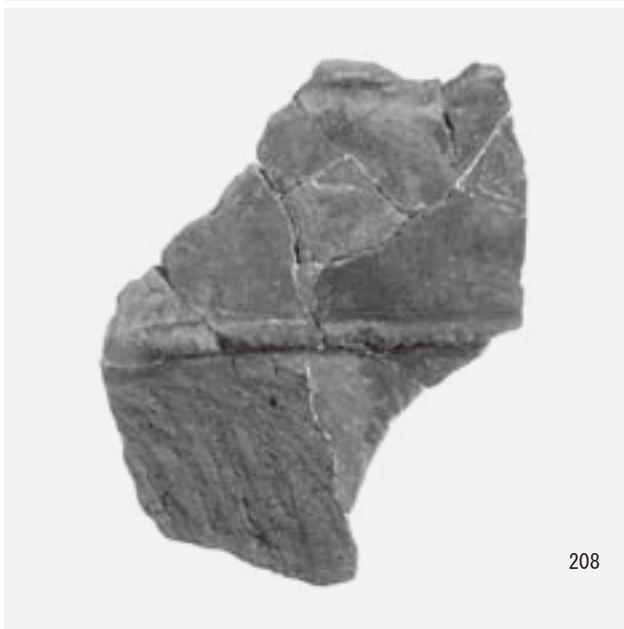
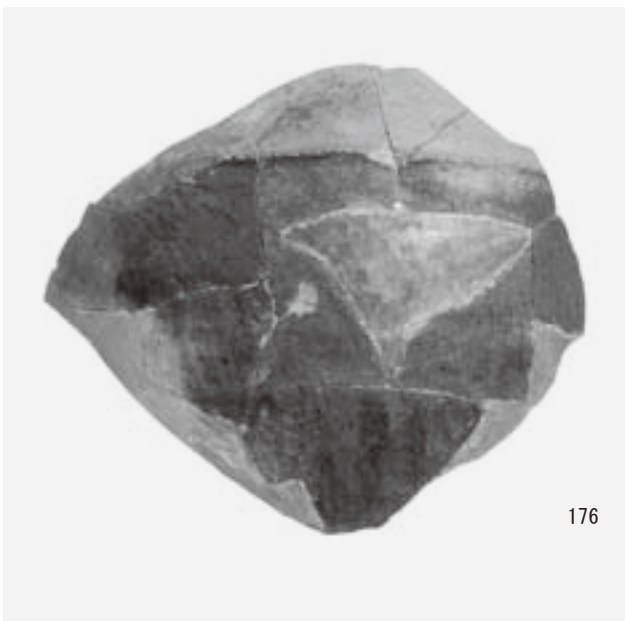
116

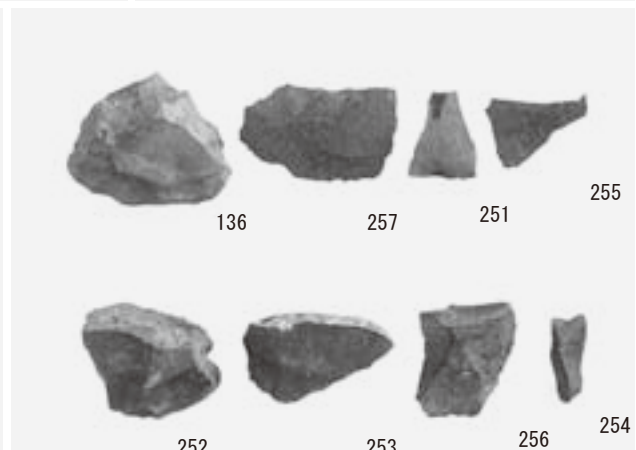
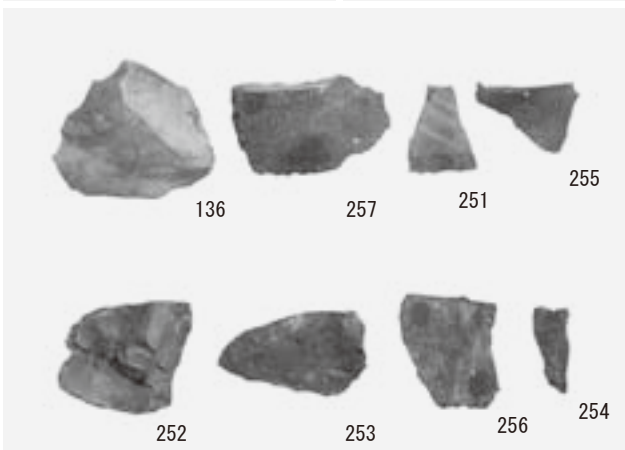
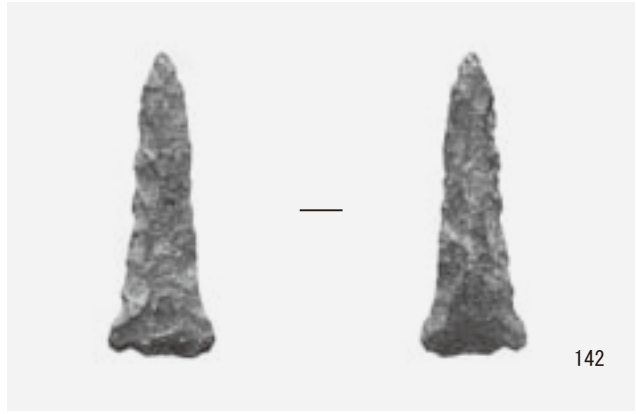
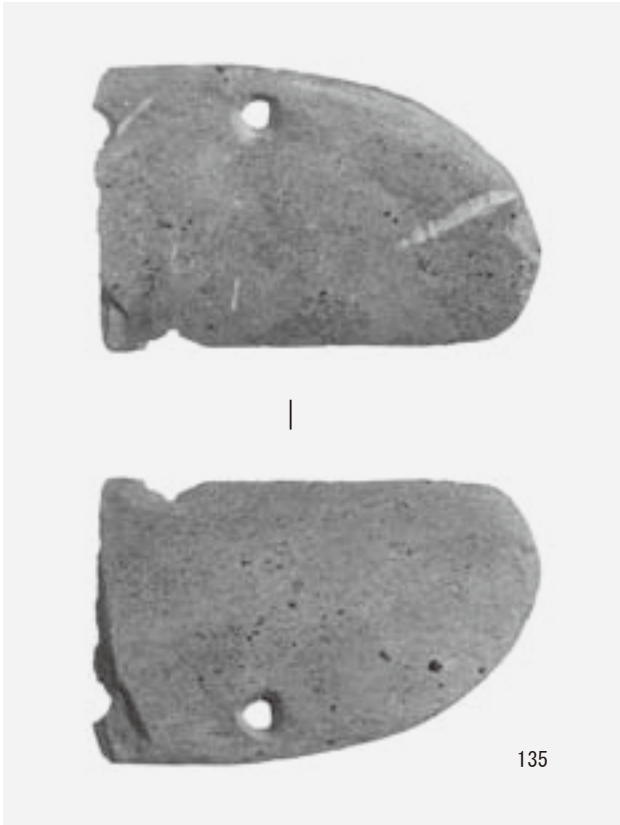












報 告 書 抄 録

ふりがな	いけしま・ふくまんじいせき7
書名	池島・福万寺遺跡7
副書名	一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書（池島Ⅱ期地区 05- 2 調査区）
巻次数	
シリーズ名	（財）大阪府文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第186集
編著者名	内田真雄
編集機関	財団法人大阪府文化財センター
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 TEL072-299-8791
発行年月日	2008年12月26日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いけしま・ふくまんじ 池島・福万寺 いせき 遺跡	おおさかふ 大阪府 ひがしおおさかし 東大阪市 いけしまちようちない 池島町地内	27227	93	34度 38分 48秒	135度 37分 43秒	2005年 8月19日 ～ 2007年 8月31日	2,633㎡	恩智川治 水緑地の 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
池島・福万寺 遺跡	田畠	古代～江戸時代	水田・島畠・溝・土坑・ピット	陶磁器・瓦質土器・土師器・須恵器・瓦・銭貨・鉄器	条里型水田の変遷
	田畠	古墳時代	溝・土坑・ピット	須恵器・土師器	
	水田	弥生時代	水田・溝・土坑・杭列 自然流路	弥生土器・突帯文土器・石器	弥生時代の地形変遷と各時期の水田の変遷
要約	<p>当遺跡における発掘調査は、1981年に開始され、現在も継続中である。既往の調査において、条里地割の変遷を示す遺構や、古墳時代～弥生時代前期中頃の各時期の水田面など農耕関連遺構と、古墳時代の初頭～前期および古墳時代中期後半～後期にかけての集落関連遺構などが重層的に検出されている。</p> <p>本調査区は、池島Ⅱ期地区の南西部に位置する。近世～中世の遺構面からは、耕作地の変遷を確認し、古代～古墳時代の遺構面は耕作地の造成など、人為的行為によって遺構面が削平を受けていることが明らかになった。弥生時代後期は調査区内を自然流路が流れるが、これは池島Ⅰ期地区の溝と接続することがわかる。弥生時代中期後半の水田は地形に従って雛段状に水田を設けている。また、中期初頭の水田も確認した。特筆すべき成果として、弥生時代前期中頃の水田を検出したことと、微高地上から溝群を検出したことがあげられる。これらは弥生時代前期の水田と水利システムを示す良好な資料といえる。</p>				

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第186集

池島・福万寺遺跡7

一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書
(池島Ⅱ期地区05-2調査区)

発行年月日 / 2008年12月26日

編集・発行 / 財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台3丁目21番4号

印刷・製本 / 株式会社 明新社
奈良県奈良市南京終町3丁目464番地